

茨城県教育財團文化財調査報告第28集

水海道都市計画事業・小絹土地区画  
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 3

大谷津 A 遺跡(下)

昭和 60 年 3 月

財団法人 茨城県教育財團

茨城県教育財團文化財調査報告第28集

水海道都市計画事業・小絹土地区画  
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 3

大谷津 A 遺跡(下)

昭和 60 年 3 月

財團法人 茨城県教育財團



# 目 次

## 一上 卷一

### 序

### 例言

第1章 調査経緯.....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査方法.....	2
1 地区設定.....	2
2 基本層序の検討.....	3
3 造構確認.....	3
4 造構調査.....	4
第3節 調査経過.....	4
第2章 位置と環境.....	8
第1節 地理的環境.....	8
第2節 歴史的環境.....	10
第3章 造構.....	13
第1節 造構の概要と記載方法.....	13
1 造構の概要.....	13
2 造構の記載方法.....	13
第2節 積穴住居跡.....	19
1 繩文時代.....	19
2 古墳時代.....	130
3 奈良・平安時代.....	138
第3節 土塙.....	142
第4節 講.....	209

## 一下 卷一

第4章 造物.....	1
-------------	---

第1節 遺物の概要と記載方法	1
1 遺物の概要	1
2 遺物の記載方法	2
第2節 穴居跡出土遺物	7
1 縄文式土器	7
2 土師器	126
第3節 土壙、グリッド出土遺物	131
1 土壙	131
2 グリッド	148
第4節 その他	151
1 土製品	151
2 石器	159
3 石製品	199
第5章まとめ	201
第1節 遺構について	202
1 穴居跡について	202
(1) 縄文時代	202
① 住居跡の類型化	203
② 住居跡の形態分類	204
(2) 古墳時代	205
(3) 奈良・平安時代	220
(4) 集落の変遷	221
2 土壙について	228
(1) 屋外炉について	228
(2) 「Tピット状遺構」について	229
(3) 土壙の形態分類	229
(4) 土壙の分布状況	234
第2節 遺物について	237
1 土器	237
2 土製品	240
3 石器	240
終章 むすび	244

## 挿図目次

第1図 第1号住居跡出土土器拓影図	7	第31図 第17号住居跡出土土器拓影図	42
第2図 第2号住居跡出土土器拓影図	7	第32図 第18号住居跡出土土器実測図	43
第3図 第4号住居跡出土土器実測図	9	第33図 第18号住居跡出土土器拓影図(1)	44
第4図 第4号住居跡出土土器拓影図(1)	10	第34図 第18号住居跡出土土器拓影図(2)	45
第5図 第4号住居跡出土土器拓影図(2)	11	第35図 第19号住居跡出土土器拓影図	47
第6図 第5号住居跡出土土器実測図	12	第36図 第20号住居跡出土土器拓影図	48
第7図 第5号住居跡出土土器拓影図(1)	13	第37図 第21・28号住居跡出土土器拓影 図(1)	49
第8図 第5号住居跡出土土器拓影図(2)	14	第38図 第21・28号住居跡出土土器拓影 図(2)	50
第9図 第6号住居跡出土土器拓影図	15	第39図 第22号住居跡出土土器拓影図	51
第10図 第7号住居跡出土土器実測図	17	第40図 第23号住居跡出土土器実測図	53
第11図 第7号住居跡出土土器拓影図(1)	18	第41図 第23号住居跡出土土器拓影図	54
第12図 第7号住居跡出土土器拓影図(2)	19	第42図 第24号住居跡出土土器実測図(1)	58
第13図 第9号住居跡出土土器実測図	20	第43図 第24号住居跡出土土器実測図(2)	59
第14図 第9号住居跡出土土器拓影図	21	第44図 第24号住居跡出土土器実測図(3)	60
第15図 第10号住居跡出土土器実測図	22	第45図 第24号住居跡出土土器拓影図(1)	61
第16図 第10号住居跡出土土器拓影図	23	第46図 第24号住居跡出土土器拓影図(2)	62
第17図 第11号住居跡出土土器実測図	25	第47図 第24号住居跡出土土器拓影図(3)	63
第18図 第11号住居跡出土土器拓影図(1)	26	第48図 第25号住居跡出土土器拓影図	64
第19図 第11号住居跡出土土器拓影図(2)	27	第49図 第26号住居跡出土土器実測図	65
第20図 第12号住居跡出土土器実測図	29	第50図 第26号住居跡出土土器拓影図(1)	66
第21図 第12号住居跡出土土器拓影図(1)	30	第51図 第26号住居跡出土土器拓影図(2)	67
第22図 第12号住居跡出土土器拓影図(2)	31	第52図 第28号住居跡出土土器実測図	68
第23図 第13号住居跡出土土器実測図	32	第53図 第30号住居跡出土土器拓影図	68
第24図 第13号住居跡出土土器拓影図	33	第54図 第32号住居跡出土土器拓影図	69
第25図 第14号住居跡出土土器拓影図	35	第55図 第33号住居跡出土土器拓影図	69
第26図 第15号住居跡出土土器実測図	36	第56図 第34号住居跡出土土器実測図	70
第27図 第15号住居跡出土土器拓影図(1)	37	第57図 第34号住居跡出土土器拓影図	71
第28図 第15号住居跡出土土器拓影図(2)	38	第58図 第35号住居跡出土土器拓影図	73
第29図 第16号住居跡出土土器拓影図	40		
第30図 第17号住居跡出土土器実測図	41		

第59图	第36号住居跡出土土器実測図……74	第91图	第57号住居跡出土土器拓影図……104
第60图	第36号住居跡出土土器拓影图1)…75	第92图	第58号住居跡出土土器拓影图…104
第61图	第36号住居跡出土土器拓影图2)…76	第93图	第59号住居跡出土土器实测图…104
第62图	第37号住居跡出土土器尖測図……77	第94图	第59号住居跡出土土器拓影图…104
第63图	第37号住居跡出土土器拓影图……78	第95图	第60号住居跡出土土器尖測図…105
第64图	第38号住居跡出土土器拓影图……79	第96图	第60号住居跡出土土器拓影图1)…106
第65图	第39号住居跡出土土器実測図……81	第97图	第60号住居跡出土土器拓影图2)…107
第66图	第39号住居跡出土土器拓影图……82	第98图	第61号住居跡出土土器实测图…108
第67图	第40号住居跡出土土器実測図……83	第99图	第61号住居跡出土土器拓影图…108
第68图	第40号住居跡出土土器拓影图1)…85	第100图	第62号住居跡出土土器实测图…109
第69图	第40号住居跡出土土器拓影图2)…86	第101图	第62号住居跡出土土器拓影图…110
第70图	第41号住居跡出土土器拓影图……86	第102图	第64号住居跡出土土器拓影图…111
第71图	第42号住居跡出土土器尖測図……88	第103图	第65号住居跡出土土器实测图1)…115
第72图	第42号住居跡出土土器拓影图……89	第104图	第65号住居跡出土土器实测图2)…116
第73图	第44号住居跡出土土器拓影图……89	第105图	第65号住居跡出土土器尖測图3)…117
第74图	第45号住居跡出土土器拓影图……90	第106图	第65号住居跡出土土器实测图4)…118
第75图	第46号住居跡出土土器拓影图……90	第107图	第65号住居跡出土土器拓影图…119
第76图	第47号住居跡出土土器実測図……91	第108图	第66号住居跡出土土器实测图1)…122
第77图	第48号住居跡出土土器尖測図……91	第109图	第66号住居跡出土土器实测图2)…123
第78图	第48号住居跡出土土器拓影图……92	第110图	第66号住居跡出土土器拓影图1)…124
第79图	第49号住居跡出土土器拓影图……93	第111图	第66号住居跡出土土器拓影图2)…125
第80图	第50号住居跡出土土器実測図……93	第112图	第8号住居跡出土土器实测图…128
第81图	第50号住居跡出土土器拓影图1)…95	第113图	第27号住居跡出土土器实测图…129
第82图	第50号住居跡出土土器拓影图2)…96	第114图	第63号住居跡出土土器实测图…129
第83图	第51号住居跡出土土器尖測図……97	第115图	第43号住居跡出土土器实测图…130
第84图	第51号住居跡出土土器拓影图……98	第116图	土壤出土土器实测图1)……133
第85图	第52号住居跡出土土器实测图……99	第117图	土壤出土土器实测图2)……134
第86图	第52号住居跡出土土器拓影图……100	第118图	土壤出土土器实测图3)……135
第87图	第53号住居跡出土土器拓影图……101	第119图	土壤出土土器拓影图1)……136
第88图	第54号住居跡出土土器拓影图……102	第120图	土壤出土土器拓影图2)……137
第89图	第55号住居跡出土土器拓影图……102	第121图	土壤出土土器拓影图3)……138
第90图	第56号住居跡出土土器拓影图……102	第122图	土壤出土土器拓影图4)……139

第123図 土壌出土土器拓影図(5).....	140	第155図 石器実測図(5).....	188
第124図 土壌出土土器拓影図(6).....	141	第156図 石器実測図(6).....	189
第125図 土壌出土土器拓影図(7).....	142	第157図 石器実測図(7).....	190
第126図 土壌出土土器拓影図(8).....	143	第158図 石器実測図(8).....	191
第127図 土壌出土土器拓影図(9).....	144	第159図 石器実測図(9).....	192
第128図 土壌出土土器拓影図(10).....	145	第160図 石器実測図(10).....	193
第129図 土壌出土土器拓影図(11).....	146	第161図 石器実測図(11).....	194
第130図 土壌出土土器拓影図(12).....	147	第162図 石器実測図(12).....	195
第131図 グリッド出土土器実測図(1).....	149	第163図 石器実測図(13).....	196
第132図 グリッド出土土器実測図(2).....	150	第164図 石器実測図(14).....	197
第133図 土製円板の大きさと重量.....	151	第165図 石器実測図(15).....	198
第134図 土器片錐の大きさ.....	153	第166図 石製品実測図.....	200
第135図 土器片錐の重量分布.....	154	第167図 大谷津A遺跡造構配置図.....	201
第136図 土製円板実測図.....	157	第168図 時期別住居跡軒数.....	203
第137図 土器片錐実測図.....	158	第169図 平面形による分類.....	204
第138図 石器の個数.....	159	第170図 柱穴の配列による分類.....	206
第139図 石錐の大きさ.....	163	第171図 炉の形態による分類.....	207
第140図 石錐の重量分布.....	164	第172図 住居跡の形態1).....	211
第141図 石器実測図(1).....	174	第173図 住居跡の形態2).....	211
第142図 石器実測図(2).....	175	第174図 住居跡の形態3).....	211
第143図 石器実測図(3).....	176	第175図 繩文時代の住居跡の主軸方向.....	212
第144図 石器実測図(4).....	177	第176図 阿玉台式期の住居跡の主軸方向.....	212
第145図 石器実測図(5).....	178	第177図 加曾利E式期の住居跡の主軸方 向.....	212
第146図 石器実測図(6).....	179	第178図 阿玉台式期の住居跡集成図(1).....	216
第147図 石器実測図(7).....	180	第179図 阿玉台式期の住居跡集成図(2).....	217
第148図 石器実測図(8).....	181	第180図 加曾利E式期の住居跡集成図(1).....	218
第149図 石器実測図(9).....	182	第181図 加曾利E式期の住居跡集成図(2).....	219
第150図 石器実測図(10).....	183	第182図 古墳時代、奈良・平安時代の住 居跡の主軸方向.....	220
第151図 石器実測図(11).....	184	第183図 大谷津A遺跡住居跡配置図(1).....	221
第152図 石器実測図(12).....	185	第184図 大谷津A遺跡住居跡配置図(2).....	226
第153図 石器実測図(13).....	186		
第154図 石器実測図(14).....	187		

第185図 大谷津A遺跡住居跡配置図(3)…	227	第190図 大谷津A遺跡土壤配置図…	234
第186図 土壌の形態規模分類…	231	第191図 第1群土器拓影図…	239
第187図 土壌の長径と短径の関係…	232	第192図 石器の類別割合…	240
第188図 土壌の長径と深さの関係…	232	第193図 石材による分類…	241
第189図 土壌の平面形からみた分類…	233	第194図 石器類の石材分類…	242

## 表 目 次

表1 土製円板一覧表…	151	表6 住居跡一覧表（縄文時代）…	213
表2 土器片錐一覧表…	154	表7 住居跡一覧表（古墳時代）…	220
表3 石器一覧表…	165	表8 住居跡一覧表（奈良・平安時代）…	221
表4 石錐一覧表…	171	表9 土壌形態分類一覧表…	230
表5 石製品一覧表…	199		

## 付 図

付図1 大谷津A遺跡遺構全体図(1)

付図2 大谷津A遺跡遺構全体図(2)

## 写真図版目次

P L 1	第4・5・7号住居跡出土土器	P L 28	把手(3)
P L 2	第7・8号住居跡出土土器	P L 29	把手(4)
P L 3	第9・10・11号住居跡出土土器	P L 30	把手(5)
P L 4	第12号住居跡出土土器	P L 31	把手(6)
P L 5	第13・15号住居跡出土土器	P L 32	把手(7)
P L 6	第15・16・17・18・19号住居跡 出土土器	P L 33	把手(8)
P L 7	第21・23号住居跡出土土器	P L 34	土製品(1) (土器片錐)
P L 8	第23・24号住居跡出土土器	P L 35	土製品(2) (土器片錐)
P L 9	第24号住居跡出土土器	P L 36	土製品(3) (土器片錐・土製円板)
P L 10	第24・27号住居跡出土土器	P L 37	土製品(4) (土製円板)
P L 11	第27・28・34号住居跡出土土器	P L 38	土製品(5) (土製円板・土玉他)
P L 12	第36・37・39・40・42号住居跡 出土土器	P L 39	石器(1) (打製石斧・磨製石斧)
P L 13	第42・43号住居跡出土土器	P L 40	石器(2) (磨製石斧・磨石)
P L 14	第47・50・51号住居跡出土土器	P L 41	石器(3) (磨石)
P L 15	第51・52・59・60・61・62号 住居跡出土土器	P L 42	石器(4) (磨石)
P L 16	第62・63・65号住居跡出土土器	P L 43	石器(5) (磨石)
P L 17	第65号住居跡出土土器	P L 44	石器(6) (磨石・石皿)
P L 18	第65号住居跡出土土器	P L 45	石器(7) (石皿)
P L 19	第65号住居跡出土土器	P L 46	石器(8) (石皿・凹石)
P L 20	第65・66号住居跡出土土器	P L 47	石器(9) (凹石・礫器)
P L 21	第66号住居跡出土土器	P L 48	石器(10) (礫器・砥石)
P L 22	土壤出土土器	P L 49	石器(11) (スタンプ形石器・ヘラ状 石器・搔器・削器・剥片・輕石・ 浮子)
P L 23	土壤出土土器	P L 50	石器(12) (石鏃)
P L 24	土壤・グリッド出土土器	P L 51	石器(13) (尖頭状石器・石錐・石匙) 石製品(1)
P L 25	グリッド出土土器	P L 52	石製品(2) (石錐)
P L 26	把手(1)	P L 53	石製品(3) (石錐)
P L 27	把手(2)	P L 54	石製品(4) (石錐)

## 第4章 遺物

### 第1節 遺物の概要と記載方法

#### 1 遺物の概要

当遺跡は、縄文時代中期の阿玉台式期から加曾利E式期の時期を中心として営まれた集落跡である。遺構は、遺跡の立地する台地の北側から東側に入り込む谷津と向かい合うように密集して検出されており、これに伴って、遺物も主として遺跡の北側や東側の遺構の覆土中から多量に出土している。遺物は、人工遺物が中心であり、遺物収納コンテナ(40×60×20cm)に160箱分出土している。

当遺跡から出土した遺物の主なものは、土器・土製品・石器・石製品等であり、特に土器片の量が圧倒的多数である。土器としては、縄文時代中期の阿玉台式期や加曾利E式期に比定されるものがその大部分を占め、少量ではあるが縄文時代早期の夏島式期や稚荷台式期に比定される然糸文系の土器が遺跡の北側から出土している。また、古墳時代中期の和泉式期や奈良・平安時代に比定される土師器も出土している。土製品としては、土器片錐52点、土製円板39点、球状土錐2点が出土しており、石器としては、二次的に利用されているものもあり、明確に数をとらえることはできないが、主なものとしては石皿18点、凹石7点、磨石・敲石51点、石錐26点、石斧20点、石匙1点、石錐57点、浮子・軽石7点などがあげられる。その他には、礫器20点、スタンプ形石器3点等が出土している。また、石製品としては、块状耳飾1点、硬玉製大珠1点、石棒3点、勾玉1点等が出土地していいる。遺物の中では、土器片錐や石錐などの出土量が比較的多いことや、黒曜石の剝片が多数出土していることが特筆されよう。

当遺跡における遺構内出土遺物の状況を観察すると、遺物はその大部分が、床面からやや浮いた状態で覆土中から出土しており、貝殻の投棄こそ見られないものの、住居の廃絶→住居跡の埋没開始(埋没しかけて摺鉢状の凹みを呈する)→土器の投棄といふいわゆる、「吹上パターン」に近い状態を呈するものが多い。また、遺構周辺から徐々に流入し堆積した状態を呈するものも見られるが、土器が床面に残されたままの状態で廃棄された、いわゆる「井戸尻パターン」の様相を呈するものは認められていない。すなわち、これらのことから遺構の営まれた時期と投棄された遺物との間には、わずかな時間差のあることが感じとれる。遺物は、ほぼ完形に近い状態に復元されたものもあるが土器片がその大半を占めている。以上のことから、住居跡や土壤の時期については、遺物のみならず、遺構の形態などもふまえながら総合的に判断することにした。

## 2 遺物の記載方法

本書では、当遺跡から出土した遺物のうち、原則として遺構内出土遺物を中心に取り扱った。各遺物についての記載方法と記載内容については、次に述べる通りである。

竪穴住居跡や土壌等から出土した土器片の中で、復元され実測可能なものについては実測を行い、復元不可能な土器片については、特徴的なものを中心に拓本実測を行った。実測図や拓影図はその主なものを遺構ごとに掲載し、出土土器観察表と文章表記を併用し解説した。把手・土製品・石器・石製品については、種類ごとに一括して実測図・拓影図を掲載し、一覧表にまとめて解説した。

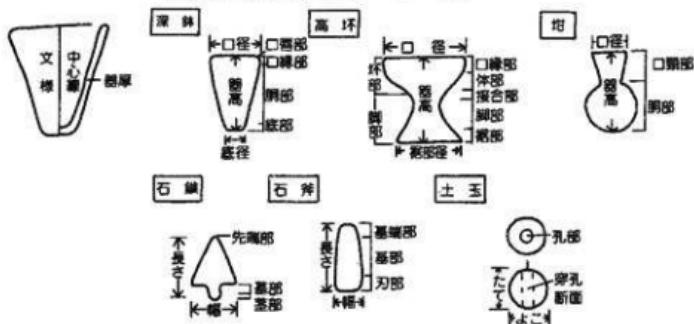
### (1) 使用記号

遺構の使用記号については、第3章第1節2の(1)と同様とした。遺物については、記録（実測、拓本、写真）したすべての遺物について、下記の記号を用いて1点ごとに固有番号を付した。

種類	土器	土製品	拓本記録土器	石器・石製品
記号	P	D P	T P	Q

## (2) 遺物実測図の作成方法と掲載方法

### 各部位の名称と法量表現のための名称



土器

- ①土器の実測方法は、中心線を挟んで左側二分の一に外面、右側二分の一に内面及び断面を記録した。
  - ②土器拓影図は、断面を右側に掲載した。
  - ③土器片縫の実測図は抉りを上下にして掲載した。

### 石器

①敲きの範囲は、←□→ (—) で表し、磨りの範囲は、←○○→ (:::::::) で表した。

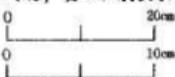
### 縮尺の表示

①土器の実測図については、四分の一、六分の一を基本とした。

②土器片、土製品、石器、石製品の実測図は三分の一を基本とした。

③縮尺の異なる実測図については、各々に別表示した。

④縮尺率は S = 1 / 6



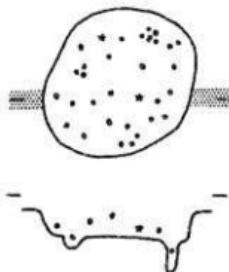
S = 1 / 3

で表した。

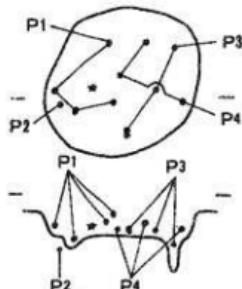
### (3) 遺物の出土位置と接合関係について

遺物の出土位置と接合関係については第3章第2節に掲載した。遺物は、出土位置を平面図及び断面図にドットで落とし、接合されたものについてはすべて線で結び掲載した。この中で、実測図や拓影図として取り上げた遺物については固有番号を付し、それ以外の遺物については接合関係だけを図中に表示した。

遺物出土位置図



土器接合関係図



①遺物出土量の多い住居跡については、ベルト(40cm幅)を設定し、その範囲内から出土した遺物を断面図に点(●…土器片、★…石器類)で表示した。

②遺物出土量の少ない住居跡については、出土した遺物を全て断面図中に表示した。

③断面図の下に表示された点は、ピット内及び床面の凹面から出土した遺物である。

④接合関係にある土器片は、近くに位置するものから順に線で結んだものである。

- ⑤図中の固有番号は、第4章第2節及び第3節に掲載した出土土器観察表及び出土土器拓影図の固有番号と一致する。
- ⑥図中に接合関係を表示した土器や土器片については、出来るだけ実測図や土器拓影図として掲載することに努めた。

#### (4) 表の見方

それぞれの表の見方は、次のとおりである。

**出土土器観察表**

図版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土	焼成	色調	備考

- ①図版番号は、実測図中の番号である。
- ②固有番号は、第3章第2節の遺構の解説及び遺物出土位置図、土器接合関係図中の番号と一致する。(例、P28…土器28番、TP31…拓本土器31番)
- ③器種は、縄文式土器の場合には深鉢形土器というように、…形土器と表示した。( )内には土器の型式名を記載した。
- ④法量は、A一口径、B一器高、C一底径を表し、単位はcmである。なお、A・Cの( )は推定値であり、Bの( )は残存高である。
- ⑤器形の特徴及び文様は、縄文式土器の場合、器形→文様の順で述べ、土師器の場合は、器形→手法の特徴の順で述べた。
- ⑥胎土・焼成・色調の欄は、胎土→焼成→色調の順で述べ、色調は『新版標準土色帖』(山下正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。土器の内面と外面で色調が異なる場合には、内…色、外…色と表示した。
- ⑦備考は、土器の現存率や特記事項等を表示した。

**土器拓影図対照表**

番号	固有番号	番号	固有番号	遺構名

(表-1)

(表-2)

- ①住居跡から出土した土器の拓影図については(表-1)を、土壤から出土した土器の拓影図については(表-2)の対照表を用いて掲載した。
- ②番号は、それぞれの図版に掲載した拓影図の番号である。

③固有番号は、各々の拓本土器に付した固有番号であり、第3章第2節に掲載した遺物出土位置図中及び土器接合関係図中の番号と一致する。

土器片鑑一覧表

図版番号	固有番号	出土地点	大きさ 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	抉り間の 長さ(cm)	形 状	備 考

①長さ、幅、厚さは、それぞれ最大長、最大幅、最大厚の計測値である。以下同様とする。

②備考の欄は、土器片の利用部位や、文様の特徴、時期等を記載した。

土製円板

図版番号	固有番号	出土地点	大きさ 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考

①備考の欄は、形態の特徴や文様の特徴等を記載した。

石器一覧表

図版番号	固有番号	器種	出土地点	大きさ 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備 考

①器種は、同一器種ごとにまとめて掲載した。

②出土地点は、その石器の出土した遺構名や小調査区（グリッド）名で表示した。

③大きさ、重量の欄の( )内数値は、欠損石器の残存値である。

④石質の欄は、その石器を作る母岩の岩石名を表示した。

⑤備考の欄は、石器の形態や特徴等を表示した。

石鑑一覧表

図版番号	固有番号	出土地点	大きさ 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	抉り間の 長さ(cm)	石 質	備 考

## (5) 上器の文様の表現方法

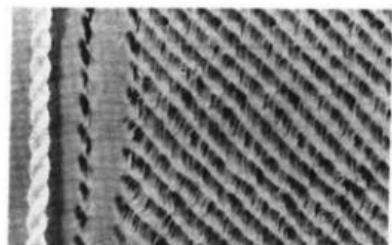
縄文の原体の表記については、山内清男氏の「日本先史土器の模紋」（山内1979）に基づいて次のように表現した。

- ① 1段の繩の回転圧痕→無筋R(1), 無筋L(2)
- ② 2段の繩の回転圧痕→単節RL(3), 単節LR(4)

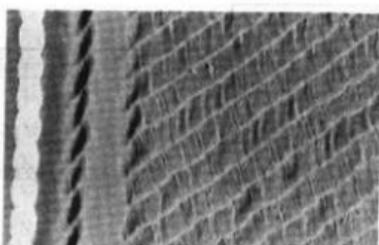
③ 3段の繩の回転圧痕→複節RLR(5), 複節LRL(6)

④ 異条の縄文(7)

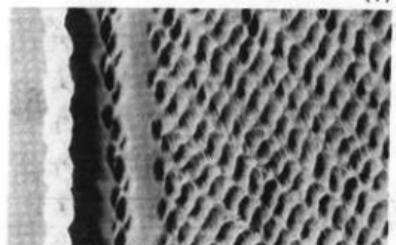
⑤ 檜巻縄文→撚糸文(8)



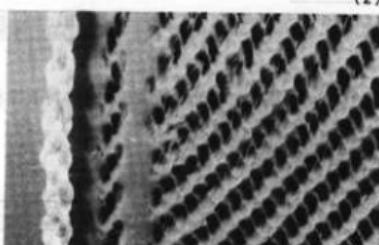
(1)



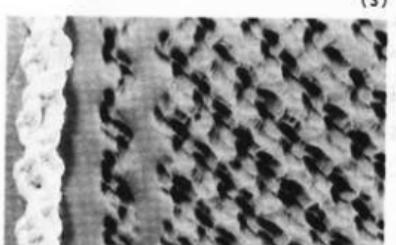
(2)



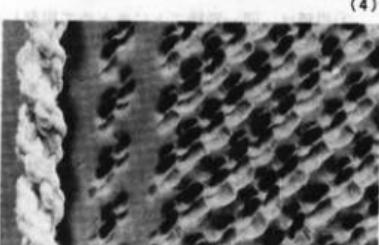
(3)



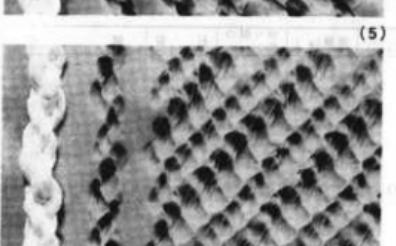
(4)



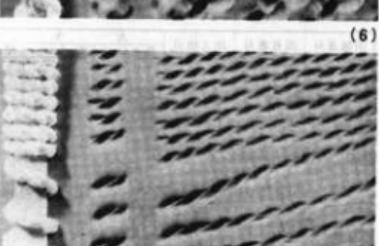
(5)



(6)



(7)



(8)

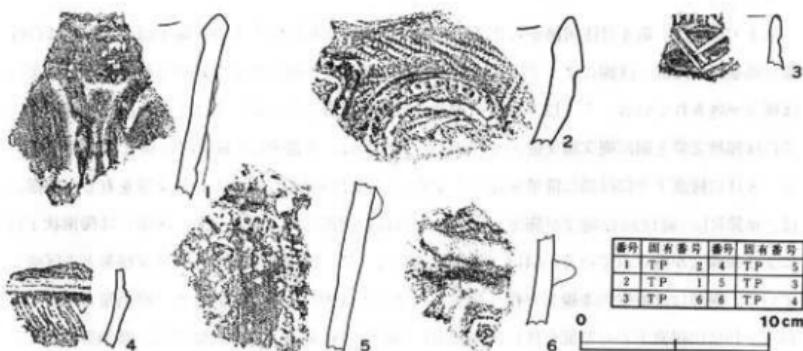
## 第2節 竪穴住居跡出土遺物

岩土山遺跡

### 1 縄文式土器

#### 第1号住居跡出土土器

第1図は、第1号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は波状口縁を呈している。1は波頂部が叉状を呈しており、波頂下には、断面三角形を呈する隆帯が左右対称に弧状に垂下している。隆帯の上面には押圧が加えられている。2は口縁に幅の広い隆帯を貼付し、口縁部はそれと接続する断面カマボコ状の隆帯によって、橢円形状に区画されている。隆帯の上面には、単節RLの横位・縦位の回転縄文が施され、区画の隆帯に沿って、やや幅の広い楔状の結節沈線文が施されている。区画内には、波状沈線文や縄文が施されている。3は口唇部にキザミ目が、口縁部には「V」字状の沈線文が施されている。4は隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。5・6は胴部破片であり、5は断面カマボコ状の隆帯に沿って爪形状の結節沈線文が施され、隆帯の上面には押圧が加えられている。6は断面三角形の隆帯に沿って楔状の結節沈線文が、隆帯の上面や区画内には、縄文が施されている。2と6は同一個体と思われる。



第1図 第1号住居跡出土土器拓影図

#### 第2号住居跡出土土器

第2図は、第2号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。胴部破片であり、結節沈線文が施されている。胎土には金雲母を多量に含んでいます。

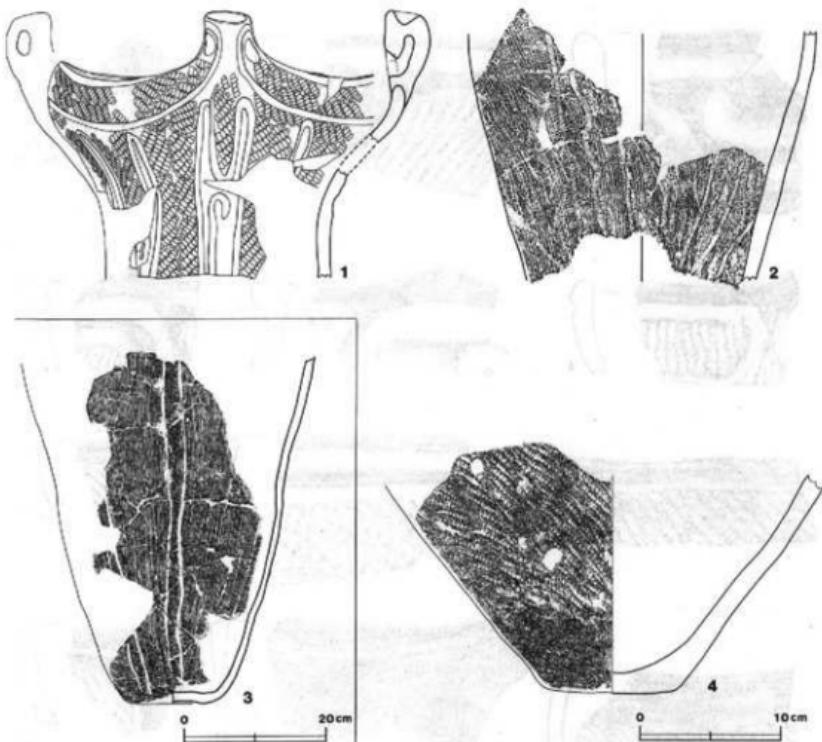


## 第4号住居跡出土土器

出土土器観察表（第3図）

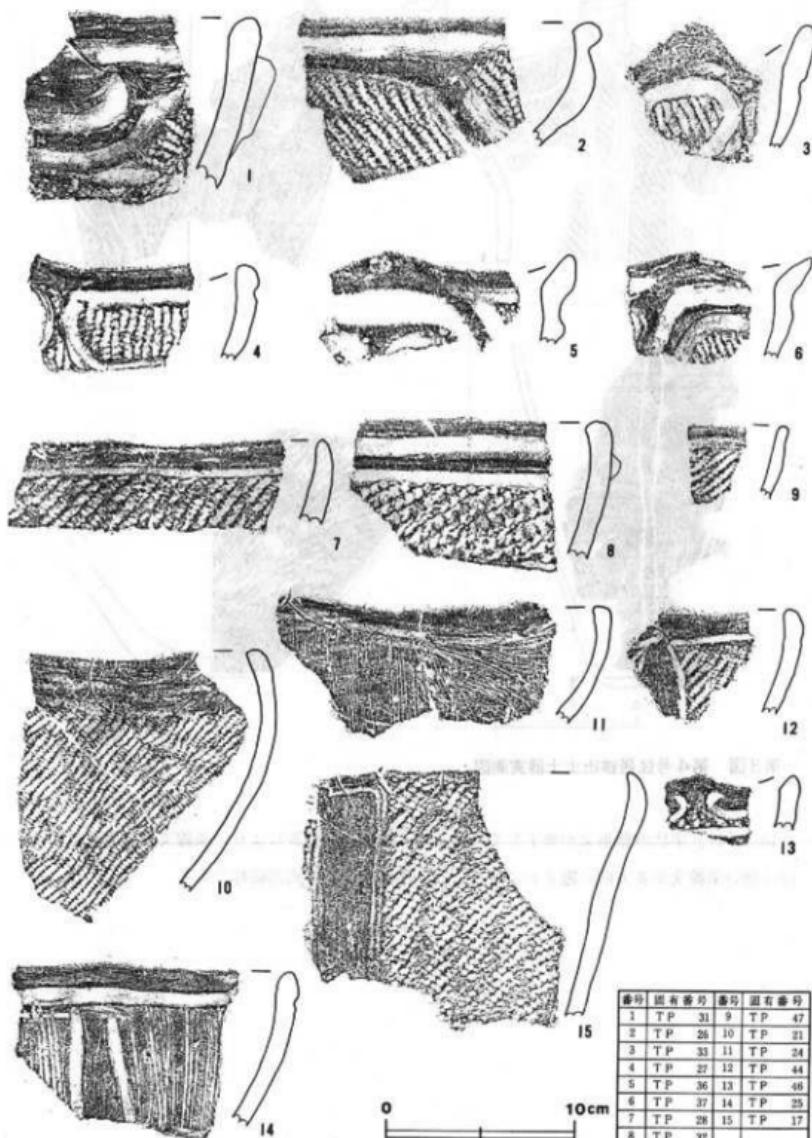
図版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土 焼成 色調	備考
第3図 1	P-1	深鉢形土器 (加賀利E面)	A 28.7 B (18.9)	口縁部は内側で聞く。口縁は波状を呈し、4単位の筋状肥厚を有している。筒状把手は、左右から孔が穿たれており貫通している。把手の上面は大きくくぼんでいる。地文には、単節RLの縦文が全面に施され、口縁部文様等は、把手の穿孔部を含め、沈線によって長楕円形に区画されている。胎部には、上端が又状となる8単位の磨消帯が垂下し、把手状文が施されている。	砂粒・スコリア 良好 に赤い褐色	現存率45% 口縁部～胴部中位 口縁部70%
	P-140	深鉢形土器 (加賀利E面)	B (17.6)	櫛歯状工具による縱位の条線文が施され、磨消帯が垂下している。	砂粒 普通 に赤い褐色	現存率5% 胴部破片
3	P-3	深鉢形土器 (加賀利E面)	B (48.7) C 13.0	地文には、櫛歯状工具による縱位の条線文が全面に施され、2本の沈線によって区画された幅の狭い磨消帯が、8単位垂下している。胴部中位と下位には、縫が付着している。	砂粒・スコリア 普通 に赤い褐色	現存率50% 胴部位～底 部
	P-2	深鉢形土器 (加賀利E)	B (14.7) C (9.5)	底部は平底で、外反して立ち上がる。胴部には、単節LRの縱位回転繩文が施され、胴部下位は無文となっている。8は口縁部無文帶と胴部繩文施文帶とを区画し、胴部には、単節RLの縦位回転繩文が施されている。8は口縁直下や口縁部に隆帯を巡らしている。10は口縁部に幅の広い無文帶を有し、胴部には、単節RLの縦位回転繩文が施されている。11は口縁部に無文帶を有し、胴部には櫛歯状工具による条線文が施されている。14は1条の沈線によって、口縁部無文帶と胴部文様帶とを区画している。胴部には縦位の条線文が粗く施され、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。15は口縁直下から器面全体に、単節RLの縦位回転繩文を施し、幅の広い磨消帯が垂下している。第5図の1～4は口縁部に円形刺突文が、5は爪形状の刺突文が施されている。6～21は胴部破片である。8は地文に単節RLの縦位回転繩文を施し、沈線によって、円形や方形状に区画されている。10は地文に繩文を施し、隆帯・沈線によって渦巻状に区画されている。12・13は葉手状の沈線文が施されている。14は口縁部に隆帯による渦巻文が施されている。胴部には、地文に単節RLの縦位回転繩文を施し、2本の浅い沈線によって区画された磨消帯が垂下している。15～21は胴部に櫛歯状工具による縦位の条線文が施されている。15・16は曲線的な条線文が施されている。	砂粒・スコリア 普通 内～に赤い褐色 外～に赤い褐色	現存率20% 胴部位～底 部

第4・5図は、第4号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。第4図の1～6は口縁部が渦巻状の隆帯・沈線によって区画され、胴部に懸垂文が施される深鉢形土器である。地文には繩文が施されている。7～12・14は口縁部に無文帶を有している。7は1条の浅い沈線によって口縁部無文帶と胴部繩文施文帶とを区画し、胴部には、単節RLの縦位回転繩文が施されている。8は口縁直下や口縁部に隆帯を巡らしている。10は口縁部に幅の広い無文帶を有し、胴部には、単節RLの縦位回転繩文が施されている。11は口縁部に無文帶を有し、胴部には櫛歯状工具による条線文が施されている。14は1条の沈線によって、口縁部無文帶と胴部文様帶とを区画している。胴部には縦位の条線文が粗く施され、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。15は口縁直下から器面全体に、単節RLの縦位回転繩文を施し、幅の広い磨消帯が垂下している。第5図の1～4は口縁部に円形刺突文が、5は爪形状の刺突文が施されている。6～21は胴部破片である。8は地文に単節RLの縦位回転繩文を施し、沈線によって、円形や方形状に区画されている。10は地文に繩文を施し、隆帯・沈線によって渦巻状に区画されている。12・13は葉手状の沈線文が施されている。14は口縁部に隆帯による渦巻文が施されている。胴部には、地文に単節RLの縦位回転繩文を施し、2本の浅い沈線によって区画された磨消帯が垂下している。15～21は胴部に櫛歯状工具による縦位の条線文が施されている。15・16は曲線的な条線文が施されている。



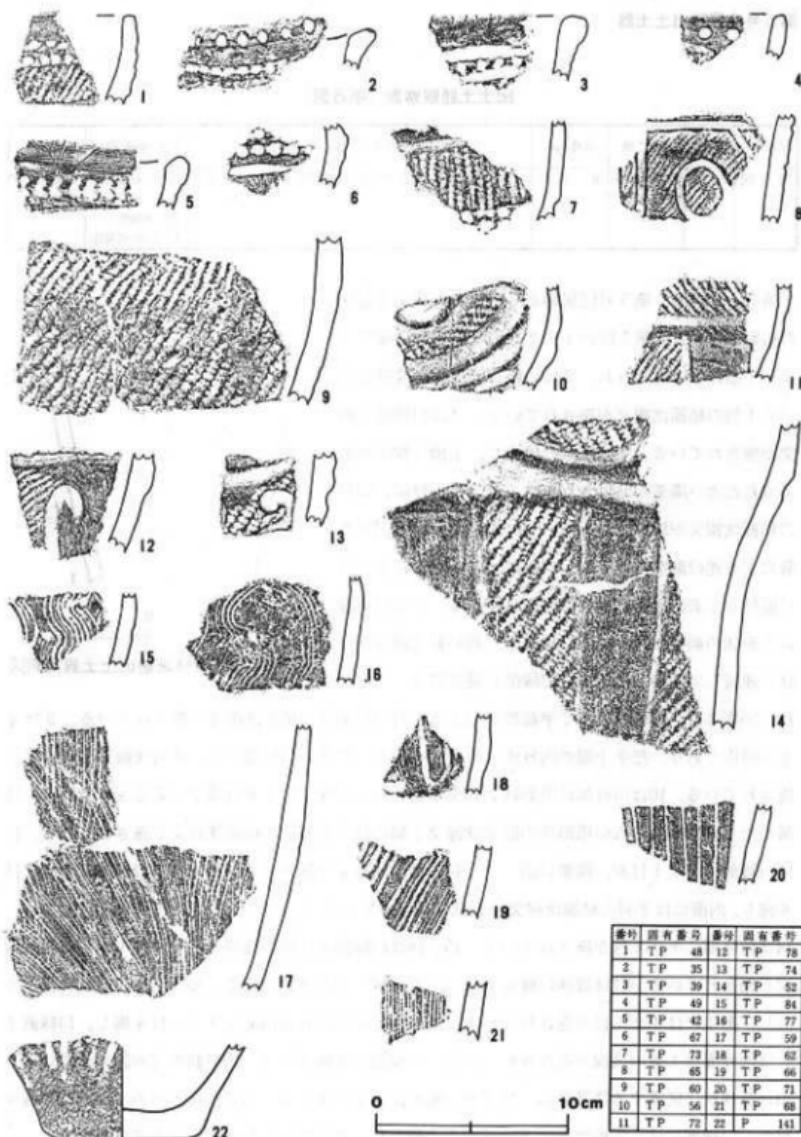
第3図 第4号住居跡出土土器実測図

18は「U」字状の懸垂文が垂下している。19・20は半截竹管により、条線文が施されている。  
19は細い条線文が多方向に施されている。22は深鉢形土器の底部破片である。



番号	固有番号	番号	固有番号
1	TP 31	9	TP 47
2	TP 26	10	TP 21
3	TP 33	11	TP 24
4	TP 27	12	TP 44
5	TP 36	13	TP 46
6	TP 37	14	TP 25
7	TP 28	15	TP 17
8	TP 32		

第4図 第4号住居跡出土土器拓影図 (1)



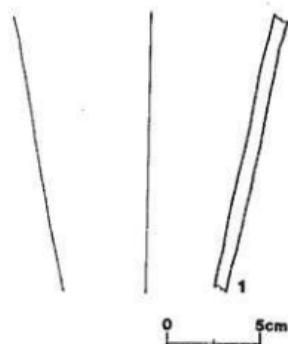
第5図 第4号住居跡出土土器拓影図 (2)

## 第5号住居跡出土土器

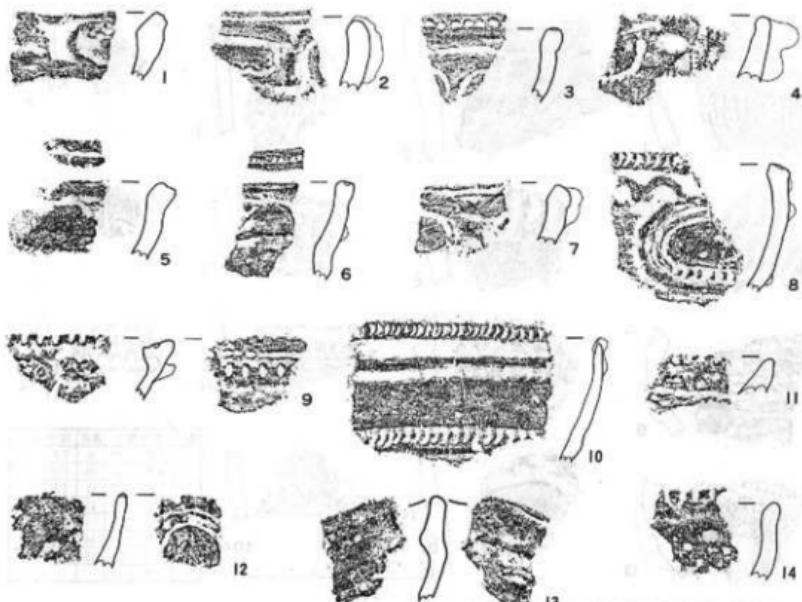
出土土器観察表（第6図）

出典番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様（手法の特徴）	胎土・焼成	色調	備考
第6図	P-4 1	深鉢形土器 (阿玉台)	B (15.0)	無文の七面で、剖部下段から上位にかけて外反して立ち上がる。	雲母・石英 審査 内一黑色 外一赤褐色	現在率30% 鋼部破片	

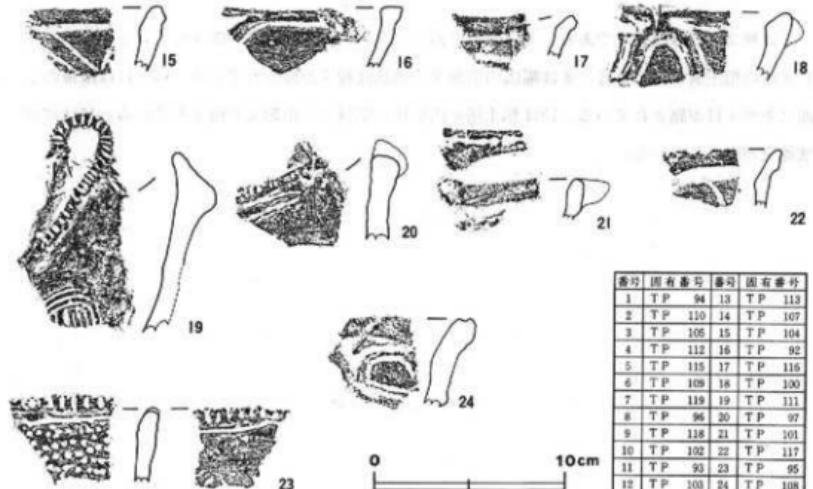
第7・8図は、第5号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。第7図の1・2は断面二角形の隆帯によって窓枠状に区画され、2は口唇部や区画の隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。3は口唇部に刺突が施されている。4は区画の接点に、上面に押圧が加えられた太い隆帯が貼付されている。5は口唇部に楔状の結節沈線文が施されている。6は口唇部に細い円形竹管による連続刺突が施され、口縁部には、粘土紐を二段に貼付して表出された小突起を有している。8は口唇部に爪形状の刺突が施され、口縁直下に細い粘土紐を「へ」状に連続して貼付している。口縁部は隆帯によって窓枠状に区画され、隆帯に沿って半截竹管による1列の爪形状の結節沈線文が施されている。9は把手の破片であり、把手端の内外面にはキザミ目が、把手の口唇部には、結節沈線文や刺突文が施されている。10は口唇部に爪形状の刺突が施され、口縁部に1本の隆帯が巡らされている。隆帯の上下には、幅の広い爪形状の結節沈線文と幅の狭い爪形状の結節沈線文が施されている。11は口唇部にキザミ目が、隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。12は口唇部にキザミ目を施し、内面には2列の結節沈線文が弧状に施されている。13は把手部で、内面に稜を有している。14は口唇部にキザミ目が施されている。15～18は口縁部や区画の隆帯に沿って、1列の結節沈線文が施されている。17は波状口縁を呈している。19・20は波状口縁で、19は口縁に渦状の把手を有し、把手にはキザミ目が施されている。23は口唇部や口唇部内面にキザミ目を施し、口縁直下には内外面に1条の沈線が巡らされている。口縁部の沈線下には、円形刺突文が施されている。24は窓枠状に区画する隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。第8図の1は波状口縁を呈し、口縁部には、半截竹管により曲線文が描かれ、幅の広い爪形文が施されている。



第6図 第5号住居跡出土土器実測図

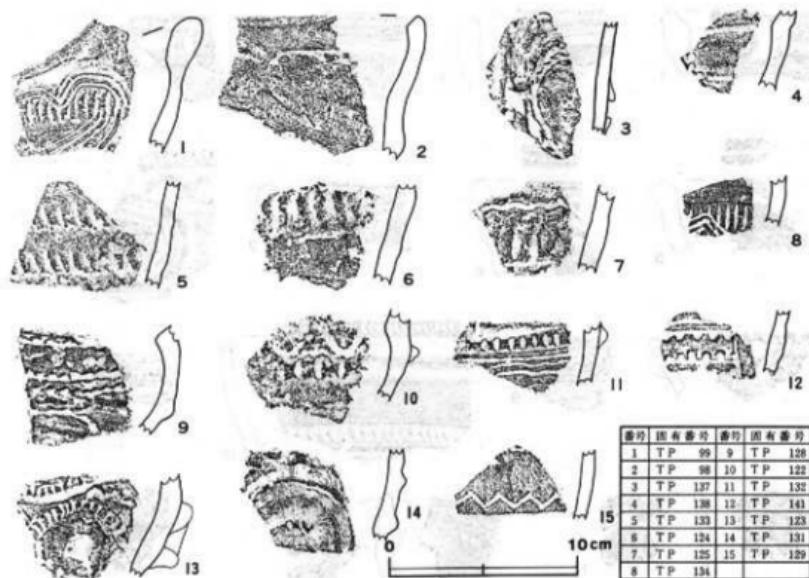


第7図 第5号住居跡出土土器拓影図 (1)



番号	固有番号	番号	固有番号
1	TP 94	13	TP 113
2	TP 110	14	TP 107
3	TP 105	15	TP 104
4	TP 112	16	TP 92
5	TP 115	17	TP 116
6	TP 109	18	TP 100
7	TP 119	19	TP 111
8	TP 96	20	TP 97
9	TP 118	21	TP 101
10	TP 102	22	TP 117
11	TP 93	23	TP 95
12	TP 103	24	TP 108

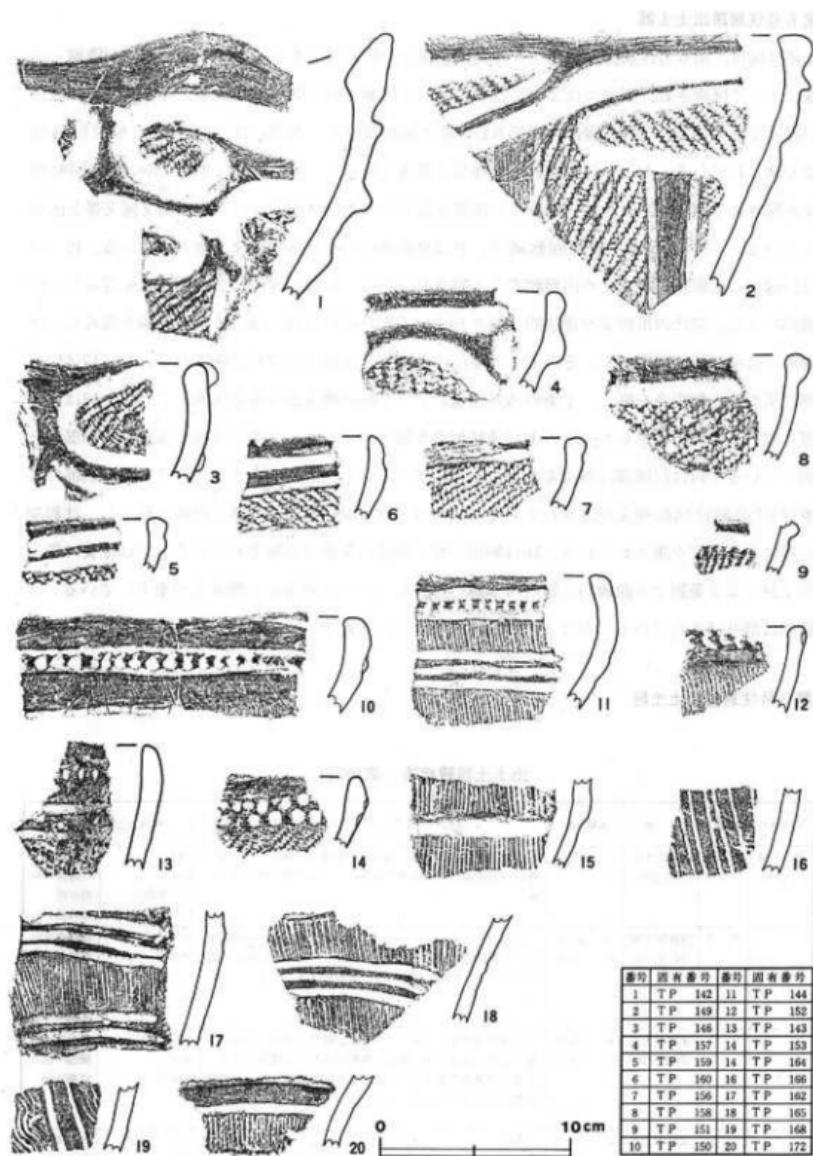
第7図 第5号住居跡出土土器拓影図 (1)



番号	固有番号	番号	固有番号
1	TP 99	9	TP 128
2	TP 98	10	TP 122
3	TP 137	11	TP 135
4	TP 138	12	TP 141
5	TP 133	13	TP 123
6	TP 124	14	TP 131
7	TP 125	15	TP 129
8	TP 134		

第8図 第5号住居跡出土土器拓影図 (2)

2は無文の口縁部破片である。3は隆帶に沿って1列の結節沈線文が施されている。5~8はヒダ状の指圧痕が見られる。8は幅広の爪形文や波状沈線文が施されている。10・11は隆帶の上面にキザミ目が施されている。13は粘土紐を円形状に貼付し、爪形文が施されている。15は波状沈線文が施されている。



番号	固有番号	番号	固有番号
1	TP 142	11	TP 144
2	TP 149	12	TP 152
3	TP 148	13	TP 143
4	TP 157	14	TP 153
5	TP 159	15	TP 164
6	TP 160	16	TP 166
7	TP 156	17	TP 162
8	TP 158	18	TP 165
9	TP 151	19	TP 168
10	TP 150	20	TP 172

第9図 第6号住居跡出土土器拓影図

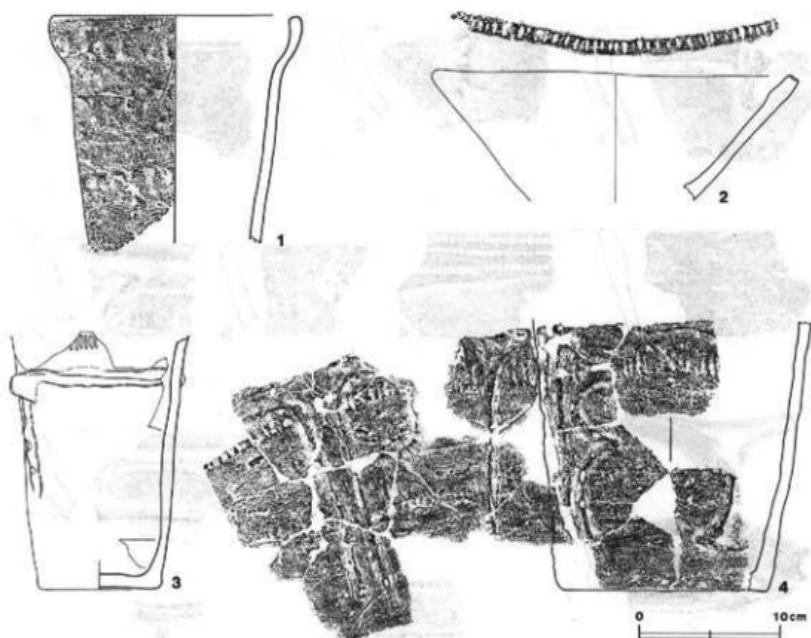
## 第6号住居跡出土土器

第9図は、第6号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～4は口縁部が隆線・沈線によって区画され、胴部には2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。1は波状口縁を呈している。2は口縁部に単節RLの横位回転縄文が、胴部には、単節RLの縦位回転縄文が施されている。5・6は口唇部と口縁部に隆帯を巡らし、6は胴部に単節LRの縦位回転縄文が施されている。7～9は口縁直下に隆帯を巡らし1条の沈線によって胴部縄文施文帯と区画している。7は単節LRの横位回転縄文、9は単節RLの斜位回転縄文が施されている。10～14は口縁部に爪形状の刺突文や円形刺突文が施されている。10は口縁部に2条の沈線を巡らし、沈線間に「C」字状の爪形文が連続的に施されている。11は口縁部に浅い2条の沈線を巡らし、沈線間に爪形状の刺突文が、その下には縦位の条線文と沈線文が交互に施されている。12は口縁部に爪形状の刺突文を施し、1条の浅い沈線によって胴部縄文施文帯と区画している。13は口縁部に船の広い無文帯をもち、その上に連続刺突が施されている。2条の沈線を巡らし、胴部と区画している。14は口縁部に無文帯をもち、その下に2列の円形刺突文を巡らしている。胴部には単節RLの縦位回転縄文が施されている。15・17・18は胴部に数条の浅い沈線を巡らし、沈線間に縦位の条線文が施されている。16は胴部に粗い縦位の条線文が施されている。19は地文に櫛齒状工具による条線文を曲線的に施し、2本の沈線によって区画された懸垂文が垂下している。沈線間に磨消帯が見られる。20は2条の沈線を巡らし、沈線下には磨消帯が縦位に施されている。

## 第7号住居跡出土土器

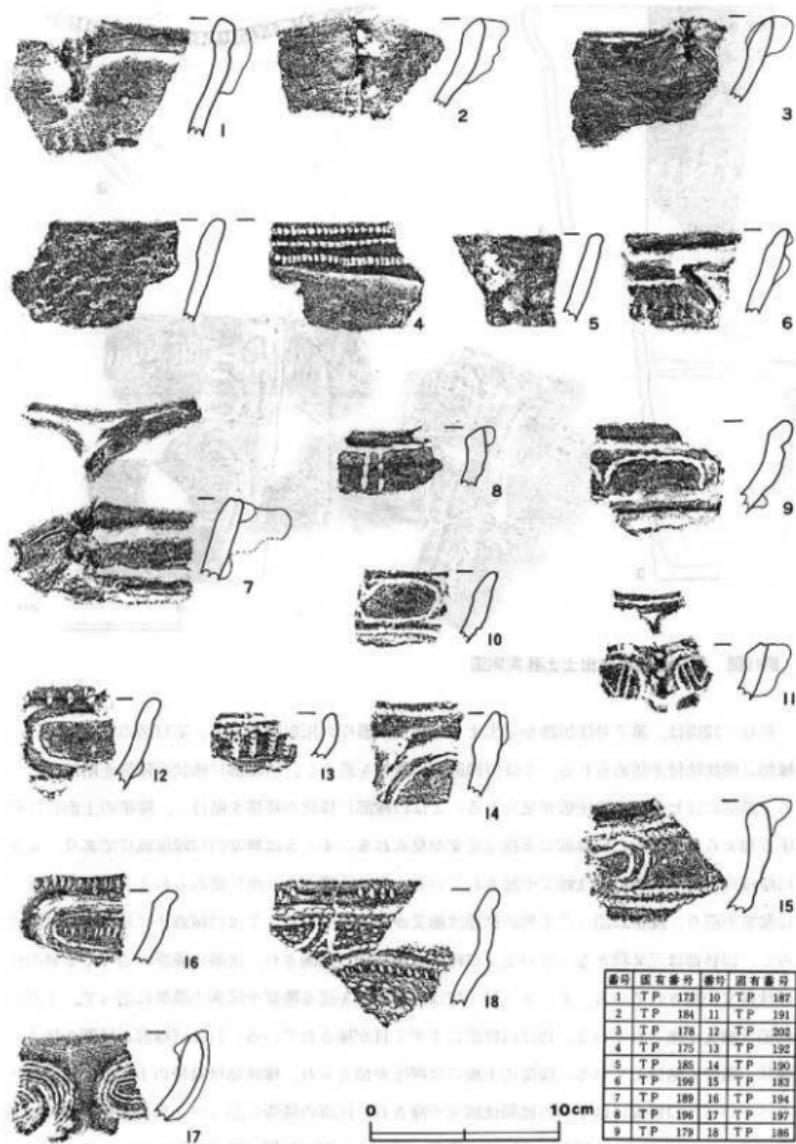
出土土器観察表（第10図）

図版番号	開拓番号	器種	法縫(cm)	器形の特徴及び文様（手縫の特徴）	胎土	焼成	色調	備考
第10図 1	P-142	深鉢形土器 (阿玉台Ⅰb)	A (17.8)	口縁部は浅く内唇し、円筒形の胴部へと移行している。 軽文の剖面圖には、脇部や胴部にヒゲ状の指印痕が見られる。	砂粒	現存率15%	口縁部～胴部中位	
2	P-4	浅鉢形土器 (阿玉台)	A (25.2) B (9.3)	底部から外輪して立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。 口縁部内面に、縦やかな縦を有しており、口縁部上面にはキザミ目が施されている。器表面は無文である。	赤母・長石 良好	現存率30%	口縁部～底部	
3	P-5	深鉢形土器 (阿玉台Ⅰb)	B (18.0) C (8.6)	口縁部文様帶は欠損しているが、彼岸上端部に爪形文が見られる。腹部には、斜面三角形の貼り付け落葉が返り、4半位の隆帯が垂下している。全体的に彫刻が粗く、輪積み整形時の指印痕が残っている。	砂粒 良好	現存率30%	腰部～底部	
4	P-30	深鉢形土器 (阿玉台Ⅱ)	B (19.2)	胴部には、「へ」状及び逆行する斜面三角形の隆帯が貼り付けられており、ところどころにヒゲ状の指印痕が見られる。隆帯に沿って爪形文が施されており、底部外面には輪積みがみられる。	長石・長石 良好	現存率30%	胴部中位～底部	



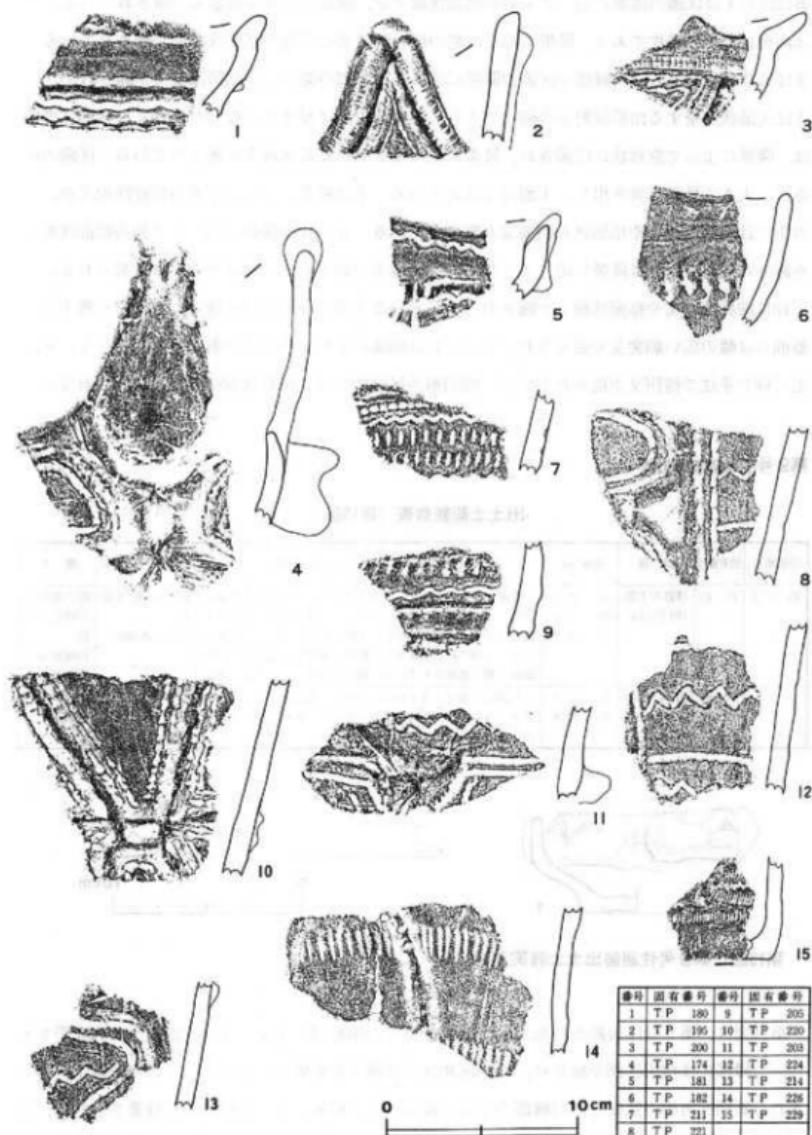
第10図 第7号住居跡出土土器実測図

第11・12図は、第7号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。第11図の1～3は、口縁部に棒状貼付が認められる。1は口縁直下に隆帯を巡らし、口縁部に棒状の隆帯を貼付している。頸部にはヒダ状の指圧痕が見られる。2は口縁部に棒状の隆帯を貼付し、隆帯の上面には押圧が加えられている。口唇部に玉抱三叉文が見られる。4・5は無文の口縁部破片であり、4は口縁部内面に3列の結節沈線文が施されている。5は圧痕が3か所に認められる。6は口縁直下に隆帯が巡り、隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。7は口縁直下に分厚い隆帯を巡らし、口唇部は三叉状となっている。口縁部は窓縫状に区画され、区画の隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。8・9・10・12は口縁直下を巡る隆帯や区画の隆帯に沿って、1列の結節沈線文が施されている。12は口唇部にキザミ目が施されている。11は口縁部の区画の接点に棒状の隆帯を貼付している。隆帯の上面には押圧が加えられ、棒状貼付隆帯の上面は、三叉状となっている。口唇部には1列の結節沈線文が施され、区画の隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。13～18は口縁直下や区画の隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。14は口唇部に1列の結節沈線文が、16・18は口唇部にキザミ目が施されている。



第11図 第7号住居跡出土土器拓影図 (1)

番号	固有名	番号	固有名
1	TP 173	10	TP 187
2	TP 184	11	TP 191
3	TP 178	12	TP 202
4	TP 175	13	TP 192
5	TP 185	14	TP 190
6	TP 199	15	TP 183
7	TP 189	16	TP 194
8	TP 196	17	TP 197
9	TP 179	18	TP 186



第12図 第7号住居跡出土土器拓影図 (2)

第12図の1は区画の隆帯に沿って1列の結節沈線文が、胴部には波状沈線文が施されている。2は山形状把手の破片であり、隆帯に沿って幅の広い刺突文や2列の結節沈線文が施されている。3は波状口縁を呈し、口縁部や区画の隆帯に沿って、1列の幅の広い結節沈線文が施されている。4は大波状を呈する山形状把手の破片であり、把手の上面は双頭状となっている。口縁部文様帶は、隆帯によって窓枠状に区画され、隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。区画の接点は、大きく外側に突き出し、上面はくぼんでいる。7は隆帯に沿って1列の結節沈線文が、その下には波状沈線文や爪形状の刺突文が施されている。8・10は隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。9は隆帯に沿って1列の結節沈線文が施され、ヒダ状の指圧痕が見られる。11～13は波状沈線文や結節沈線文が施されている。14は上面にキザミ目が施された隆帯が垂下し、器面には幅の広い刺突文が巡らされている。15は胴部の下位に爪形状の刺突を密に巡らし、その上に同じ手法で楕円文が描かれている。楕円形の区画内には、結節沈線文が波状に施されている。

#### 第9号住居跡出土土器

出土土器観察表（第13図）

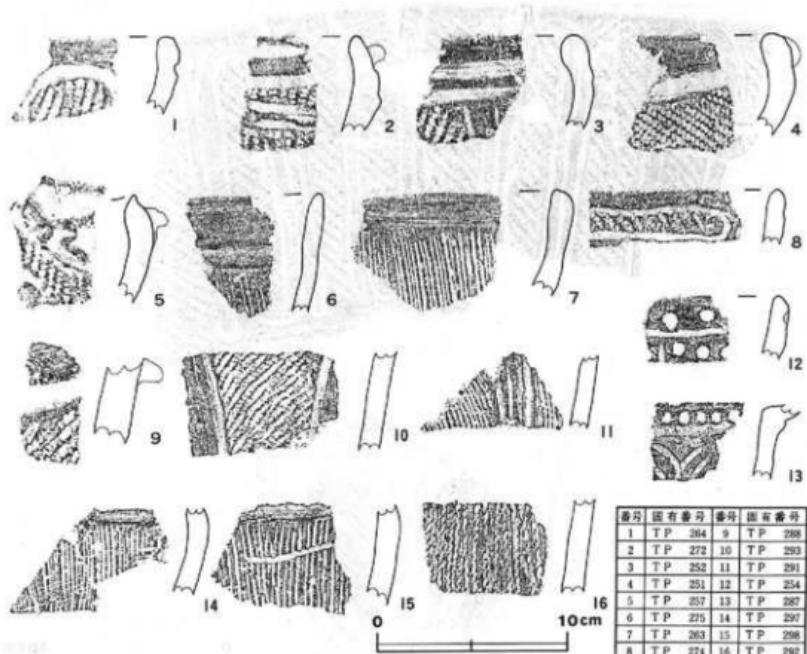
測定番号	団有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様（手法の特徴）	胎土	焼成	色調	備考
第13図 1	P-10	浅鉢形土器 (阿玉台1b)	A 10.5 B 5.6 C 6.3	底部から大きく外反して立ち上がり、やや直立しながら立ち上がる口縁部に接続している。口縁部には、粘土模様り付けた棒状の区画が、4単位配されている。区画内には、1列の結節沈線文が、瓶状に連續的に施されている。器面は粗く變形されている。土中に混入した土器である。	砂粒・石英・ガラス 良好	現存率70%	口縁部～底 部	口縁部50% 底50%
	P-89	台付土器	B 1.4 C 17.9	台部は、瓶で大きく外反して聞く。器部からは、一定の厚さを保ちながら傾斜して立ち上がり。底部に接続するものと思われる。	砂粒 普通	現存率5%	未溝	に赤褐色



第13図 第9号住居跡出土土器実測図

第14図は、第9号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁直下に無文帶をもち、口縁部には楕円区画が施され、その区画内には縄文が充填されている。2は口縁直下に巡らされた断面三角形の隆帯と、口縁部の下方に巡らされた隆帯によって口縁部文様帶を区画し、区画内には、単節RLの斜位回転縄文が施されている。3は口縁部に2条の沈線を巡らしている。胴部には、単節RLの縦位回転縄文が施され、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下して

いる。4は1条の沈線によって口縁部無文帯と胴部繩文施文帯とを区画し、胴部には単節RLの横位回転繩文が施されている。5は波状口縁を呈している。6は口縁直下に幅の広い無文帯を有し、浅い沈線によって胴部と区画されている。胴部には継位の条線文が施されている。7は口縁直下に幅の狭い無文帯を有し、その直下には継位の条線文が施されている。8は口縁部を沈線によって楕円区画し、区画内には単節RLの横位回転繩文を施している。12は口縁部に1条の沈線を巡らし、その上下に円形刺突文を施している。9~11, 13~16は胴部破片である。10は地文に単節RLの継位回転繩文を施し、2本の浅い沈線によって区画された磨消帯が垂下している。11は地文に継位・斜位の撲糸文が施されている。13は口縁部直下の胴部破片であり、浅い沈線を巡らして口縁部と胴部とを区画している。口縁部には四角形の刺突を施し、胴部には浅い沈線が弧状に施されている。14~15は胴部に沈線を巡らし、その直下には継位の条線文が施されている。16は粗い撲糸文が継位に施されている。

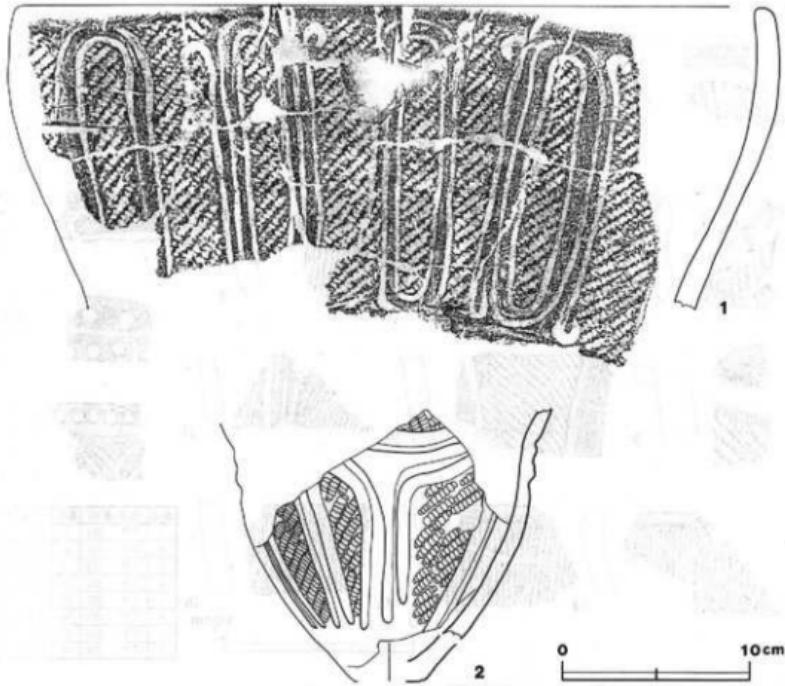


第14図 第9号住居跡出土土器拓影図

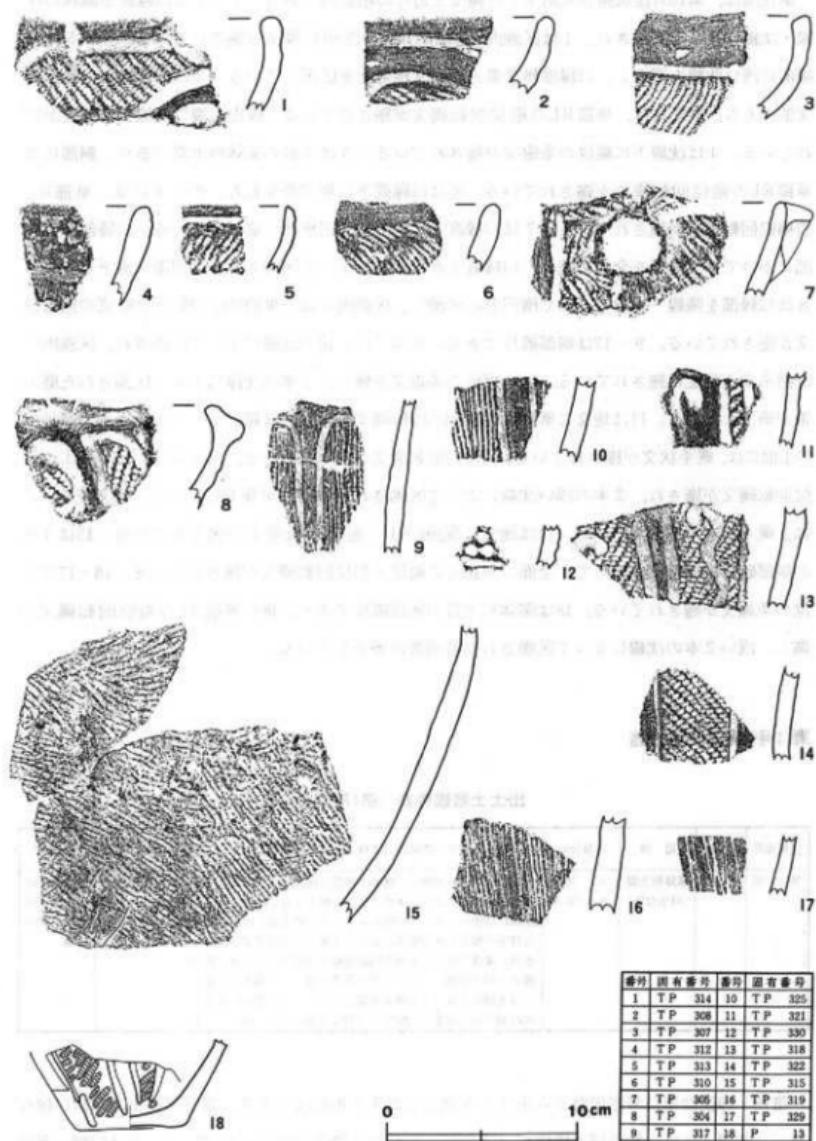
第10号住居跡出土土器

出土土器観察表（第15図）

図版番号	器有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様（手法の特徴）	胎土 焼成 色調	備考
第15図	P 11	深鉢形土器 （加曾利EⅢ）	A (39.6) B (16.1)	平縁で、胴部中位から外反して立ち上がり、口縁部で浅く内脅する。口縁部から胴部中位にかけて、2本の沈線によって区画された部位の横円文が8単位重下し、横円文の両側には、沈線によって表出された対称をなす麻手状文が、部位に施されている。地文には單節RLの部位回転繩文が施され、2本の沈線間は繊り消されている。	砂粒・スコリア 普通 内一浅黄褐色 外一にぶい褐色	現存率30% 口縁部～胴部上位 口縁部20%
1	P 12	深鉢形土器 （加曾利EⅢ）	B 14.4 C (3.7)	底部から緩く内脅して立ち上がり、破片上部で外反している。胴部には單節RLの部位回転繩文が施され、2本の沈線によって区画された磨消帯が巻下している。	砂粒 良好 内一深褐色 外一赤褐色	現存率30% 底部～底部 底部10%



第15図 第10号住居跡出土土器実測図



第16図 第10号住居跡出土土器拓影図

番号	固有番号	番号	固有番号
1	TP 314	10	TP 325
2	TP 308	11	TP 321
3	TP 307	12	TP 330
4	TP 312	13	TP 318
5	TP 313	14	TP 322
6	TP 310	15	TP 315
7	TP 305	16	TP 319
8	TP 304	17	TP 329
9	TP 317	18	P 13

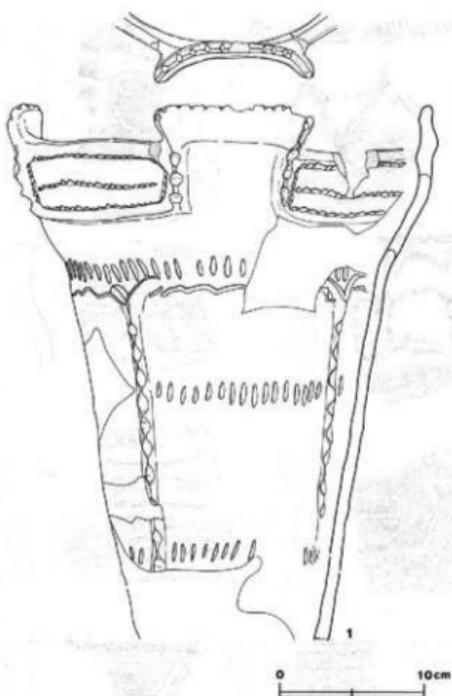
第16図は、第10号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁部が溝状の隆線・沈線によって区画され、1は区画内に単節RLの横位回転縄文が施されている。3～5は口縁部に浅い沈線を巡らし、口縁部無文帯と胸部文様帯とを区画している。3は幅の広い口縁部無文帯をもち、胸部には、単節RLの縱位回転縄文が施されている。破片右端の沈線上には孔が穿かれている。4は沈線下に縦位の条線文が施されている。5は小形の深鉢形土器であり、胸部には単節RLの縦位回転縄文が施されている。6は口縁直下に無文帯をもち、その下には、単節RLの横位回転縄文が施されている。7は口縁直下に粘土紐を円形状に貼付している。口唇部から胸部にかけては、縄文を全面に施し、口縁直下から沈線によって区画された磨消帯が垂下している。8は口縁部を隆線・沈線によって楕円形に区画し、区画内には、単節RLの横位や縦位の回転縄文が施されている。9～17は胸部破片である。9は「人」状の沈線によって区画され、区画内には撚糸文が縦位に施されている。10は縦位の条線文を施し、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。11は地文に単節RLの縦位回転縄文を施し、沈線によって区画された磨消帯の上面には、蘇手状文が施されている。12は円形刺突文が施されている。13は地文に単節RLの縦位回転縄文が施され、2本の浅い沈線によって区画された磨消帯が垂下している。縄文帯の上には、蘇手状文が施されている。14は地文に複節LRLの縦位回転縄文が施されている。15は3片の胸部破片が接合したもので、全面に無節Lの縦位・斜位回転縄文が施されている。16・17は縦位の条線文が施されている。18は深鉢形土器の底部破片であり、細い単節RLの縦位回転縄文を施し、浅い2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。

#### 第11号住居跡出土土器

出土土器観察表（第17図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様（手法の特徴）	胎土 燒成 色調	備考
第17図 1	P-14 深鉢形土器 (阿玉台Ib)	A 28.2 B (37.4)	口縁部は浅く内擣し、胸部は底部に向かってすぼまっている。口縁部には、4単位の窓状の把手を有し、把手の口縁部には粗いキザミ目が施されている。把手間には、上面に押圧の加えられた隆帯により、4単位の区画状文が構成され、隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。腹部から脚下平部に「Y」字状の隆帯が垂下し、隆帯の上面には丸棒状工具による押圧が加えられている。底部には波状沈線文が、脚部には幅広の爪彫文が施されている。	砂粒・雲母・長石 普通 内一暗褐色 外一褐色	現存率90% 口縁部・胸部の一部が欠損

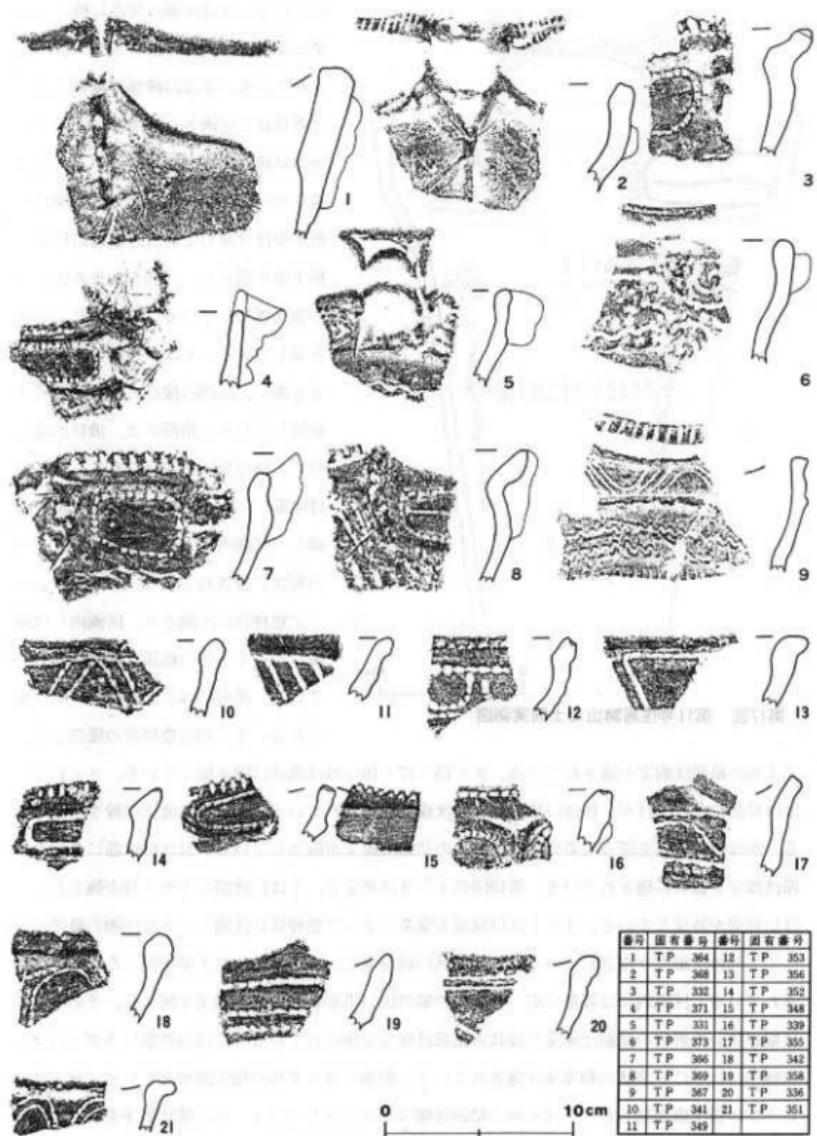
第18・19図は第11号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。第18図の1は波状口縁を呈し、波頂下には、粘土紐を横位に4本貼付した棒状の隆帯が付けられている。2は口縁に双頭状の小突起を有し、突起部からは「Y」字状の隆帯が垂下している。口唇部にはキザミ目が施さ



第17図 第11号住居跡出土土器実測図

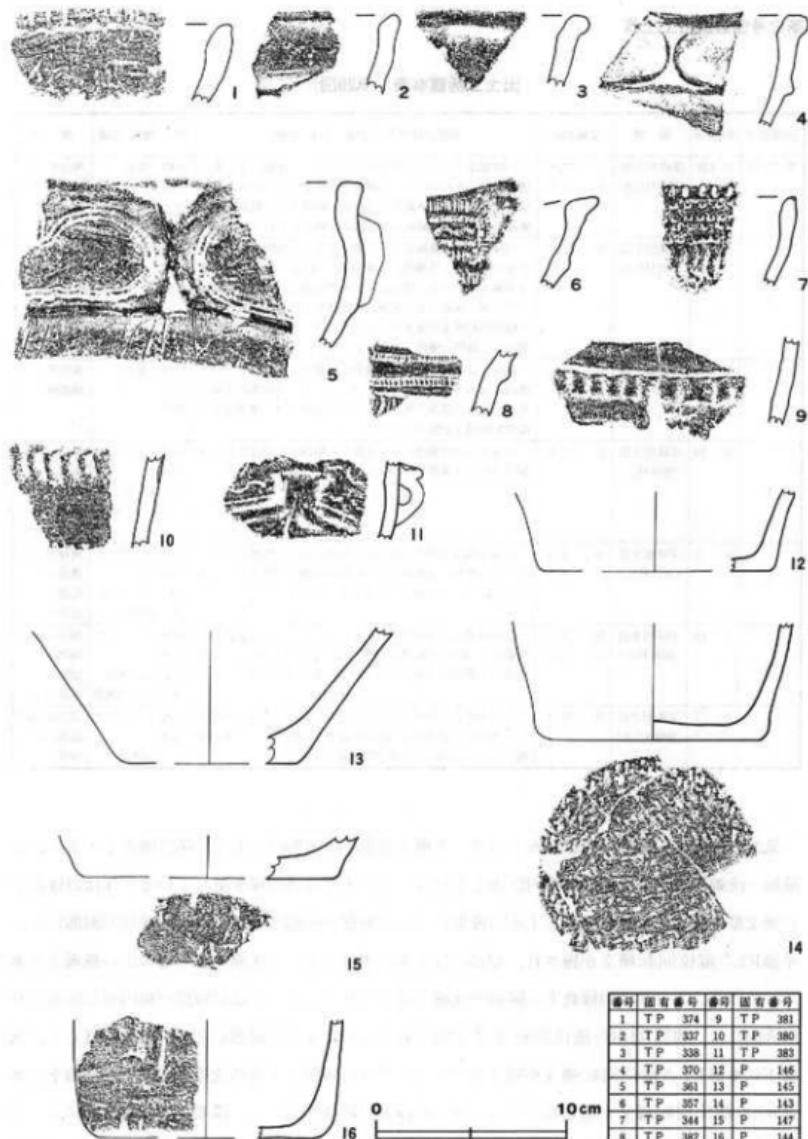
れている。3は区画の接点に棒状の隆帯が貼付され、口唇部にキザミ目が施されている。4は口縁部が隆帯によって窓枠状に区画され、隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。区画接点の口縁には、上面がくぼむ環状の把手が付けられている。5は口唇部に粘土紐を巡らし、一部をつまみ出して小突起状にしている。口唇部は三叉状を呈している。6は口唇部に結節沈線文を施し、区画の接点に棒状の隆帯を貼付している。頸部には、波状沈線文やヒダ状の指圧痕が見られる。7は貼付隆帯によって口縁部を「冂」状に区画し、区画内に1列の結節沈線文が橢円形状に施されている。8は隆帯によって窓枠状に区画され、区画内には隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。頸部にはヒダ状の指圧痕が見られる。9～19は窓枠状の隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。9・15・17・19～21は波状口縁を呈している。9・14・15は口唇部にキザミ目が、16は口唇部に結節沈線文が施されている。20・21は波状口縁を呈している。20は口縁直下を巡る隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。21は口縁部に2列の結節沈線文が弧状に施されている。第19図の1～3は無文で、1は口唇部にキザミ目が施され、3は口唇部が外反している。4・5は口縁部を隆帯によって窓枠状に区画し、5は区画の隆帯に沿って2列の沈線文が施されている。6は波状口縁を呈し、波頂下には粘土帶で囲った突起が貼付されている。区画内には隆帯に沿って1列の幅の広い爪形状の結節沈線文が施され、その内側には幅の狭い爪形状の結節沈線文や波状の結節沈線文が施されている。7は口唇部にキザミ目が、口縁部には「C」字状の刺突文が施されている。胴部にはヒダ状の指圧痕が見られる。9・10はヒダ状の指圧痕が見られ、9は1列の結節沈線文が巡らされている。11は横状把手を有し、隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。12・14～16は深鉢形土器の底部破片であり、14・15は底部に網代痕を有している。13は鉢形土器の底部破片である。

て1列の結節沈線文が施されている。9・15・17・19～21は波状口縁を呈している。9・14・15は口唇部にキザミ目が、16は口唇部に結節沈線文が施されている。20・21は波状口縁を呈している。20は口縁直下を巡る隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。21は口縁部に2列の結節沈線文が弧状に施されている。第19図の1～3は無文で、1は口唇部にキザミ目が施され、3は口唇部が外反している。4・5は口縁部を隆帯によって窓枠状に区画し、5は区画の隆帯に沿って2列の沈線文が施されている。6は波状口縁を呈し、波頂下には粘土帶で囲った突起が貼付されている。区画内には隆帯に沿って1列の幅の広い爪形状の結節沈線文が施され、その内側には幅の狭い爪形状の結節沈線文や波状の結節沈線文が施されている。7は口唇部にキザミ目が、口縁部には「C」字状の刺突文が施されている。胴部にはヒダ状の指圧痕が見られる。9・10はヒダ状の指圧痕が見られ、9は1列の結節沈線文が巡らされている。11は横状把手を有し、隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。12・14～16は深鉢形土器の底部破片であり、14・15は底部に網代痕を有している。13は鉢形土器の底部破片である。



第18図 第11号住居跡出土土器拓影図 (1)

番号	固有番号	番号	固有番号
1	TP 364	12	TP 353
2	TP 368	13	TP 356
3	TP 332	14	TP 352
4	TP 371	15	TP 348
5	TP 331	16	TP 339
6	TP 373	17	TP 355
7	TP 366	18	TP 342
8	TP 369	19	TP 358
9	TP 367	20	TP 336
10	TP 341	21	TP 361
11	TP 349		



番号	固有番号	番号	固有番号
1	TP 374	9	TP 381
2	TP 337	10	TP 380
3	TP 338	11	TP 383
4	TP 370	12	P 146
5	TP 363	13	P 145
6	TP 357	14	P 143
7	TP 344	15	P 147
8	TP 362	16	P 144

第19図 第111号住居跡出土土器拓影図 (2)

## 第12号住居跡出土土器

出土土器観察表（第20回）

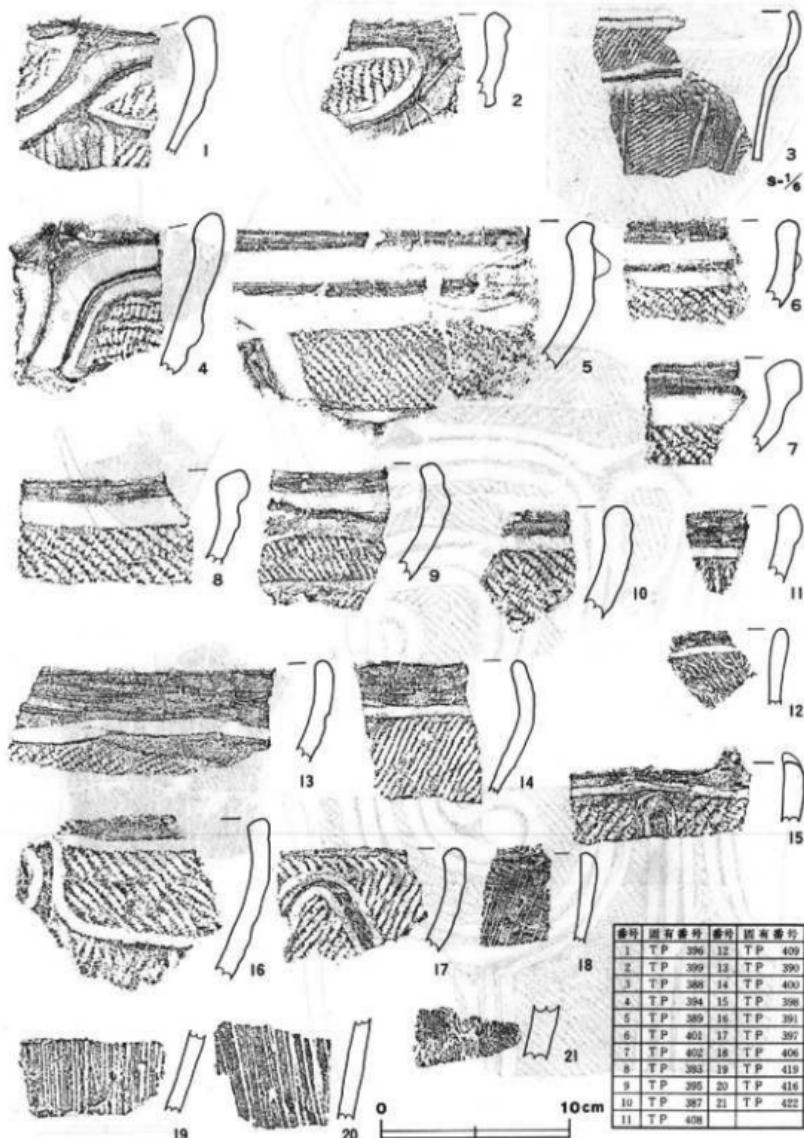
図版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土 焼成 色調	備考
第20回 1	P 148	深鉢形土器 (加賀利E型)	A (33.8) B (14.5)	口縁部はキャリバーフを呈しており、口縁部には1条の沈線が施されている。口縁直下は研磨されており、口縁部の沈線下には、單節RLの縦位回転繩文が、胴部には、單節RLの縦位や横位の回転繩文が施されている。	砂粒・長石 普通 内一に深い褐色 外一褐色	現存率5% 口縁部～胴部上段
2	P 150	深鉢形土器 (加賀利E型)	B (21.6)	口縁部には、沈線によって描き出された横内文が横位に8単位施され、口内には單節RLの縦位・横位の回転繩文が施されている。胴部は、2本の沈線によって1单位に「口」状に区画され、区内には浅き文や单節RLの縦位・横位回転繩文が施されている。「口」状の区画と区画の間に、縦位の横内文が施されている。	砂粒・長石 普通 褐色	現存率25%
3	P 149	深鉢形土器 (加賀利E型)	B (20.6)	胴部には、二本1単位の隆帯と沈線が4単位重下し、区内には大きな溝字文を描き出している。溝字文の下部からは、2本の隆帯が重下している。地文には、单節RLの縦位回転繩文が施されている。	砂粒・長石 良好 良好 褐色	現存率20% 胴部破片
4	P 16	深鉢形土器 (加賀利E)	B (3.4)	底部からほぼ直立に立ち上がり、胴部下位では外反する。胴部下位には单節RLの縦位回転繩文が施されている。	砂粒・スコリア 普通 内一褐色 外一に深い褐色 底部50%	現存率5% 未満 胴部下位～ 底部
5	P 33	深鉢形土器 (加賀利E)	B 9.6 C 6.7	底部前面は平坦で、底部から胴部にかけて外傾して立ち上がる。胴部には单節RLの縦位回転繩文が施され、2本の沈線によって区画された崩消帶が重下する。	砂粒・スコリア 良好 内一に深い褐色 外一褐色	現存率5% 胴部下位～ 底部 底部5%
6	P 18	深鉢形土器 (加賀利E)	B 7.7 C 5.0	底部外面は、中央部がわずかにくぼんでいる。胴部には单節RLの縦位回転繩文が施され、2本の沈線によって区画された崩消帶が重下する。胴部下位は無文となっている。	砂粒・スコリア 普通 内一に深い褐色 外一に深い褐色 底部100%	現存率10% 胴部下位～ 底部 底部
7	P 17	深鉢形土器 (加賀利E型)	B (14.4)	胴部中位から外反して立ち上がり、頭部で大きく外反する。胴部には单節RLの縦位回転繩文が施され、2本の沈線によって区画された崩消帶が重下する。	砂粒・スコリア 普通 内一に褐色	現存率10% 頭部～胴部 中位

第21・22図は、第12号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。第21図の1・2・4は隆線・沈線によって口縁部を横内区画している。1・4は波状口縁を呈している。3は口縁直下に無文帯をもち、口縁部を巡る1本の隆帯によって胴部と区画されている。口縁部や胴部には、单節RLの縦位回転繩文が施され、胴部には2本の沈線によって区画された幅の広い懸垂文が垂下している。5・6は口縁直下に隆線や沈線が施されている。5は口縁部が梢円形に区画され区画内には、複節RLRの横位回転繩文が施されている。6は口縁部に2条の沈線を巡らし、沈線直下に单節RLの横位回転繩文が施されている。7は口縁部に1条の沈線を巡らし、沈線直下に单節RLの横位回転繩文が施されている。9は口縁部に隆帯を巡らし、隆帯下を浅い沈線によって梢円区画し、区画内に单節RLの横位回転繩文を施している。10～14は口縁直下に無文帯を有し沈線直下には繩文が施されている。11は撫糸文が縦位に施され、12は無節しの縦位回転繩文が施さ



第20図 第12号住居跡出土土器実測図

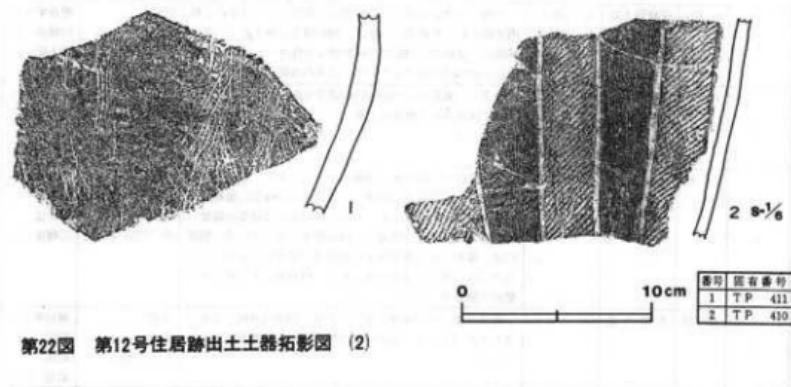
(1) 古墳群路上上古墳原跡付近(11m) (2) 15cm



第21図 第12号住居跡出土土器拓影図 (1)

酒匂河岸上・土器発掘調査報告書 第12章

番号	現有番号	番号	現有番号
1	TP 396	12	TP 409
2	TP 399	13	TP 390
3	TP 388	14	TP 400
4	TP 394	15	TP 398
5	TP 389	16	TP 391
6	TP 401	17	TP 397
7	TP 402	18	TP 406
8	TP 393	19	TP 419
9	TP 395	20	TP 416
10	TP 387	21	TP 422
11	TP 408		



第22図 第12号住居跡出土土器拓影図 (2)

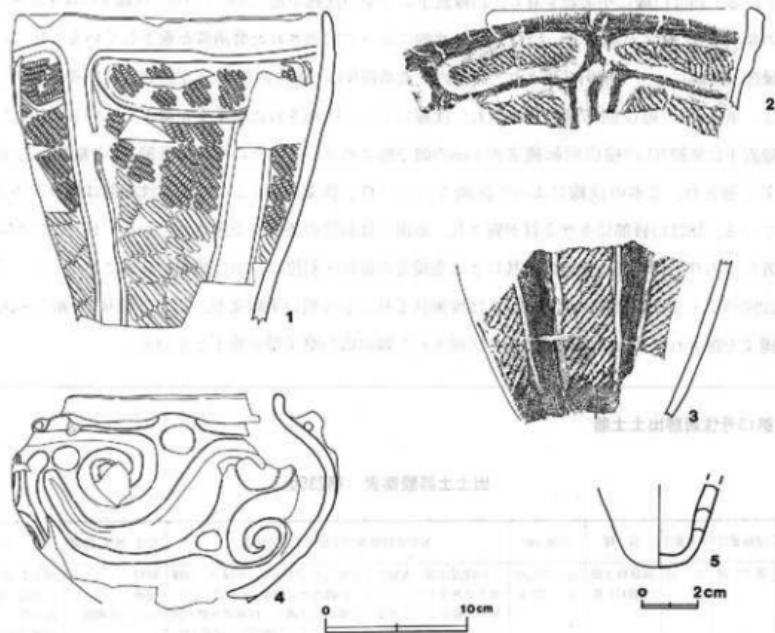
れている。13は口縁直下に幅の広い無文帯を有し、沈線下には単節LRの横位回転繩文が施されている。15は口縁に小突起を有し、口縁直下に1条の沈線が巡らされている。沈線下には単節RLの縱位回転繩文が施され、「匁」状の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。16は口縁部が沈線によって梢円区画され、区画内には単節RLの横位回転繩文が施されている。胸部には、単節RLの縱位回転繩文が施され、沈線によって区画された懸垂文が垂下している。17は口縁直下に単節RLの横位回転繩文が1cmの幅で施されている。その下には単節RLの縱位回転繩文が施され、2本の沈線によって区画された「匁」状文が垂下している。沈線間は磨り消されている。18は口唇部にキザミ目が施され、器面には斜位の条線文が施されている。19~21は胸部破片であり、19・20は櫛歯状工具による条線文が縱位・斜位に、21は曲線的に施されている。第22図の1・2は胸部破片である。1は櫛歯状工具による粗い条線文が、2は単節RLの縱位回転繩文が施され、2本の沈線によって区画された幅の広い磨消帯が垂下している。

#### 第13号住居跡出土土器

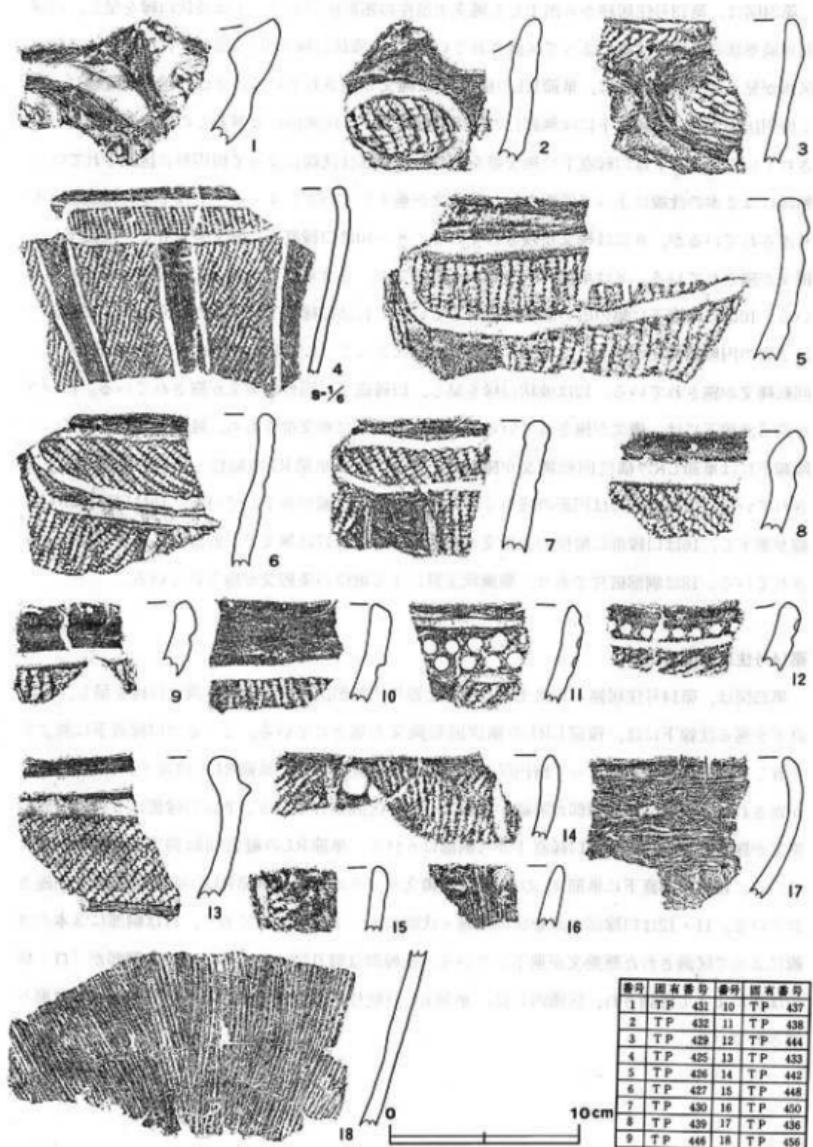
出土土器観察表 (第23図)

図版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土	焼成	色調	備考
第23図	P 20	深鉢形土器 (部機付EⅢ)	A (21.8) B 22.4	口縁部は浅く内側して立ち上っている。平底で、口縁直下は無文となっている。口縁部から胸部にかけて、「匁」状の沈線によって大きく2部位に区画し、区画間を磨り消している。区画内の上部は次級によって梢円形に区画され、区画内には単節LRの横位・縱位の回転繩文が施されている。区画内の胸部には単節RLの縱位の回転繩文が施される。区画中央部には、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。口縁部内面にはヨコナギ彫形が施されている。	砂粒	現存率30%	口縁部一胸 部中位	口縁部50%

2	P 151	深鉢形土器 (加曾利E面)	A (18.0) B (7.3)	平縁で、浅く内側する口縁部は、隆唇により4単位に横内区画され、单脚RLの横位の回転模様が施されている。胴部は、单脚RLの横位の回転模様が施され、沈線による「匁」状区画が施されている。区画内は擦り消されている。	砂粒 良好 内一暗褐色 外一灰褐色	現存率 5% 口縁部～胴部上位 口縁部 30%	
3	P 152	深鉢形土器 (加曾利E面)	B (11.0)	地文に、单脚RLの縱位回転模様を施し、2本の沈線によって区画された懸垂文が垂下している。沈線間は擦り消されている。	砂粒・スコリア 長石 良好 明赤褐色	現存率 5% 胴部下位の 破片	
4	P 19	鉢形土器 (加曾利E面)	A (14.7)	胴部下位から頸やかに内側して立ち上がり、胴部上位で大きく「く」の字状に内側し、直立する口縁部に接続している。口縁部は研磨されている。説にあたる肩部の隆線には、横方向に小孔が貫通し、接着把手となっている。胴部には、隆唇による渦巻状文や曲線文が描かれしており、ところどころに丸いくぼみが見られる。内外面とも丁寧にナデ整形が施されている。	砂粒 (少) 良好 内一明赤褐色 外一にい赤褐色	現存率 40% 口縁部～胴部下位 口縁部 45%	
5	P 21	手程土器	B - 3.0	底部外面はやや丸味を帯びており、胴部は外傾しながら立ち上がっている。器面上には内外面ともナゲ整型が施されている。	砂粒 普通 にい赤褐色	現存率 10% 胴部下位～ 底面 底面 100%	



第23図 第13号住居跡出土土器実測図



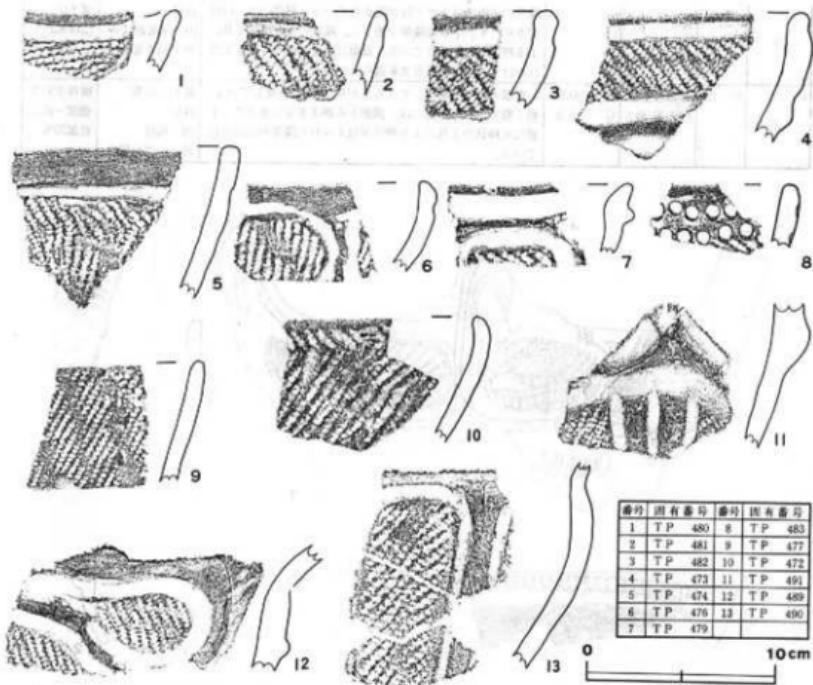
番号	固有番号	番号	固有番号
1	TP 431	10	TP 437
2	TP 432	11	TP 438
3	TP 429	12	TP 444
4	TP 425	13	TP 453
5	TP 426	14	TP 442
6	TP 427	15	TP 448
7	TP 430	16	TP 450
8	TP 439	17	TP 436
9	TP 446	18	TP 456

第24図 第13号住居跡出土土器拓影図

第24図は、第13号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は波状口縁を呈し、口縁部が渦巻状の隆線・沈線によって区画されている。2は波状口縁を呈し、波頂下に沈線による楕円区画が見られ、区画内には、単節RLの横位回転繩文が施されている。3は口縁部が隆線によって楕円区画され、口縁直下には無節Lの横位回転繩文が、区画内には無節Lの縦位回転繩文が施されている。4～7は口縁直下に無文帯をもち、口縁部は沈線によって楕円形に区画されている。胴部には2本の沈線によって区画された懸垂文が垂下している。4・5・7は2本の沈線間が磨り消されているが、6には繩文が残されている。8～10は口縁直下に無文帯を有し、沈線下には繩文が施されている。8は単節RLの横位回転繩文が、9は単節RLの斜位回転繩文が施されている。10は口縁直下に幅の広い無文帯を有している。11はLJ縁直下に沈線が巡らされ、口縁部には2列の円形刺突文が施されている。胴部は沈線によって「匚」状に区画され、単節RLの縦位回転繩文が施されている。12は波状口縁を呈し、口縁直下に円形刺突文が施されている。口縁部を巡る沈線下には、繩文が施されている。13は口縁直下に無文帯をもち、隆線が巡らされている。隆線下には単節LRの横位回転繩文が施されている。14は単節RLの縦位・斜位の回転繩文が施されている。口縁直下には円形の浅いくぼみが見られ、沈線が垂下している。15は口縁部から沈線が垂下し、16は口縁部に縦位の条線文が施されている。17は無文で、器面には横ナデ整形が施されている。18は胴部破片であり、櫛齒状工具による縦位の条線文が施されている。

#### 第14号住居跡出土土器

第25図は、第14号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は波状口縁を呈し、口縁直下を巡る沈線下には、複節LRLの横位回転繩文が施されている。2～6は口縁直下に無文帯を有し、口縁部を沈線によって楕円区画している。区画内には、単節RLの横位・斜位回転繩文が施されている。7は口縁部が隆線・沈線によって区画されている。8は口縁部に2列の円形刺突文が施されている。9は口縁直下から胴部にかけて、単節RLの縦位回転繩文が帯状に施されている。10は口縁直下に単節RLの横位回転繩文が、その下には単節RLの縦位回転繩文が施されている。11・12は口縁部が渦巻状の隆線・沈線によって区画されており、11は胴部に3本の沈線によって区画された懸垂文が垂下している。沈線間は磨り消されている。13は胴部が「匚」状の沈線によって区画され、区画内には、単節RLの縦位回転繩文が施されている。区画間は磨り消されている。



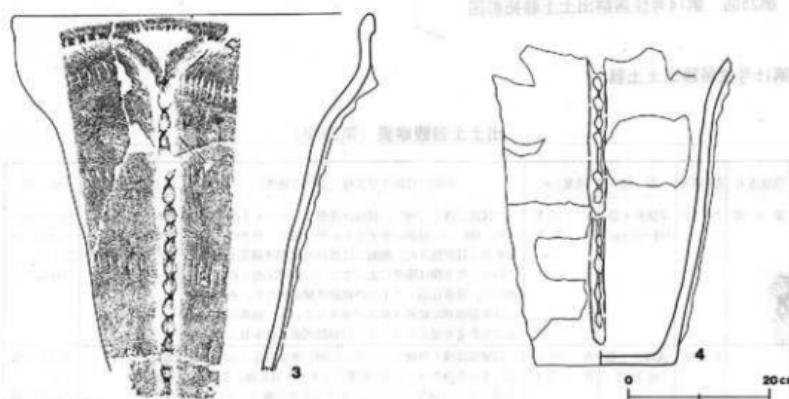
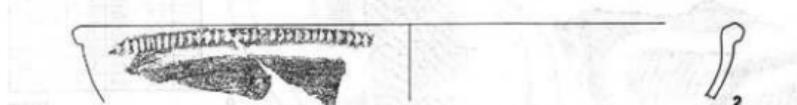
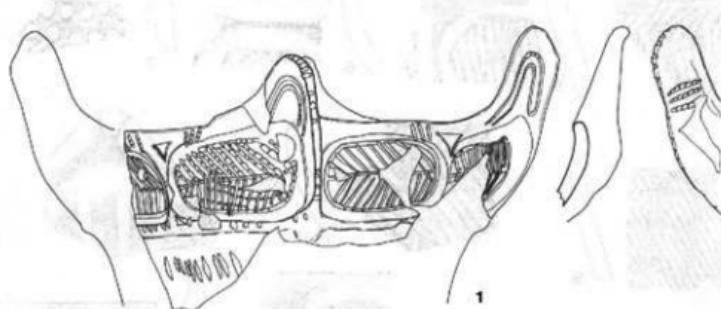
第25図 第14号住居跡出土土器拓影図

### 第15号住居跡出土土器

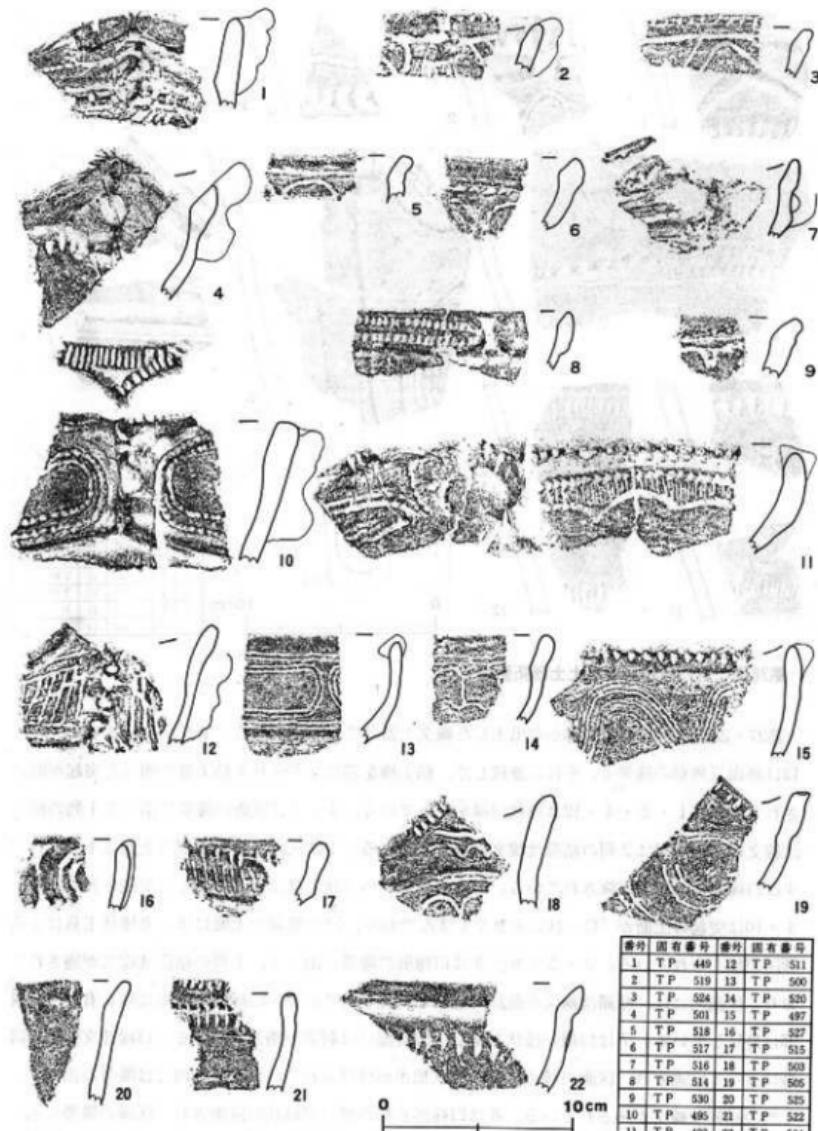
出土土器観察表（第26図）

団版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土	焼成	色調	備考
第26図	P 22	深鉢形土器 (阿玉台Ib)	A (35.1) B (25.0)	口縁部は浅く内側し、腹部は底部に向かってすぼまっている。口縁には、縦状の把手に4ヶ所に備え、把手の上面にはキザミ目が施され、側面には弧状の結節沈線文が施されている。把手間は腰帶によって二つに横円区画され、区画内には、腰帶に沿って1列の横筋沈線文が施されている。腹部には、幅広の爪形文を施させている。口縁部内面に縫を有している。	砂粒・長石 良好	内一に赤い橙色 外一灰褐色	現存率30% 口縁部～胴部上位 口縁部90%	
1	P 156	深鉢形土器 (阿玉台)	A (46.5) B (5.4)	口縁部は浅く内側している。口縁に腰帶を施し、口縁部に厚みを持たせている。腰帶にはキザミ目を施している。腹部には、口縁部から「Y」字状の腰帶が垂下している。	雲母・長石 良好	褐灰色	現存率5% 未焼 口縁部～胴部上位 口縁部90%	
2	P 155	深鉢形土器 (阿玉台II)	A 25.4 B (25.0)	口縁部は浅く内側し、腹部は底部に向かってすぼまっている。口縁に腰帶を施し、口縁部に厚みをもたらしている。	雲母・長石・石英		現存率20% 口縁部～胴部	

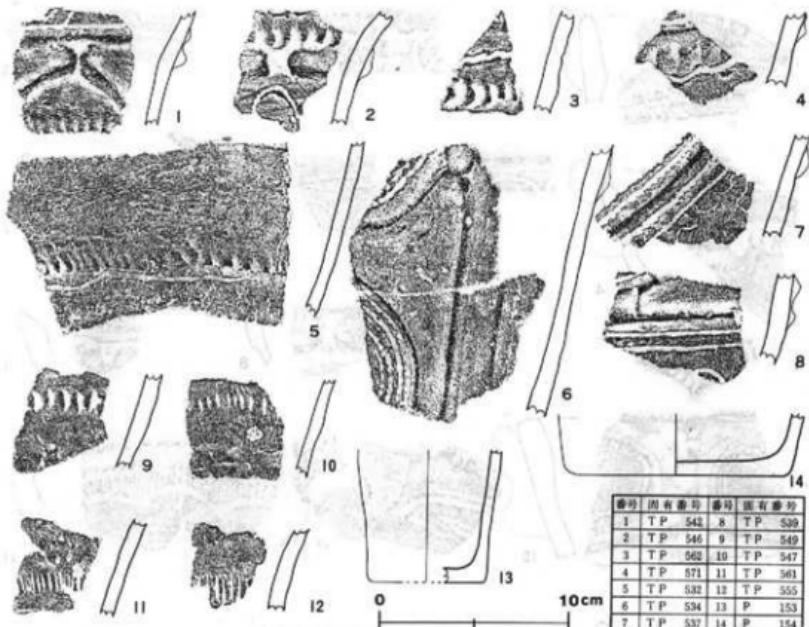
3				隆起の上面にはキザミ目が施されている。底部には、口縁部から「Y」字状の隆帯が垂下し、隆帯には丸棒状工具による押圧が加えられている。背面には、腹部から胴下半部にかけて、幅広の爪形文を這らせている。	良好 内一黒褐色 外一明赤褐色	部下位 口縁部25%
4	P 23	深鉢形土器 (阿玉台)	B (20.5) C 5.3	底部からやや外傾して立ち上がり、頸部で外反している。粗く整形成された器面には、頸部から胴下半分にかけて、上面に丸棒状の工具による押圧が加えられた隆帯が貼付されている。	長石・石英 良好 内一褐色 外一にほい褐色	現存30% 頭部~底部 底部50%



第26図 第15号住居跡出土土器実測図



第27図 第15号住居跡出土土器拓影図 (1)



番号	内有番号	番号	内有番号
1	TP 542	8	TP 539
2	TP 546	9	TP 549
3	TP 562	10	TP 547
4	TP 571	11	TP 561
5	TP 532	12	TP 555
6	TP 534	13	P 153
7	TP 537	14	P 154

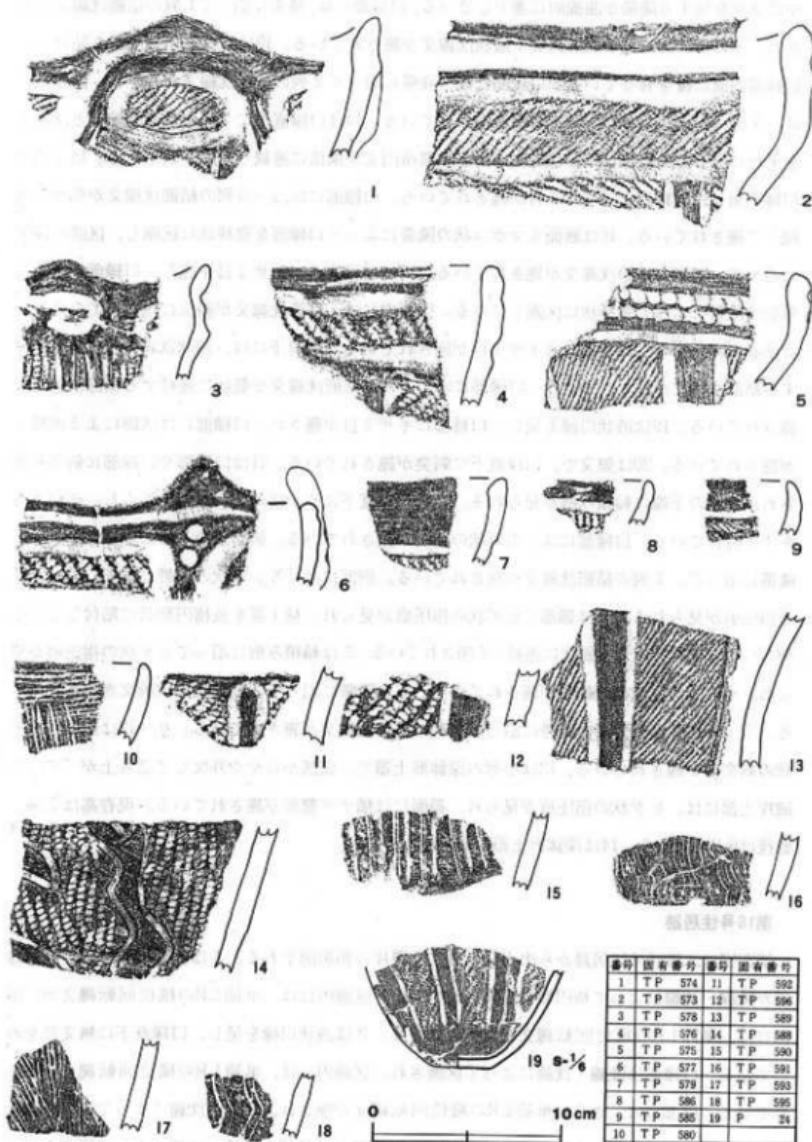
第28図 第15号住居跡出土土器拓影図 (2)

第27・28図は第15号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。第27図1・2・4・10・12は断面三角形の隆帯と、それに連続して、粘土縛を芯にしてそれを粘土帯で囲った突起が貼付されている。1・2・4・12は波状口縁を呈している。1・2は区画の隆帯に沿って1列の結節沈線文が、10・12は2列の結節沈線文が施されている。1は区画下方の隆帯の上面にキザミ目が、4は口縁部に爪形文が施されている。10は口唇部にヘラ状工具によるキザミ目が施されている。4・10は突起の上面が「C」状に大きくくぼんでおり、12の突起の上面には、丸棒状工具による押圧が加えられている。3・5・6・9は口縁部の隆帯に沿って、1列の結節沈線文が施されており、区画内には、結節沈線文が弧状に連続して施されている。口縁部の内面に稜を有し、口唇部は外反している。7は口縁が波状を呈し、口唇部には刺突が施されている。口縁部文様帯は隆帯によって区画され、区画の接点には、橋状把手が付けられている。区画内には隆帯に沿って、1列の結節沈線文が施されている。8は口縁部が幅の狭い窓棒状に区画され、区画の隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。11は口縁に小突起を有し、口縁直下には断面三角形の隆帯が巡らされている。突起や隆帯の上面には、キザミ目が施されている。口縁直下からは、断面カ

マボコ状を呈する隆帯が曲線的に乘下している。口縁部には、隆帯に沿って1列の結節沈線文が施され、その下には、爪形状の刺突や波状沈線文が施されている。13は口縁直下に隆帯を貼付し、口縁部内面に稜を有している。口縁部には、隆帯に沿って2列の結節沈線文が施され、区画内には、2本の沈線によって横円文が表出されている。14は口縁直下に1列の結節沈線文と沈線文を平行に施し、その下に結節沈線文による不整横円文が横位に連続して施されている。15は波状口縁を呈し、口縁直下にキザミ目が施されている。口縁部には、3~5列の結節沈線文が弧状に連続して施されている。16は断面カマボコ状の隆帯によって口縁部を窓枠状に区画し、区画の隆帯に沿って、2列の結節沈線文が施されている。17は口縁直下にキザミ目を施し、口縁部を断面三角形の隆帯によって窓枠状に区画している。区画内には、結節沈線文が斜位に施されている。18は波状口縁を呈し、口唇部にはキザミ目が施されている。波頂下には、波状沈線文や弧状に連続する結節沈線文が施されている。口縁部には、1列の結節沈線文や弧状に連続する結節沈線文が施されている。19は波状口縁を呈し、口唇部にキザミ目が施され、口縁部には沈線による曲線文が施されている。20は無文で、口縁直下に刺突が施されている。21は口唇部や口縁部に刺突が施され、破片の下端に輪積み痕が見られる。22は口縁直下にやや幅の広い隆帯を巡らし、その下方をナデ付けている。口縁部には、爪形状の刺突が施されている。第28図の1は口縁部を区画する隆帯に沿って、1列の結節沈線文が施されている。胴部には「X」字状の隆帯が垂下し、ヒダ状の指圧痕が見られる。2は頸部にヒダ状の指圧痕が見られ、粘土帶を長横円形状に貼付している。胴部には、結節沈線文が弧状に連続して施されている。5は輪積み痕に沿ってヒダ状の指圧痕が見られ、その下には波状沈線文が施されている。6は隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。7・8は断面三角形の隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。9~12は胴部に爪形状の刺突文が施されている。13は小形の深鉢形土器で、底部からやや外反して立ち上がっている。破片上部には、ヒダ状の指圧痕が見られ、器面には横ナデ整形が施されている。現存高は7cm、底径は6.2cmである。14は深鉢形土器の底部破片である。

#### 第16号住居跡

第29図は、第16号住居跡から出土した繩文土器片の拓影図である。1は波状口縁を呈し、口縁部が隆線・沈線によって横円形に区画されている。区画内には、単節LRの横位回転繩文が、胴部には、単節LRの縦位回転繩文が施されている。2は波状口縁を呈し、口縁直下に無文帶を有している。口縁部は隆線・沈線によって区画され、区画内には、単節LRの横位回転繩文が施されている。胴部には、地文に単節LRの縦位回転繩文が施され、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。3は波状口縁を呈し、口縁部が渦巻状の隆線・沈線によって区画されていて、胴部には単節RLの縦位回転繩文を施し、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下し



第29図 第16号住居跡出土土器拓影図

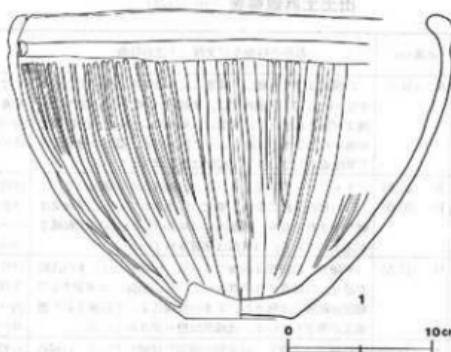
ている。4は口縁部を2本の沈線によって区画し、胴部には2本の沈線によって区画された磨消帶が垂下している。5は口縁部に1条の沈線を巡らし、口縁部文様帶と胴部文様帶とを区画している。口縁部には2列の円形刺突文が、胴部には細い单節RLの縱位回転繩文が施され、2本の沈線によって区画された磨消帶が垂下している。6は波状口縁を呈し、口縁直下に1条の沈線が施されている。口縁部は隆線・沈線によって区画され、区画内には、单節RLの横位回転繩文が施されている。波頂下の区画の隆線の上面には、円形刺突文が縱位に施されている。7~9は口縁部に無文帶を有し、沈線下には繩文が施されている。10は口縁部に横位の条線文が、胴部には縱位や横位の条線文が施されている。11は繩文の上に「匚」状の懸垂文が垂下している。12・13は单節RLの縱位回転繩文が施され、2本の沈線によって区画された懸垂文が垂下している。13は5と同一個体とも思われる。14は单節RLの横位・斜位の回転繩文が施され、その上に2本の沈線を曲線的に施し、沈線間を磨り消している。15~18は条線文が直線的・曲線的に施されている。

図版30 球根山遺跡出土土器(第17号)

### 第17号住居跡出土土器

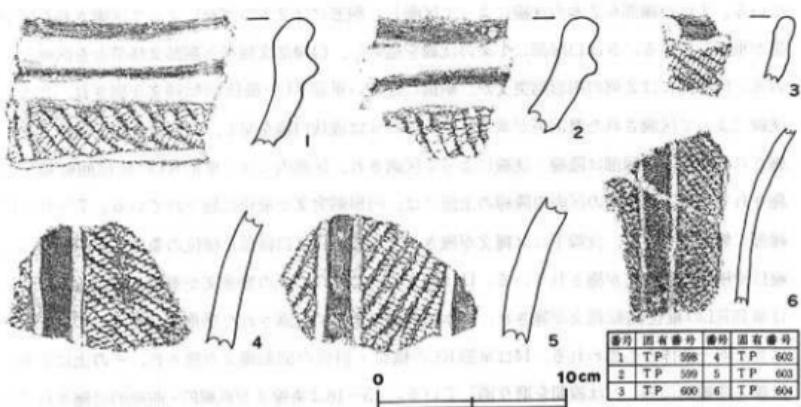
出土土器観察表 (第30図)

図版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土	焼成	色調	備考
第30図	P 25	鉢形土器 (加曾利EⅡ)	A (29.0) B 21.8 C (7.4)	平底で、口縁部は内増している。口縁直下を無文帶とし、 口縁部に1条の沈線を巡らしている。沈線下から胴部下位 にかけて、ヘラ状工具による幅の広い縱位の沈線が全面に 施されている。口縁部と胴下部の2ヶ所に補修孔が穿たれ ており、破損した後も、補修して使用されたものと想われる。	砂粒	普通	内一灰褐色 外一褐色	現存率45% 口縁部一部 部 口縁部50% 底部50%



第30図 第17号住居跡出土土器実測図

第31図は、第17号住居跡から出土した繩文土器片の拓影図である。1・2は口縁部を隆線・沈



第31図 第17号住居跡出土土器拓影図

線によって楕円形に区画し、1は区画内に単節RLの横位回転繩文が、2は単節RLの斜位回転繩文が施されている。3は口縁直下に無文帯を有し、口縁部は沈線によって楕円形に区画されている。4~6は胴部破片であり、4・6は単節LRの縱位回転繩文が、5は単節RLの縱位回転繩文が施され、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。

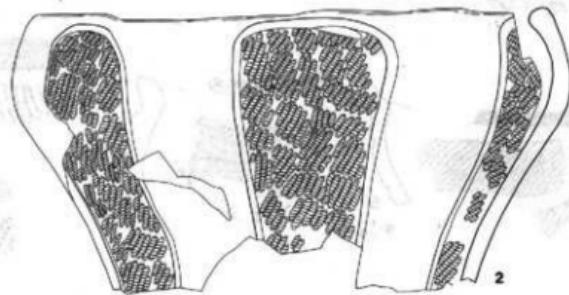
### 第18号住居跡出土土器

出土土器観察表 (第32図)

図版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土	焼成	色調	備考	
第32図 1	P-67	深鉢形土器 (加曾利EⅡ)	A (54.5)	口縁部は浅く内脣し、隣帶による渦巻文や楕円文で区画がなされている。区画内には、単節RLの横位・斜位の回転繩文が施されている。胴部には単節RLの縱位の回転繩文が施され、2本の沈線によって区画された幅広の懸垂文が7单位垂下している。沈縫間は磨り消されている。	砂粒・スコリア	現存率40%	普通	内一灰褐色 外一橙色	底部中位～ 底部 口縁部60% 炉埋設土器
2	P-27	深鉢形土器 (加曾利EⅡ)	A (40.0) B (20.0)	キャリバー形を呈している。口縁直下から胴部にかけて、「匂」状の沈縫に沿り6單位に区画されている。区画間は磨り消されており、区画内には単節RLの縱位の回転繩文が施されている。口部は研磨されている。	砂粒・スコリア	現存率20%	良好	口縁部～胴部上位 外一暗赤褐色	口縁部50%
3	P-28	深鉢形土器 (加曾利EⅡ)	B (17.5)	平縁で、口縁部は内脣している。口縁部には2本の沈縫があり、口縁直下は研磨されている。胴部には単節RLの縱位回転繩文が施され、2本の沈縫によって区画された懸垂文が垂下している。沈縫間は磨り消されている。	砂粒・スコリア	現存率25%	良好	口縁部～胴部中位 外一黄褐色	口縁部25%
4	P-26	深鉢形土器 (加曾利EⅡ)	A (14.0) B 15.3	口縁部は内脣し、円筒形の胴部に接続している。口縁直下には、単節RLの縱位の回転繩文が、口縁部から胴部には単節RLの縱位の回転繩文が全面に施されている。口縁部から胴部にかけて、「匂」状を呈する隣帶が2单位垂下しており、その両側にはナデ形が施されている。	砂粒・スコリア	現存率30%	良好	内一灰褐色 外一灰褐色	口縁部～胴部中位 口縁部50%



1



2



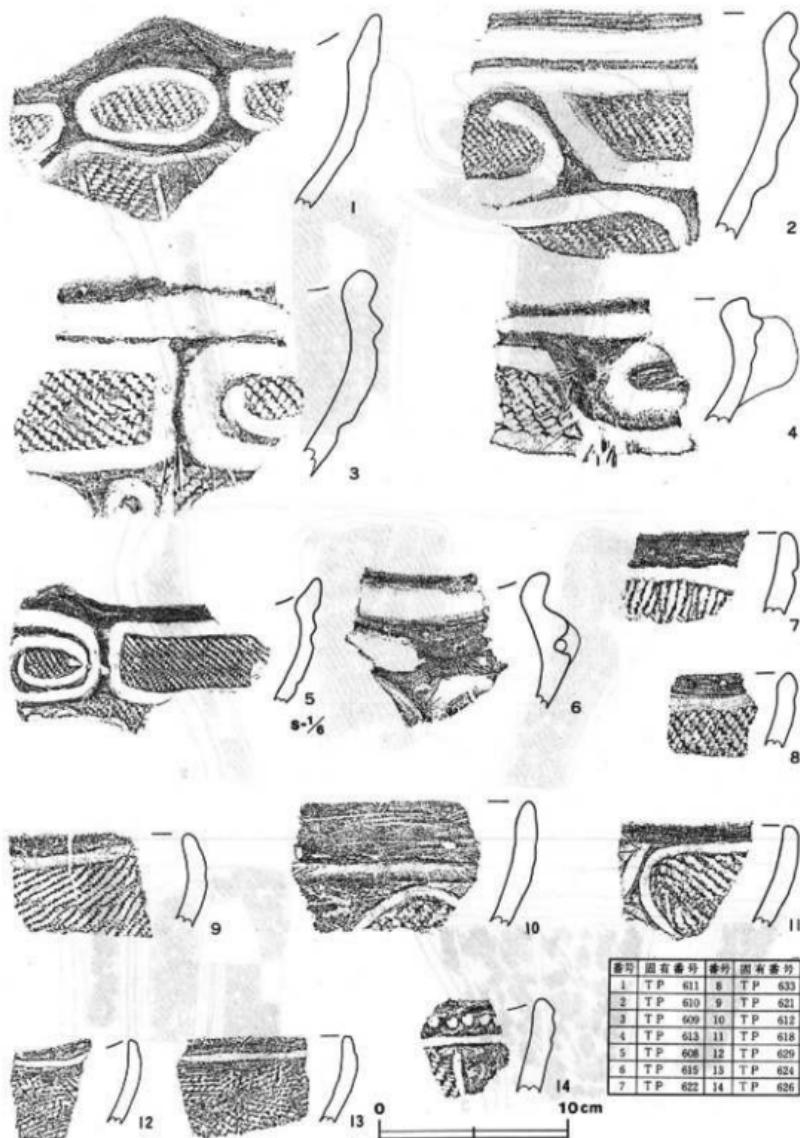
3



4

第32圖 第18號住居跡出土土器實測圖

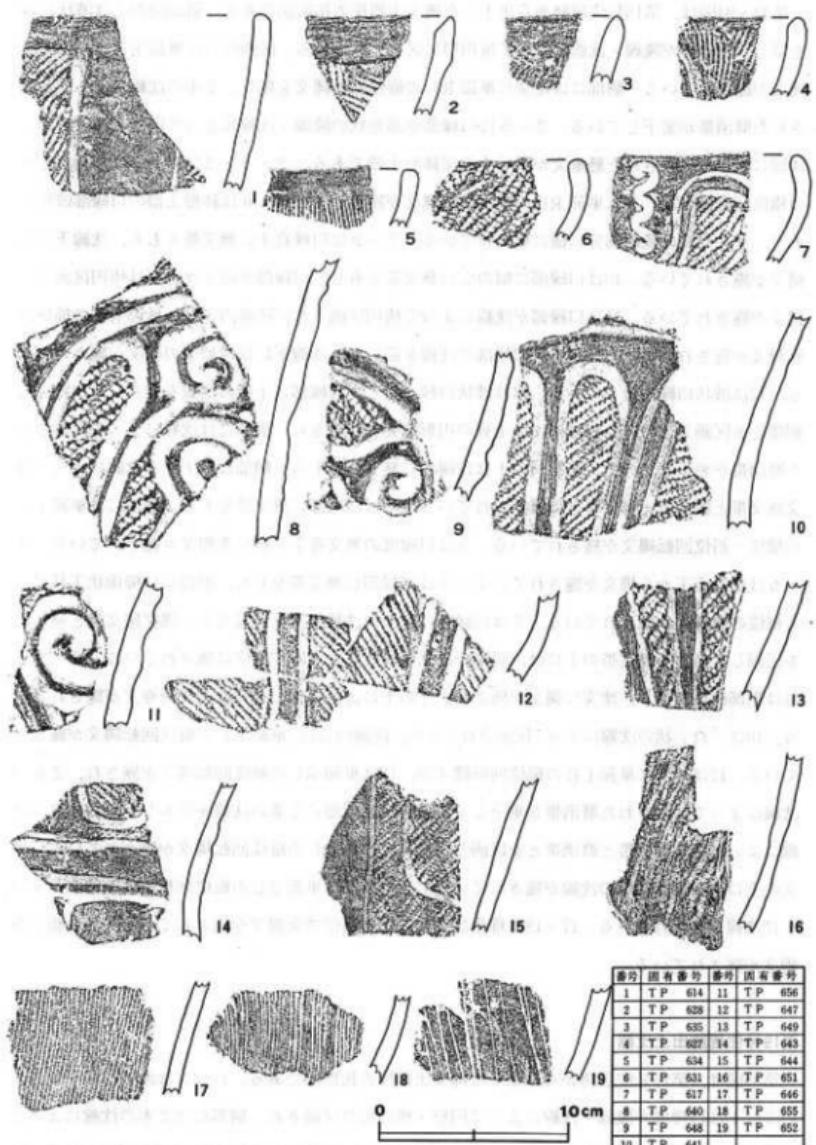
1. 受過燒器土器底盤  
2. 受過燒器土器底盤  
3. 受過燒器土器底盤  
4. 受過燒器土器底盤



第33図 第18号住居跡出土土器拓影図 (1)

酒匂実習土器出土地點地圖 (1) 住居跡

番号	固有番号	番号	固有番号
1	TP 611	8	TP 633
2	TP 610	9	TP 621
3	TP 609	10	TP 612
4	TP 613	11	TP 618
5	TP 608	12	TP 629
6	TP 615	13	TP 624
7	TP 622	14	TP 626



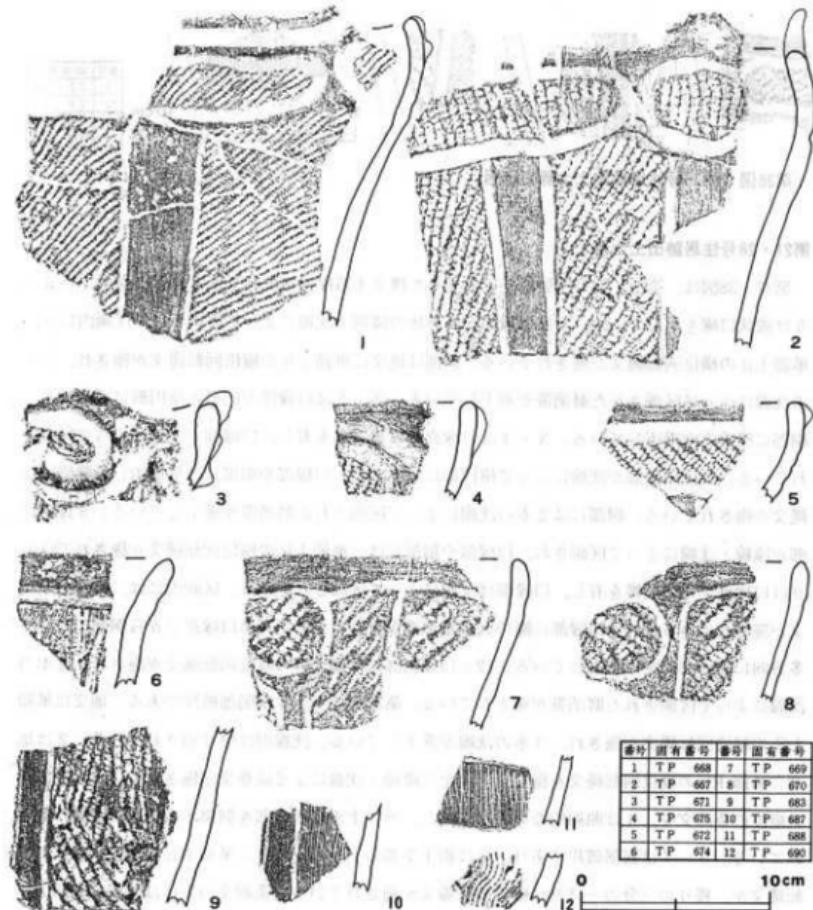
第34図 第18号住居跡出土土器拓影図 (2)

第33・34図は、第18号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。第33図の1は波状口縁を呈し、口縁部が隆線・沈線によって楕円形に区画されている。区画内には単節RLの縦位回転縄文が施されている。胴部には地文に単節RLの縦位回転縄文を施し、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。2～5は口縁部が渦巻状の隆線・沈線によって区画され、胴部に沈線によって区画された懸垂文が垂下する深鉢形土器である。2・3・5は区画内に複節RLRの横位回転縄文が、4は単節RLの横位回転縄文が施されている。6は鉢形土器の口縁部破片であり、小孔が肩の隆線部分に横に穿たれている。7～9は口縁直下に無文帯をもち、沈線下には縄文が施されている。10は口縁部に幅の広い無文帯を有し、口縁部を巡る沈線下は楕円区画され縄文が施されている。11は口縁部が沈線によって楕円区画され、区画内には、単節RLの横位回転縄文が施されている。12・13は口縁部に沈線を巡らし、沈線下には付加条の縄文が施されている。12は波状口縁を呈している。14は波状口縁を呈し、口縁部に1条の沈線を巡らし、口縁部と胴部とを区画している。口縁部には1列の円形刺突文が施され、胴部には沈線によって区画された磨消帯が垂下している。第34図の1は口縁部に無文帯をもち、胴部は垂下する沈線によって縄文施文帯と幅の広い無文帯とに区画されている。2は口縁部に無文帯をもち、胴部には単節LRの横位・斜位回転縄文が施されている。3は口縁部の無文帯下に粗い条線文が施されている。4・6は口縁直下から縄文が施されている。5は口縁部に無文帯をもち、胴部には櫛齒状工具による縦位の条線文が施されている。7は口縁部に2条の沈線を波状に巡らし、縄文施文帯と無文帯を区画している。無文帯の上には、両端が渦状となる蛇行沈線が縦位に施されている。8・9・11は胴部破片であり、地文に縄文が施され、その上には、隆線・沈線による渦巻文が施されている。10は「匂」状の沈線によって区画されており、区画内には、単節RLの縦位回転縄文が施されている。12は地文に単節LRの縦位回転縄文が、13は単節RLの縦位回転縄文が施され、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。14は頸部に2条の沈線を巡らし、15は縦位の沈線によって縄文施文帯と磨消帯とを区画し、地文に単節RLの縦位回転縄文が施されている。縄文の上には「L」字状の沈線が施されている。16は地文に単節RLの縦位回転縄文を施し、その上に沈線が施されている。17・18は櫛齒状工具による縦位の条線文が施されている。19は粗い条線文が施されている。

#### 第19号住居跡出土土器

第35図は、第19号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～3は波状口縁を呈している。1は口縁部が隆線・沈線によって円形・楕円形に区画され、胴部には2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。口縁部や胴部には、単節RLの縦位回転縄文が施されている。2は口縁部を沈線によって円形・楕円形に区画し、区画内に単節RLの斜位回転縄文が施されて

いる。胸部には地文に単節 RL の縦位回転繩文が施され、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。3は口縁部を渦巻状の隆線・沈線によって区画している。5は口縁部を沈線によって楕円形に区画し、区画内には、単節 RL の横位回転繩文が施されている。胸部には懸垂文が垂下している。6は1条の浅い沈線を巡らし、口縁無文帶と胸部文様帶とを区画している。胸部には梯齒状工具による縦位の条線文が施されている。7・8は口縁部に無文帯を有し、胸部は地文に繩文を施し、沈線によって楕円形や「匚」状に区画されている。9は地文に単節 RL の横位・斜位の回転繩文を施し、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。10~11は梯



第35図 第19号住居跡出土土器拓影図

歯状工具による縦位の条線文が施されている。12は条線文が曲線的に施されている。

### 第20号住居跡出土土器

第36図は、第20号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部を沈線によって楕円形に区画し、区内には、単節 LR の縦位回転縄文が施されている。2～4は胴部破片であり、2・3は地文に単節 RL の縦位回転縄文を施し、懸垂文を垂下させている。4は櫛歯状工具による縦位・斜位の条線文が施されている。



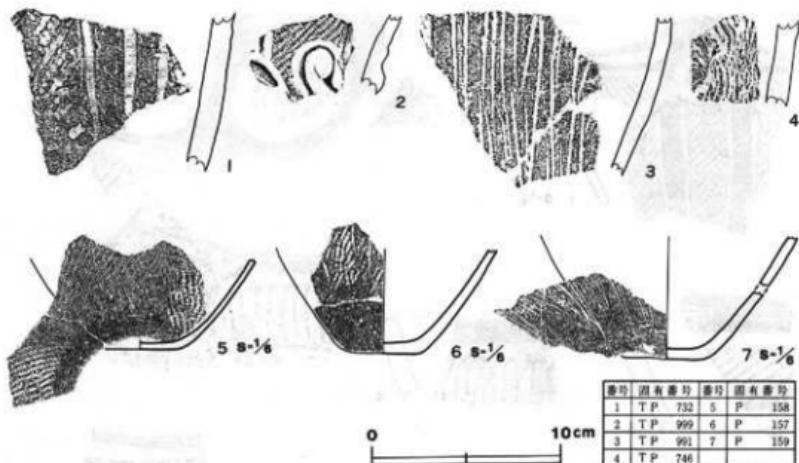
第36図 第20号住居跡出土土器拓影図

### 第21・28号住居跡出土土器

第37・38図は、第21・28号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。第37図の1～3・5は波状口縁を呈している。1は口縁部が渦巻状の隆線・沈線によって区画され、区内には、単節 LR の横位回転縄文が施されている。胴部は地文に単節 LR の縦位回転縄文が施され、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。2・5は口縁部が円形・楕円形に区画され、胴部に懸垂文が垂下している。3・4は口縁直下に無文帯を有し、口縁部が沈線によって区画されている。7は口縁部が沈線によって楕円形に区画され、口縁部や胴部には単節 RL の縦位回転縄文が施されている。8は口縁部が隆線・沈線によって区画され、口縁部や胴部には、単節 LR の横位回転縄文が施されている。9は口縁直下に無文帯を有し、口縁部は沈線によって区画されている。区内には、縦位の条線文が施されている。10は口縁部に幅の広い無文帯を有している。11は口縁直下から胴部にかけて多方向に細い条線文が施されている。12・13は胴部に単節 RL の縦位回転縄文が施され、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。第38図の1～4は胴部破片である。地文に単節 LR の縦位回転縄文が施され、3本の沈線が垂下している。沈線間は磨り消されている。2は地文に単節 RL の縦位回転縄文を施し、その上に隆線・沈線による渦巻文が施されている。3は粗い縦位の条線文を、4は曲線的な条線文を施し、その上から末端部を刺突する弧状の沈線が施されている。5～7は底部破片であり、5は胴下半部の三分の二ほどに単節 RL の横位・斜位の回転縄文が、残りの三分の一ほどに縦位の条線文が施されている。条線文の上には、粗い単節 RL の縦位回転縄文がまばらに施されている。7は胴部下半に粗い縦位方向の沈線文が施されている。



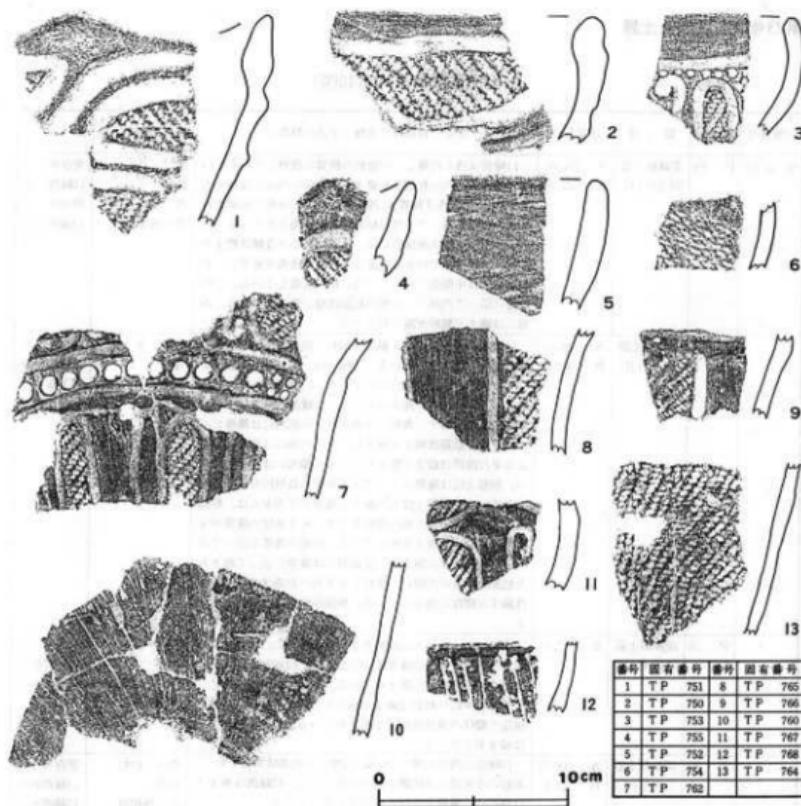
第37图 第21·28号住居跡出土土器拓影圖 (1)



第38図 第21・28号住居跡出土土器拓影図 (2)

#### 第22号住居跡出土土器

第39図は、第22号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1・4は波状口縁を呈している。1は口縁部を隆線・沈線によって区画し、2・4は沈線によって区画されている。区画内には縄文が施されている。6は太い撚糸文が、3・7は円形刺突文が施されている。3は沈線によって口縁部無文帯と胴部文様帯とを区画し、沈線下には円形刺突文が施されている。胴部は「匂」状の沈線によって無文帯と縄文施文帯とに区画され、「匂」状の区画内には単節RLの継位回転縄文が施されている。無文帯の上面には1条の沈線が垂下している。8・9は地文に縄文を施し、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。8は複節RLRの継位回転縄文が、9は単節RLの継位回転縄文が、10は細い継位の条線文が施されている。11は蕨手状文が、12は粗い継位の条線文が施されている。13は地文に単節RLの継位回転縄文が施され、数条の細い沈線が垂下している。

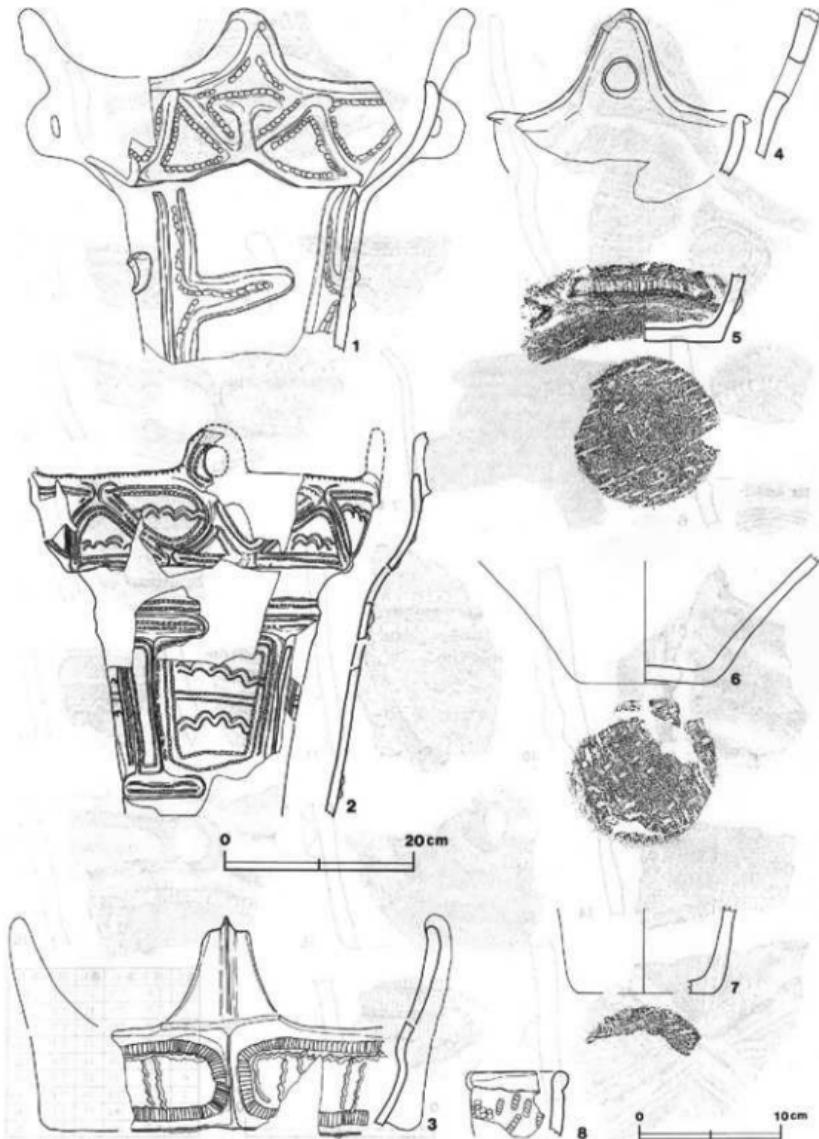


第39図 第22号住居跡出土土器拓影図

## 第23号住居跡出土土器

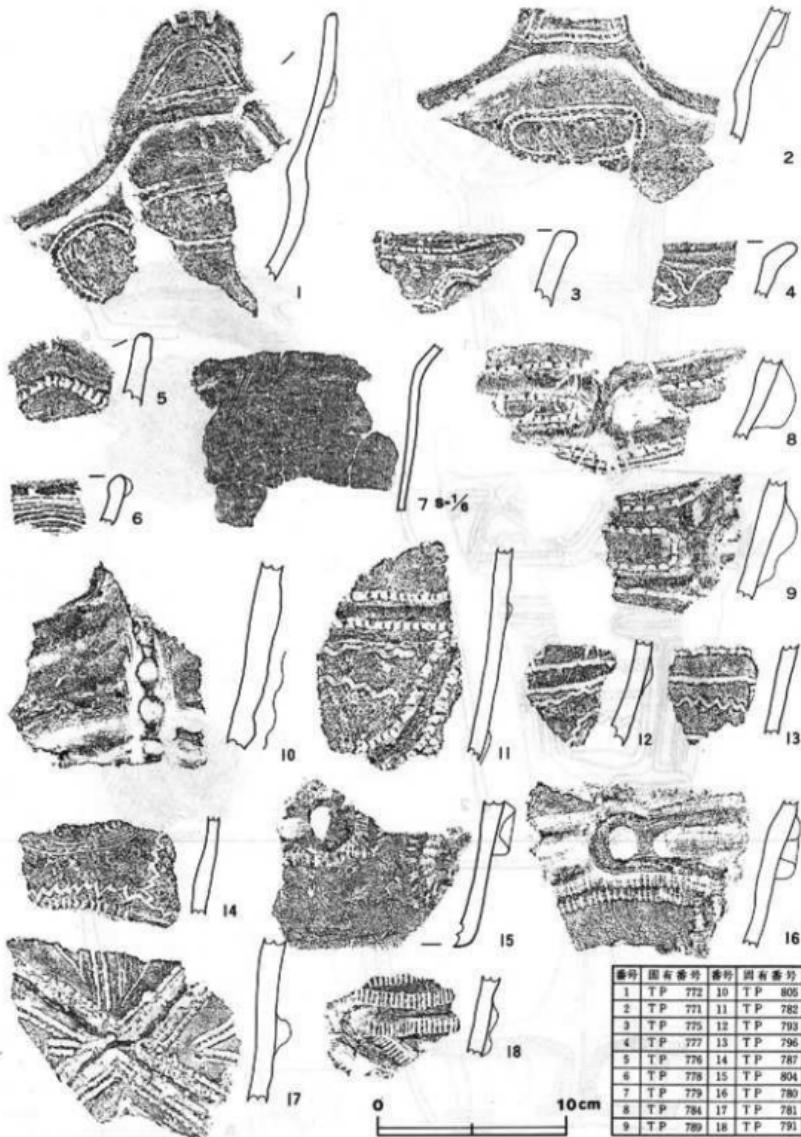
出土土器観察表（第40回）

記版番号	表面番号	器種	法尺(cm)	器形の特徴及び文様（手法の特徴）	胎土・焼成 色調	備考
第40回	P 29	深鉢形土器 (阿玉台1号)	A (31.0) B (25.2)	口縁部は浅く内脇し、円筒形の側部に接続している。口縁には4単位の山形把手を有し、口縁部の内面には縫を有している。口縁部文様は、隕帯によって三角形に区画され、区画の隕帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。山形把手の下方の区画接点には、4単位の小さな横状把手が縫につけられている。胴部には2本の隕帯が施され、右側の隕帯は中間部で大きく「U」状に屈曲している。この隕帯に沿って内側に、1列の結節沈線文が施されている。内面には横ナメ盤形が施されている。	雲母・長石 良好 内一黒褐色 外一暗赤褐色	現存率20% 口縁部一側 部中位 口縁部20%
1	P 32	深鉢形土器 (阿玉台2号)	A (38.0) B (41.0)	口縁部は浅く内脇し、底部で折れ、胴部は底部に向かって直線的にすばまっている。口縁には、中央部に内窓をもつ4単位の小突起が付けられている。口縁部や小突起の上面には、キザミ目が施されている。口縁部は隕帯によって横位に、横円形や二角形に区画され、区画内には隕帯に沿って2列の結節沈線文が施され、その内側には半軸管による平行流状沈線文が施されている。頭部には無文帯をもつ。胴部上位は隕帯によって、4単位の長梢円形状に区画されている。胴部上位に区画する隕帯の下からは、胴部下位で外側に曲曲し複円形状をなす1単位の隕帯が4単位隕帯下し、胴部を区画している。隕帯の隕帯に沿って2列の結節沈線文が施され、隕帯間に隕帯に沿って施された結節沈線文の内側に、平行する2列の結節沈線文や流状沈線文が横位に施されている。胴部中位に縫が付いている。	砂粒・スコリア 良好 灰褐色	現存率70% 口縁部一側 部下位 口縁部60%
2	P 38	深鉢形土器 (阿玉台1号)	B 7.5	口縁には4単位の山形把手を有し、把手の口縁部から隕帯下する隕帯二角形の隕帯を中心として、口縁部は横位に4単位の梢円形状に区画されている。区画の隕帯に沿って、1列の幅の広い結節沈線文が施されている。区画内には、横状や縱状の隕帯の隕帯沈線文が施されている。口縁部の内面には縫を有している。	雲母・砂粒 良好 内一黒褐色 外一灰褐色	現存率10% 口縁部破片 口縁部20%
3	P 34	深鉢形土器 (阿玉台1号)	A (18.5) B 13.8	口縁部は浅く内脇している。口縁には人字状突起を有し、突起の中央部には凹面があげられている。口縁部は無文で、口縁部は、隕帯が貼付され分厚くなっている。	雲母・砂粒 良好 内一黒褐色 外一暗灰色	現存率20% 口縁部破片 口縁部40%
4	P 162	深鉢形土器 (阿玉台)	B 10.6	胴下部は、底部から緩やかに内脇して立ち上がっている。胴部を区画する隕帯に沿って、1列の細かい結節沈線文が施されている。底部外側は中央がやくぼんでおり、網代模が見られる。	砂粒・長石・雲母 普通 暗色	現存率5% 胴部下位～ 底部 底部95%
5	P 161	鉢形土器 (阿玉台)	B (8.5) C 9.2	底部の外側は中央部がわざわざくぼんでおり、胴部の下位は底部から外反して立ち上がっている。器面は無文で粗く盤形されており、胴部下位には輪轉み底をとどめている。底部には網代模が見られる。	砂粒・長石・雲母 普通 灰褐色	現存率15% 胴部下位～ 底部 底部80%
6	P 160	深鉢形土器 (阿玉台)	B (6.5) C (9.8)	胴下部は、底部からは垂直に立ち上がっている。底部に胴代模が見られる。	砂粒・長石・石英 雲母 普通 橙色	現存率5% 胴部下位～ 底部 底部10%
7	P 83	深鉢形土器 (阿玉台)	B 10.1 C (10.1)	コップ形を呈する小形の深鉢形土器で、口縁部にはやや幅の広い隕帯が貼付されており、口縁部は外反する。胴部には單筋RLの織文がまばらに施されている。	砂粒・金雲母 良好 黒褐色	現存率10%
8						



第40図 第23号住居跡出土土器実測図

説明書付属図



番号	固有番号	番号	固有番号
1	TP 772	10	TP 808
2	TP 771	11	TP 782
3	TP 775	12	TP 793
4	TP 777	13	TP 796
5	TP 776	14	TP 787
6	TP 778	15	TP 804
7	TP 779	16	TP 780
8	TP 784	17	TP 781
9	TP 789	18	TP 791

第41図 第23号住居跡出土土器拓影図

同様の出土土器出典図解図版

第41図は、第23号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は接合はできなかつたが同一個体である。口縁には山形状の把手を有し、把手の口唇部にはキザミ目が施されている。波頂下には、半截竹管による結節沈線文が半円形状に施されている。口縁には断面カマボコ状の隆帯が巡らされており、把手下方の口縁部には、2列の結節沈線文が楕円形状に施されている。3は口縁直下に横状の結節沈線文が1~2列に施されている。4は弧状の結節沈線文が連続して施されている。5は波状を呈し、波頂部にはキザミ目が、口縁直下を巡る隆帯に沿って1列の爪形状の結節沈線文が施されている。9は口縁直下に2列の結節沈線文が施されている。7は無文で頸部に輪積み痕が見られる。8・9は断面三角形の隆帯によって窓枠状に区画され、隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。10は無文で、口縁部から隆帯が垂下している。隆帯の上面には、丸棒状工具による押圧が加えられている。11~14は隆帯に沿って1列の結節沈線文や爪形状の刺突文が施され、波状沈線文が見られる。15・16は隆帯に連結して、粘土紐を円形状に貼付し隆帯に沿って幅の広い結節沈線文が施されている。頸部の下位は、無文となっている。17は断面三角形の隆帯を「×」状に貼付し、隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。18は隆帯に沿って幅の広い結節沈線文が施されている。

#### 第24号住居跡出土土器

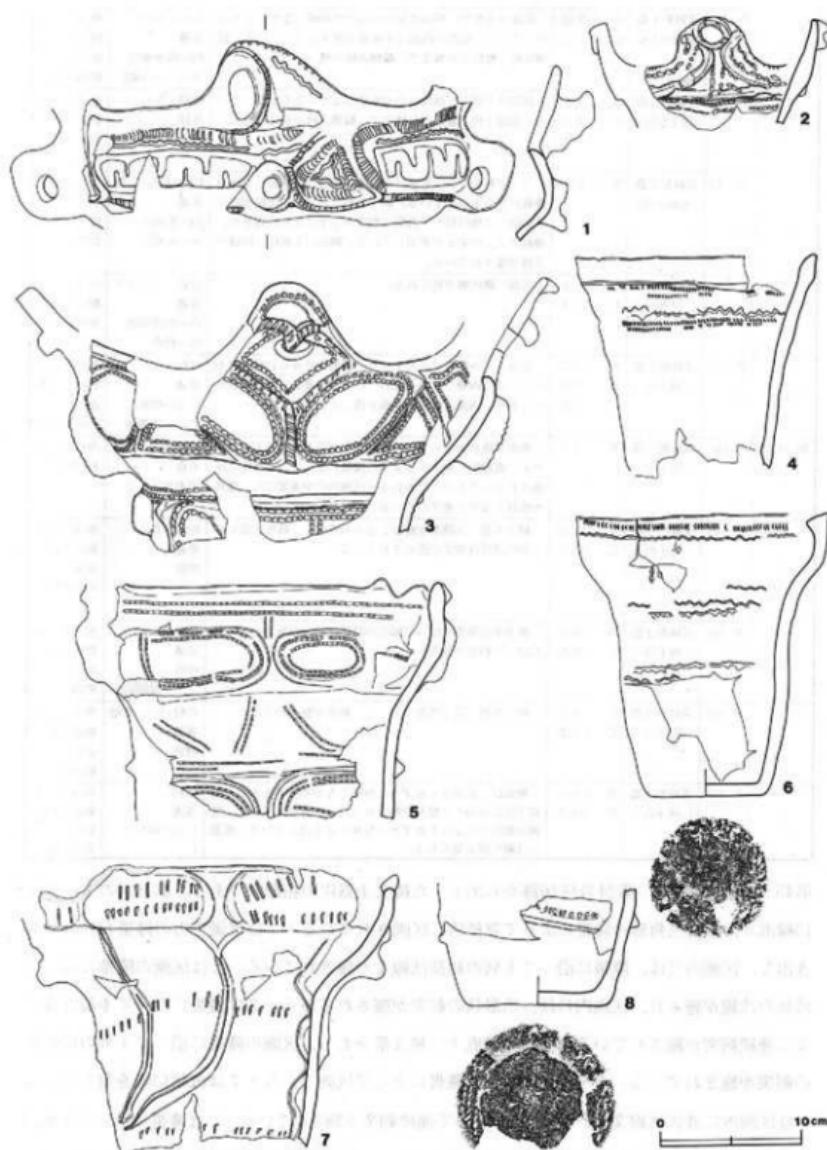
出土土器観察表（第42・43・44図）

図版番号	固有番号	品種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土	焼成色	備考
第42図	P 48	深鉢形土器 (腰取)	A (3.5)	口縁部は「く」の字形に彎曲し、内面に後を有している。 口唇部は外反している。口縁は波状を呈し、溝状の隆帯を付した4単位の山形把手が施されている。口縁部文様帶は隆帯によって4単位に横位に楕円区画され、区画の接点には横状把手が付けられている。区画内には、隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。横円形の区画内には波状沈線文により表出された三叉文が、横円形の区画内には、波状沈線文や波状によって表出された通縫「ノ」の字文が施されている。	砂粒・スコリア	現存率10%	口縁部破片 口縁部5%
			B (12.8)		良好	内一に赤褐色	
2	P 70	深鉢形土器 (阿玉台)	A (15.0)	口縁には4単位の山形把手を有し、把手の上部外面にはボタン状の粘土紐を貼付している。縁の上面はえぐられている。口唇部にはキザミ目を施している。口縁部文様帶は隆帯によって横位に長椭円形状に変互に区画されている。区画接点の隆帯にはキザミ目が施され、区画内には隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。頸部は無文で、頸部上位を巡る隆帯に沿って、2列の結節沈線文が施されている。	雲母・砂粒・長石 苦痛	現存率30%	口縁部～頸部 外一に赤褐色
			B (8.1)		内一黒褐色	11縁部90%	
3	P 43	深鉢形土器 (阿玉台Ⅱ)	A (38.3)	波状1輪を呈し、口縁には4単位の山形把手を有している。把手の付け根の部分には、円窓があいている。口縁部文様帶は、横円形や三角形形状に変互に区画されている。区画接点の隆帯にはキザミ目が施され、区画内には隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。頸部は無文で、頸部上位を巡る隆帯に沿って、2列の結節沈線文が施されている。	雲母・長石 良好	現存率15%	口縁部～頸部上位 口縁部25%
			B (17.8)		内一黒褐色 外一暗赤褐色	11縁部25%	

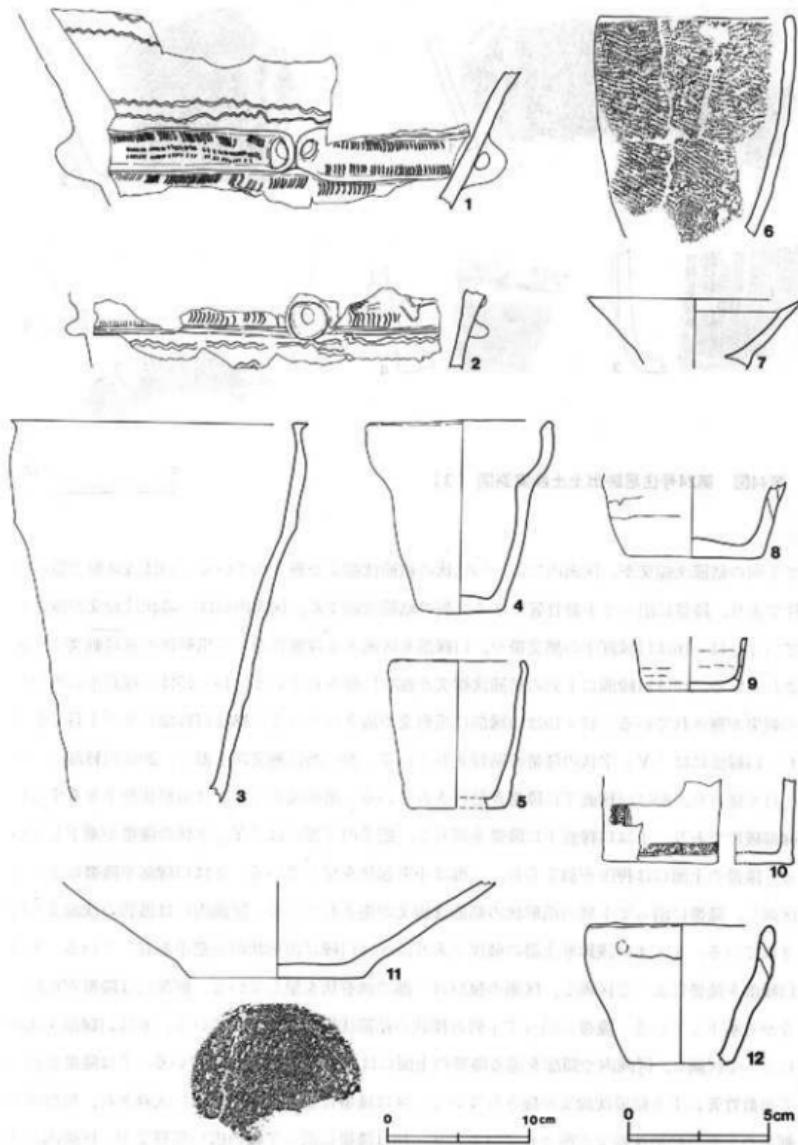
第 42 図 4	P 45	深鉢形土器 (阿玉台)	A (17.4)	口縁部は外反し、円筒形の脚部に接続している。口縁部にはナデ彫文が施され、脚部には幅の広い爪形文と幅の狭い爪形文を1単位として、下に2単位並らし、その間に波状沈彫文を施している。	砂紋・スコリア 普通 内一黒褐色 外一において褐色	現存率70% 口縁部～脚部下位 口縁部70%
			B (15.1)			
5	P 40	深鉢形土器 (阿玉台Ⅱ)	A (25.6)	口縁部は浅く内寄し、円筒形の脚部に接続している。口縁部には、頂部が丸頭状となる4単位の小把手を有している。口縁部の内面には縦を有している。口縁底下には半截竹管による平行の筋状沈彫文が施され、口縁部には直面・V字形の溝等により横位の横内区画等が配されている。区画内には、陰帯に沿って2列の筋状沈彫文が施されている。脚部には「U」字状に連続する2列の筋状沈彫文が施されている。	砂紋・スコリア 普通 内一黒褐色 外一において褐色	現存率30% 口縁部～脚部中位 口縁部50%
			B (19.8)			
6	P 37	深鉢形土器 (阿玉台)	A 17.9	口縁部は浅く内寄し、口縁部は厚手であるほど外反している。口縁部の内面には縦を有している。脚部は円筒状であるが、中位にやや膨らみを有している。口縁部上面には無筋の横位回転彫文が施され、口縁底下には横位に、1列の横状の刺突文が連續的に施されている。その下には波状沈彫文が施されている。肩部上部や中ほどには二本1単位の波状沈彫文が施されている。底部には網代痕が見られる。	砂紋 普通 内一黒褐色 外一において褐色	現存率80% 口縁部～底部 口縁部90% 底部100%
			B 19.8			
7	P 33	深鉢形土器 (阿玉台Ⅱ)	A (27.0)	口縁部は浅く内寄し、円筒形の脚部に接続している。口縁部には4単位の小把手を有している。口縁部は厚手で、口縁部には陰帯によって横続する二個1単位の横内区画が4単位施されている。区画内には陰帯に沿って幅広の爪形文が施され、区画の下方から脚部下には「Y」字状の陰帯や直曲線が施されている。脚部には網代痕が施されている。	雲母・長石・砂粒 普通 内一褐色 外一黒褐色	現存率30% 口縁部～脚部中位 口縁部50%
			B (19.2)			
8	P 53	深鉢形土器 (阿玉台)	B ( 8.3)	脚部下位には、上面に丸棒状工具による押圧の加えられた陰帯が施されている。陰帯に沿って、1列の刺突文が施されている。底部には網代痕が見られる。	砂紋・スコリア 長石 普通 内一黒褐色 外一明赤褐色	現存率10% 脚部下位～底部 底部80%
			C 19.9			
第 43 図 1・2	P 49	深鉢形土器 (脚 坂)	B (10.0)	腹部には2本の陰帯があり、2本の陰帯を連結するよう	雲母・砂粒 普通 内一褐色 外一黒褐色	現存率 5 % 未調 腹部～脚部
			C (30.7)	に、眼鏡状把手が付けられている。陰帯に沿って、波状沈彫文や筋状沈彫文が施されている。破片上部にも波状沈彫文が見られる。1と2は同一個体である。		
3	P 46	深鉢形土器 (阿玉台)	A (21.0)	口縁部は外傾し、円筒形の脚部に接続している。手縫で複合口縁を有している。器形は無地で粗く整形成されている。	砂紋 普通 において褐色	現存率80% 口縁部～底部 において95% 底部10%
			B (27.0)	脚部下位には縦が付着している。		
4	P 44	深鉢形土器 (阿玉台)	A 13.3	口縁部は浅く内寄し、脚部中位に膨らみをもち、脚部は底部に向かってすばまっている。手縫で、口縁部はわずかに外反している。無文である。	雲母・砂粒 普通 内一黒褐色 外一褐色	現存率 100 %
			B 13.8			
5	P 52	深鉢形土器 (阿玉台)	A 9.3	手縫で口縁部に厚みをもち、コップ形を呈している。無文である。	砂紋 普通 内一黒褐色 外一灰褐色	現存率70% 口縁部～底部 口縁部50% 底部10%
			B (10.6)			
6	P 31	深鉢形土器 (阿玉台)	A (13.7)	手縫で、全面に多方向から無筋の凹凸彫文が施されて	金雲母・砂粒 不良 内一暗赤褐色 外一において褐色	現存率40% 口縁部～脚部下位 口縁部70%
			B (15.7)	いる。		
7	P 169	浅鉢形土器 (阿玉台)	A (15.2)	底部から外縫して立ち上がり、口縁部の内面に縦を有している。内外面とも横ナギ彫形が施されている。	雲母・長石 普通 褐色	現存率20% 口縁部～底部 口縁部10% 底部 5 %
			B ( 4.7)			

8	P 54	深鉢形土器 (阿玉台1a)	B (5.6) C (9.2)	底部は平坦で、胴部は底部からやや外傾しながら立ち上がりっている。底面の内面は中央部が厚手になっている。器面は軽く整形され無文で、輪積み模様が残っている。	長石・砂粒 普通 内一暗赤褐色 外一よい赤褐色	現存率10% 胴部下位～ 底部100%
9	P 168	深鉢形土器 (阿玉台1b)	B (3.6) C (6.3)	底部は平坦で、胴部はやや外傾しながら立ち上がりている。器面は軽く整形され無文で、輪積み模様が見られる。	砂粒・長石 良好 内一よい褐色	現存率10% 胴部下位～ 底部50%
10	P 42	深鉢形土器 (五所ヶ谷)	B (6.0)	コップ形を呈し、底部は平坦で、底部から胴部にかけて窓突に立ち上がっている。胴下半部には2本の沈線が残り沈線間に横円形や三角形の刺突が上下に交互に施され、連続「コ」の字文を表している。胴部にも窓突に同様の文様が施されている。	砂粒・長石・石英 普通 内一黒褐色 外一灰褐色	現存率20% 胴部下位～ 底部 底部50%
11	P 47	深鉢形土器 (阿玉台)	B 6.8 C 12.3	底部に網代模様が見られる。	長石・スコリア 普通 内一明黄褐色 外一橙色	現存率15% 胴部～底辺 底部50%
12	P 51	深鉢形土器 (阿玉台)	A (6.5) B 5.0 C 3.6	底部から外傾して立ち上がり、胴部中位から1様部にかけて、浅く内傾しながら突いている。器表面は軽く整形されており、内面には輪積み模様が残している。	砂粒 普通 内一よい赤褐色 外一よい赤褐色	現存率25% 口縁部～胴 部下位 口縫部25%
第44区 1	P 167	深鉢形土器 (阿玉台)	B 8.0	胴部は底部からわずかに外傾しながら立ち上るものと思われ、直線的に進下する4本の隆帯によって、2部位に区画されているものと思われる。区画内の中央部には、隆帯が逆行しながら求め下している。	砂粒・長石・雲母 不良 明赤褐色	現存率5% 胴部破片
2	P 163	深鉢形土器 (阿玉台)	B (11.5) C (12.1)	胴下半部には隆帯が逆行しながら求め下し、破片上部には2列の波状沈線文が施されている。	砂粒・長石 普通 橙色	現存率5% 胴部中位～ 底部 底部5%
3	P 161	深鉢形土器 (阿玉台)	B (8.5) C (9.6)	垂下する隆帯に沿って側面の結節沈線文が施され、それに沿って刺突が施されている。	砂粒・長石 普通 橙色	現存率5% 胴部下位～ 底部 底部10%
4	P 165	深鉢形土器 (阿玉台)	B (7.1) C (9.4)	胴下半部に沿る隆帯に沿って、刺突が施されている。	砂粒・長石・雲母 普通 橙色	現存率5% 胴部下位～ 底部 底部10%
5	P 166	深鉢形土器 (阿玉台)	B (6.0) C (18.9)	胴部は、底部からわずかに外傾しながら立ち上がる。胴部下位には横ナガ整形が施されている。底部は平坦で、周囲が胴部下位よりもわずかに外側にはみ出している。底部には網代模様が見られる。	砂粒 普通 内一よい橙色	現存率5% 胴部下位～ 底部 底部10%

第45・46・47図は、第24号住居跡から出土した繩文土器片の拓影図である。第45図の1～3は口縁部が、断面三角形の隆帯によって窓棒状に区画されている。1は区画下方の隆帯が外側に突き出し、区画内には、隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。2は区画の隆帯に沿って波状の沈線文が施され、区画内には、爪形状の刺突が施されている。3は隆帯に沿って半截竹管による連続刺突が施されている。4は口縁直下に無文帯をもち、区画の隆帯に沿って1列の爪形状の刺突が施されている。5～8は口縁部を隆帯によって区画し、5・7は波状口縁を呈している。5は区画内に波状沈線文が、6は隆帯に沿って連続刺突が施されている。7は隆帯に沿って1列の結節沈線文が施され、区画内には2列の波状沈線文が見られる。8は隆帯に沿って1列の幅の広い結節沈線文や、櫻状の結節沈線文が施されている。9は口唇部に連続刺突が施され、隆帯に沿っ



第42圖 第24號住居跡出土土器實測圖（1）



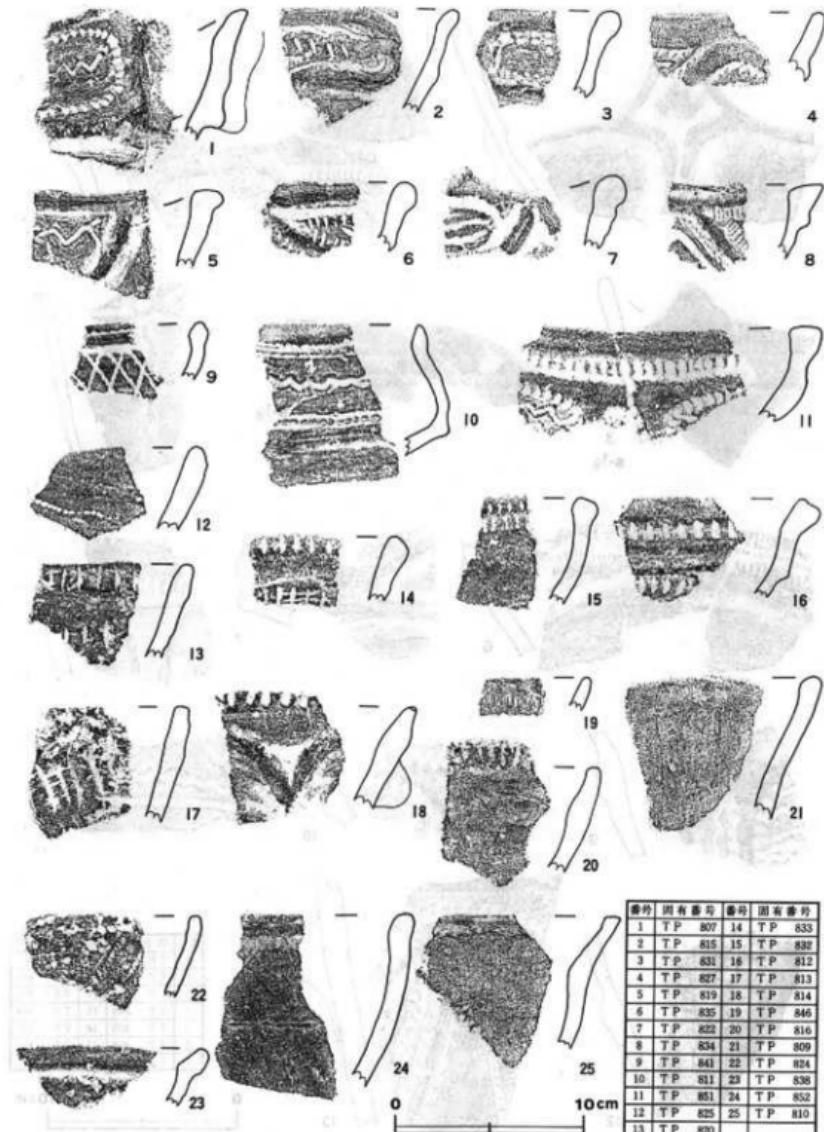
第43図 第24号住居跡出土土器実測図 (2)



第44図 第24号住居跡出土土器実測図（3）

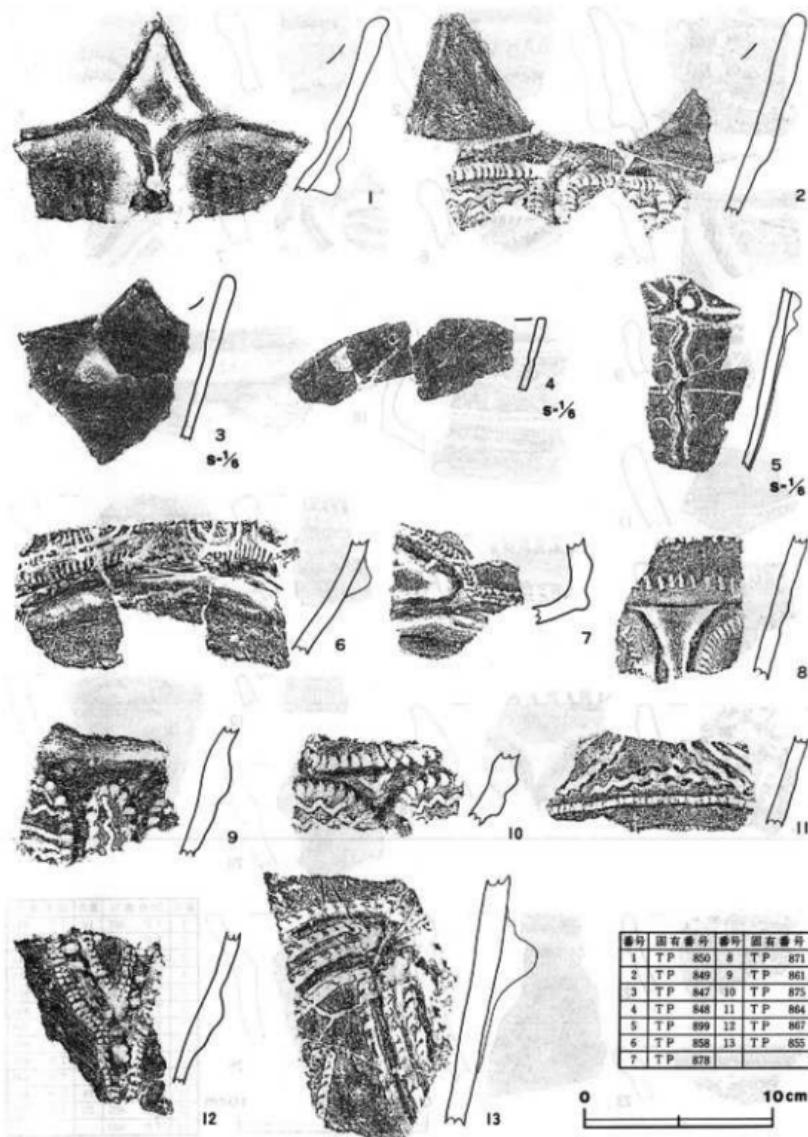
0 10cm

て1列の結節沈線文が、区画内には、「×」状の結節沈線文が施されている。10は浅鉢形土器の破片であり、隆帯に沿って半截竹管による2列の結節沈線文が、区画内には、波状沈線文が施されている。11・16は口縁直下の無文帶や、口縁部を区画する隆帯に沿って爪形状の連續刺突文が施されている。12は口縁部に1列の結節沈線文が線状に施されている。13～15は口縁直下に爪形状の刺突が施されている。17・19は口縁部に爪形文が施されている。18は口唇部にキザミ目が施され、口縁部には「V」字状の隆帯が貼付されている。20～25は無文の土器で、20は口唇部にキザミ目が施され、23は口縁直下に隆帯が貼付されている。第46図の1・2は山形状把手を有する口縁部破片であり、1は口縁直下に隆帯を巡らし、把手の下部には「Y」字状の隆帯が垂下している。隆帯の上面には押圧が加えられ、一部は小突起状を呈している。2は口縁部を隆帯によって区画し、隆帯に沿って1列の爪形状の結節沈線文が施されている。区画内には波状の沈線文が施されている。3・4は浅鉢形土器の破片であり、3は口縁に山形状の小把手を有している。5は口縁部を隆帯によって区画し、区画の接点は一部で渦巻状を呈している。胴部には隆帯が蛇行しながら垂下している。隆帯に沿って1列の楔状の結節沈線文が施されている。6は口縁部を沈線によって区画し、区画内や頸部を巡る隆帯の上面には、キザミ目が施されている。7は隆帯に沿って半截竹管による結節沈線文が施されている。8は隆帯によって楔円形状に区画され、爪形状の刺突や1列の結節沈線文が施されている。9・10は隆帯に沿って幅の広い爪形文が、区画内には波状沈線文が施されている。11は1列の結節沈線文や波状沈線文が施されている。12は「Y」字

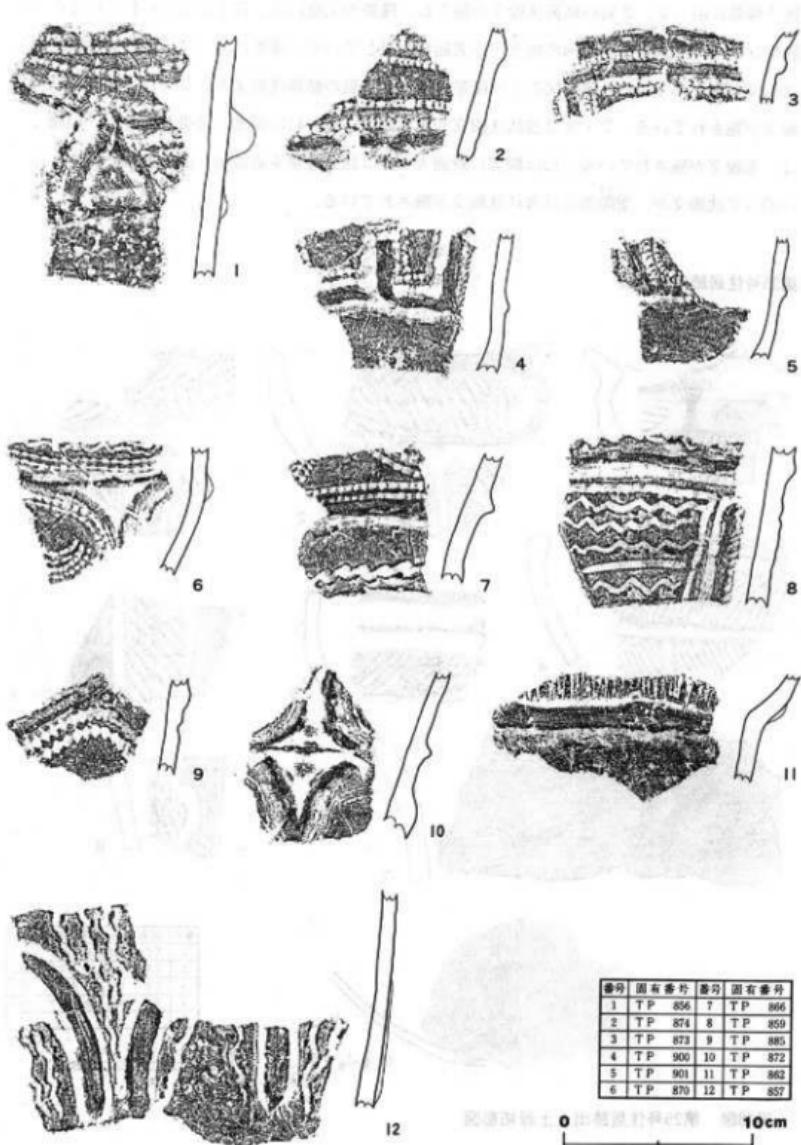


第45図 第24号住居跡出土土器拓影図(1)

15. 固壁窓跡出土調査用土器



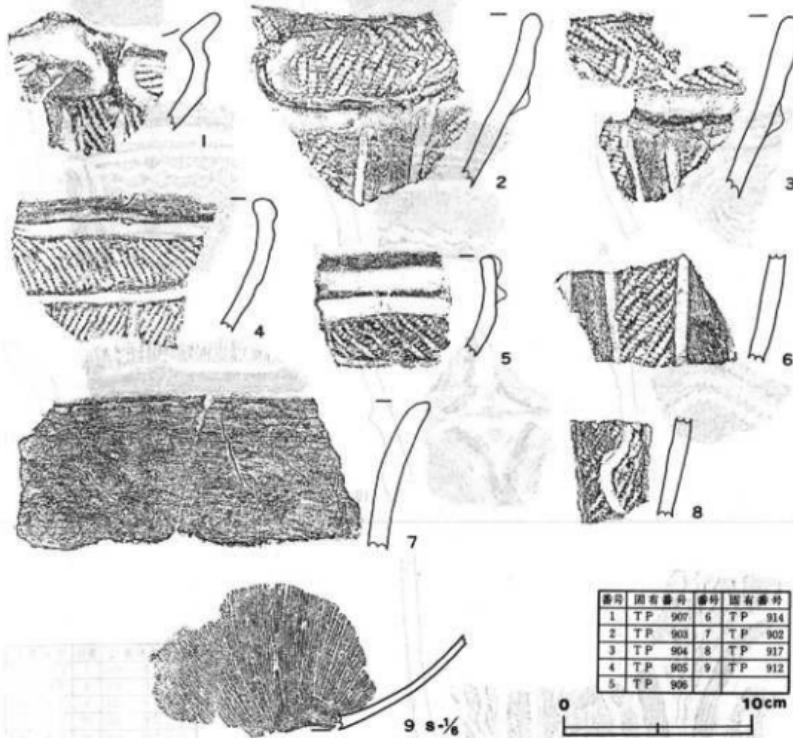
第46図 第24号住居跡出土土器拓影図 (2) (1) 圓錐形器出土出目底付多段環 (2) 扇形



第47圖 第24號住居跡出土土器拓影圖（3）

状の隆帯に沿って、2列の結節沈線文が施され、隆帯の上面には、押圧が加えられている。13は隆帯によって区画され、区画の接点が小突起状を呈している。隆帯に沿って半截竹管による結節沈線文が施されている。第47図の1は隆帯に沿って1列の結節沈線文が、3~10は2列の結節沈線文が施されている。7・8は波状沈線文が施されている。11は頸部に隆帯を巡らし、口縁部には、条線文が施されている。12は胴部に断面カマボコ状の隆帯を直線的・曲線的に貼付し、隆帯に沿って沈線文が、空隙部には波状沈線文が施されている。

第25号住居跡出土土器



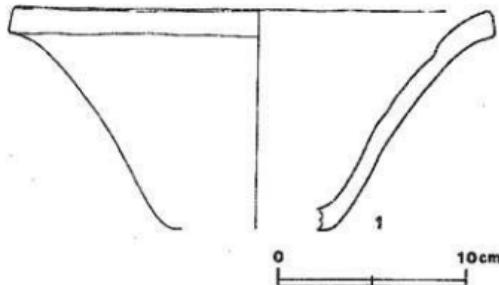
第48図 第25号住居跡出土土器拓影図

第48図は、第25号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は波状口縁を呈し、口縁部を満巻状の隆線・沈線によって区画し、区画内には単節LRの横位回転繩文が施されている。胴部には単節LRの縦位回転繩文が施され、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。2・3は口縁部を隆線によって橢円形状に区画し、胴部には2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。2は口縁部や胴部に単節RLの縦位回転繩文が施されている。4は口縁直下に無文帯を有し、口縁部を沈線によって区画している。区画内には単節RLの横位回転繩文が施されている。胴部には単節RLの縦位回転繩文が施され、沈線が垂下している。5は口縁部を隆線・沈線によって区画している。6は地文に単節RLの縦位回転繩文が施され、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。7は口縁部に幅の広い無文帯を有している。8は繩文帯の上に蛇行沈線が垂下している。9は鉢形土器の底部破片であり、櫛歯状工具による縦位の条線文が施されている。

#### 第26号住居跡出土土器

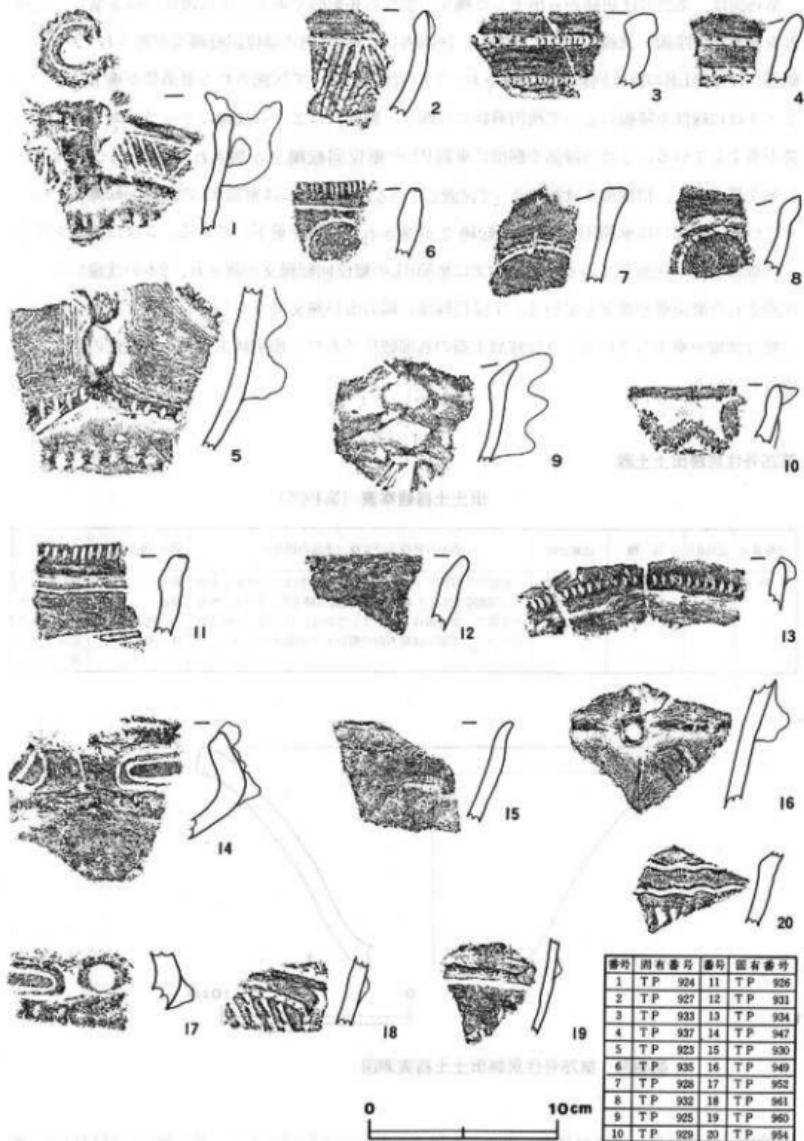
出土土器観察表（第49図）

同様番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様（手法の特徴）	胎土	焼成	色調	備考
第49図	P-50	浅鉢形土器 (阿正台)	A (25.2) B (10.5) C (8.3)	底部から外傾して立ち上がり、胴部中位でその度合を増し、口縁部で外反する。口縁部内面に縫を有している。無文の土器で、器表面はザラザラしており、上半部には横方向のナゲ、下半部には横方向の粗いナゲが施されている。	長石・スコリア 普通	現存率20%	内一側赤褐色 外一赤褐色	11壁部～底 部 1壁部 底部5%米糊

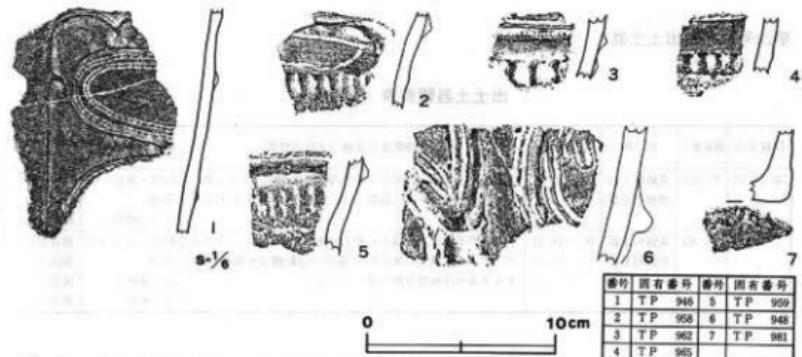


第49図 第26号住居跡出土土器実測図

第50・51図は第26号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。第50図の1は口縁部を断面三角形の隆帶によって区画し、隆帶に沿って1列の結節沈線文が施されている。口縁部には頂



第50図 第26号住居跡出土土器拓影図 (1)



第51図 第26号住居跡出土土器拓影図（2）

部が環状となる橋状把手が付けられている。把手の口唇部には、キザミ目や結節沈線文が施されている。頸部にはヒダ状の指圧痕が見られる。2～6は口縁部の隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。2は区画内に斜位の結節沈線文が、6は弧状の結節沈線文が施されている。6は口唇部にキザミ目が施されている。7・8は波状口縁を呈し、口縁部に結節沈線文が弧状に施されている。5は波状口縁を呈し、口縁部は断面三角形の隆帯によって三角形状に区画されている。隆帯の上面にはキザミ目が施され、区画接点の隆帯の上面には、丸棒状工具による押圧が加えられている。区画の隆帯に沿って3列の細い結節沈線文が施され、区画内には、3列の波状沈線文が施されている。頸部にはヒダ状の指圧痕が見られる。9は波状口縁を呈し、口縁直下に巡らされた断面三角形の隆帯に連結して、粘土棒が縦位に貼付され、突起状を呈している。口唇部にはキザミ目が施され、突起には押圧が加えられている。10は口縁直下に隆帯を巡らし、口縁部には蛇行する粘土紐が貼付されており、粘土紐の両側には、キザミ目が施されている。11は口唇部にキザミ目を施し、隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。12・15は無文の土器である。13は口縁直下に巡らされた隆帯の上面にキザミ目が施されている。14は浅鉢形土器の破片であり口縁部には2列の結節沈線文が橢円形状に施されている。16は胸部を巡る断面三角形の隆帯の上面に、円形の粘土瘤が貼付されている。粘土瘤の上面はくぼんでいる。17は浅鉢形土器の破片であり、上面に押圧が加えられた粘土瘤が貼付されている。18・19は隆帯に沿って1列の結節沈線文が施され、20には波状沈線文やヒダ状の指圧痕が見られる。第51図の1は隆帯が直曲線状に施され、隆帯に沿って、半截竹管による2列の結節沈線文が施されている。2～4はヒダ状の指圧痕が見られる。5は幅の広い爪形文が施され、輪積み痕が見られる。6は隆帯に沿って2列の粗い結節沈線文が、区画内には、「U」状の沈線が施されている。7は底部破片であり、網代痕が見られる。

第28号住居跡出土土器

出土土器観察表（第52図）

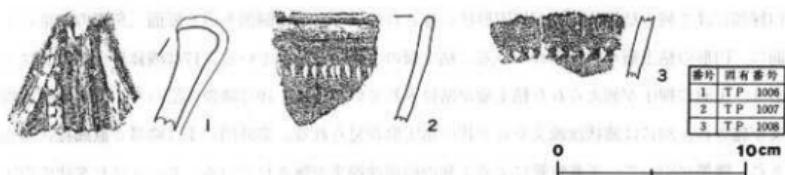
図版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様（手法の特徴）	胎土	焼成	色調	備考
第 52 図 1	P 170	深鉢形土器 (加曾利 E Ⅲ)	B (10.0)	胴部の下位は、底部から若干内壁しながら、大きく開いて立ち上っている。器面には、車輪RLの縞文を羽状に施している。	砂粒・長石 普通	現存率15%	胴部下位～ 底部	
2	P 63	深鉢形土器 (加曾利 E Ⅲ)	B (16.3) C (10.1)	胴部の下位は、底部から若干内壁しながら開いて立ち上っている。地文に車輪RLの縞文の回転縞文を施し、垂下する2本の沈線を磨り消している。	砂粒・スコリア 良好	現存率15%	胴部下位～ 底部	



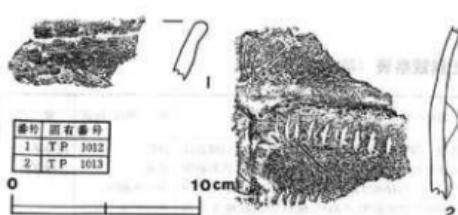
第52図 第28号住居跡出土土器実測図

第30号住居跡

第53図は、第30号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は山形状の把手の破片であり、頂部が双頭状となっている。隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。2は口縁部に爪形状の刺突文が施されている。3は胴部破片であり、楔状の刺突文が施されている。



第53図 第30号住居跡出土土器拓影図

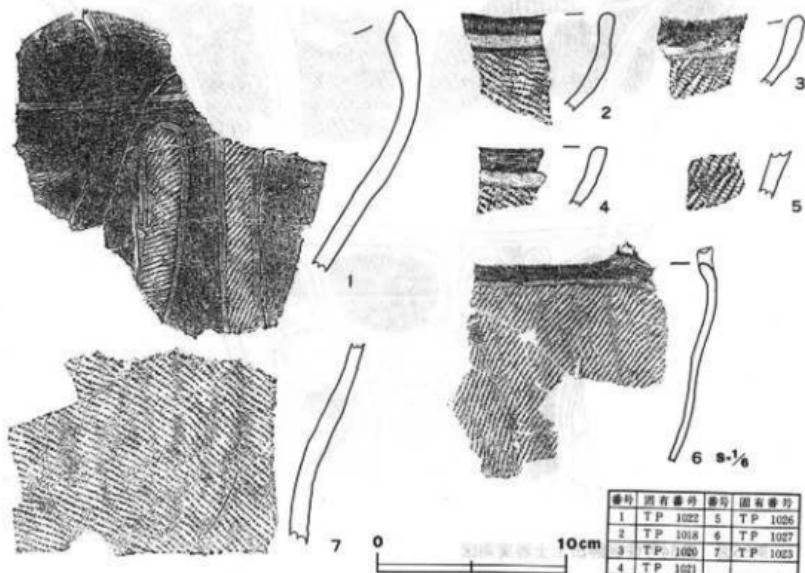


第54図 第32号住居跡出土土器拓影図

### 第32号住居跡出土土器

第54図は、第32号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部破片であり、無文で、口縁直下に隆帯が巡らされている。2は胴部破片であり、頸部を巡る断面三角形の隆帯に連続する「Y」字状の隆帯が垂下している。胴部には、幅の広い爪形文が施されている。

第55図は、第33号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は波状口縁を呈し、口縁部に浅い沈線を巡らし、口縁部と胴部とを区画している。口縁部は無文で、胴部には幅の狭い「匁」状の沈線が垂下し、「匁」状の区画内には、細い単節RLの継位回転縄文が施されている。2~4は口縁部に無文帯をもち、沈線下には縄文が施されている。6は口縁部に浅い沈線を巡らし、口縁部無文帯と胴部縄文施文帯とを区画している。口縁には、上面がくぼむ小突起を有している。胴部には、単節RLの継位回転縄文が施されている。7は胴部に単節LRの継位回転縄文が施されている。

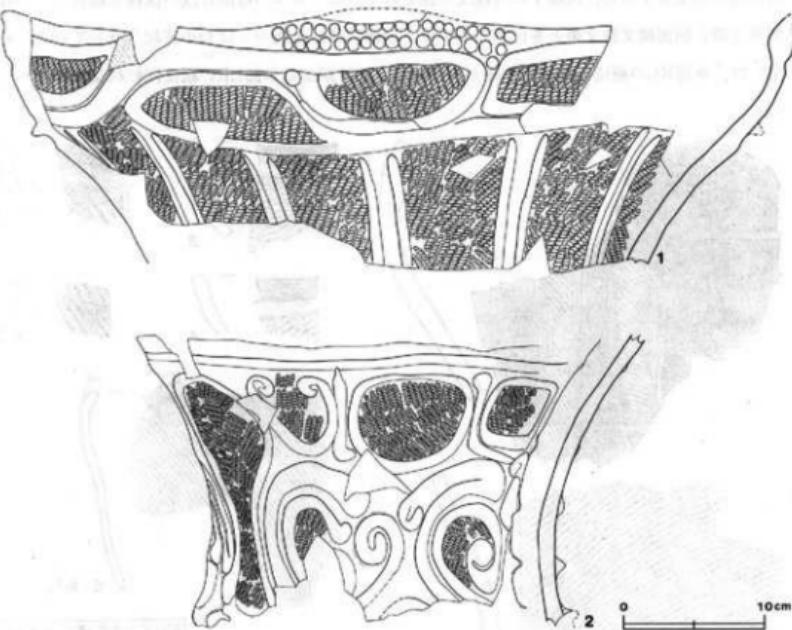


第55図 第33号住居跡出土土器拓影図

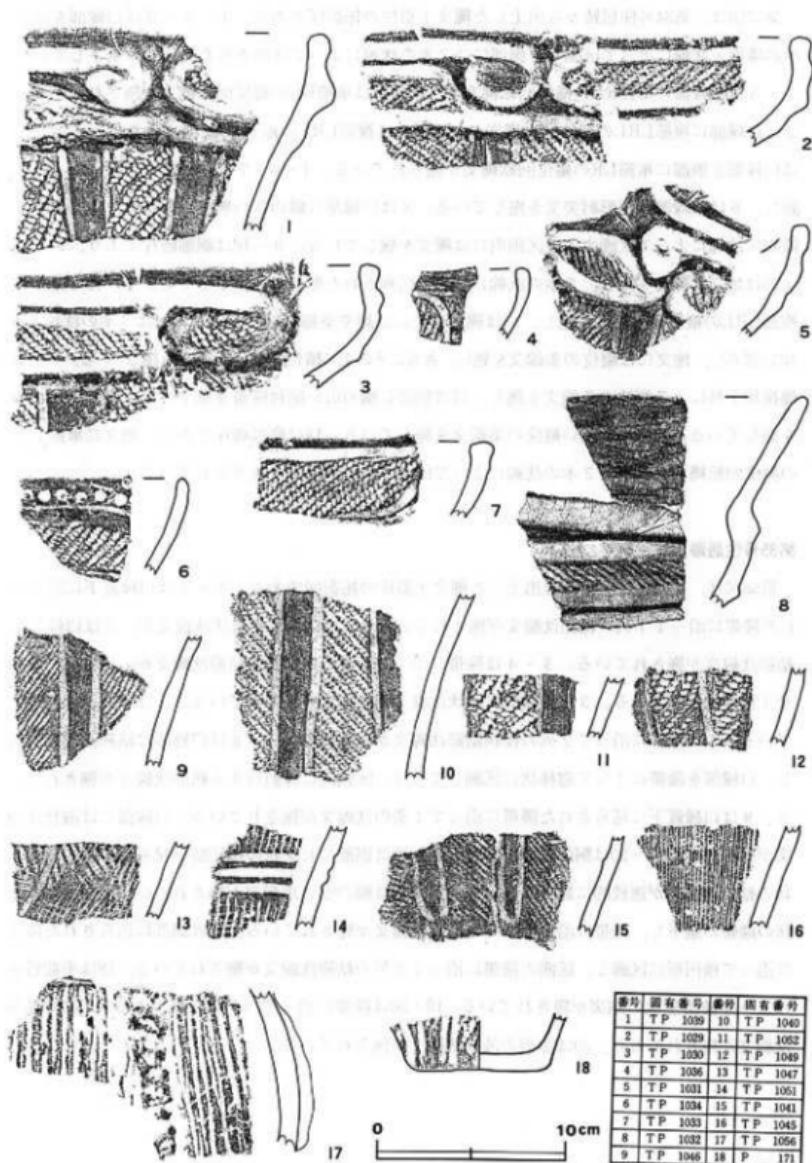
第34号住居跡出土土器

出土土器観察表 (第56図)

図版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土	焼成	色調	備考
第56図	P-65	深鉢形土器 (加賀利EⅡ)	A (56.0) B (17.0)	口縁部は浅く内彎し、口唇部は外反している。口縁部は織やかな4單位の波状を呈し、波状部には2列の円形削突文を施している。口縁部は隆線・沈線によって横円形に区画され、区画内には単筋RLの斜位、横位の回転補文が施されている。胴部には単筋RLの縱位の回転繩文を施し、2本の沈線によって区画された幅の狭い磨消帶を垂下させている。	砂粒 普通	現存率30%	口縁部破片	
1	P-66	深鉢形土器 (加賀利EⅡ)	B (19.5)	胴部中位に筋を持ち、胴部上位で外反している。胴部には1条の深い沈線を巡らし、その直下に、沈線によって表された連結する一対の握手状文を中心として、隆線・沈線による9单位の横柱横円文を施している。肩下部には、隆線・沈線による渦巻文や変形格円文を施し、区画内には単筋RLの横位や縦位の回転繩文を充填している。	砂粒・スコリア 普通	現存率50%	胴部 下位	
2								



第56図 第34号住居跡出土土器実測図

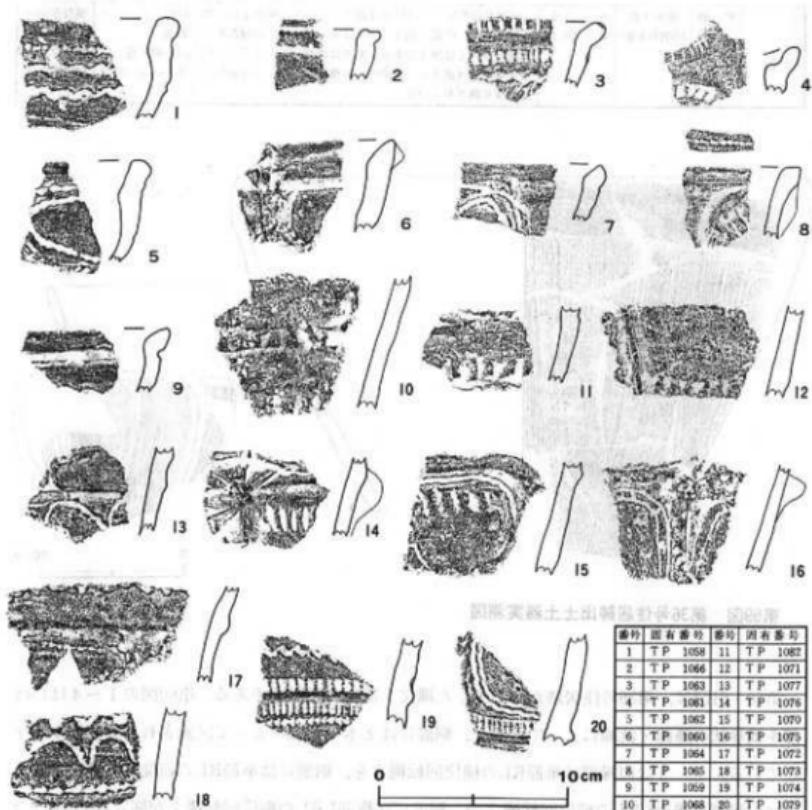


第57图 第34号住居跡出土土器拓影圖

第57図は、第34号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～3・5は口縁部を渦巻状の隆線・沈線によって区画し、胴部には2本の沈線によって区画された磨消帶が垂下している。1・5は口縁部に単節RLの横位回転繩文が、胴部には単節RLの縦位回転繩文が施されている。2は口縁部に複節LRLの横位回転繩文を、胴部には複節LRLの縦位回転繩文を施している。3は口縁部と胴部に単節LRの縦位回転繩文が施されている。4・6・7は口縁部を沈線によって区画し、6は口縁部に円形刺突文を施している。8は口縁部に幅の広い無文帯を持ち、無文帯下を隆線・沈線によって区画する。区画内には繩文を施している。9～16は胴部破片であり、9～12・15は地文に繩文を施し、2本の沈線によって区画された磨消帶を垂下させている。10は地文に複節LRLの縦位回転繩文を施し、13は繩文の上に沈線や条線を施している。14は3本の沈線を横位に巡らし、地文には縦位の条線文を施し、さらにその上に横位に細い条線文を施している。16は歯齒状工具による縦位の条線文を施し、17は胴部に幅の広い貼付隆帶を垂下させ、隆帶上に刺突を施している。地文には粗い縦位の条線文を施している。18は底部破片であり、地文に単節LRの縦位回転繩文を施し、2本の沈線によって区画された磨消帶を垂下させている。

### 第35号住居跡出土土器

第58図は、第35号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁直下に巡らされた隆帶に沿って1列の結節沈線文が施されている。1は口縁部に波状沈線文が、2は口唇部に結節沈線文が施されている。3・4は隆帶に沿って1列の爪形状の結節沈線文が、口唇部にはキザミ目が施されている。3は口縁部に波状沈線文や条線文が施されている。4は波状口縁を呈している。5は隆帶に沿って2列の櫛状結節沈線文が施されている。8は口唇部に結節沈線文を施し、口縁部を隆帶によって窓格状に区画している。区画内には斜行する結節沈線文が施されている。9は口縁直下に巡られた隆帶に沿って1条の沈線文が施されている。口縁部には波状沈線文が見られる。10～20は胴部破片である。10～12は胴部にヒグ状の指圧痕が見られる。13は山形状の結節沈線文が連続的に施されている。14・15は幅の広い爪形文が施されている。16は「Y」字状の隆帶が垂下し、隆帶に沿って2列の結節沈線文が施されている。17は胴部に巡られた隆帶に沿って横円形に区画し、区画の隆帶に沿って2列の結節沈線文が施されている。18は半截竹管により連続山形状の刺突が施されている。19・20は隆帶に沿ってヘラ状工具による幅の広い結節沈線文が施されており、20は2列の波状沈線文が施されている。



第35号住居跡出土土器拓影図

図番	器有番号	器名	因由番号
1	TP 1058	11	TP 1082
2	TP 1066	12	TP 1071
3	TP 1063	13	TP 1077
4	TP 1061	14	TP 1076
5	TP 1062	15	TP 1079
6	TP 1060	16	TP 1075
7	TP 1064	17	TP 1072
8	TP 1065	18	TP 1073
9	TP 1069	19	TP 1074
10	TP 1068	20	TP 1079

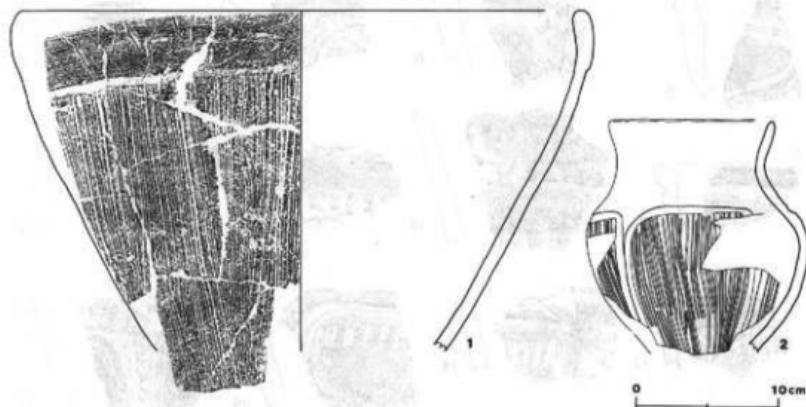
第35号住居跡出土土器拓影図

### 第36号住居跡出土土器

出土土器観察表(第59図)

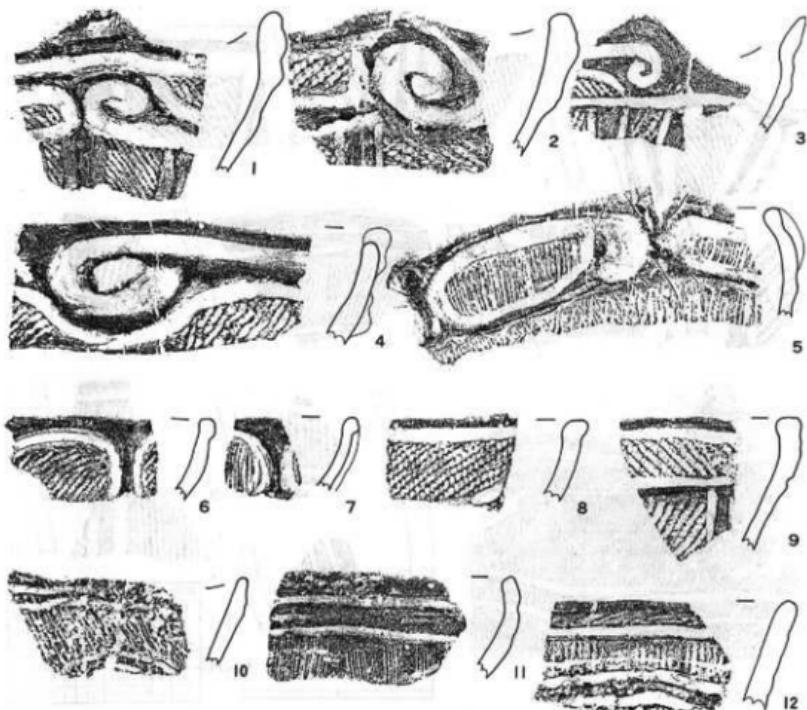
図版番号	器有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土	焼成	色調	備考
第59図	P 172	深鉢形土器 (加賀利EⅢ)	A 39.5 B (23.8)	胴部下位から外傾して立ち上がり、口縁部と胴部を区画している。周回する1条の弦紋によって、口縁部と胴部を区画している。口縁部は無文で研磨されており、胴部には纏曲状工具による範囲の柔軟文が施されている。内面には横ナメ彫形が施されている。	砂粒・スコリア	現存率20%	口縁部・胴部中位 外・黒褐色	口縁部20%

2	P 68 壺形土器 (加曾利EⅢ)	A 11.5 B 16.4	口縁部は外反し、口唇部は直立している。胴部上位に最大径を有し、底部に向かってすぼまっている。口縁部から胴部にかけては無文である。胴部は沈線によって「匚」状に4単位に区画され、区画内には櫛歯状工具による縦位の条線文が施されている。	妙粒・スコリア 普通 内一側灰色 外一におい褐色	現存率60% 口縁部一胴部下位 口縁部100%
---	-------------------------	------------------	--	-----------------------------------	-------------------------------

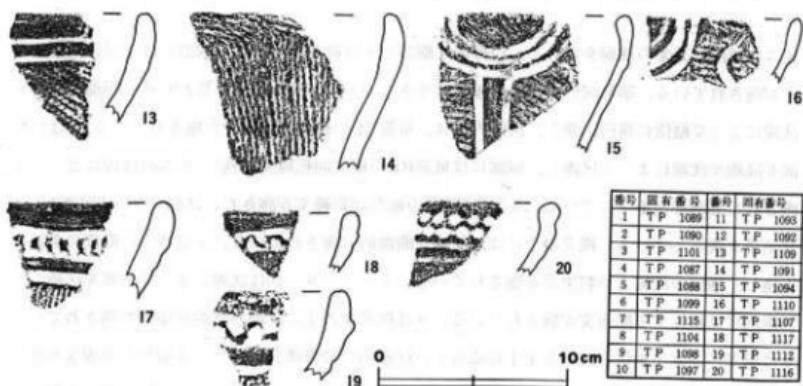


第59図 第36号住居跡出土土器実測図

第60・61図は、第36号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。第60図の1～4は口縁部を渦巻状の隆線・沈線によって区画し、胴部には2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。1・3は口縁部に単節RLの横位回転繩文を、胴部には単節RLの縦位回転繩文を施す。2は口縁部に複節LRLの横位回転繩文が、胴部には複節LRLの縦位回転繩文が施されている。5は口縁部を隆線・沈線によって区画し、口縁部・胴部には縦位の条線文が施されている。6～9は口縁部を隆線や沈線によって区画し、6・8・9は地文に繩文が、7は縦位の条線文が施されている。9は胴部に2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。10～13は口縁直下に無文帯を有し、口縁部を沈線によって区画している。10は波状口縁を呈し、口縁部に斜行する条線文が施されている。11は縦位の条線文が、12は無節の繩文が施されている。14は口縁部と胴部に施文方向を変えた撚糸文が全面に施されている。15・16は口縁部を3本の沈線によって「匚」状に区画し、地文に繩文が施されている。15は胴部に2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。17は口縁部に浅い沈線を巡らし、口縁部と胴部とを区画している。口縁直下に無文帯を有し、口縁部には爪形状の連続刺突文が、胴部には撚糸文が施されている。18・19は口縁直下に無文帯を有し、口縁部に蛇行する隆線を巡らしている。隆線の上下には刺突が施されている。

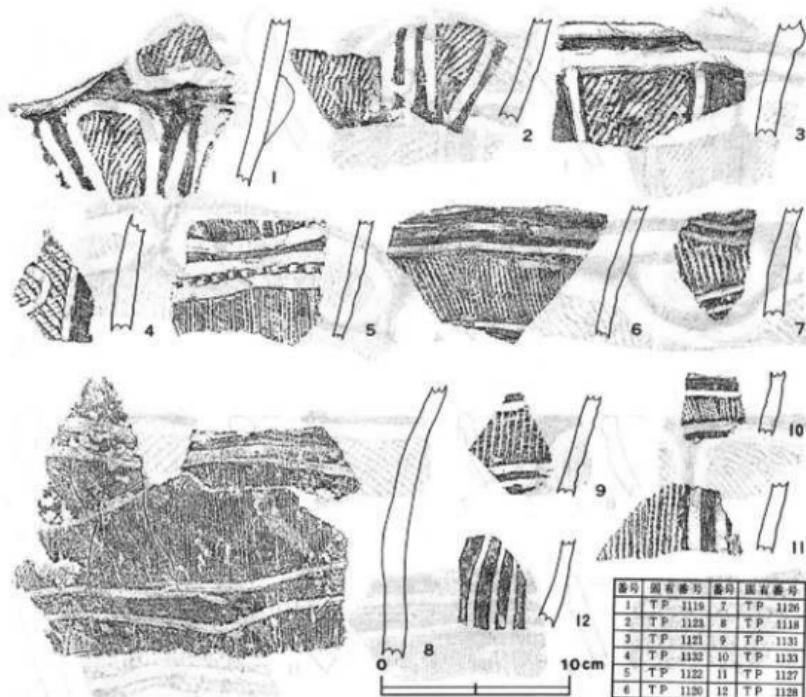


(1) 国都痕跡出土土器拓影圖 第13堆



番号	固有番号	形名	固有番号
1	TP 1089	11	TP 1093
2	TP 1090	12	TP 1092
3	TP 1101	13	TP 1109
4	TP 1087	14	TP 1091
5	TP 1088	15	TP 1094
6	TP 1099	16	TP 1104
7	TP 1115	17	TP 1107
8	TP 1104	18	TP 1117
9	TP 1096	19	TP 1112
10	TP 1097	20	TP 1116

第60図 第36号住居跡出土土器拓影圖 (1)



第61図 第36号住居跡出土土器拓影図（2）

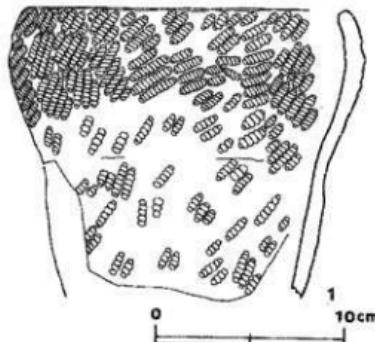
20は口縁部に2条の沈線を巡らし、口縁部と胴部とを区画している。口縁部には2列の円形刺突文が施されている。第61図の1と2は接合はできなかつたが同一個体と思われる。胴部を縦線や沈線によって縱位に梅円区画し、区画内には、単節RLの縱位回転繩文が施されている。3は口縁部を縦線や沈線によって区画し、胴部には単節RLの縱位回転繩文を施し、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。4は単節LRの縱位回転繩文が施され、沈線によって区画された磨消帯が垂下している。繩文の上には、沈線が曲線的に施されている。5は地文に縱位の条線文を施し、横位の沈線文や刺突文が施されている。6・7・9・10は沈線によって胴部を区画し、区画内には斜行する撚糸文が施されている。9は撚糸文の上に、細い沈線が横位に施されている。8は胴部に2本1単位の沈線を上下に巡らし、区画内には櫛齒状工具による縱位の条線文が施されている。11は胴部に縱位の撚糸文が施され、太くて浅い2本の沈線によって区画された幅の狭い磨消帯が垂下している。12は縱位の条線文が施されている。

番号	固有番号	番号	固有番号
1	TP 1119	7	TP 1126
2	TP 1123	8	TP 1118
3	TP 1121	9	TP 1131
4	TP 1132	10	TP 1133
5	TP 1122	11	TP 1127
6	TP 1120	12	TP 1128

第37号住居跡出土土器

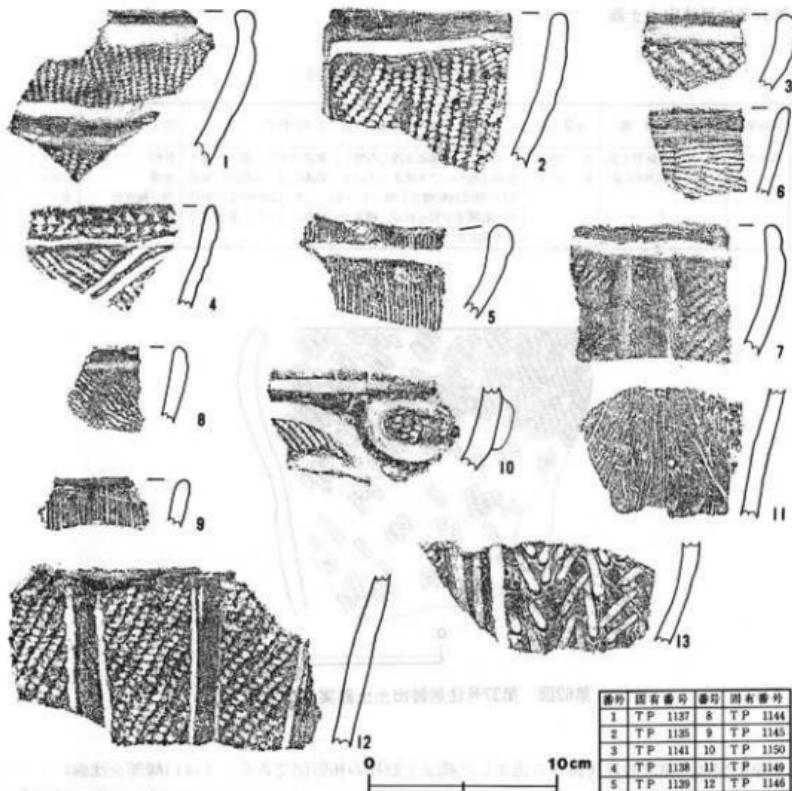
出土土器観察表（第62図）

図版番号	固有番号	器種	法景(cm)	器形の特徴及び文様「手法の特徴」	胎土 焼成 色調	備考
第62図	P 69	深鉢形土器 (加曾利EⅢ)	A (18.0) B 13.6	平底で、口縁部は浅く内折し、胴部は中位に膨みを持ち、底部に向かってすぼまっている。器面には、全面的に單節RLの継位・斜位の回転繩文を施している。一部には單節RLの継位の斜位繩文が見られる。繩文が口縁部には密に、胴部には粗く施されている。	砂質・スコリア 著述 内一褐色 外一において褐色	現存率30% 口縁部～胴部中位 口縁部70%



第62図 第37号住居跡出土土器実測図

第63図は、第37号住居跡から出土した繩文土器片の拓影図である。1は口縁部を沈線によって区画し、区画内には、単節しRの継位・斜位の回転繩文が施されている。2は口縁部に無文帶を有し、胴部を「匂」状の沈線によって区画している。区画内には単節しRの継位・斜位の回転繩文が施されている。4は口縁直下に2列の刺突文を施し、口縁部を1条の沈線や2条の斜行する沈線によって区画している。地文には無節しの継位回転繩文が施されている。5は全面に継位の繩文を施し、口縁部に1条の沈線を巡らしている。7は口縁部に1条の沈線を巡らし、口縁部無文帯と胴部繩文施文帯とを区画している。胴部には2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。9は口縁直下から胴部にかけて継位の条線文が施されている。10～13は胴部破片であり、10は渦巻状の隆線や沈線によって口縁部を区画し、繩文を充填している。13は胴部に綾形文を施し、2本の沈線によって区画された隆帯を垂下させ、隆帯の上面には、1条の沈線が継位に施されている。

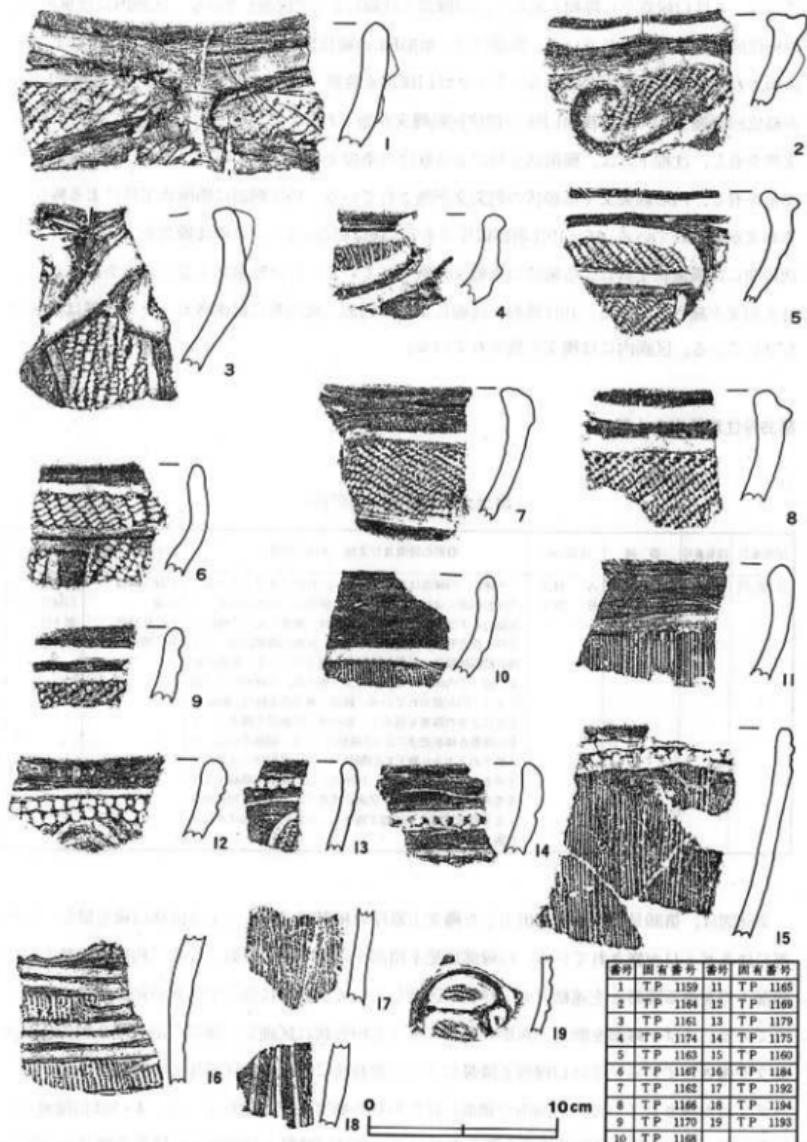


第63図 第37号住居跡出土土器拓影図

番号	固有番号	番号	固有番号
1	TP 1137	8	TP 1144
2	TP 1135	9	TP 1145
3	TP 1141	10	TP 1150
4	TP 1138	11	TP 1149
5	TP 1139	12	TP 1146
6	TP 1154	13	TP 1148
7	TP 1136		

### 第38号住居跡出土土器

第64図は、第38号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部を隆線によって橢円区画し、胴部に沈線による磨消帯が垂下している。口縁部の区画内や胴部には、単節RLの継位回転縄文が施されている。2は口縁に巡らされた隆線が渦状となり口縁部に貼付されている。区画内には、単節RLの継位回転縄文が、口唇部には沈線が施されている。3・4は口縁部を渦巻状の隆線や沈線によって区画し、胴部には2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。3は区画内に縄文が、4は口縁部に継位の条線文が施されている。5・8は口縁部を隆線・沈線によって区画し、口唇部に沈線が施されている。6は区画内に単節RLの横位回転縄文が施されている。胴部には単節RLの継位回転縄文が施され、沈線によって区画された磨消帯が垂下している。



番号	固有番号	番号	固有番号
1	TP 1159	11	TP 1165
2	TP 1164	12	TP 1169
3	TP 1161	13	TP 1179
4	TP 1174	14	TP 1173
5	TP 1163	15	TP 1160
6	TP 1167	16	TP 1184
7	TP 1162	17	TP 1192
8	TP 1166	18	TP 1194
9	TP 1170	19	TP 1193
10	TP 1168		

第64図 第38号住居跡出土土器拓影図

ている。6は口縁直下に縦線を巡らし、口縁部を沈線によって区画している。区内には単節RLの横位回転繩文が施されている。胴部には、単節RLの縦位回転繩文を施し、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。7・9は口縁部を隆線・沈線によって区画し、7は複節LRLの縦位回転繩文が、9は複節LRLの横位回転繩文が施されている。10-11は口縁部に幅の広い無文帯を有し、沈線下には、櫛齒状工具による縦位の条線文が施されている。12-15は口縁部に無文帯を有し、円形刺突文や爪形状の刺突文が施されている。15は胴部に櫛齒状工具による縦位の条線文が施されている。16-19は胴部破片である。16は胴部に2~3条の沈線文を上下に巡らし、沈線間には櫛齒状工具による縦位の条線文が施されている。17は櫛齒状工具による条線文が、19は条線文が施されている。19は隆線・沈線によって円形・梢円形に区画され、その一部は渦巻状を呈している。区内には繩文が施されている。

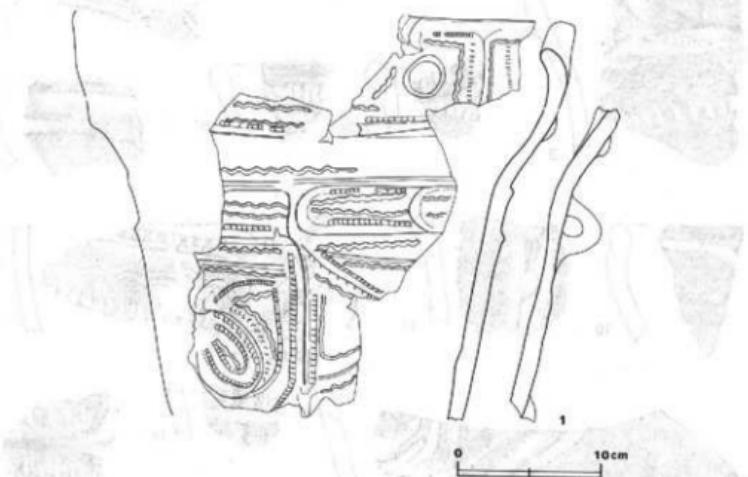
### 第39号住居跡出土土器

出土土器觀察表（第65図）

出展番号	調査番号	器種	法尺(cm)	器物の特徴及び文様（手法の特徴）	粘土 焼成 色調	備考
666 回	P 71	深鉢形土器 (阿玉台)	A 34.0 B 28.0	半腰で、口縁部は浅く内側に、口外部で外反している。 口縁部内面には波を有している。胴部は、底部に向かって直線的にぼりまっている。口縁部は、隆唇によって横位に方形や長方形に区画されており、区画の隆唇に沿って1列の結節沈線文や爪形状の刺突文が施されている。結節沈線文に沿って内面には波状沈線文が施され、区内には沈線によって2列が描かれている。頭部に無文帯を持つ。胴部は、上部に2本の隆唇を巡らし、幅の広い区画帯を構成し、2本の隆唇を棒状把手によって連結している。胴部中央は、扶把手の下方から底下する隆唇によって、方形状に4半径に区画されるものと思われ、区内には、渦巻や曲線をなす隆唇が付されている。区画の隆唇に沿って、1列の櫛状をなす結節沈線文や沈線が施され、区内には波状沈線文が施されている。	空心・移栓 普通 内一灰褐色 外一黑褐色	保存率20% 上縁部・胴部下位・口縁部10%

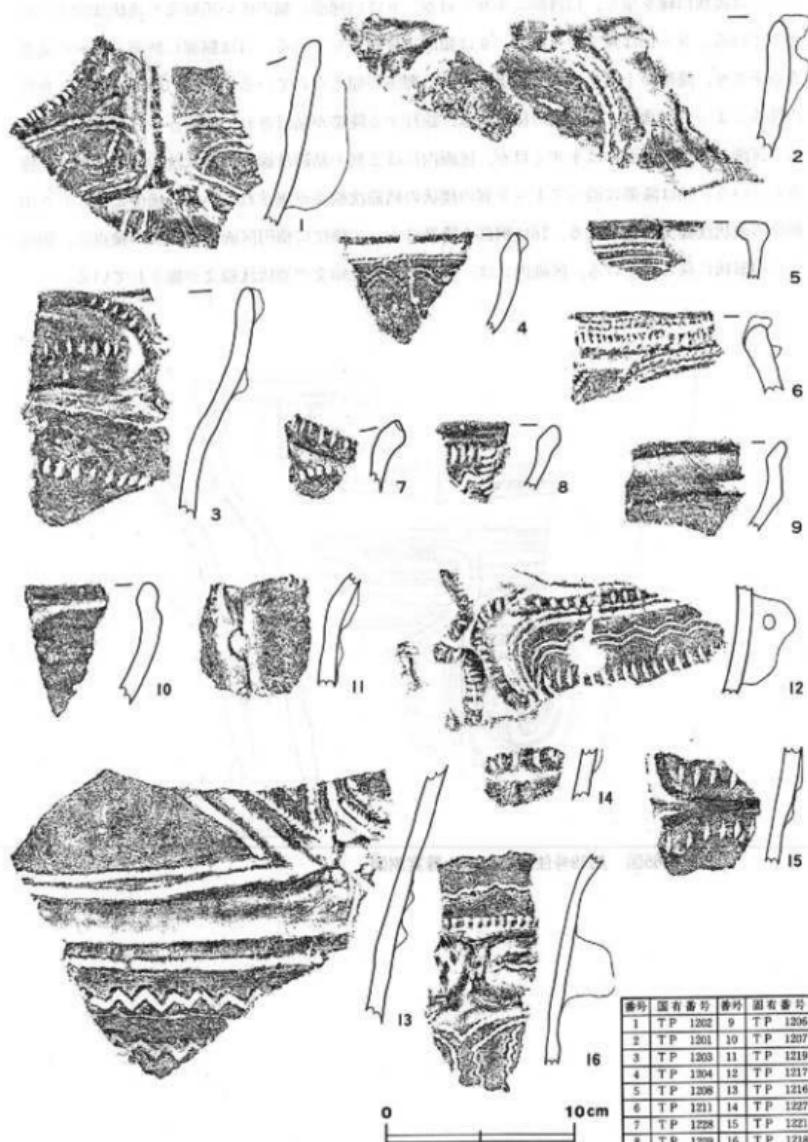
第66図は、第39号住居跡から出土した繩文土器片の拓影図である。1は波状口縁を呈し、口縁部にはキザミ目が施されている。口縁部は把手頂部から垂下する断面二等辺三角形の隆唇と、口縁部下方を巡る隆唇とを連結させ、棒状に区画している。隆唇に沿って2列の結節沈線文が施されている。2は口縁部を断面三角形の隆唇によって円形状に区画し、隆唇に沿って2列の結節沈線文が施されている。3は口縁部を隆唇によって窓棒状に区画し、区画接点の隆唇の上面には、キザミ目が施されている。区内や頭部には爪形状の刺突文が施されている。4・5は口縁直下の隆唇に沿って、2列の結節沈線文が施されている。6は口唇部と口縁直下の隆唇の間にヘラ状工具による幅の広い結節沈線文が、口縁部を区画する隆唇に沿って2列の結節沈線文が施されてい

る。7は波状口縁を呈し、口唇部にキザミ目が、8は口縁部に幅の広い爪形文や波状沈線文が施されている。9・10は無文の土器で、9は頸部に稜を有している。11は胴部に断面三角形の隆帯を垂下させ、隆帯の上面には丸棒状工具による押圧が加えられている。12は口縁部を断面三角形の隆帯によって区画し、区画内の接点には、蛇行する隆帯が貼付され、側面から孔が穿たれている。区画の隆帯の上面にはキザミ目が、区画内には2列の結節沈線文や波状沈線文、爪形文が施されている。13は隆帯に沿って1~2列の楔状の結節沈線文が施されている。横位に施された山形状の波状沈線文も見られる。16は胴部を隆帯によって横位に楕円区画し、区画の接点は、側面から円形状に抉られている。区画内には、楔状の結節沈線文や波状沈線文が施されている。



第65図 第39号住居跡出土土器実測図



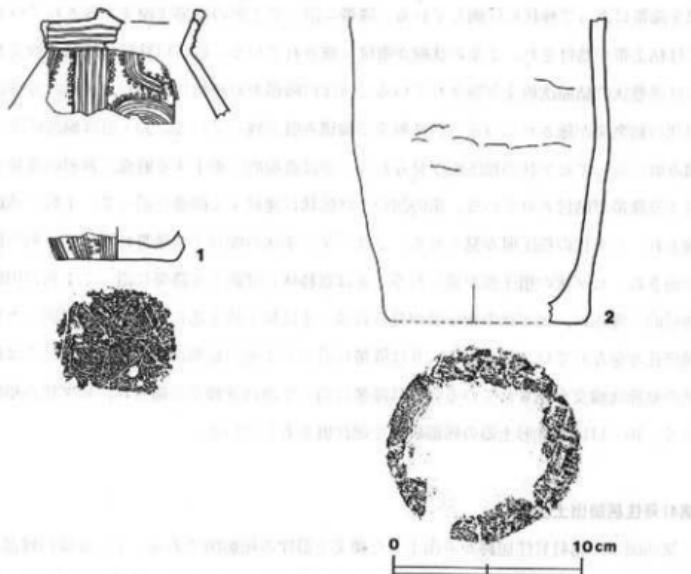


第66図 第39号住居跡出土土器拓影図

第40号住居跡出土土器

出土土器観察表（第67図）

図版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様（手法の特徴）	胎土	焼成	色調	備考
第67図	P-82	壺形土器	A (8.2) C 6.4	平坦な底部から胴部上位にかけて内側して立ち上がり、口縁部で大きく外反する。胴部中位に最大径を有している。口縁には小突起を有し、口縁部には3条の沈線が施されている。胴部は、口縁部の直下から底部にかけて垂下する、5~6本を1単位とする平行沈線によって輪位に区隔され、各区画には、平行沈線によって曲線的な文様が表されており。平行沈線に沿って、刺先状の工具による連續刺突が施されている。底部には水葉模が見られる。	砂粒 良好	現存率15% 口縁部~胴部上位	内一黒褐色 外一浅黄褐色	
1	P-64	深鉢形土器 (阿玉台Ib)	B (16.3) C (10.1)	胴部は、底部からやや外傾して立ち上がり、中位に膨みを持ち、上位で直立する。粗く整形成された器蓋には、輪積み模が残っており、底部には網代模が見られる。	砂粒・芸母 普通	現存率60% 胴部上位~底部	内一黒褐色 外一赤褐色	底部10%

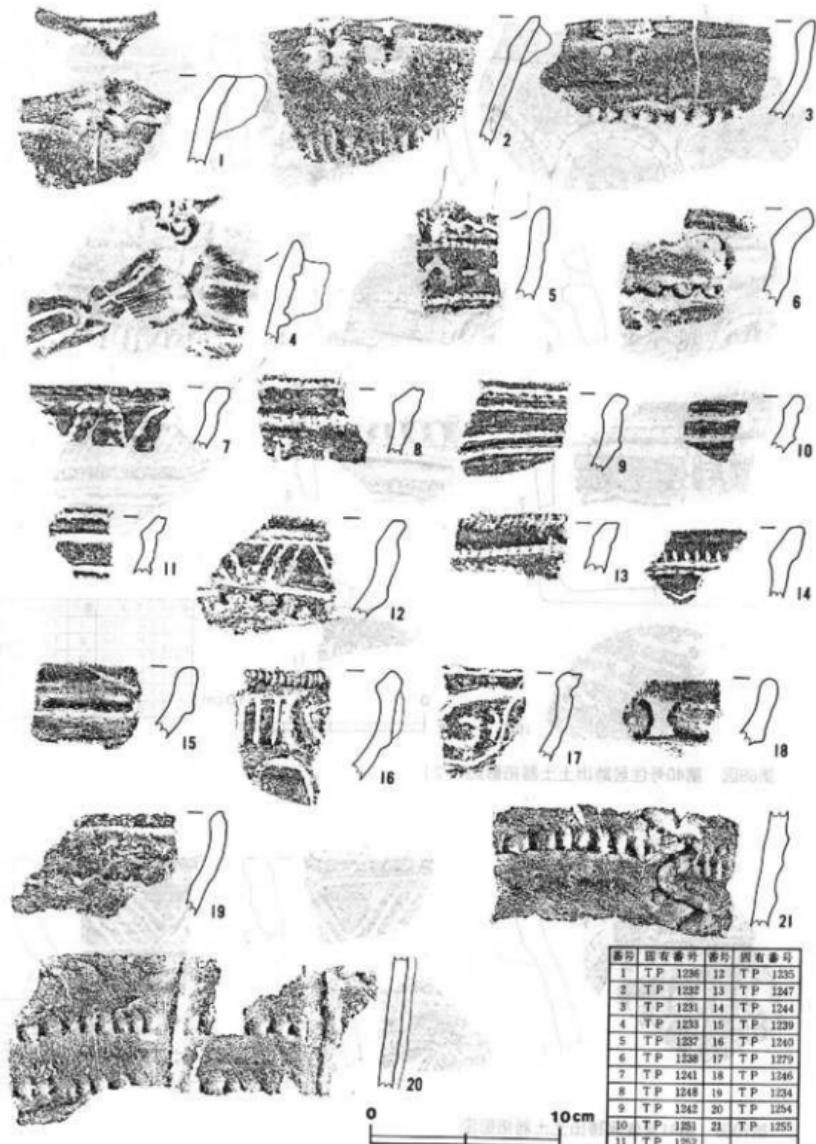


第67図 第40号住居跡出土土器実測図

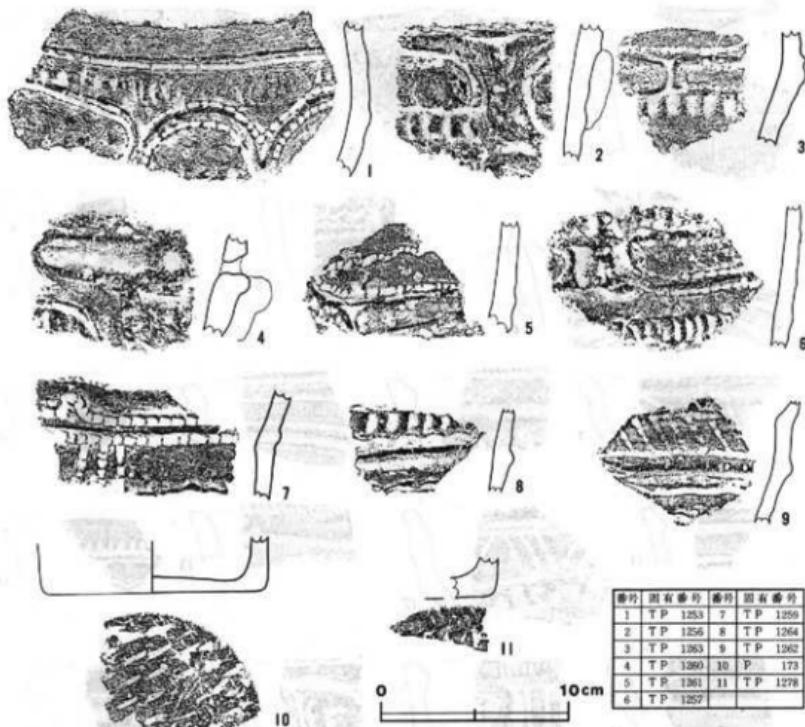
第68・69図は、第40号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。第68図の1は口縁部に粘土棒を芯にして粘土帯で囲った突起が貼付されている。2は口縁部に粘土紐を2段に貼付し、それをつまみ出して「Y」字状の小突起としている。胴部には、ヒダ状の指圧痕が見られる。3は頸部に輪積み痕が見られ、爪形状の刺突が施されている。3は波状口縁を呈し、波頂部は双頭状に抉られている。口縁部は区画の接点に粘土棒を芯にして粘土帯で囲った小突起や、「Y」字状の粘土紐を貼付し、隆帯によって窓枠状に区画されている。区画内には、隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。5・8～13は区画の隆帯に沿って、1列の結節沈線文が施されている。8・11は口唇部に半截竹管による「C」字状の連続刺突が、9は1列の結節沈線文が、13はキザミ目が施されている。6は口縁部を区画する隆帯の上面に、丸棒状工具による押圧が加えられており、頸部にはヒダ状の指圧痕が見られる。14は口縁直下に造られた幅の広い隆帯の上面にキザミ目が、隆帯に沿って、2列の結節沈線文が施されている。15は口縁部に貼付された幅の狭い隆帯に沿って、「C」字状の刺突文がまばらに施されている。16は口唇部にキザミ目を施し、口縁部を隆帯によって棒状に区画している。隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。区画内には粘土帯が貼付され、2条の沈線が巻位に施されている。17は口唇部に結節沈線文が、口縁部には渦巻状の結節沈線文が施されている。18は口縁部を窓枠状に区画し、区画の隆帯に沿って爪形状の刺突文が施されている。19は無文で輪積み痕が残っている。20・21は胴部破片であり、輪積み痕に沿ってヒダ状の指圧痕が見られる。20は直線的に垂下する断面三角形の隆帯が、21は蛇行する隆帯が貼付されている。第69図の1は弧状に連続する隆帯に沿って、1列の結節沈線文が施され、ヒダ状の指圧痕が見られる。2は「Y」字状の蛇行する隆帯に沿って1列の結節沈線文が施され、ヒダ状の指圧痕が見られる。3は窓枠状に区画する隆帯に沿って1列の円形刺突文が連続的に施され、ヒダ状の指圧痕が見られる。4は粘土棒を芯にして粘土帯で囲った突起を有し、補修孔が穿たれている。5～7・9は隆帯に沿って1列の結節沈線文が施され、5は区画内に波状の結節沈線文が施されている。8は隆帯に沿って波状沈線文が施され、ヒダ状の指圧痕が見られる。10・11は深鉢形土器の底部破片で網代痕を有している。

#### 第41号住居跡出土土器

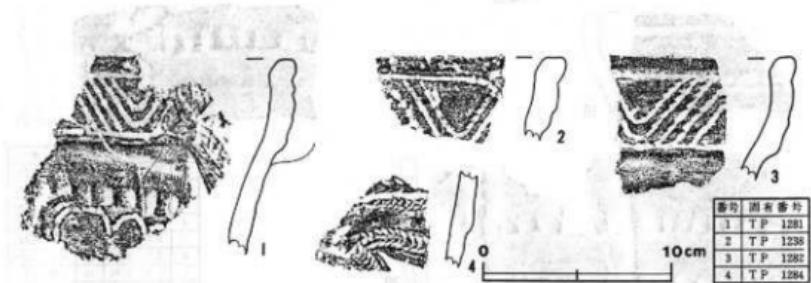
第70図は、第41号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～3は口縁部、4は胴部破片である。1～3は口縁部を断面三角形の隆帯によって区画し、区画の隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。区画内には結節沈線文が「V」字状に施されている。1は区画接点の隆帯が外側に突き出し、頸部には、ヒダ状の指圧痕や弧状に連続する結節沈線文が施されている。4は隆帯に沿って1列の楔状の結節沈線文が施されている。



第68図 第40号住居跡出土土器拓影図（1）



第69図 第40号住居跡出土土器拓影図（2）



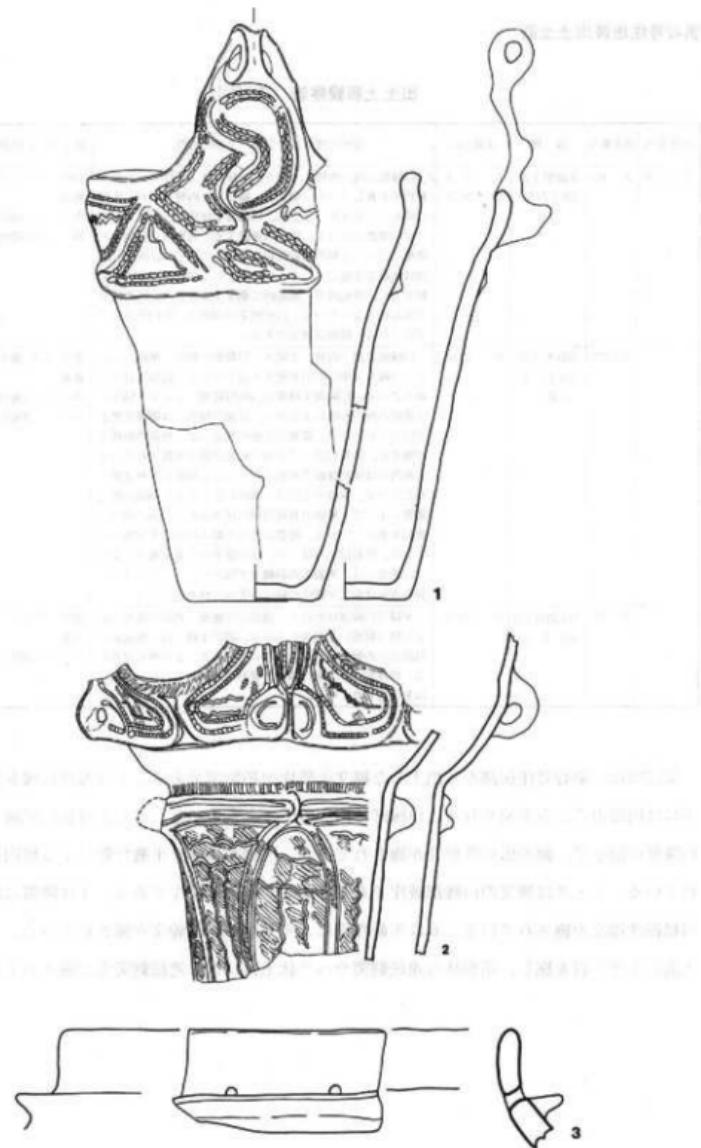
第70図 第41号住居跡出土土器拓影図

## 第42号住居跡出土土器

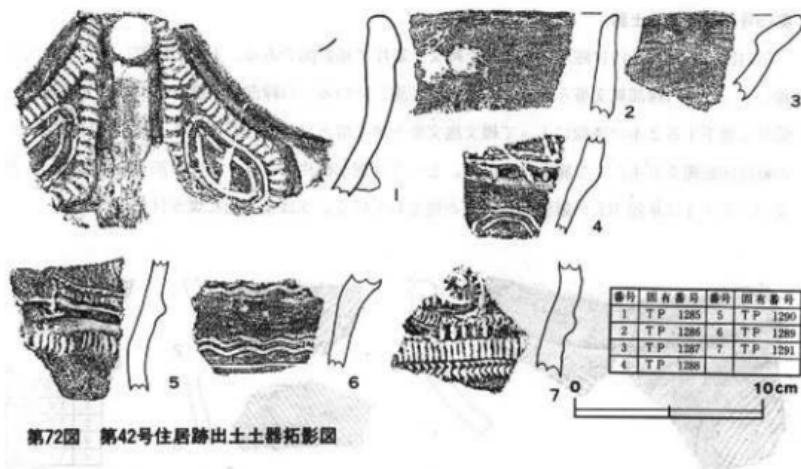
出土土器観察表（第71図）

図版番号	同名番号	器種	法葉(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土焼成色調	備考
第71図	F-85	圓錐形土器 (阿玉台Ⅱ)	A (27.4) B 38.9	I縁部は浅く内側して開き、II縁には1単位の大きな山形把手を有している。胴部は、横やかに内側しながら底部に向かってすぼまっている。口縁部文様帶は、断面カマがコ状の隆帯によって、横位に連続する三角形状に凸曲され隆帯に沿って2列の結節沈線文を施している。区画内には波状沈線文を施している。山形把手の上端には渦巻状の突起を有し、突起部から曲線的に下する隆帯は、区画接点で突起状となっている。山形把手の内面は、横円形状にくぼんでいる。胴部は無文である。	砂鉄・スコリア 普通 内一に赤褐色 外一に赤褐色	現存率60% 口縁部～胴部下位 口縁部50%
1	P-127	圓錐形土器 (阿玉台Ⅱ ～Ⅲ)	B 32.1	I縁部は浅く内側して開き、円筒形の胴部に接続している。II縁には4単位の山形把手を有している。底部は打ち欠かれている。II縁部文様帶は、貼付隆帯によって、横位に8単位の横円形状に区画され、区画の接点には結節沈線手が付けられている。隆帯の上面や地盤には、無面の結節沈線文が施され、隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。区画内には波状沈線文が施されている。胴部の上位は、横位に連続された間隔の狭い隆帯によって4単位の横円形に区画され、区画の接点に突起を表出している。隆帯に沿って幅広の爪形文が施されている。突起部からは「V」状の隆帯が4単位垂下している。地盤には、無面の斜溝文が施され、その上には、2列の波状沈線文が横位や縦位の方向に施されている。	青母・石英・長石 普通 内一に赤褐色 外一に赤褐色	現存率70% I縁部～胴部中位 口縁部70% 埋設位置
2	P-81	石舟付土器 (阿玉台)	A (19.4)	半球では縁部は外反し、胴部には断面三角形の隔壁を造らし縁(眞縁)を形成している。眞の上縁には、焼成時に外側から内側の下方向に穿たれた小孔が、2か所に見られる。内外面とも丁寧に模ナメ整形が施されており、内面には朱が塗られている。	青母・長石 良好 内一に赤褐色	現存率5% 口縁部～眞縁部 II縁部20%

第72図は、第42号住居跡から出土した繩文土器片の拓影図である。1は波状口縁を呈し、波頂下には円形のくぼみが見られる。口縁部は円形のくぼみを中心として左右対称に区画され、区画の隆帯に沿って、幅の広い爪形文が施されている。区画内には、半截竹管による横円文が表出されている。2・3は無文の口縁部破片である。4~7は胴部破片である。4は隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。6は半截竹管による平行波状沈線文が施されている。7は隆帯の上面にキザミ目を施し、爪形状の連続刺突やヘラ状工具による連続刺突文が施されている。



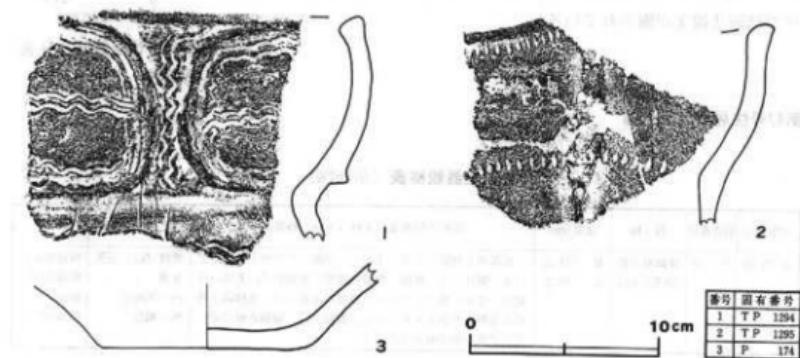
第71図 第42号住居跡出土土器実測図



第72図 第42号住居跡出土土器拓影図

#### 第44号住居跡出土土器

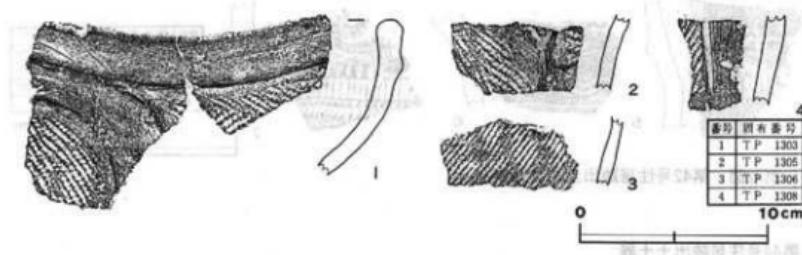
第73図は、第44号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部を窓棒状に区画する隆帯の内側に沿って、半截竹管による2列の平行沈線や波状沈線文が施されている。区画内には横位に、区画間に縦位に2列の波状沈線文が施されている。2は口縁部や胴部に爪形状の刺突文が施され、断面三角形の隆帯が蛇行しながら垂下している。隆帯の上面には、丸棒状工具による押圧が加えられている。3は浅鉢形土器の底部破片である。



第73図 第44号住居跡出土土器拓影図

### 第45号住居跡出土土器

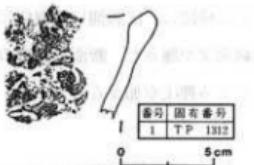
第74図は、第45号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部に巡らされた隆線によって、口縁部無文帯と胴部文様帯とを区画している。口縁部は研磨されており、胴部は、弧状に垂下する2本の隆線によって縄文施文帯と無文帯とに区画されている。地文には単節LRの縦位回転縄文が主として施されている。2~3は胴部破片であり、2は単節LRの縦位回転縄文が、3・4は単節RLの縦位回転縄文が施されている。3は器表面に煤が付着している。



第74図 第45号住居跡出土土器拓影図

### 第46号住居跡出土土器

第75図は、第46号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部破片であり、口縁直下に、粘土紐を横位に二段に貼付して表出した小突起を有している。口縁部には、渦巻状の結節沈線文が施されている。

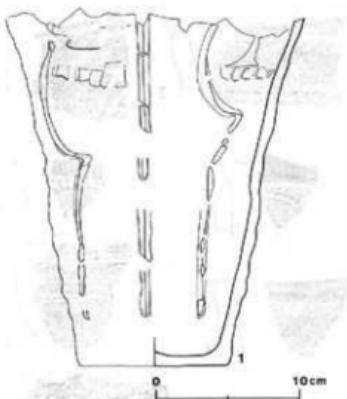


第75図 第46号住居跡出土土器  
拓影図

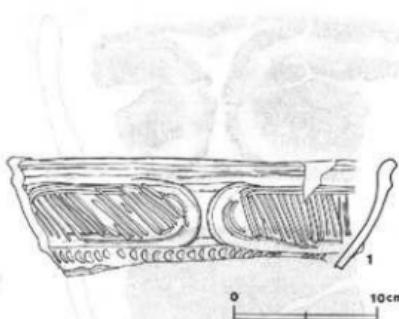
### 第47号住居跡出土土器

出土土器観察表（第76図）

図版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様（手法の特徴）	粘土 燐成 色調	備考
第76図	P 78	深鉢形土器 (側面台1b)	B (24.2) C 10.2	底部から外傾して立ち上がり、胴部上位でやや外反している。胴部は、断面三角形の隆帯が直線的に、あるいは航行しながら垂下している。隆帯の上面には、丸棒狀工具による押圧が加えられている。器面には、輪横み痕に沿ってヒダ状の指圧痕が見られる。	雲母-長石-石英 普通 内-黒褐色 外-褐色	現存率60% 胴部上位～ 底部100%



第76図 第47号住居跡出土土器実測図



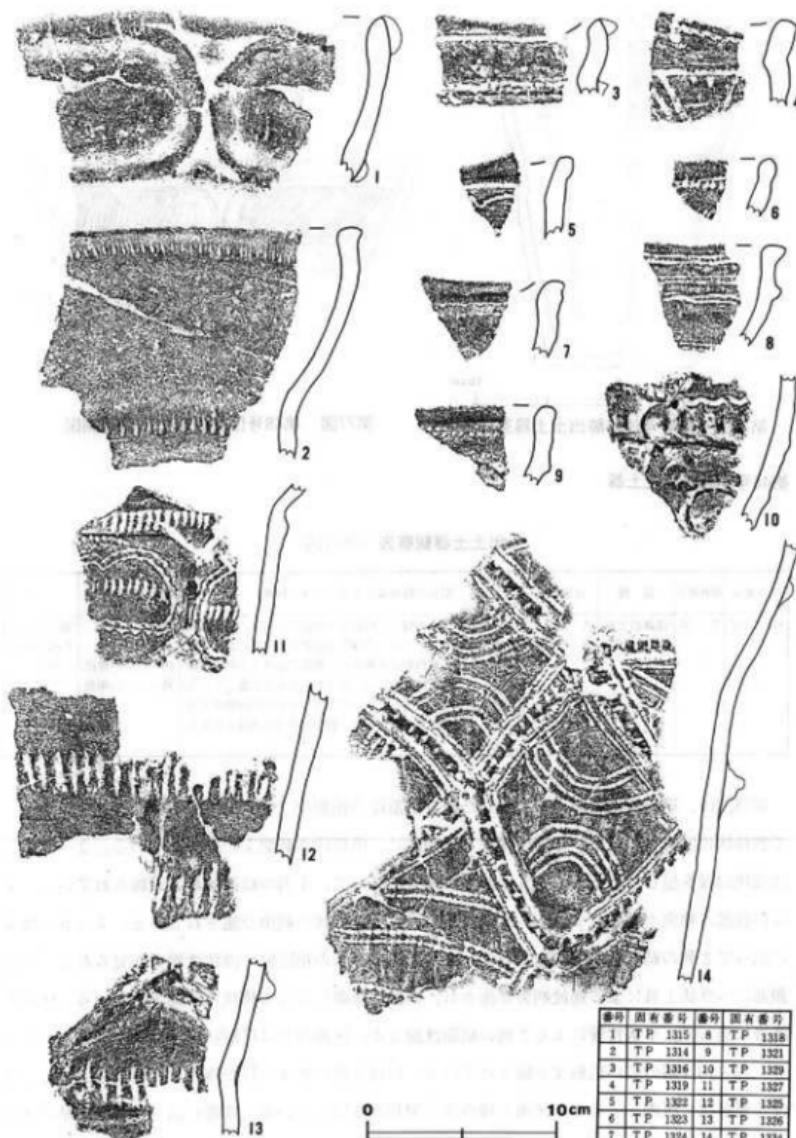
第77図 第48号住居跡出土土器実測図

#### 第48号住居跡出土土器

#### 出土土器観察表（第77図）

国版番号	周有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土	焼成	色調	備考
第77図	P 76	深鉢形土器 (阿玉台Ⅱ)	A (27.3) B (7.8)	口縁部は深く内側し、口唇部は外反している。口縁部の内面に横を有している。口縁部文様番は、隆帯によって横位に4単位の横円形に区画され、隆帯に沿って2列の沈線を施している。区画内には、斜方向の刺繻文を施している。口唇部には隆帯を巡らし、その下方はナゲラレ凹帯状となっている。頸部には、爪形状の刺突文や波状沈線文を巡らしている。	雲母・長石 普通	現存率25%	口縁部破片 口縁部75%	

第78図は、第48号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部を隆帯によって窓棒状に区画している。2は口縁直下や頸部に、爪形状の刺突文が施されている。3～5・7は波状口縁を呈している。3～5は区画の隆帯に沿って、1列の結節沈線文が施されている。4は口唇部に刺突が施されている。6は隆帯に沿って爪形状の刺突が施されている。7～9は隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。10はヒダ状の指圧痕や波状沈線文が見られる。11は頸部にヘラ状工具による連続刺突が施され、胸部は隆帯によって棒状に区画されている。区画の隆帯に沿って、半截竹管による2列の結節沈線文が、区画内には爪形状の連続刺突が施されている。12・13は幅の広い爪形文が施されている。14は上面にキザミ目が施された隆帯によって、胸部を菱形状に区画している。区画の接点は小突起状を呈している。隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。

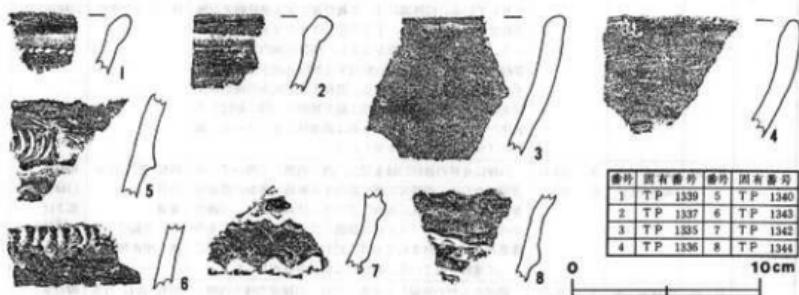


第78図 第48号住居跡出土土器拓影図

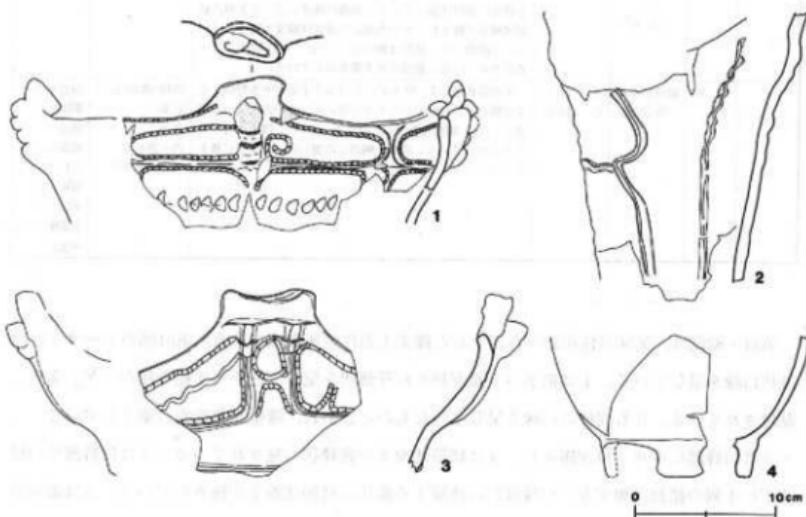
番号	固有番号	番号	固有番号
1	TP 1315	8	TP 1318
2	TP 1314	9	TP 1321
3	TP 1316	10	TP 1329
4	TP 1319	11	TP 1327
5	TP 1322	12	TP 1325
6	TP 1323	13	TP 1326
7	TP 1324	14	TP 1334

### 第49号住居跡出土土器

第79図は、第49号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁直下に隆帯を貼付し、1は口縁部に劍先状工具による連続刺突が施されている。3・4は無文の口縁部破片である。5は断面三角形の隆帯に沿って幅の広い爪形文が施されている。6はヒダ状の指圧痕が、7・8は波状沈線文が見られる。



第79図 第49号住居跡出土土器拓影図



第80図 第50号住居跡出土土器実測図

## 第50号住居跡出土土器

出土土器観察表 (第80図)

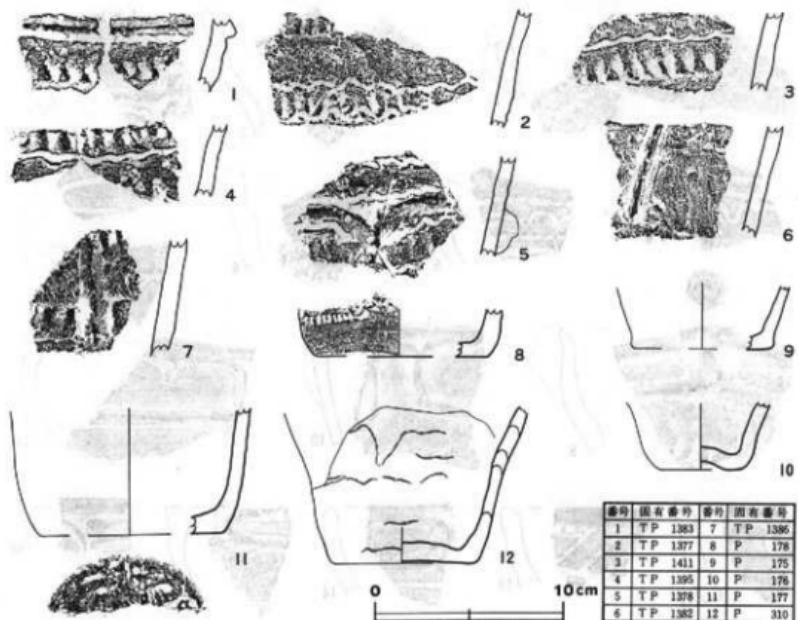
出発番号	器名番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土 燃成 色調	備考
第80図	P-79	深鉢形土器 (阿玉台Ⅰa)	A (29.0)	口縁は4単位の波状口縁を呈し、一部で段状となっている。波状部の突起の内面には、粘土紐を溝巻状に貼付し施者「文文」を施している。口縁部は浅く内側し、内面に継ぎを有している。口唇部には、手造竹管による連続刺突が施されている。口縁部は、上下に造られた2本の隆帯によって、幅の狭い横帯区画がなされ、横帯区画内には、さらに突起間に構成された2つの相対する円錐区画を1単位として、4単位に区画されている。突起下方の区画の後方に粘土棒を芯として、垂状の粘土紐を横帯に一段に貼付して突出した小突起が施され、一部は溝巻状となっている。頸部にはヒダ状の脂上痕が見られる。	雲母・熱石・石英 普通 内一赤褐色 外一にい赤褐色	現存率10% 口縁部～頸部 内一赤褐色 外一にい赤褐色
			B (10.9)			
1	P-84	深鉢形土器 (阿玉台Ⅰa)	B (20.4)	口縁は身形の波状口縁を呈し、浅く内側して開いている。波状部からは、中間部で浅く旋行する斜面三角形の盛巻が草下し胴部を2単位に区画している。区画間にには、1種類から底部に向かって「3」字形に屈曲しながら垂下する2本の隆帯が對称に貼付されており、括れ部は、蛇行する隆帯によって連絡されている。胴部には縦縞模様が見らるる。	砂粒・雲母・長石 石英 普通 内一赤褐色 外一明赤褐色	現存率40% 口縁部～胴部下位 内一赤褐色 外一明赤褐色 S15出土土器片と接合
			C (10.2)			
2	P-91	深鉢形土器 (阿玉台Ⅰa)	A (35.0)	頸部からやや外傾して立ち上がり、口縁部で浅く内側しながら開いている。口縁は4単位の波状口縁を呈し、平坦な波頂部には、内面に2列の結節沈線文を施す棒状の粘土紐が貼付されている。波頂部直下の口縁部には、粘土紐を2段に貼付して突出した1列の小突起を有しており、小突起部から「L」字状の盛巻が左右に分れ、口縁部文様帶を横帯に構成区画している。区画の隆帯に沿って1列の結節沈線文が施され、その内側には波状沈線文が施されている。区画間にには、結節沈線文によって円や「八」字の文様が施されている。頸部には無文帶を有している。	砂粒・雲母・石英 普通 内一にい赤褐色 外一暗赤褐色	現存率10% 口縁部～頸部 内一にい赤褐色 外一暗赤褐色
			B (12.6)			
3	P-80	押付形土器 (阿玉台)	C (きず)			
			「きず」			
4	P-80	押付形土器 (阿玉台)	B (10.1)	平坦な底部は、厚さが0.7-1cmで平面部が方形状となる小脚が4つ付いていたものと思われ、その内の2つが現存している。脚部は無文で、底部を一定にし、浅く内側して立ち上げている。底部と胴部との境には、わずかに縫を有している。	砂粒・雲母・長石 石英 普通 内一黒褐色 外一暗赤褐色	現存率25% 脚部下位～底部 内一黒褐色 外一暗赤褐色 S15出土土器片と接合 E10a区からも 同型のP205 が出土
			C (10.1)			

第81・82図は、第50号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。第81図の1～9・11は波状口縁を呈している。1は把手の上面が抉られ双頭状を呈し、把手には粘土紐が「Y」字状に貼付されている。2も同様の口縁を呈していたものと思われ、隆帯が曲線的に垂下している。3・6は口唇部にキザミ目が施され、3は結節沈線文が窓棒状に施されている。4は口唇部や口縁直下に1列の結節沈線文が、口縁部には連続する弧状の結節沈線文が施されている。5は波頂部が双頭状を呈するものと思われ、口縁部を区画する隆帯に沿って、1列の結節沈線文が施されている。9は口縁部には円形竹管による連続する弧状の結節沈線文が施されている。10は口縁部が隆帯



番号	固有番号	番号	固有番号
1	TP 1352	12	TP 1361
2	TP 1355	13	TP 1353
3	TP 1356	14	TP 1362
4	TP 1358	15	TP 1359
5	TP 1357	16	TP 1371
6	TP 1360	17	TP 1387
7	TP 1363	18	TP 1372
8	TP 1364	19	TP 1387
9	TP 1350	20	TP 1375
10	TP 1351	21	TP 1379
11	TP 1349	22	TP 1375

第81図 第50号住居跡出土土器拓影図（1）



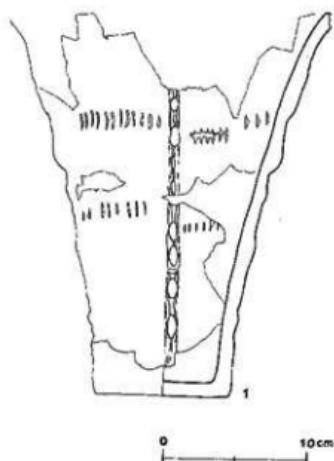
第82図 第50号住居跡出土土器拓影図(2)

によって幅の狭い窓棒状に区画され、1列の結節沈線文が施されている。口唇部から口縁部の区画接点には、粘土棒を芯とした小突起が付されている。頸部にはヒダ状の指圧痕が見られる。10は口縁部を隆帯によって楕円区画し、区画間を「匚」状の隆帯によって連結している。11は口縁部を隆帯によって棒状に区画し、隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。12~17は口縁部を区画する隆帯に沿って、1列の結節沈線文が施されている。14・15は口縁部を隆帯によって窓棒状に区画している。18は口唇部を欠損する口縁部破片であり、大きく「く」の字状に屈曲している。口縁部には隆帯を上下対称に弧状に連続させ、楕円区画している。隆帯に沿って、1列の結節沈線文が施されている。外側に突き出す口縁部下方の隆帯は、上下から交互に刺突され、連続「コ」の字状となっている。19~22は胴部破片であり、ヒダ状の指圧痕が見られる。第82図の1~4・7はヒダ状の指圧痕が見られ、2~5は波状沈線文が施されている。6~7は胴部に断面三角形の隆帯が垂下し、6は隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。8~12は底部破片であり、11は底部に網代痕を有している。

## 第51号住居跡出土土器

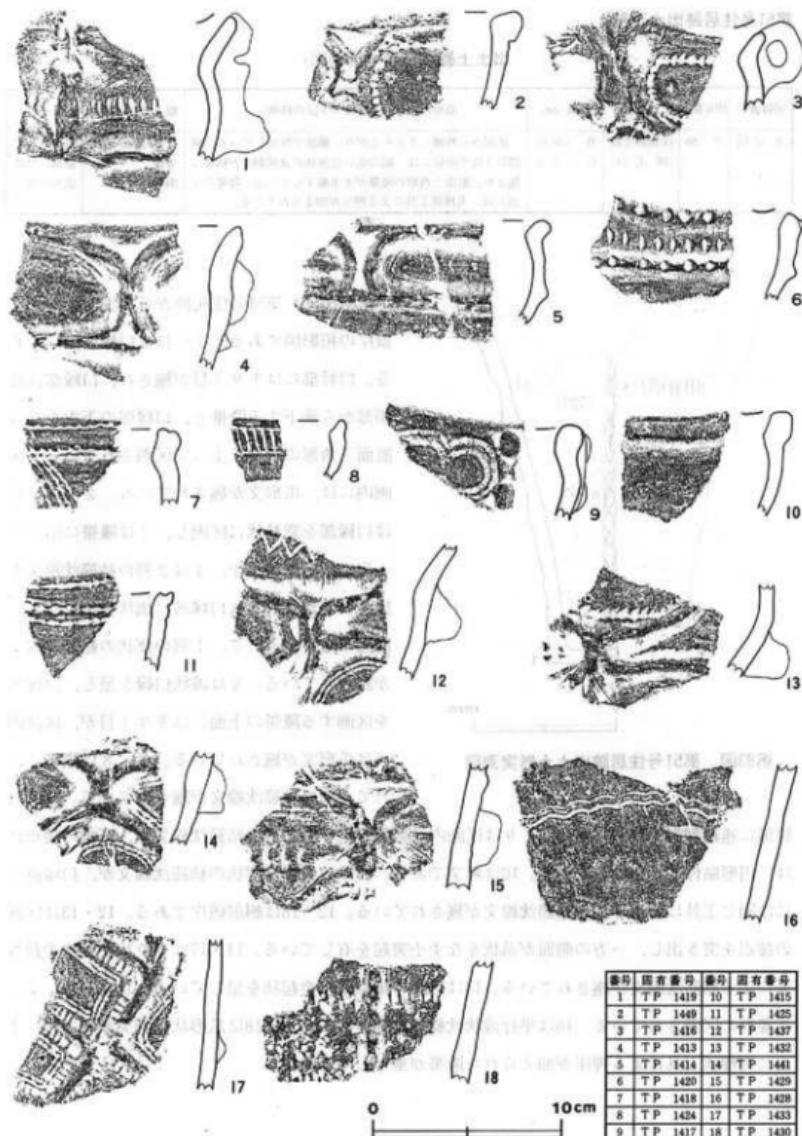
出土土器観察表（第83図）

図版番号	所有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土	焼成	色調	備考
第83図 1	P-86	深鉢形土器 (阿玉台)	B (26.0) C (9.3)	底部から外傾して立ち上がり、頸部で外反している。胴部の上位や中位には、幅の広い爪形状の連続刺突が横位に施され、断面三角形の隆帯が4本垂下している。底帯の上面には、丸棒状工具による押圧が加えられている。	粘土・長石・石英 普通	現存率70%	黒褐色	頸部～底部 50%



第83図 第51号住居跡出土土器実測図

第84図は、第51号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1~11は口縁部破片である。口唇部にはキザミ目が施され、口縁部は波頂部から垂下する隆帯と、口縁部の下方を巡る断面三角形の隆帯によって区画されている。区内には、爪形文が施されている。2・4・5は口縁部を窓棒状に区画し、2は隆帯に沿って1列の結節沈線文が、4は2列の結節沈線文が施されている。3は口縁部に橋状把手を有し、区画の隆帯に沿って、1列の櫻状の結節沈線文が施されている。6は波状口縁を呈し、口縁部を区画する隆帯の上面にはキザミ目が、区内には爪形文が施されている。7・8は隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。7は口唇部に連続刺突が施されている。9は区画内に弧状を呈する2列の結節沈線文が、区画の接点には、円形貼付文が施されている。10は無文である。11は口唇部に櫻状の結節沈線文が、口縁直下には同じ工具による2列の結節沈線文が施されている。12~18は副部破片である。12・13は区画の接点を突き出し、一方の側面が渦状をなす小突起を有している。14・17はヘラ状工具や半截竹管による結節沈線文が施されている。14は区画の接点が小突起状を呈している。17は隆帯によって菱形に区画されている。16は平行波状沈線文が施されている。18は爪形状の刺突が施され、上面に丸棒状工具による押圧が加えられた隆帯が垂下している。



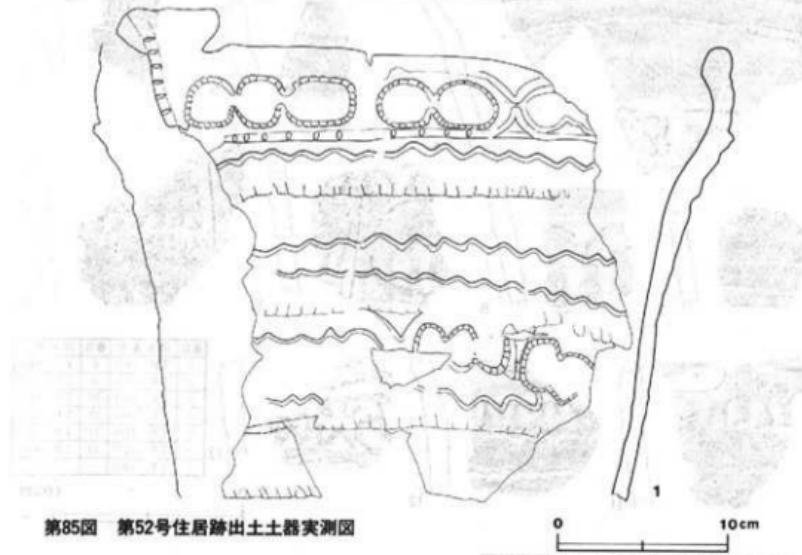
图号	固有番号	图号	固有番号
1	TP 1419	10	TP 1415
2	TP 1449	11	TP 1425
3	TP 1416	12	TP 1437
4	TP 1413	13	TP 1432
5	TP 1414	14	TP 1441
6	TP 1420	15	TP 1429
7	TP 1418	16	TP 1428
8	TP 1424	17	TP 1433
9	TP 1417	18	TP 1430

第84図 第51号住居跡出土土器拓影図

## 第52号住居跡出土土器

出土土器観察表（第85図）

国版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土	焼成色調	備考
第85図	P 92	深鉢形土器 (阿玉台Ⅰb)	A (36.3) B (28.0)	胸部中位からやや外傾して立ち上がり、口縁部は浅く内 側で開き、口唇部で外反している。口縁部の内面に棱を 有している。口縁は平坦で、環状の把手が付けられている。 口縁部文様は、隆帯によって連續的に、横位に横凹区画 され、区画内には、「弓」状の結節沈線を上下対称に連続さ せて、横円文を表出している。口唇部や隆帯の上面には、 キザミ目を施している。頸部や胸部にはヒダ状の指圧痕や 波状洗線文が見られ、「Y」字状の隆脊が施下している。	砂粒・垂母・長石 石英 普通	現存率10% 口縁部～頸 部中位 口縁部20%	



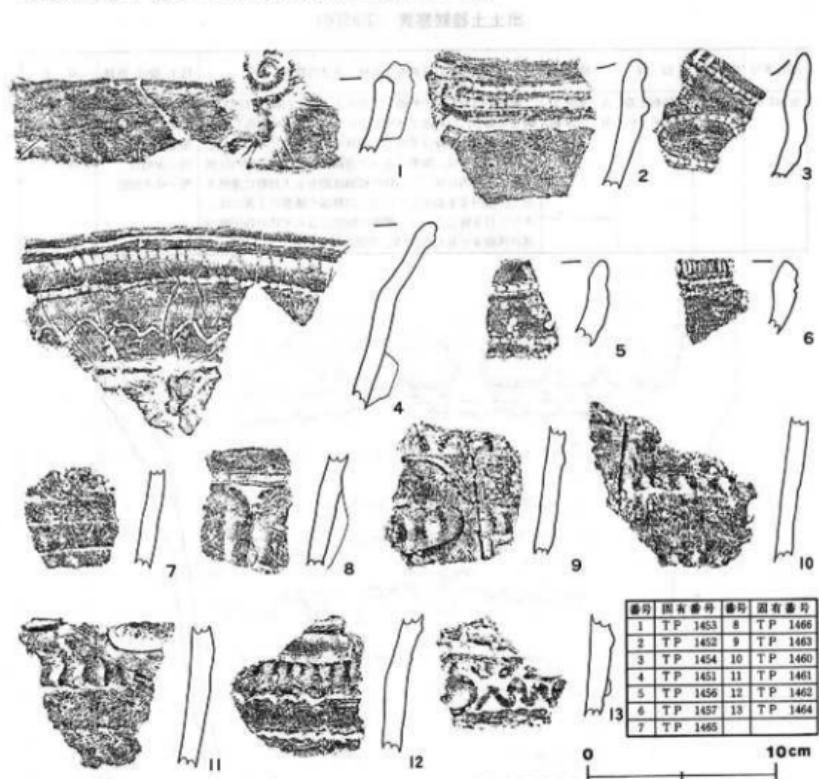
第85図 第52号住居跡出土土器実測図

0 10cm

図版復元図(参考) 第38図

第86図は、第52号住居跡から出土した繩文土器片の拓影図である。1は口唇部から口縁部にかけて、上面が渦巻状となり蛇行しながら垂下する粘土紐が貼付されている。無文で、器面には輪積み痕が見られる。2・3は波状口縁を呈し、口唇部が抉られ双頭状となっている。口縁部には区画の隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。3は口唇部にキザミ目や、結節沈線文が施されている。4は口縁直下や、口縁部を区画する隆帯に沿って1列の結節沈線文が施され、区画内には、1条の結節沈線文や波状沈線文が横位に巡らされている。頸部には、枯土棒を芯とし  
て粘土帶で囲った小突起が貼付されている。6は口唇部にキザミ目が施されている。7～13は胸  
部破片である。7は輪積み痕が良好に残っており、8～13はヒダ状の指圧痕が見られる。8は隆帯

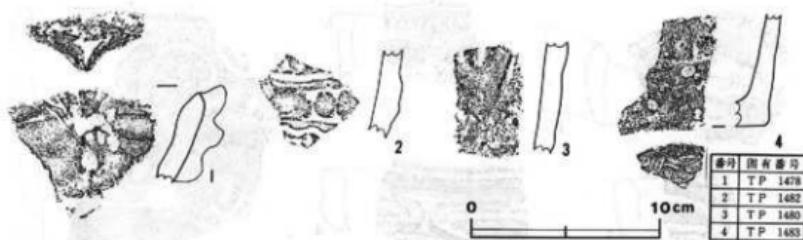
に沿って1列の結節沈線文が施され、「Y」字状の隆帯が垂下している。12は波状沈線文が施され、13は区画内に、蛇行する粘土紐が横位に貼付されている。



第86図 第52号住居跡出土土器拓影図

#### 第53号住居跡出土土器

第87図は、第53号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部破片であり、口縁部に粘土紐を横位に三段に貼付し、小突起を表出している。口唇部は三叉状となり、突起の上面には押圧が加えられている。2・3は胴部破片であり、2は区画の中央部に円形貼付文が見られ、その左右には粘土帯が横位に貼付されている。区画の隆帯の上下には、1列の結節沈線文が波状に施されている。3は隆帯が垂下し、ヒダ状の指圧痕が見られる。4は底部破片であり、底部にはヒダ状の指圧痕が、底部には網代痕が見られる。



第87図 第53号住居跡出土土器拓影図

#### 第54号住居跡出土土器

第88図は、第54号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部に粘土紐を横位に三段に貼付し、小突起を表出している。口唇部は三角形状となり、キザミ目が施されている。口縁部には、円形刺突文が楕円形状に施されている。2～4は口縁部を隆帯によって窓枠状に区画し、口唇部や区画の隆帯に沿って、1列の結節沈線文が施されている。2は区画の隆帯の上面にキザミ目が施されている。5は口唇部の上面や側面にキザミ目が施されている。7は口縁直下に1列の結節沈線文が、口縁部には弧状に結節沈線文が施され、輪積み痕に沿ってヒダ状の指圧痕が見られる。8～10はヒダ状の指圧痕が見られる胴部破片である。8は区画の隆帯に沿って1列の結節沈線文が施され、9・10は蛇行して垂下する断面三角形の隆帯が貼付されている。

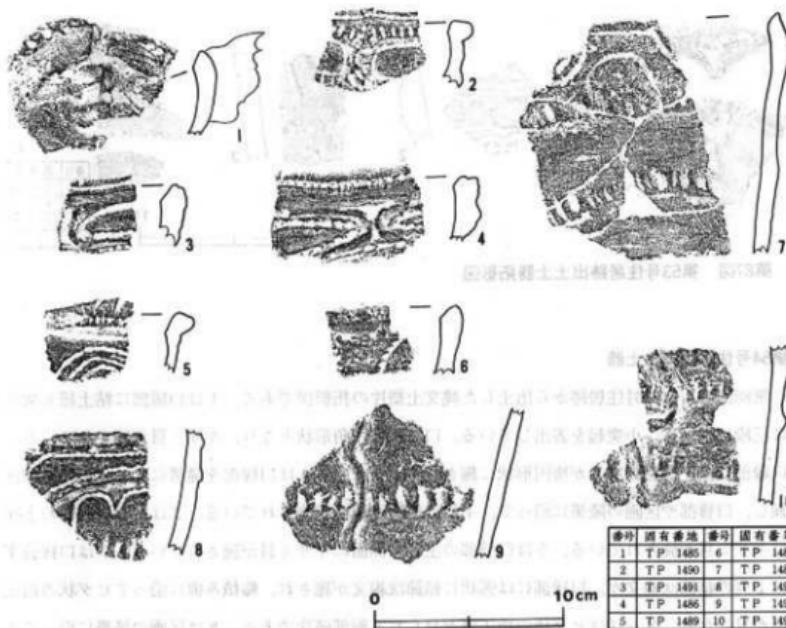
#### 第55号住居跡出土土器

第89図は、第55号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部破片であり、口縁部を隆帯によって窓枠状に区画し、1列の結節沈線文が施されている。2・3は胴部破片であり、3は蛇行しながら垂下する隆帯に沿って、1列の結節沈線文が施されている。

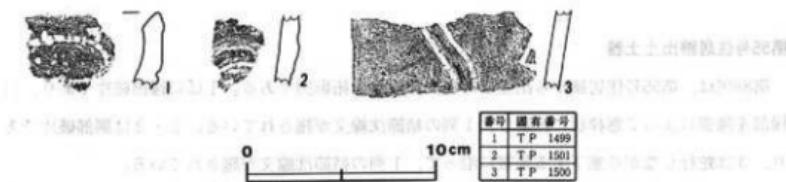
図書収蔵室 土器収集部 第55号

#### 第56号住居跡出土土器

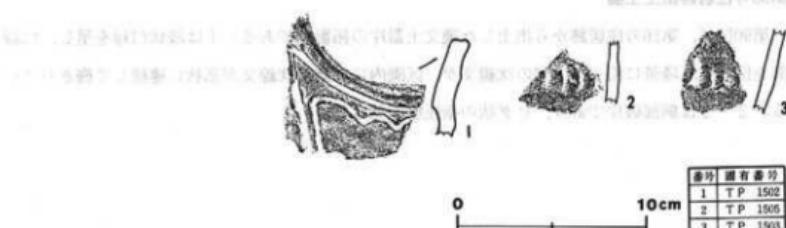
第90図は、第56号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は波状口縁を呈し、口縁部を区画する隆帯に沿って1列の沈線文が、区画内には結節沈線文が弧状に連続して施されている。2・3は胴部破片であり、ヒダ状の指圧痕が見られる。



第88図 第54号住居跡出土土器拓影図



第89図 第55号住居跡出土土器拓影図



第90図 第56号住居跡出土土器拓影図

### 第57号住居跡出土土器

第91図は、第57号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部破片であり、口縁部を区画する隆帯に沿って、1列の結節沈線文が施されている。2は粘土紐を二段に貼付して表出した小突起を連結させ、2つの小突起を連結する粘土紐の上面にはキザミ目が施されている。突起の上面は三叉状となっている。3は区画の隆帯に沿って1列の結節沈線文が施され、区画間には断面カマボコ状を呈する「へ」状の隆帯が貼付されている。「へ」状の隆帯の上面には、キザミ目や結節沈線文が施されている。4・5はヒダ状の指圧痕が見られ、5は断面三角形の隆帯が垂下している。

### 第58号住居跡出土土器

第92図は、第58号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は波状口縁を呈し、口唇部にキザミ目が、口縁部には1列の結節沈線文が施されている。2～4は胴部破片であり、2は隆帯に沿って波状沈線文が施されている。3・4はヒダ状の指圧痕が見られる。3には波状沈線文が施され、4には断面三角形の隆帯が垂下している。

### 第59号住居跡出土土器

出土土器觀察表（第93図）

図版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様（手法の特徴）	胎土 燃成 色調	備考
第93図	P-128	注口付深鉢形土器 (細縫利E型)	A (12.6) B (6.7)	口縁は繊やかな波状を呈している。口縁部と胴部とを区画する隆線に接して、やや上方に反る注口を取り付けている。口縁部は無文であり、胴部には注口を取り付けた後で、単節LRの継位の回転縄文を施している。	砂粒・スコリア 普通 内一において黄褐色 外一褐灰色	現存率5% 口縁部～胴部上位 口縁部10% F7付近覆土 中から、同 器種のP168 出土。本器 に伴うもの と考えられ る。

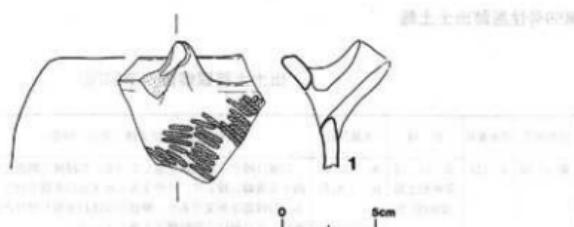
第94図は、第59号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は波状口縁を呈し、1は口縁部に巡らされた隆線によって、口縁部無文帶と胴部文様帶とを区画している。胴部は弧状の隆線によって無文帶と縄文施文帶とに区画され、地文には単節RLの継位回転縄文が施されている。口縁部を巡る隆線と胴部を区画する隆線との接点は隆起し、突起状となっている。2は隆線によって、口縁部と胴部とを区画している。口縁部は無文で、胴部には単節LRの継位回転縄文が施されている。



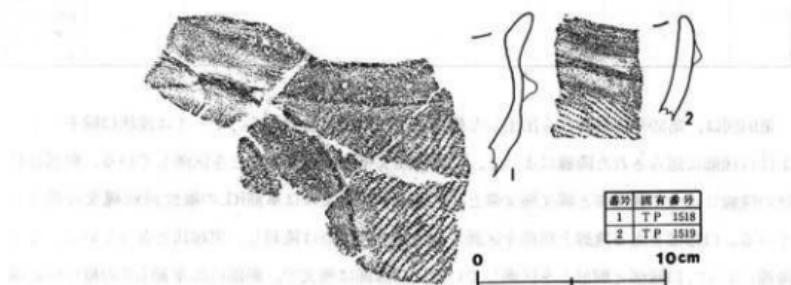
第91圖 第57號住居跡出土土器拓影圖



第92圖 第58號住居跡出土土器拓影圖



第93圖 第59號住居跡出土土器實測圖

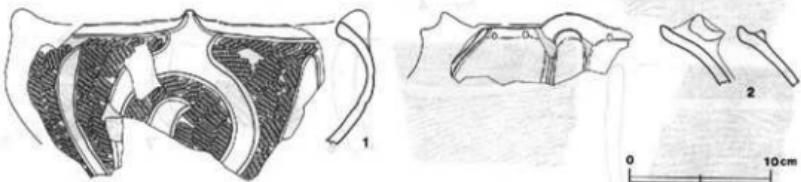


第94圖 第59號住居跡出土土器拓影圖

第60号住居跡出土土器

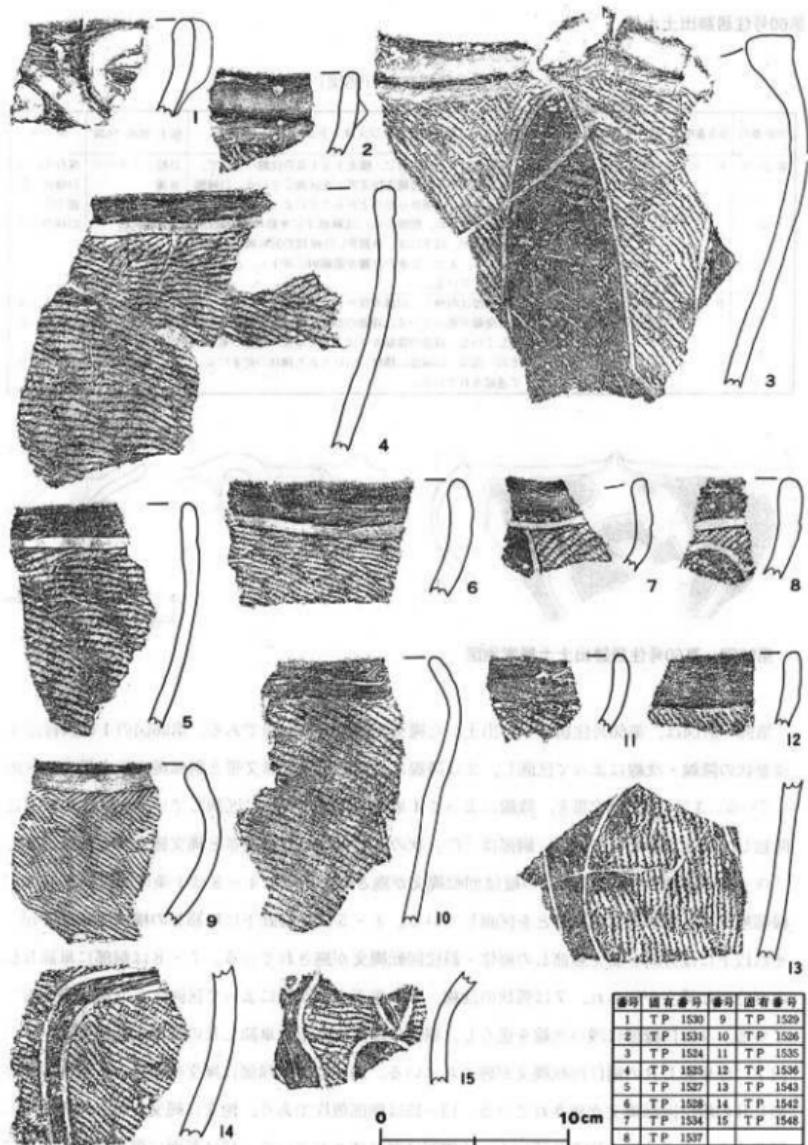
出土土器観察表 (95図)

図版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土	焼成	色調	備考
第 95 図 1	P 95	深鉢形土器 (加賀利E面)	A 23.9 B ( 9.5)	口縁部は大きく内脇し、横走する1条の沈線によって、口縁部無文帯と胴部繩文施文帯とを区画している。口縁部には、隆線が両側からせり上ることによって表出された小突起が見られ、胴部には、単節RLの継位の回転繩文が施されている。また、2本の沈線が曲線的に垂下し、沈線間を磨り消している。	砂粒・スコリア	普通	内一に赤褐色 外一灰褐色	現存率20% 口縁部一側 部上位 口縁部25%
	P 93	有孔脚付土器 (加賀利E面)	A (12.8) B ( 4.4)	口縁部は内脇し、口縁が緩やかな液状を呈している。肩部に隆線が走っている。隆線の部分には、上下に小孔が貫通している。肩部の隆線からは2本1単位の隆線が垂下し、その一部は、口縁部に横位に付けられた構造の把手によって連結されている。	砂粒・スコリア	普通	内一灰褐色 外一赤褐色	現存率5% 口縁部一側 部上位 口縁部20%

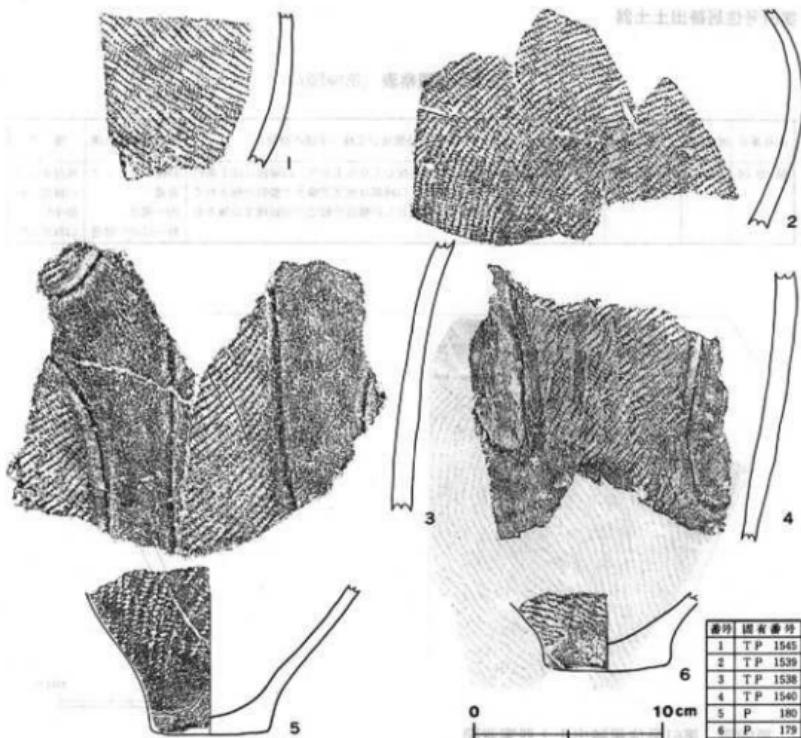


第95図 第60号住居跡出土土器実測図

第96・97図は、第60号住居跡から出土した繩文土器片の拓影図である。第96図の1は口縁部を渦巻状の隆線・沈線によって区画し、2は隆線によって口縁部無文帯と胴部繩文施文帯とを区画している。3は口縁部無文帯を、隆線によって4単位の長楕円形状に区画している。区画の接点は隆起し、突起状となっている。胴部は「匂」状の沈線によって無文帯と繩文施文帯とに区画され、「匂」状の区画外には単節LRの継位回転繩文が施されている。4～8は1条の沈線によって口縁部無文帯と胴部繩文施文帯とを区画している。4・5は沈線直下に無節Lの横位回転繩文が、それ以下には方向を変え無節Lの継位・斜位回転繩文が施されている。7・8は胴部に単節RLの継位回転繩文が施され、7は弧状の沈線、8は垂下する沈線によって区画された磨消帯を有している。9は口縁部に浅い沈線を巡らし、胴部には沈線直下に単節LRの横位回転繩文が、それ以下には単節LRの継位回転繩文が施されている。10～12は口縁部に無文帯をもち、胴部には単節LRの継位回転繩文が施されている。13～15は胴部破片であり、地文に繩文を施し、その上に屈曲する二本の沈線が施されている。沈線間は磨り消されている。15は器面に煤が付着している。



第96図 第60号住居跡出土土器拓影図（1）



第97図 第60号住居跡出土土器拓影図(2)

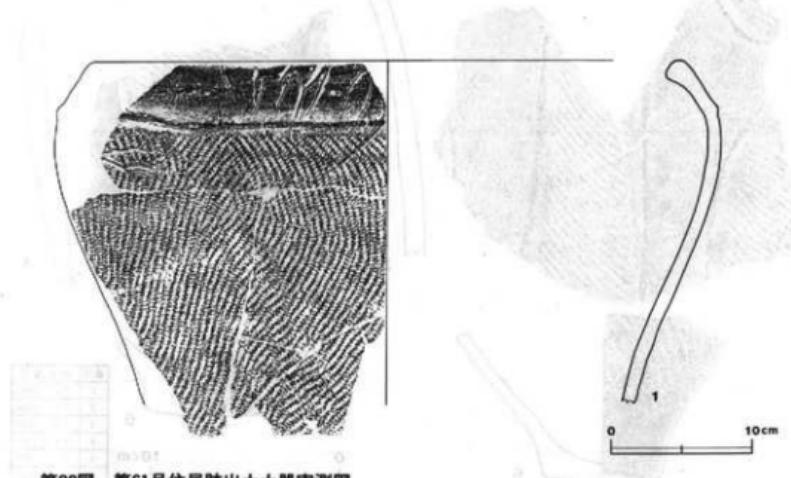
第97図の1は単節RLの横位回転繩文が、2は単節RLの縦位回転繩文が施され、2には全面に煤が付着している。3は弧状の、4は「U」字状の隆線によって、無文帯と繩文施文帯とに区画されている。5・6は単節RLの縦位回転繩文が施されている。5・6は深鉢形土器の底部破片である。



第61号住居跡出土土器

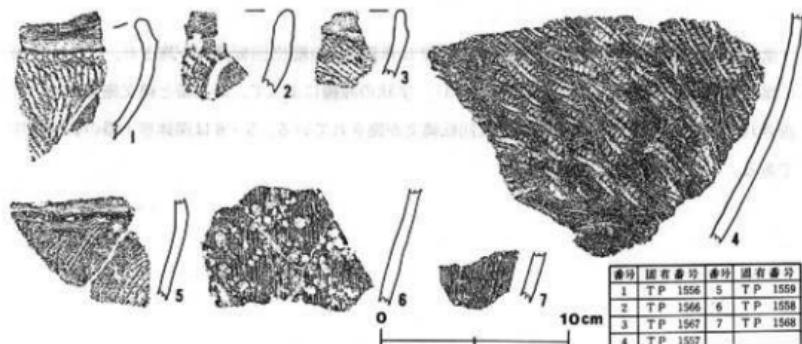
出土土器観察表（第98図）

図版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	粘土 烧成 色調	備考
第98図 1	P.181	深鉢形土器 (加曾利E型)	A 41.7 B (24.2)	胴部中位からやや外反して立ち上がり、口縁部には1条の 隆線が走っている。口縁部は無文で横ナギ整形が施されて おり、胴部には单脚R.L.の横位や縱位の回転繩文が施され ている。	砂粒・スコリア 普通 内一開色 外一によい橙色	焼成率20% 口縁部～胴 部中位 口縁部20%



第98図 第61号住居跡出土土器実測図

(1) 古墳出土土器実測図



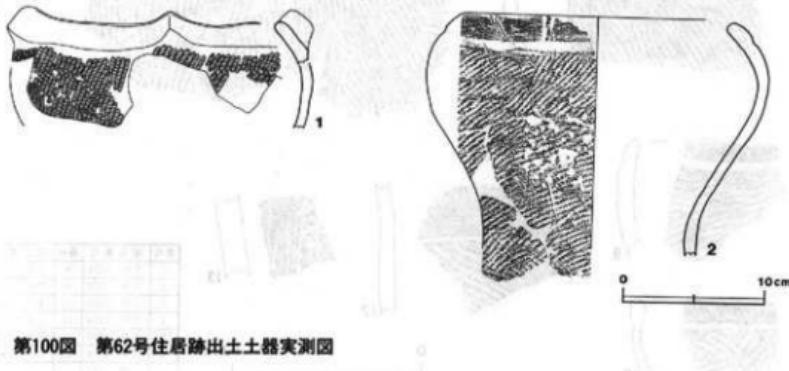
第99図 第61号住居跡出土土器拓影図

第99図は、第61号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～3は口縁部破片であり、1は波状口縁を呈し、口縁部無文帯と胴部文様帯とを隆線によって区画している。隆線の直下には、円形刺突文が施されている。胴部には無節Lの継位回転繩文が施され、弧状の沈線によって区画された無文帯が見られる。2は口縁部に爪形状の刺突を施す無文帯を有している。胴部には単節RLの横位回転繩文を施し、沈線によって区画された無文帯を有している。3は口縁部を沈線によって区画し、胴部には無節Lの継位回転繩文が施されている。4～7は胴部破片である。4は胴部に、太さの異なる単節RLの繩を2本然り合せた異条繩文が継位に施されている。5～7は条線文が施されている。

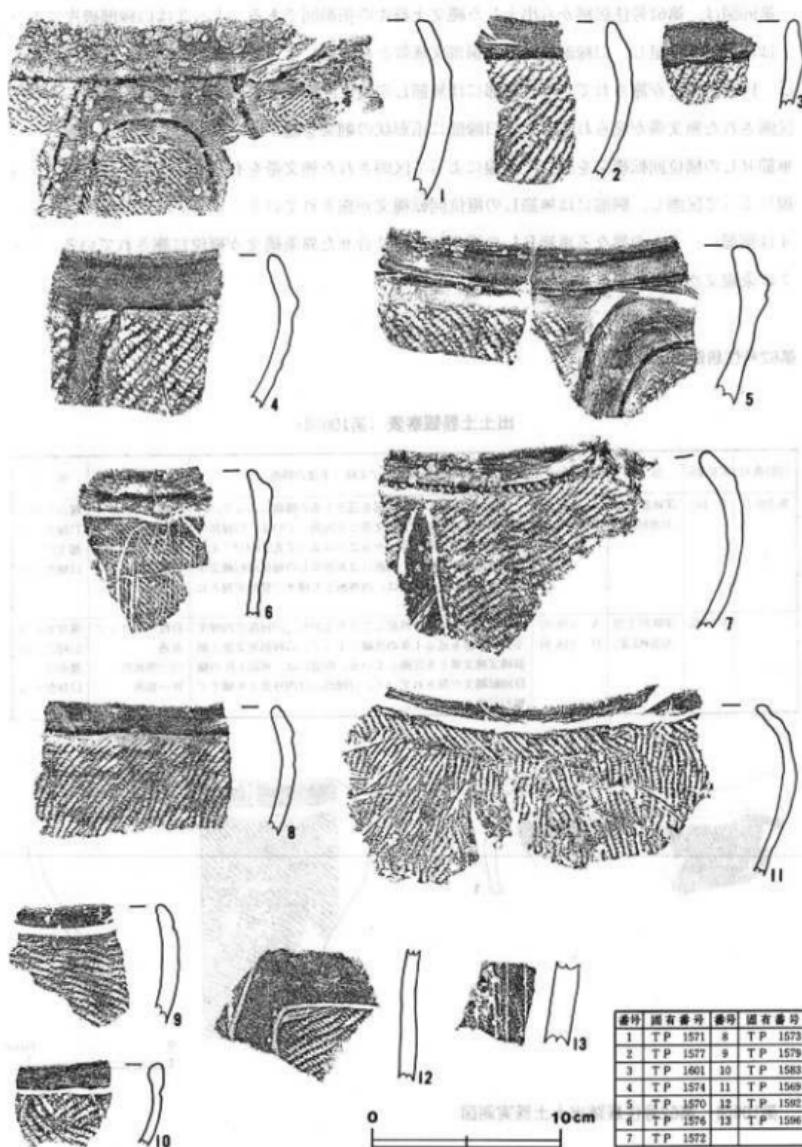
#### 第62号住居跡出土土器

出土土器観察表（第100図）

図版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様（手法の特徴）	胎土	焼成	色調	備考
第100図 1	P 105 (加曾利EⅡ)	深鉢形土器	A 17.0 B 8.5	口縁部は内厚し、口縁部を巡る1条の隆線によって、口縁部無文帯と胴部純文様文帯とを区画している。口縁部には隆線が両側からせり上がるによって突出された。4単位の小突起が見られ、胴部には単節RLの継位回転繩文が施されている。口縁部は、内外面とも横ナメ整形が施されている。	砂粒・スコリア 普通	現存率10% 口縁部～胴部上位	黒褐色・にほい 橙色	口縁部60%
2	P 182 (加曾利EⅢ)	深鉢形土器	A (19.0) B (16.3)	胴部上位からやや外反して立ち上がり、口縁部で内厚する。口縁部を巡る1条の沈線によって、口縁部無文帯と胴部純文様文帯とを区画している。胴部には、単節LRの横位回転繩文が施されている。口縁部には内外面とも横ナメ整形が施されている。	砂粒・スコリア 普通	現存率40% 口縁部～胴部中位	内一黒褐色 外一褐色	口縁部30%



第100図 第62号住居跡出土土器実測図



第101図 第62号住居跡出土土器拓影図

第101図は、第62号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～8は口縁部無文帯と胴部文様帯とを隆線によって、9～11は沈線によって区画している。1・4・5は胴部を弧状の隆線によって無文帯と縄文施文帯とに区画している。1・5は単節LRの縦位回転繩文が、4は単節RLの縦位回転繩文が施されている。6は隆線の直下に1条の沈線を巡らし、胴部には、無節Lの縦位回転繩文を施した後で、弧状の沈線や縦位の条線文が施されている。7は波状口縁を呈し、口縁部の区画の接点が小突起状となっている。胴部には単節RLの縦位回転繩文を施し、2本の沈線によって区画された磨消帯が垂下している。8は胴部に単節RLの縦位回転繩文が、9は口縁部を巡る沈線下に単節RLの横位回転繩文が、以下には単節RLの縦位回転繩文が施されている。10は単節RLの縦位回転繩文が、11は単節LRの繩文が多方向から施されている。12・13は胴部破片であり、12は沈線によって無文帯と縄文施文帯とを区画し、区内には単節RLの縦位回転繩文が施されている。13は条線文が施されている。

#### 第64号住居跡出土土器

第102図は、第64号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～3は口縁部破片であり1は口縁を巡る隆帯に沿って、太さの異なる2列の結節沈線文が施されている。2は口縁直下を巡る隆帯に接続して、「Y」字状の隆帯が垂下している。3は口縁直下を巡る隆帯に沿って、1列の結節沈線文が施されている。4は胴部に断面三角形の隆帯を垂下させ、隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。隆帯の上面には、丸棒状工具による押圧が加えられている。



第102図 第64号住居跡出土土器拓影図

## 第65号住居跡出土土器

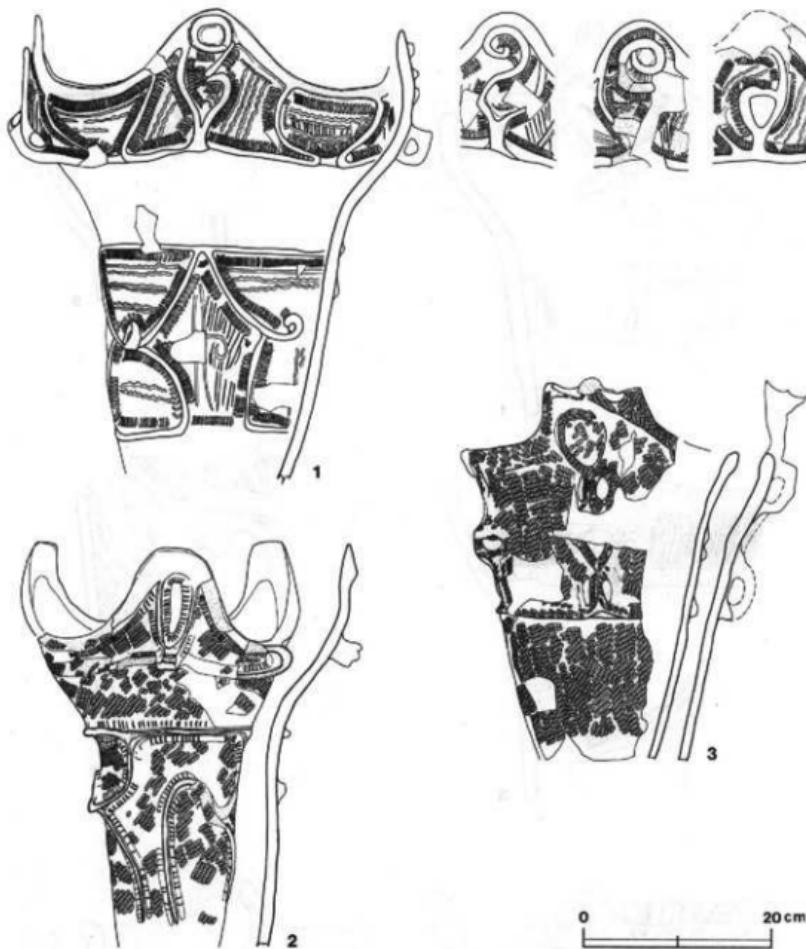
出土土器観察表（第103・104・105・106[2]）

出典番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土	焼成	色調	備考
第103回	P-114	深鉢形土器 (阿玉台Ⅱ)	A (38.5)	4単位の波状口縁を呈している。口縁部は、隆唇によつて三角形や半円形、椅円形に構成され、隆唇に沿つて側面の結節状縞文が施されている。区画内には、沈線文や波状沈線文、条線文が施している。把手上部からは、円や扇形状の文様を描きながら隆唇が曲線的に進下し、口縁部の下方を巡る隆唇と連結して、4単位の楕状把手を表出している。胴部には無文帯を有している。胴部には、上下に2本の隆唇を巡らし、上部の隆唇に接して、中間部が溝状の小突起となる「U」状の隆唇が4単位貼付されている。「U」状の隆唇に接して、隆唇が「ハ」の字状に垂下し、胴下部の隆唇と連結している。隆唇に沿って幅の狭い爪形状の結節状縞文が施され、区画内には沈線文、波状沈線文、条線文が施されている。	砂粒・スコリア 良好 暗赤褐色	現存率90%	口縁部～胴部下位 口縁部100%	
			B (49.0)					
2	P-112	深鉢形土器 (阿玉台Ⅱ)	A (32.8)	胴部下位からやや外傾して立ち上がり、頸部で外反し、口縁部で浅く内脣して開いている。口縁は波状を呈し、3単位の楕状把手を有している。口縁部文様帶は、側の広い隆唇と断面三角形の隆唇を上下に巡らし、把手上部にせり上がる幅の狭い三角形状に区画されている。区画の接点はつまみ出され小突起となっている。把手には「U」字状の隆唇が貼付され、その下には粘土紐を構造に一段に貼付し、突起を表出している。区画の隆唇を沿って、1列の爪形状の結節状縞文を施している。胴部には、頭部を巡る隆唇に接する曲線的な隆唇が貼付され、隆唇に沿って爪形状の結節状縞文が施されている。地文には單節Rしの窓型の網目模様を施している。	砂粒・長石 普通 黒褐色	現存率90%	口縁部～胴部下位 口縁部90%	
			B (43.2)					
3	P-113	深鉢形土器 (阿玉台Ⅱ)	A (29.0)	波状口縁を呈し、口縁には円孔の穿れた板状の把手や、内面に円形のくぼみを有する板状の把手、蛇行する隆唇を貼付した小型把手を有している。口縁部には幅の広い隆唇を巡らし、全面に縞文を施している。把手部からは腹位方向に、隆唇によって表された円形文や菱形文に連続する2つの楕状把手が付けられており、胴部を巡る隆唇と接続している。把手間のU字部からは、「Y」字状の隆唇が複雑に屈曲しながら垂下し、胴部を巡る断面三角形の隆唇と接続している。器蓋には、全面に单節Rしの楕文が施されており、隆唇の上部にも縞文が施されている。胴部内面には煤が付着している。	砂粒・長石 良好 内一にない真椎 色 外一灰褐色	現存率45%	口縁部～胴部下位 口縁部60%	
			B (40.8)					
1	P-107	深鉢形土器 (阿玉台Ⅱ)	A 25.4	U字縁部は浅く内脣して開いて、円筒形の胴部に接続している。口縁には2単位の楕状把手を有している。把手の側面はくぼみでいる。口縁部文様帶は、貼付隆唇によって椅円形、半円形に区画され、把手下部の区画の接点を突出し、小突起を表出している。区画内には波状沈線文も見られる。胴部には隆唇を曲線的に貼付し、爪形状の連続軌跡文を施している。隆唇間に、横位の波状沈線文を施している。	砂粒・長石・ガラス 普通 にない褐色	現存率80%	口縁部～胴部下位 口縁部90%	
			B (22.6)					
2	P-100	深鉢形土器 (阿玉台Ⅱ)	C (13.0)					
			A (26.5)	平底で、胴部上位からほぼ垂直に立ち上がり、口縁部で浅く内脣して開いている。口縁部の内面に棱を有している。口縁部からは、腹面がカマゴ状を呈する「Y」字状の貼付隆唇が2本垂下している。口縁底天下「Y」字状の貼付隆唇に沿って1列または2列の結節状縞文が施されている。その一部は、区画の中胴部で継続となり、胴部に向かって垂下している。口縁部の内面には横ナギ彫形が施されている。	砂粒・スコリア 良好 内一暗褐色 外一暗褐色	現存率30%	口縁部～胴部上位 口縁部40%	
			B (15.7)					

第104回 3	P 108	深鉢形土器 (阿玉台Ⅲ)	A (24.3)	口縁部はやや内側して開き、円筒形の胴部に接続している。口縁部には幅の広い貼付隆帯を巡らし、口縁部文様帶は、貼付隆帯によって横位の楕円形に区画されている。区画の隆帯に沿って刺先状工具による1列の結節沈線文が施され、その内側には縦位の柔軟文が施されている。区画下方の隆帯上には、丸棒状工具による押圧が加えられ、臘鍼状把手が付けられている。把手上面にはキザミ目が施されている。胴部には、断面カマボコ状の隆帯が斜面的に貼付され、隆帯に沿って刺先状の結節沈線文が施されている。	砂粒・スコリア 普通 内一に赤褐色 外一に赤褐色	現存率70% 口縁部～胴部下位 口縁部80%
			B (31.6)			
4	P 99	深鉢形土器 (阿玉台Ⅲ)	B (20.1)	胴部には、断面カマボコ状を呈する隆帯が扇形状に3本張り下し、垂下する隆帯の中間部には、浅底の小突起が表されている。突起の側面はくぼんでおり、隆帯に沿って結節沈線文が施されている。隆帯前面には、縦位や斜位方向に粘付次沈線、柔軟、沈線、液状沈線文等がまばらに施されている。胴部上位には、横位の液状沈線文が見られる。内面に煤が付着している。	砂粒・長石 良好 内一に赤褐色 外一赤褐色	現存率50% 胴部破片
			C 13.6			
5	P 98	深鉢形土器 (阿玉台Ⅲ)	B (17.6)	底部から外傾して立ち上がる。胴下部には、断面三角形の隆帯を上下に2本巡らせ、その間を、断面カマボコ状の貼付隆帯によって、4単位に構成して横円区画している。破片の上部には、縦位の柔軟文が見られる。内面に煤が付着している。	砂粒・長石 普通 内一黒褐色 外一に赤褐色	現存率30% 口縁部～底部 口縁部50% 底面 100%
			C 13.6			
6	P 111	深鉢形土器 (阿玉台Ⅲ)	A 20.2	口縫には2単位の山形把手を有し、口縁部は浅く内傾して開いている。把手は中ほどに握持を持ち、外側に円形状の隆帯が貼付されている。隆帯の内側に沿って、1列の結節沈線文が施されている。把手の内面は円形状に抉られてくぼんでおり、くぼみの外縫に沿って、1列の結節沈線文が施されている。もう一方の把手は破損しているが、把手下部には、隆帯によって縦位に長方形の連續区画がなされている。区画内には、隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。口縁部の上端には貼付隆帯が巡り、口唇部は把手となっている。口縁部から胴部には、無跡Lの縦位の回転構文が施されている。	砂粒 普通 内一に赤褐色 外一暗赤褐色	現存率50% 口縁部～胴部中位 口縁部80%
			B 12.0			
1	P 103	深鉢形土器 (阿玉台Ⅲ)	A (22.5)	平底な底部から胴部上位にかけて、わずかに外傾しながら立ち上がり、頭部から口縁部にかけて、大きいくぼみの字状に内傾し、口唇部で直立している。頭部に巡らされた2本の隆帯によって、口縁部と頭部、胴部とを区画する。口縁部には、地間に無跡Lの横位や横位の回転構文を施し、その上に横位に「S」字状、逆「S」字状の隆帯を4か所に貼付している。頭部に無文帶を有し、頭部に巡らされた2本の隆帯の上面には、柔軟文が施されている。胴部は、頭部から垂下する隆帯によって縦位に3単位に区画されている。区画内には、隆帯によって渦巻状の文様が表されている。渦巻状の隆帯と区画の隆帯との間は、續走する3本の沈線によって連結されており、区画内の隙間にには、縦位の柔軟文が施されている。胴部の下位には、横ナナ形が施されている。	砂粒・スコリア 良好 暗褐色	現存率90% 胴下部分の一部が欠損
			B 28.0			
2	P 109	深鉢形土器 (阿玉台Ⅲ)	A (29.9)	胴部下位からやや外傾して立ち上がり、頭部で大きく外反し、口縫前で直立している。口縁部には、幅の広い断面カマボコ状の隆帯と、断面三角形の隆帯を上下に巡らし、幅の狭い口縁部文様帶を区画している。上下の隆帯に接して、5単位の「S」字状の隆帯を横位に貼付している。「S」字状の隆帯の上面にはキザミ目が施されている。隆帯に沿って爪棒状の結節沈線文が施されている。頭部には細い無跡Lの横位の回転構文を施している。胴部には、無跡Lの縦位の回転構文が施されている。内面には、ヘラ状工具により、粗なナナ形が施されている。	砂粒・長石・石英 普通 赤褐色	現存率90% 口縁部～胴部下位 口縁部90%
			B (26.4)			
	P 94	深鉢形土器 (阿玉台)	C (15.3)			
			A (26.6)	胴部下位から直線的に立ち上がり、胴上部から頭部にかけてやや外傾し、口縫部で直立している。口縫部には幅の広い貼付隆帯を巡らし、口縫部を有段位に成形している。		
	P 94	深鉢形土器 (阿玉台)	B (29.1)			

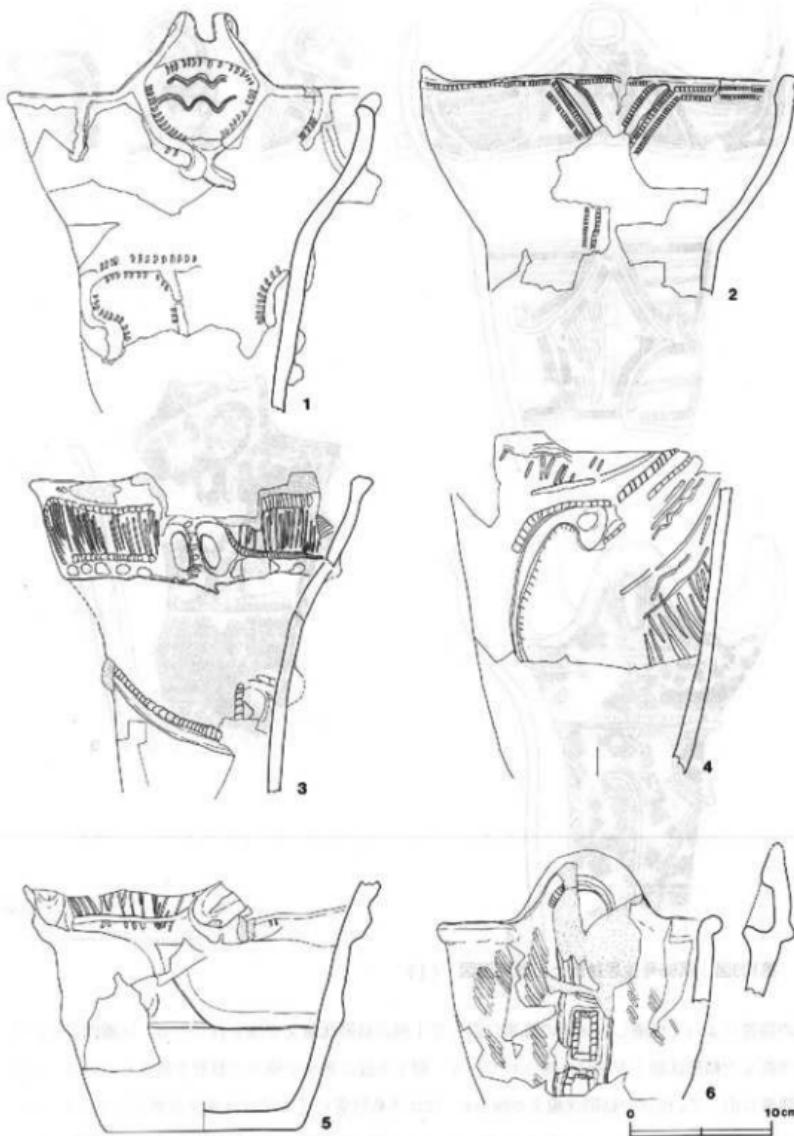
3				口縁部を巡る隆帯には、さらに「V」字状の隆帯を4単位貼付している。胴部は無文である。口縁部には、内外面とも横ナデ整形が施されている。胴部の内面には縫合付着している。	内一によい赤褐色 外一暗赤褐色	口縁部60%
4	P 184	深鉢形土器 (阿玉台Ⅱ)	A (27.2) B (14.7)	口縁部は浅く内側して開き、円筒形の胴部に接続している。口縁部の上端には隆帯が追加され、口縁部は無文で有段状となっている。口縁部は外反し、口縁部の内面に縫合付着している。表面は粗く横ナデ整形され、その上に結糸跡の手法による間隔の細い回転繩文を施している。	砂粒・長石 普通 内一暗褐色 外一黒褐色	現存率20% 口縁部～胴部上位 口縁部25%
5	P 185	深鉢形土器 (阿玉台)	A (29.4) B (8.2)	口縁部は内寄り、口唇部は大きく外反している。無文で、内外面とも横ナデ整形が施されている。	砂粒・雲母 普通 内一褐色 外一暗褐色	現存率5% 口縁部破片 口縁部5%
第106回	P 115	浅鉢形土器 (阿玉台)	A 49.2 B (17.8) C (14.2)	胴部下位から口縁部にかけて、浅く内側して大きく外側に開き、口縁部で外反している。口縁部内面に縫合付着している。口縁部の上端には、一対の縫合孔が穿たれている。内外面とも丁寧な横ナデ整形が施されている。無文である。	砂粒・長石・雲母 良好 内一灰褐色 外一によい褐色	現存率95% 口縁部～底部 口縁部30% 表衣80%
1	P 104	浅鉢形土器 (阿玉台)	A (36.0) B (10.6)	胴部下位から口縁部にかけて、やや内側して立ち上がり、口縁部でやや内側し、口縁部で大きく外反している。平縁で、口縁部の内面に縫合付着している。無文の土器で、内外面とも横ナデ整形が施されている。	砂粒・雲母・長石 良好 内一黃褐色 外一褐色	現存率30% 口縁部～胴部 口縁部下位 口縁部40%
2	P 186	浅鉢形土器 (阿玉台)	A 37.4 B 12.9	胴部下位から胴部上位にかけてやや外反して開き、口縁部で浅く内側して開いている。口縁部は厚手で、口縁部の内面に縫合付着している。内外面ともヘラ状工具により丁寧な横ナデ整形が施されている。	砂粒・長石・雲母 良好 内一によい褐色 外一によい褐色	現存率10% 口縁部～胴部下位 口縁部20%
3						

第107図は、第65号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は波状口縁を呈し、口縁直下に巡らされた幅の広い隆帯に沿って1列の結節沈線文が、口縁部には波状沈線文が施されている。2は口縁部に1条の深い結節沈線文が巡らされ、胴部には綫ナデ整形が施されている。3は口縁部に、幅の広い「ハ」字状の隆帯を4単位連結して貼付し、隆帯に沿って、半截竹管による2列の結節沈線文が施されている。胴部は2列の結節沈線文によって、縫位に長方形状に区画されている。4は口縁部を隆帯によって区画し、区内には渦巻状の結節沈線文や「C」字状の半截竹管による連続刺突が施されている。5は口縁直下に幅の広い無文帶を有し、口縁部には、上面にキザミ目が施された断面カマボコ状の隆帯が、渦状に貼付されている。隆帯に沿って沈線が施されている。6は口縁直下に隆帯を巡らし、口縁部を沈線によって区画している。口縁部には半截竹管による2列の沈線文が、弧状に連続して施されている。7は口縁直下に幅の広い隆帯を巡らし、口縁部にはそれと連結する「V」字状の隆帯が貼付されている。隆帯の上面には、縄文が充填されている。8は全面に単節RLの回転繩文が多方向から施されている。9は口縁部を隆帯によって区画し、隆帯の上面や口縁部には、単節RLの回転繩文が多方向から施されている。頸部は無文で横ナデ整形が施されている。10～13は胴部破片であり、10は胴部を断面カマボコ状

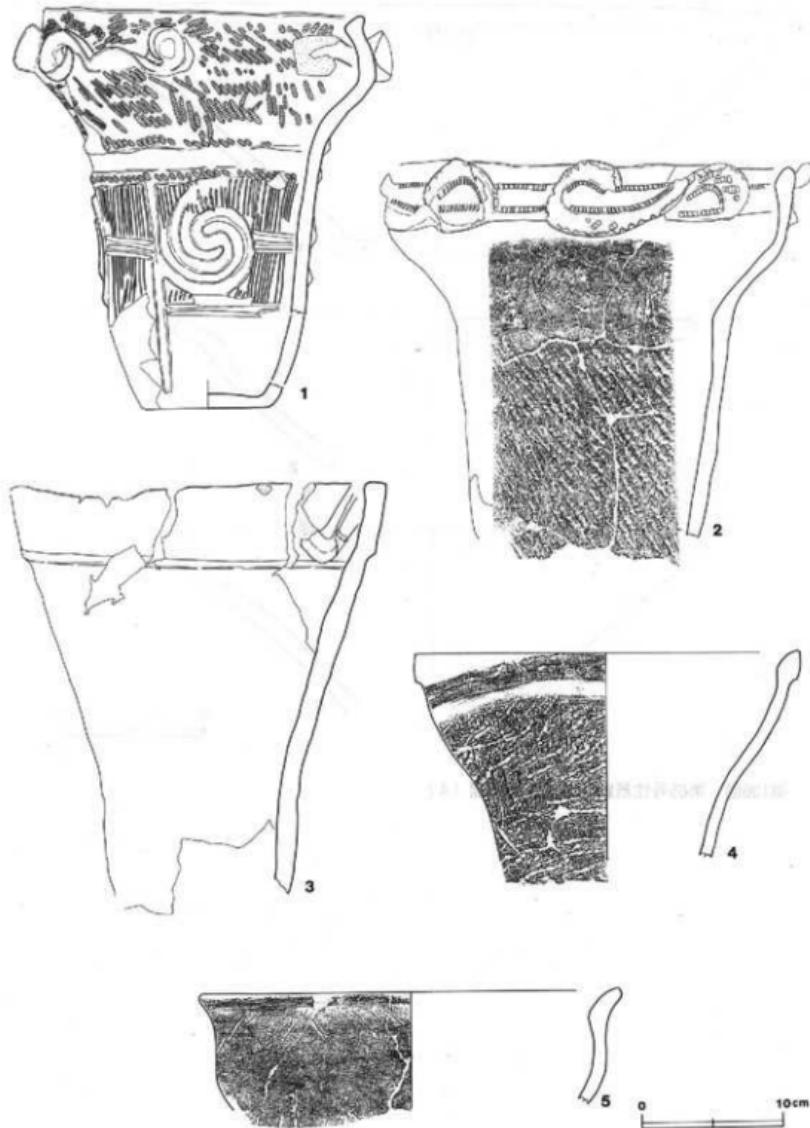


第103図 第65号住居跡出土土器実測図（1）

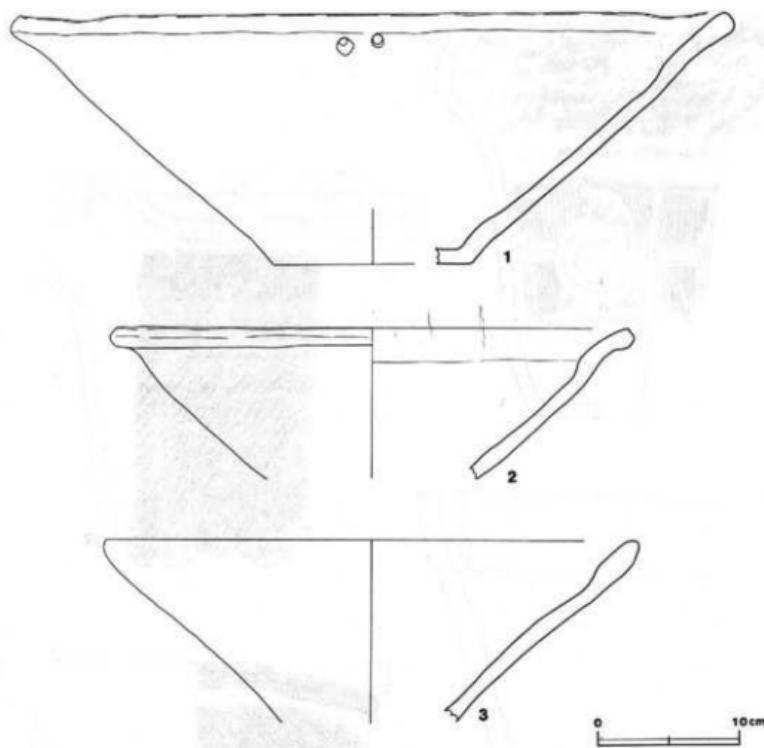
の隆帯によって区画し、区画の隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。区画内には波状沈線文や結節沈線文が横位に施されている。胴下半部は無文で横ナデ整形が施されている。11は隆帯に沿って、楔状の結節沈線文が施され、12は半截竹管による平行沈線文が垂下している。13には三叉文や「凶」状のマークが施されている。14は浅鉢形土器、15は深鉢形土器の底部破片である。



第104図 第65号住居跡出土土器実測図（2）

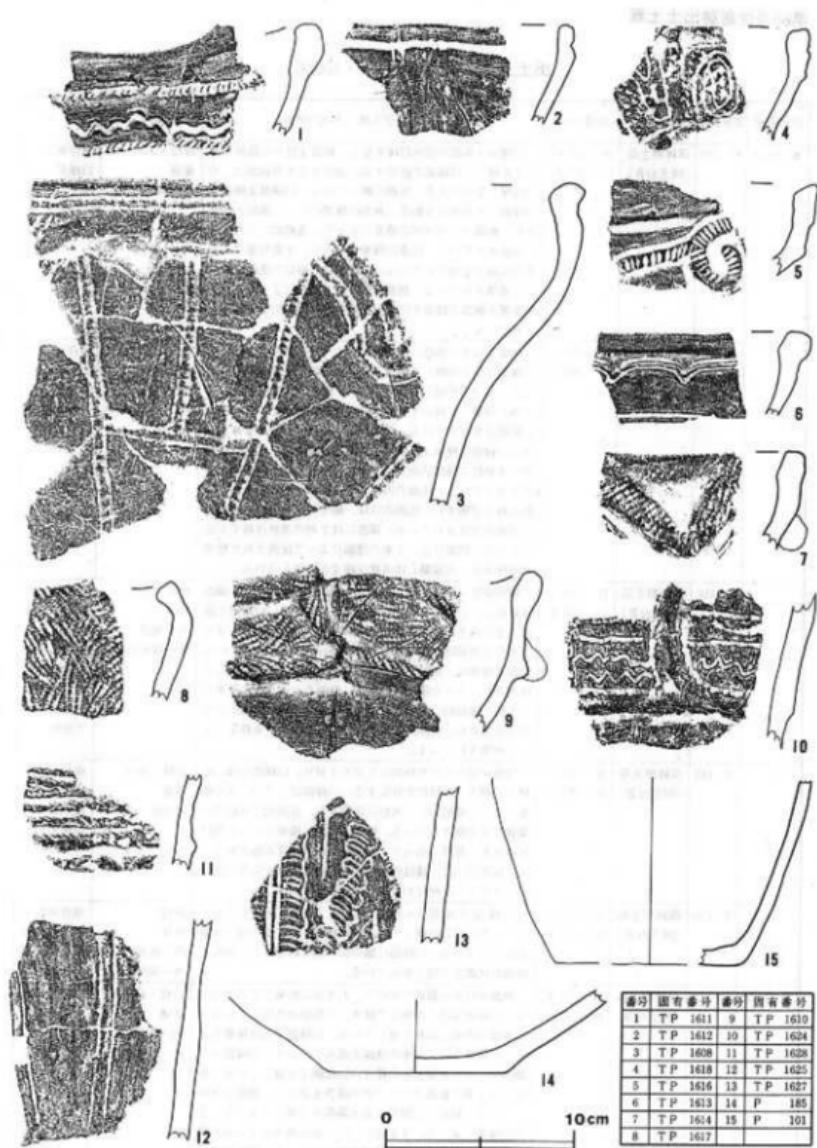


第105図 第65号住居跡出土土器実測図 (3)



第106図 第65号住居跡出土土器実測図 (4)

1 30号发掘土山壁旁の井戸底 1切引面



图号	固有番号	图号	固有番号
1	TP 1611	9	TP 1610
2	TP 1612	10	TP 1624
3	TP 1608	11	TP 1628
4	TP 1618	12	TP 1625
5	TP 1616	13	TP 1627
6	TP 1613	14	P 185
7	TP 1614	15	P 101
8	TP 1617		

第107図 第65号住居跡出土土器拓影図

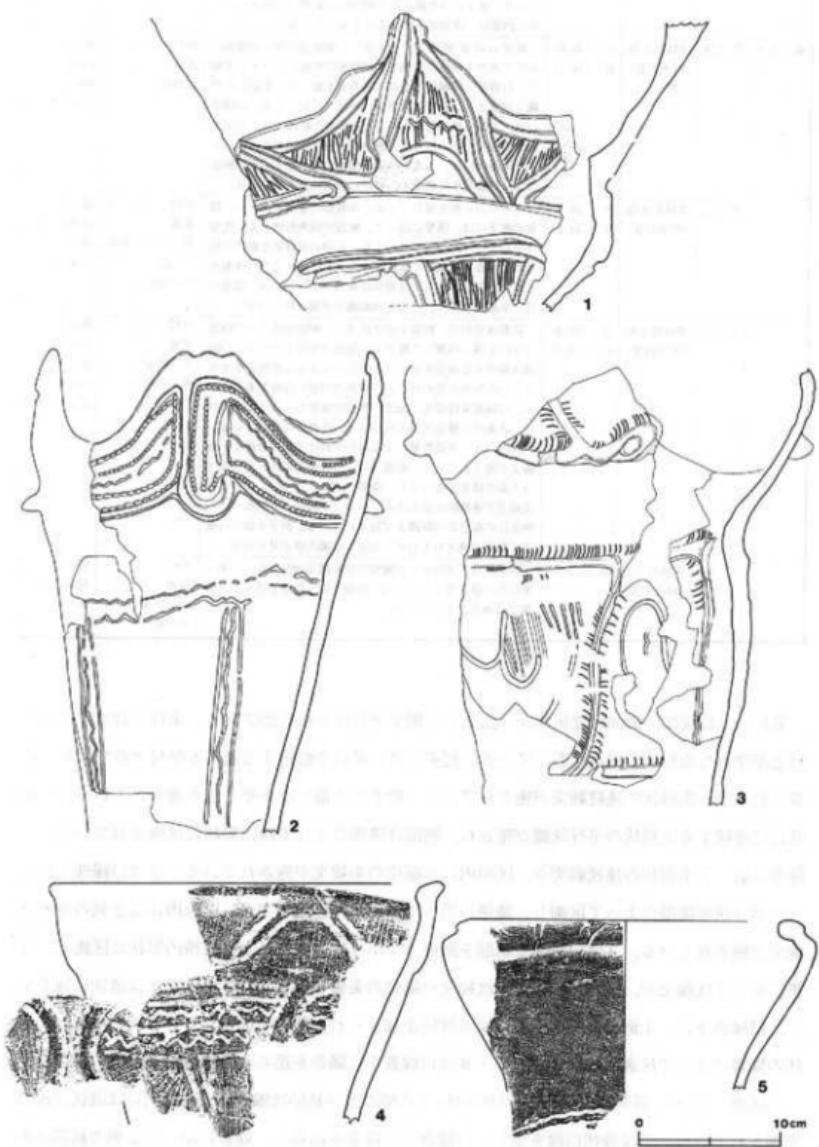
## 第66号住居跡出土土器

出土土器観察表（第108・109図）

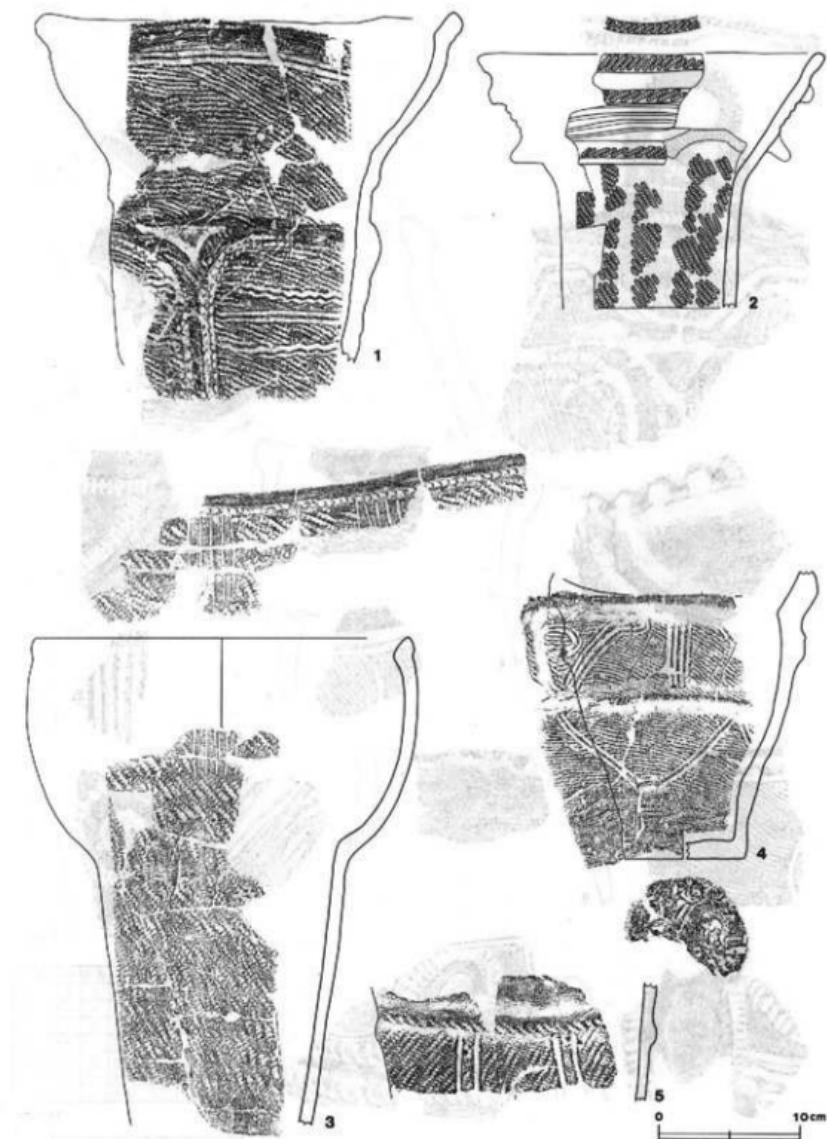
調査番号	同上番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様（手法の特徴）	胎土 燃成 色調	備考
第108回	P 123	深鉢形土器 (阿玉台型)	B (20.6) C (17.3)	口縁は4単位の波状口縁を呈し、胴部上位から頸部にかけて外傾し、口縁部で直立する。底状をなす突起部は、やや内側しながら大きく外側に向いている。口縁部文様帶は、口縁部の下方を巡る断面V-角形の隠帶によって、頸部と区画され、腹面カマボコ状の隠帶によって、通常の三角形状に区画されている。尻側の隠帶に沿って、半截竹管による平行文様が施されている。区画内には、縦位の条線文によって五塗されている。胴部上位を巡る隠帶によって、頸部無文帶と斜面文様帶を区画し、頸部には縦位の条線文が施されている。	砂粒・スコリア 普通 暗赤褐色	現存率20% 口縁部～胴部上位 口縁部30%
2	P 121	深鉢形土器 (阿玉台型)	A (22.5) B (34.1)	頸部上位から頸部にかけて大きく「く」の字状に内傾し、口縁部は内側して開いている。頸部下位から胴部上位にかけて、やや外傾して立ち上がり、腹部から口縁部にかけて後後に内傾して開いている。口縁は波状を呈し、4單位の山形把手を有している。把手頂部には押印が加えられている。口縁部文様帶は、断面V-角形の隠帶によって、二三月狀に4単位に横位区画され、把手下部の尻側の隠帶の接点は、済状となっている。区画の内側には、隠帶に沿って2列の結節沈線文が施され、区画内には、縦位の条線文や波状条線文、三叉文様が施されている。底部には、2列の波状沈線文が施されている。胴部には、2本の手縫によって区画された地垂文が施され、沈縫間に波状沈線文が施している。	砂粒・長石・石英 普通 内一褐色 外一において赤褐色	現存率60% 口縁部～胴部下位 口縁部45%
3	P 110	深鉢形土器 (阿玉台型)	B (31.0) C (16.8)	胴部中位に縮みを有し、浅く内側して立ち上がる。頸部は外反し、口縁部は後く内側して開いている。口縁部と頸部とを区画する断面V-角形の隠帶は、一部で陶器からなり上り小尖起状となっている。頸部に無文帶を有している。頸部文様帶は、頸部と胴下部に巡る2本の隠帶によって区画され、上下の隠帶に接して、腹面カマボコ状の隠帶が、山形状に連続的に施されている。隠帶に沿って幅広の爪印が施され、区画内には沈線文、波状沈線文、条線文によって五塗されている。	砂粒・長石 普通 内一褐色 外一暗褐色	現存率45% 口縁部～胴部中位 口縁部10% 底部を打ち欠き、切削 設土器として使用。
4	P 189	深鉢形土器 (阿玉台型)	A (27.3) B (16.7)	胴部中位からやや外反して立ち上がり、口縁部で後く内側して開き、口縁部で外反する。口縁部は、「く」の字状の隠帶によって連続的に三角形に区画され、区画内には縦位の条線文が施されている。胴部上位は、隠帶によって横円区画され、隠帶に沿って爪形状の結節沈線文が施されている。区画内には、横位の条線文や波状沈線文が交叉に施されている。その下には縦位の条線文が施されている。	砂粒・長石 普通 灰褐色	現存率20% 口縁部～胴部中位 口縁部20%
5	P 190	深鉢形土器 (阿玉台型)	A (22.3) B (12.2)	口縁部は頸部から後反して立ち上がり、上位で大きく「く」の字状に内傾している。口縁部下に1条の深い沈縫を施している。口縁部に施の深い無文帶を有し、底部には波状沈線文が施されている。	砂粒 良好 内一灰褐色 外一褐色	現存率20% 口縁部～頸部 口縁部10%
1	P 119	深鉢形土器 (阿玉台型)	A (26.8) B (25.0)	胴部中位から頸部にかけて、わずかに外傾して立ち上がる。口縁部は後く内側して開き、口縁部は外反している。口縁部の内側には縫を有している。口縁部下には隠帶を巡らし、隠帶下には2本の沈縫を施している。口縁部から頸部にかけて基底し折の縦位の条線文を施している。胴部は、頸部を巡る隠帶から歪下する「Y」字状の隠帶によって、4単位に「口」字状区画されている。隠帶に沿って2列の結節沈線文が施されている。区画内には、横走する3列の平行沈線文と波状沈線文が交叉に表出され	砂粒・長石 普通 内一褐色 外一暗褐色	現存率45% 口縁部～胴部中位 口縁部10%

				ている。地文には単節LRの横位の回転彫文が施されている。内面は二次焼成を受けもうろくなっている。		
第109図	P-124	深鉢形土器 (阿玉台Ⅳ)	A (24.6)	胴部はほぼ直立に立ち上がり、脚部上位から口縁部にかけて大きく外傾して開き、口縁部で外反している。半袖で、L1管部と口縁直下を走る隆帯の上面には、單節LRの彫文が施され、幾帯の下方にはナデ付けられている。口縁部には、上面に単節LRの彫文が施された断面カマボコ状の隆帯を上下に巡らし、胴の狭い横位区画がなされている。区画内には、4本の沈線が横位に施されている。胴部には、单節LRの彫文が、底位に帯状に施されている。	砂粒・長石 普通 黒褐色	現存率20% 口縁部～胴部中段 口縁部10%
			B (18.1)			
2	P-122	深鉢形土器 (阿毛台Ⅳ)	A (26.2)	キヤリバーポを呈している。L1管部に隆帯を巡らし、隆帯の底には、隆帯に沿って、断面が四角形をなし、丸堀がややとがった棒状工具により、1列の連続的な刺突が施されている。口縁部には、5本を1単位とする平行沈線が8単位重下している。沈線周は無文となっている。表面には、全面に单節RLの横位回転彫文が施されている。	砂粒・スコリア 普通 内一にぶい赤褐色 外一暗褐色	現存率30% 口縁部～胴部下位 口縁部20%
			B (34.3)			
3	P-120	深鉢形土器 (阿玉台Ⅳ)	B (20.4)	底部は半径で、脚部下位は直立し、脚部中位から口縁部にかけて浅く内側して開き、口縁部で外反している。口縁部は継やかな波状を呈し、2単位の小さな山形状把手を有していたものと思われる。L1管部の内面には筆を有している。口縁部文様帶は、断面三角形の風呂によつて長方形形状に、2単位に横位回転されていている。区画面は離れている。区画内には、半数竹刀による縦位や斜位の平行沈線文や曲線文が施されている。胴部には、口縁部と胴部とを区隔する1条の隆帯が巡らされ、隆帯に後じて、「」状の平行沈線文が連続的に巡らされている。口縁部から胴部には、無節Lの底位の回転彫文が施されている。胴下半部には横ナデ彫文が施されており、底部には網代模が見られる。	砂粒・長石 普通 内一黒褐色 外一赤褐色	現存率70% 口縁部～底 部 口縁部35% 底部 55%
			C (8.3)			
4	P-191	深鉢形土器 (阿玉台Ⅳ)	B (8.0)	胴部には、单節RLの横位の回転彫文が施され、一本1単位の沈線が重下している。脚部下位に隆帯を巡らし、隆帯下は無文となっている。	砂粒 普通 内一灰褐色 外一褐色	現存率10% 胴部下位の 破片
5						

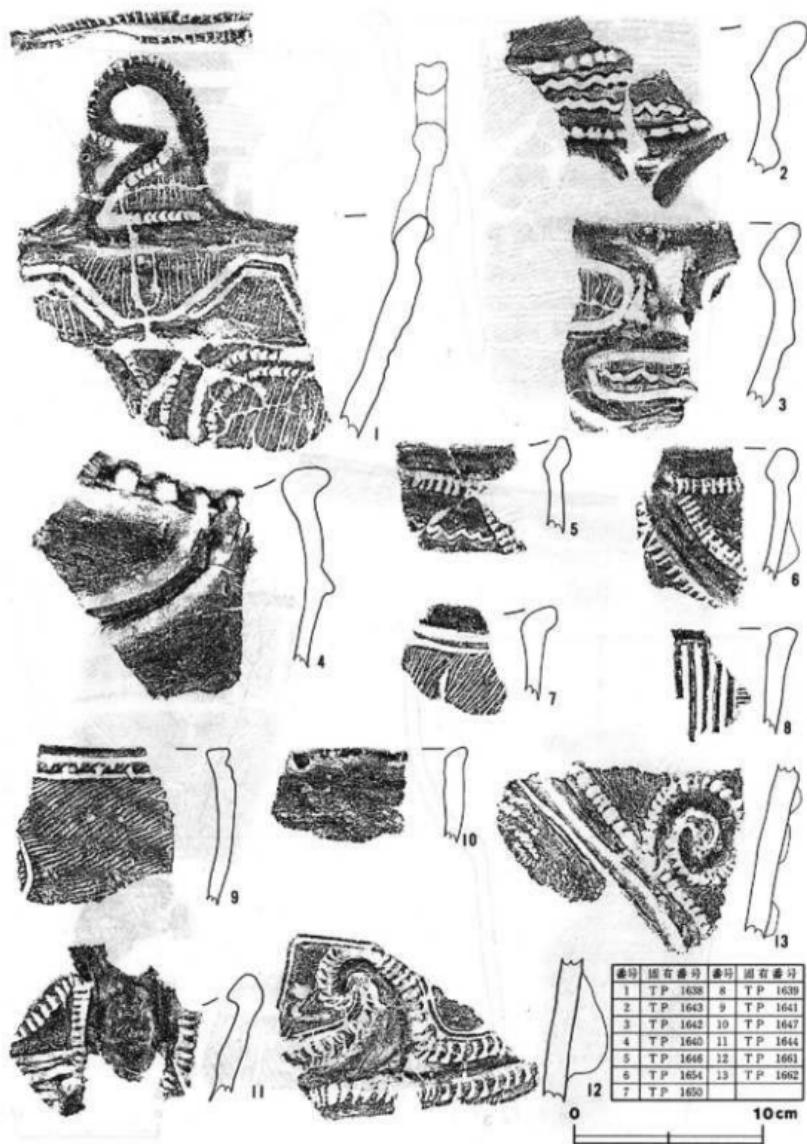
第110・111図は、第66号住居跡から出土した繩文土器片の拓影図である。第110図の1は口縁に内窓が穿れた山形状の把手を有している。把手には、渦状や蛇行する隆帯が貼付されており、隆帯に沿って、爪形状の連続刺突が施されている。把手の上面にはキサミ目が施されている。口縁部には連続する山形状の平行沈線が施され、胴部は隆帯によって橢円形状に区画されている。 隆帯に沿って爪形状の連続刺突が、区画内には縦位の条線文が施されている。2は口縁部を断面カマボコ状の隆帯によって区画し、隆帯に沿って爪形状の連続刺突が、区画内には2列の波状沈線文が施されている。3は口縁部や胴部を断面カマボコ状の隆帯によって橢円形状に区画し、隆帯に沿って沈線文が、区画内には波状沈線文や縦位の条線文が施されている。4は波状口縁を呈し、口縁直下に、上面に丸棒状工具による押圧が加えられた隆帯を巡らしている。口縁部は、弧状の隆帯によって区画されている。5・6は口縁直下に隆帯を巡らし、口縁部を弧状の隆帯によって区画している。隆帯に沿って、ヘラ状工具による幅の広い結節沈線文が、区画内には波状沈線文が施されている。7は波状口縁を呈し、口縁直下に隆帯を巡らし、隆帯に沿って2列の結節沈線文が、以下には条線文が施されている。8はL1管直下から、縦位の平行沈線文が施されている。



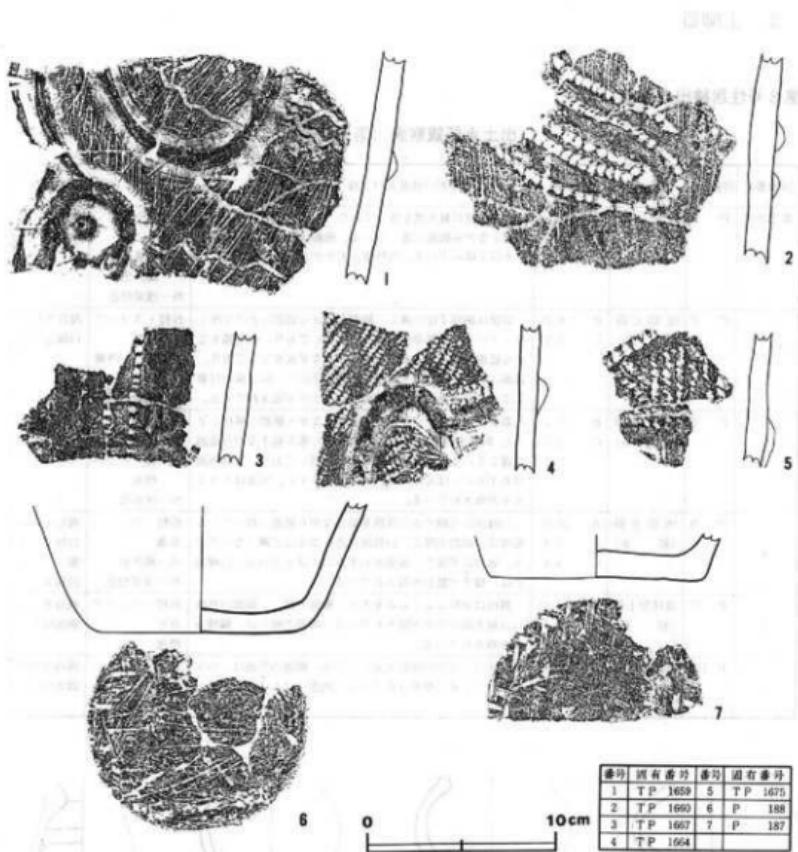
第108図 第66号住居跡出土土器実測図（1）



第109図 第66号住居跡出土土器実測図（2）（1）～（4）酒瓶形土器出幅基部断面図（5）骨片



第110圖 第66號住居跡出土土器拓影圖 (1) ⑤ 鄭州新鄭出土西周中期



第111図 第66号住居跡出土土器拓影図(2)

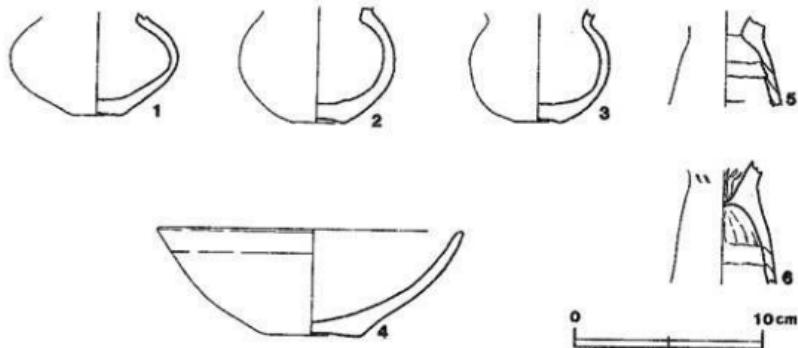
9は口縁部を沈線によって区画し、沈線間には上下から刺突を施し、連続「コ」の字文を表している。胴部には無節の繩文が施されている。10は無文である。11は波状口縁を呈し、口縁部を区画する隆帯に沿って、ヘラ状工具による幅の広い結節沈線文が施されている。12・13は胴部に隆帯を渦状に貼付し、12は幅の広い爪形文が、13にはヘラ状工具による幅の広い結節沈線文が施されている。第111図の1・2は地文に条線文を施し、胴部を隆帯によって区画している。1は隆帯に沿って沈線文が、2は爪形状の結節沈線文が施されている。3は縦位に2列の連続刺突文が、4・5は繩文が施されている。6・7は底部に網代痕を有する深鉢形土器の底部破片である。

## 2 土師器

### 第8号住居跡出土土器

出土土器観察表（第112図）

図版番号	測定番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様（手法の特徴）	胎土 硬成 色調	備考
第112図 1	P 8	培形土器 (和泉)	B (5.3)	脚部中位に最大径を有しており、大きく「く」の字状に屈曲しながら底部に達している。底部は平底で、底面がわずかにくぼんでいる。内外面ともナデが施されている。	砂粒 (少) 普通 内一灰黄褐色 外一浅黄褐色	現存率80% 口縁部欠損
2	P 7	培形土器 (和泉)	B (6.2) C 2.8	器厚は脚部下位で薄く、脚部下位から底部にかけて厚くなっている。脚部中位に最大径を有しており、弧を描きながら底部に達している。底部は小さな平底を呈しており、底面はわずかにくぼんでいる。内面にはナデ、外面上部には横溝が施されている。	砂粒・スコリア 普通 内一灰白・浅黄褐色 外一浅黄褐色	現存率80% 口縁部欠損
3	P 6	培形土器 (和泉)	B (5.7) C 2.6	器厚は厚手で、一定の厚さを保ちながら脚部へ移行している。脚部中位に最大径を有しており、弧を描きながら底部に達している。底部は小さな平底を呈しており、底部外側はわずかにくぼんでいる。内面はヘラナデ、外面上部にはガキが施されている。	砂粒 良好 内一灰褐色 外一灰褐色	現存率80% 口縁部欠損
4	P 9	圓形土器 (和泉)	A 16.8 B 5.8 C 5.4	口縁部から腰やから底状を呈しながら底部に致っている。器厚は、底部が厚く、口縁部に近くなるほど薄くなっている。底部は平底で、底面がわずかにくぼんでいる。口縁部には、横ナデ彫形が施されている。	砂粒 (少) 普通 内一褐色 外一浅黄褐色	現存率60% 口縁部～底部 口縁部50%
5	P 77	高円形土器 (和泉)	B (4.2)	脚柱は中程にふくらみをもち、腰部で窪く。脚部の外側には輪方向のナデが施されている。脚部内面には、輪縞み模様が施されている。	砂粒・スコリア 良好 褐色	現存率5% 脚部破片
6	P 126	高円形土器 (和泉)	B (6.1)	脚柱は、ほぼ円筒形を呈している。脚部の外側は、ヘラによって丁寧に整形成されている。内面にはしばり目が見られる。	砂粒 良好 内一褐色	現存率10% 脚部破片



第112図 第8号住居跡出土土器実測図

## 第27号住居跡出土土器

出土土器観察表 (第113回)

図版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土 熟成 色調	備考
第113回 1	P 55	壺形土器 (和泉)	A (19.5) B (6.4)	口縁部は複合口縁を呈し、「く」の字状に屈曲する頸部に接続している。口總部は丸味を持っている。胴部は内外面とも横ナナ彫形が施されている。	砂粒・スコリア 普通 内一に赤褐色	現存率10% 口縁部～胴部上位 口縁部100%
2	P 57	壺形土器 (和泉)	A 13.3 B (8.6)	口縁部は外反し、口總部ではさらにその度合を増している。頸部は「く」の字状に屈曲している。口縁部は内外面とも横ナナ彫形が施されている。	砂粒・スコリア 良好 内一に赤褐色	現存率15% 口縁部～胴部中位 口縁部30%
3	P 56	壺形土器 (和泉)	A 17.5 B (6.6)	口縁部は外反し、「く」の字状に屈曲する頸部に接続している。口總部は内外面とも横ナナ彫形が施されている。	砂粒・スコリア 良好 内一に赤褐色 外一に赤褐色	現存率5% 口縁部～胴部上位 口縁部20%
4	P 90	壺形土器 (和泉)	B (3.5)	口總部は外傾し、胴部は中位に最大径を持つものと思われる。器表面には横い模ナナの後に、横ナナ彫形が施されている。	砂粒 良好 褐色	現存率5% 胴部上位或 者
5	P 59	壺形土器 (和泉)	A 12.4 B 7.6 C 4.6	底部からやや内側して立ち上がり、口縁部ではさらに内側の度合を増している。口總部は薄子である。底部には木葉痕が見られ、その中央部はややくぼんでいる。口縁部は内外面とも横ナナ彫形が施されている。	砂粒 普通 内一淡黃褐色 外一淡褐色	現存率90% 口縁部、胴部の一部欠 損、底部欠 損 口縁部95%
6	P 60	高杯形土器 (和泉)	B (7.3)	脚部は上位でわずかに折れ、器部に向ってやや脚みを持ちながら次第に開いている。器底にはヘラによる整形が入念に施されている。内面には輪積み痕が残っている。	砂粒 良好 褐色	現存率10% 脚部破片
7	P 58	高杯形土器 (和泉)	A (18.4) B (3.4)	底部は、外側に開く凹状を呈するものと思われる。器底は内外面とも横ナナ彫形の後、ヘラミガキ彫形が施されている。	砂粒 良好 内一赤褐色 外一に赤褐色	現存率5% 底部破片

## 第43号住居跡出土土器

出土土器観察表 (第115回)

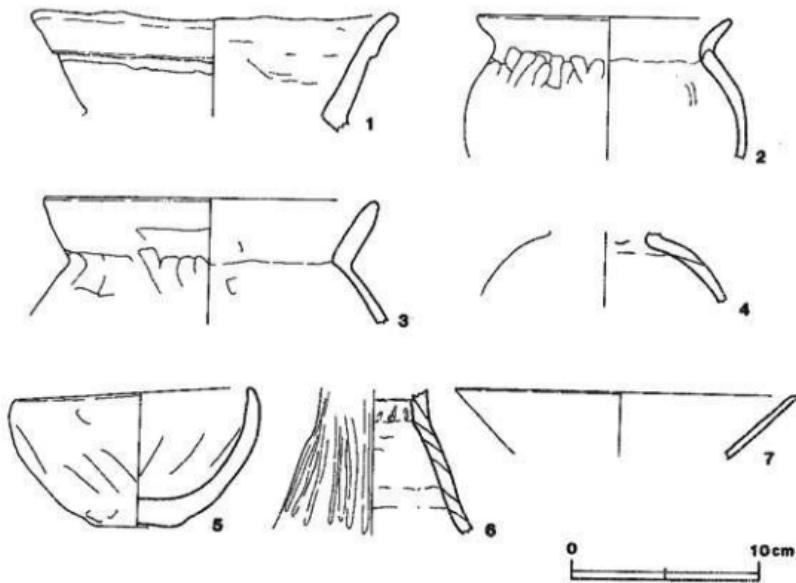
図版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土 熟成 色調	備考
第115回 1	P 87	壺形土器 (和泉)	A 10.9 B 11.9 C 3.0	口總部は外傾して立ち上がっている。頸部は大きく「く」の字状に屈曲し、縦やかに内側しながら底部に坐っている。胴部は最大径を中位に有している。底部は平底である。口總部の内外面は横ナナ彫形、胴部は外表面がヘラケズリのあと粗いヘラミガキがあり、内面はヘラナナ彫形が施されている。器表面全体に傷が付着している。	砂粒・スコリア 良好 内一褐色 外一に赤褐色 ・灰褐色	現存率95% 口總部の一部欠損
2	P 75	壺形土器 (和泉)	A 15.3 B (4.4)	脚部上位から口總部にかけて、「く」の字状に外反して立ち上がり、口總部で外反の度合を増している。口總部には、内外面とも横ナナ彫形が施されている。	砂粒・スコリア 良好 内一黒褐色 外一淡黃褐色	現存率5% 未測 口總部 脚部上位 口總部 5%未測

3	P 102	壺形土器 (和泉)	B (26.0) C (6.3)	平底で、底部から脚部上位にかけて器壁を一定に保ち、大きく半円形を描きながら立ち上がっている。脚部は中位に最大径を有している。	砂粒・スコリア 普通 内一赤褐色 外一黒褐色	現存率30% 網上位～底 部 底部100%
4	P 88	壺形土器 (和泉)	A (6.9) B 7.3 C 2.2	口縁部は外傾し、口唇部は薄くやや丸味を帯びている。脚部は最大径を中位に有しておらず、球形状を呈している。底部は平底で、中央部がわずかにくぼんでいる。口縁部の内外面、脚部外面はヘラミガキ。器内部はヘラナガ整形が施されている。	砂粒 良好 褐色	現存率80% 口縁部の一部欠損 口縁部30%
5	P 72	高环形土器 (和泉)	A 20.9 B (6.6)	脚部は外方に開く皿状をなし、脚部と接合する底部外面には縫合を有している。器底には、内外面とも横ナガ整形が施されている。	砂粒・スコリア 普通 内一赤褐色 外一褐色	現存率20% 环部破片 底部25%
6	P 74	高环形土器 (和泉)	A (19.7) B 15.8 C (13.7)	环部はするどく外反し、脚部と接する底部外面には縫合が認められる。環部の口径は器高より大である。脚部は脚部に向かってやや傾いており、下位に膨みを有し、中位は空洞となっている。脚部は広がらない。口縁部と脚部の内外面に横ナガ直があり、脚部は外側に粗い旋方向のヘラナデ、内面にナガ整形が施されている。全体的に摩滅している。	砂粒・スコリア 普通 褐色	現存率60% 环部30% 脚部60%
7	P 73	高环形土器 (和泉)	B (10.1) C (13.2)	脚部は环部との接合部から器底に向かって外反している。脚部の内面には輪積み痕を残し、器底にはヘラミガキ整形が施されている。	砂粒・スコリア 普通 内一赤褐色 外一褐赤褐色	現存率30% 脚部～脚部
8	DP 93	土 玉	2.5×2.5 孔径 0.6 11.7g	球形を呈しており、中央部よりもやや外側にずれた位置に、両側から孔が穿たれている。器底にはナガ整形が施されている。	砂粒・スコリア 良好 にぼい褐色	現存率95%
9	DP 94	土 玉	2.4×2.4 孔径 0.7 11.2g	球形を呈しており、中央部に一方から孔が穿たれている。器底には丁寧なナガ整形が施されている。	砂粒・スコリア 良好 にぼい褐色	現存率 100%

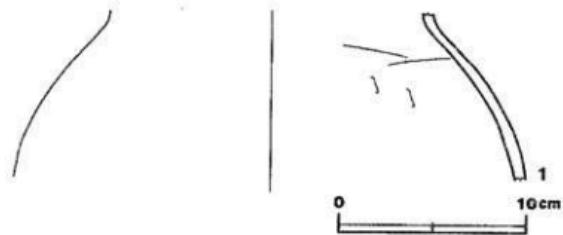
### 第63号住居跡出土土器

出土土器観察表（第114図）

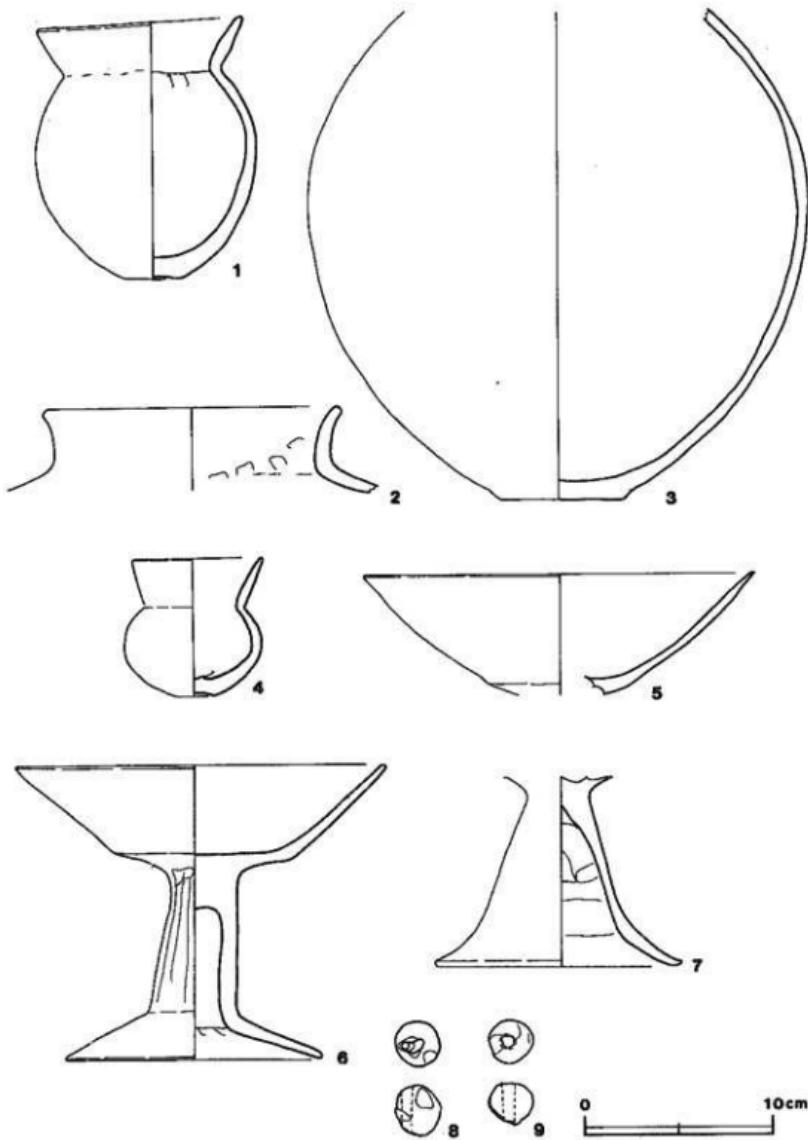
図版番号	固有番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様（手法の特徴）	胎土 成色 色調	備考
第114図 1	P 129	壺形土器	B (8.9)	脚部は、器底を一定に保しながら内側して立ち上がり、脚部で外反している。脚部には、丁寧な横ナガ整形が施されている。	砂粒・長石 良好 内一赤褐色 外一褐色	現存率10% 脚部～脚部 上位



第113図 第27号住居跡出土土器実測図



第114図 第63号住居跡出土土器実測図



第115図 第43号住居跡出土土器実測図

### 第3節 土壙・グリッド出土土器

#### 1 土壙

出土土器観察表（第116・117・118図）

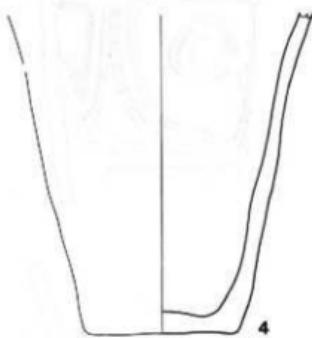
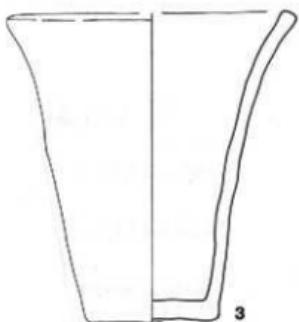
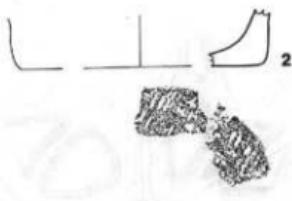
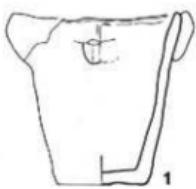
出版番号	固有番号	基種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土 燃成 色調	備考
第116図	P 130	深鉢形土器 (阿玉台Ⅱ)	A (26.5) B (31.3)	胴部下位からやや外反して立ち上がり、頸部で直立し、口縁部は浅く内傾して開いている。口縁は波状を呈し、口縁には、横位に連続する山形状の把手と有孔把手を1単位とする、4単位の把手群を有している。この把手群には、縦位に横状把手がつけられ、口縁部の下方を巡る隆帯と連結し、口縁部文様等を区画している。口縁部文様等は、把手を中心として、施墨によって楕円形や三角形に区画され、区画の隆帯に沿って、内側には2列の結節沈縮文が施されている。頸部には無文帶を有している。胴部文様等は、頸部と胴部下位を巡る2本の隆帯によって区画され、区画内には、貼付隆帯によって表された「U」状の区画文が3単位施されている。「U」状の区画文の内側には、円文と直線文を組み合わせた「?」状の風巻が貼付され、隆帯に沿って爪形状の結節沈縮文が施されている。	青母・長石 普通 内一において褐色 外一暗赤褐色	SK-50出土 現存率80% 口縁部～胴部下位 口縁部95%
1	P 192	深鉢形土器 (阿玉台)	B (6.4) C 13.6	底部は外面の中央部がくぼんでおり、胴部の下位よりもやや外側にはみ出している。胴部下部は底部から外傾して立ち上がっている。	砂粒・長石・青母 普通 橙色	SK-50出土 現存率10% 胴部下半～ 底部 底部 100% P130と重なって出土
2	P 193	深鉢形土器 (阿玉台)	A (30.0) B (13.3)	口縁部は浅く内傾して開き、上位で外反している。口縁直下には、幅の広い無文帶を有している。口縁部文様等は、2本の隆帯によって区画され、区画内には、隆帯を「X」状や渦巻状に施付している。隆帯の側面には、櫛状の刺突が施されている。口縁部の内側に縫を有し、口縁部は厚手となっている。	青母・長石 普通 内一赤褐色 外一において褐色	SK-118出土 現存率 10% 口縁部 部破片 口縁部20%
3	P 195	変形土器	A (22.4) B (5.6)	頸部から口縁部にかけて大きく「く」の字状に外反し、口輪部は折り返されている。内外面とも丁寧に横ナタで調整が施されている。	砂粒・長石・青母 良好 において褐色	SK-135出土 現存率 5% 口縁部 ～頸部 口縁部10%
4	P 194	深鉢形土器	B (1.5) C (8.0)	底部は平坦で、底部から外傾して立ち上がっている。底部に木薙痕が見られる。	砂粒・長石・石英 普通 において褐色	SK-135出土 現存率 5% 未焼 部破片 底部30%
5	P 131	高环形土器	B (2.6)	环部は、脚部との接合部から内傾して開き、皿状となっている。环部の底部外側には、わずかに被が見られる。器面は、内外面とも横ナタ整形が施されている。	砂粒 良好 において褐色	SK-201出土 現存率 5% 环部 破片
6	P 132	深鉢形土器 (阿玉台Ⅱb)	B 18.0 C 8.5	底部は平底で、底部から胴部上位にかけて外傾して立ち上がりしている。胴部には、縦横に楕円に沿ってヒダ状の瘤状痕が見られる。器面はざらざらしており、底部に網代痕が見られる。	長石・石英 不良 内一赤褐色 外一褐色	SK-213出土 現存率 70% 脱部 中位～底部 底部100%
7	P 133	深鉢形土器 (阿玉台)	B (10.8) C (8.2)	破片上部には、上面に渦巻状の隆帯を貼付した構造把手が見られる。器部を巡る隆帯下には、弧状の隆帯が連結して貼付され、その末端部は垂下している。垂下する隆帯の	青母・長石・石英 普通 内一黒褐色	SK-213出土 現存率 60% 口縁部

				上面には押圧が加えられ、隆起に沿って結節沈線文が施されている。区画内には結節沈線によって直線、横状、渦巻状の文様が密に施されている。	外にぶい赤褐色 部～底部 底部10%
第117回 1	P 134 (阿玉台)	A (9.2) B 9.2 C (4.8)	底部は平坦で、底部から縁部にかけて外傾して立ち上がりっている。口縁は繊やかな液状を呈し、口縁底下には、短い粘土紐を横位置に2段に貼付して作り出した小突起を有している。	青母・長石 普通 内一黒褐色 外一灰褐色	SK-217出土 現存率45% 口縁部～底部 口縁部25% 底部70%
	P 136 (阿玉台)	B (2.8) C (12.8)	底部は平坦で、底部から胴下部にかけてやや外傾して立ち上っている。底部には胴代底が見られる。	砂粒・長石・石英 石英 普通 にぶい橙色	SK-226出土 現存率5% 底部破片 底部10%
3	P 138 (阿玉台)	A (15.4) B 16.5 C 6.9	底部は、平沢で、底部から胴上部にかけて外傾して立ち上がり、口縁部で大きく外反している。平縁で、基面は無文となっている。	青母・長石 良好 内一灰褐色 外一にぶい褐色	SK-251出土 現存率70% 口縁部～底部 口縁部30% 底部100%
	P 135 (阿玉台)	B (17.0) C 8.0	底部は平沢で、内部の中央部は分厚くなっている。胴部は底部からやや外傾して立ち上がり、上位で外反している。器面は無文となっている。	砂粒・長石・石英 普通 内一黒褐色 外一灰褐色	SK-251出土 現存率70% 脇部 上位～底部 底部100%
5	P 137 (阿玉台Ⅱ)	B 27.4 C 8.1	底部は平沢で、胴部は底部からやや外傾して立ち上っている。胴部から口縁部にかけては、浅く内側して開き、口縁部で外反している。口縁は繊やかな液状を呈している。口縁には、外縁に突き出す断面三角形の隆起によって区画された、縦の抜い文様帯を有している。区画の隆帯に沿って、1列の結節沈線文が施されている。胴部に1条の隆帯を造らし、隔壁窓文帯と胴部文様帯とを区画している。胴部は、隔壁部を通る隆帯から垂下する3本の隆帯によって、3単位に区画され、区画の隆帯に沿って、2列の結節沈線文が施されている。区画内には、まばらに継続の沈線文が施されている。	青母・長石 良好 内一灰褐色 外一褐色	SK-271出土 現存率70% 口縁部～底部 口縁部30% 底部80%
	P 138 (佐曾利EⅢ)	B (17.9) C (6.6)	底部は平沢で、底部から胴下部にかけて外傾して立ち上っている。胴部には、複数LRLの輪位の回転模様が粗く施されている。2本の沈線によって区画された懸垂文が、8単位垂下している。沈線間は粗く磨り消されており、所々に純文が残っている。	砂粒・スコリア 良好 内一にぶい褐色 外一褐色	SK-295出土 現存率30% 脇部 中位～底部 底部80%
第118回 1	P 322 (阿玉台)	B (3.7)	深鉢形土器の口縁に付されたと思われる、人頭把手の破片である。把手の口唇部には、渦巻状の結節沈線文が施されており、途中で拘文方向を変えている。器内面には、細い點付模様によって眉・鼻・目・口が表現されている。器外面には、結節沈線が直線的に施されている。器面は磨耗している。	石英・青母 普通 明褐色	SK-300出土 現存率5%
	P 139 (阿玉台)	B 14.4 C 7.8	底部はほぼ平沢で、内部の中央部はやや分厚くなっている。底部から胴上部にかけて、やや外傾して立ち上っている。器面は粗く整形され、縫積み痕がわずかに見られる。	青母 普通 内一黒褐色 外一褐色	SK-485出土 現存率30% 脇部 中位～底部 底部40%

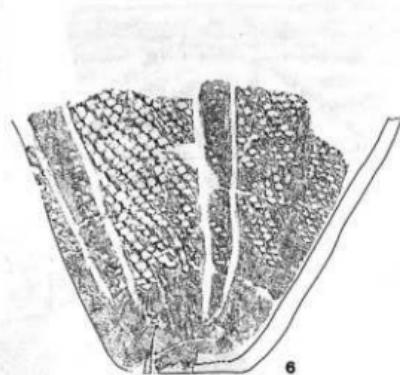


第116図 土壤出土土器実測図（1）

（出所）西日本古文書館蔵 古代日本



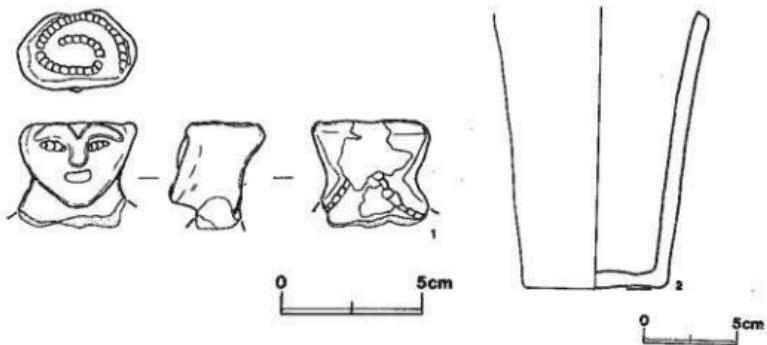
0 10 cm



0 10 cm

第117図 土器実測図（2）

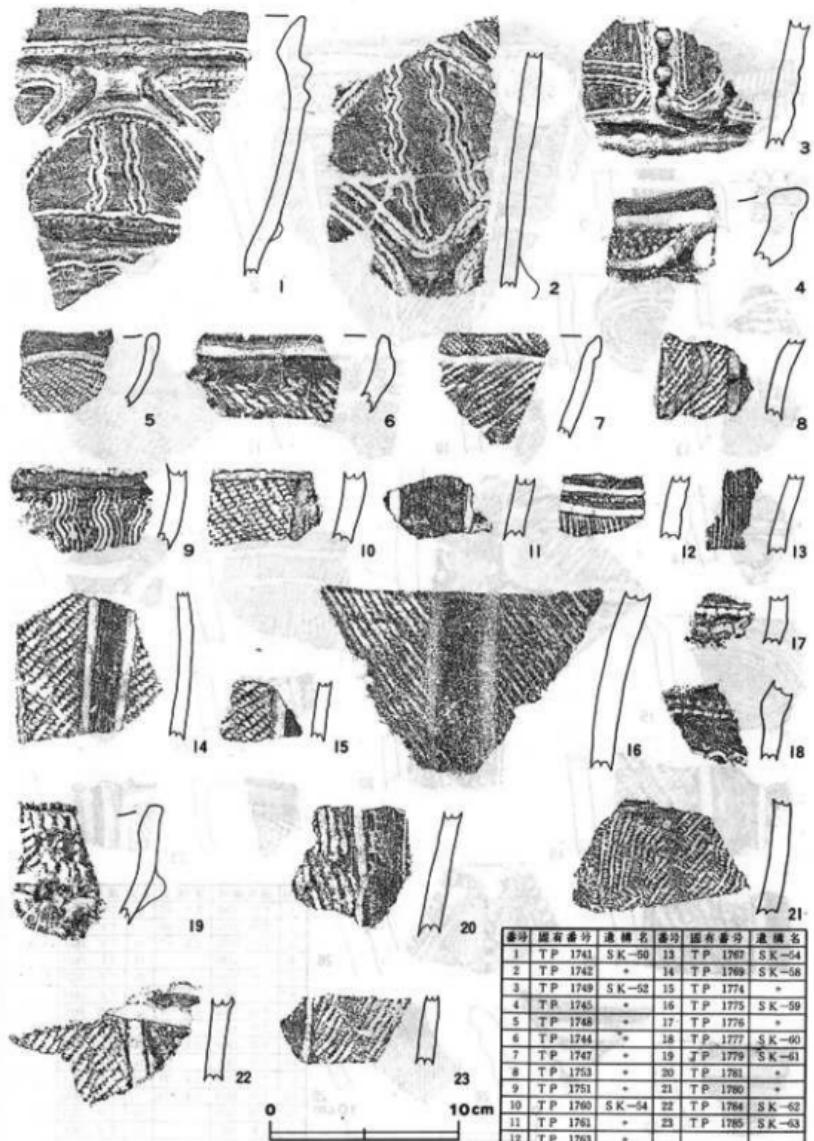
（1）西周家層の土器類（2）測量図



第118図 土竈出土土器実測図（3）



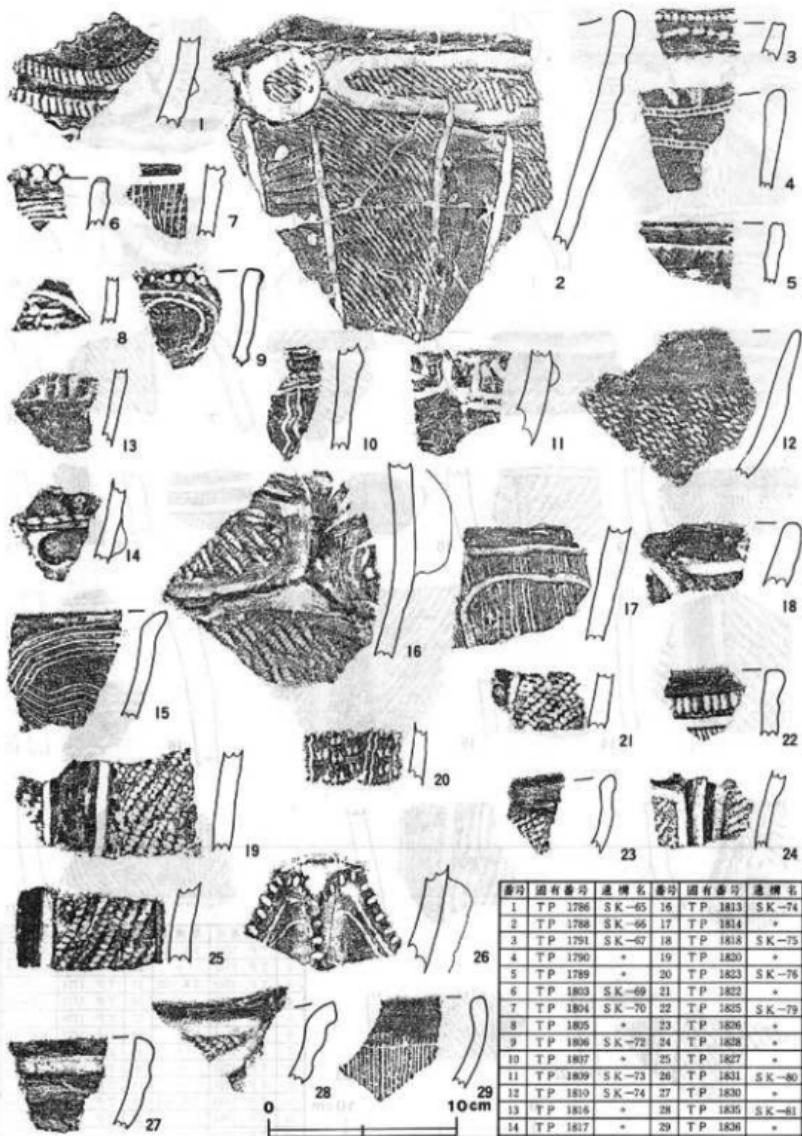
第119図 土壤出土土器拓影図（1）



番号	施有番号	遺構名	番号	施有番号	遺構名
1	TP 1741	SK-60	13	TP 1767	SK-64
2	TP 1742	*	14	TP 1769	SK-58
3	TP 1749	SK-52	15	TP 1774	*
4	TP 1745	*	16	TP 1775	SK-59
5	TP 1748	*	17	TP 1776	*
6	TP 1744	*	18	TP 1777	SK-60
7	TP 1747	*	19	TP 1779	SK-61
8	TP 1753	*	20	TP 1781	*
9	TP 1751	*	21	TP 1780	*
10	TP 1760	SK-54	22	TP 1784	SK-62
11	TP 1761	*	23	TP 1785	SK-63
12	TP 1763	*			

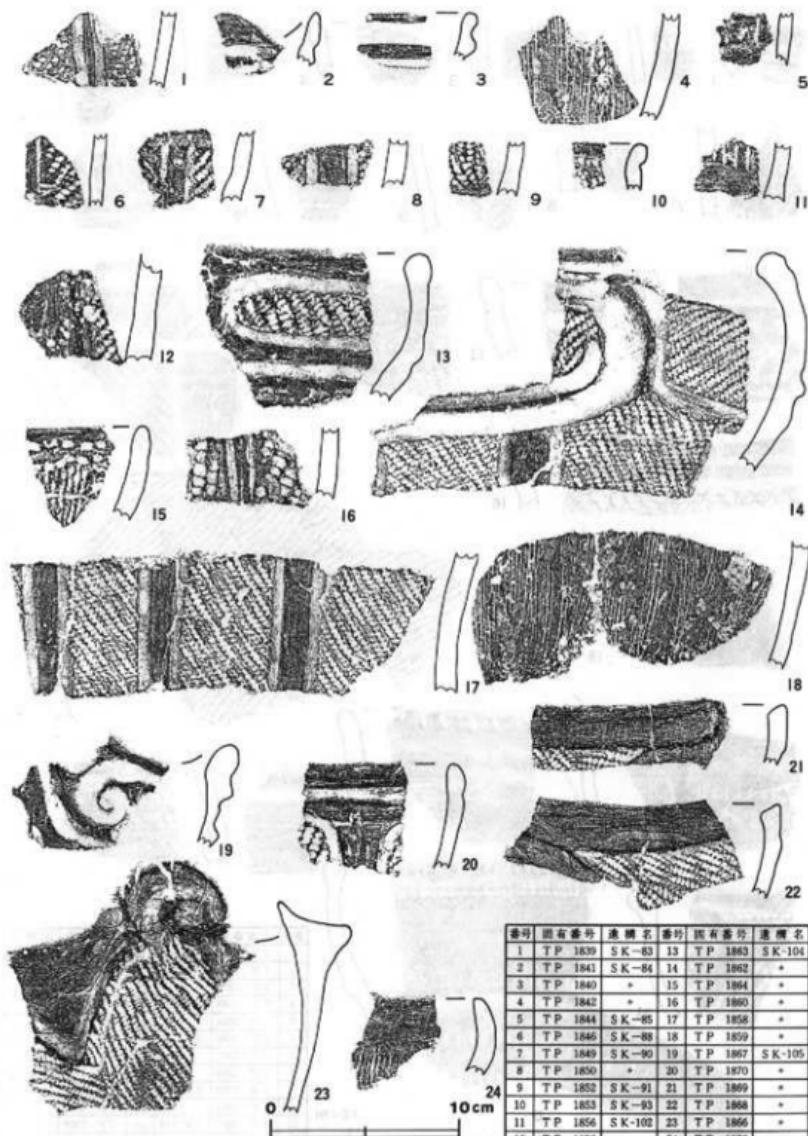
第120図 土壤出土土器拓影図（2）

深澤跡出土土器拓影図(2)



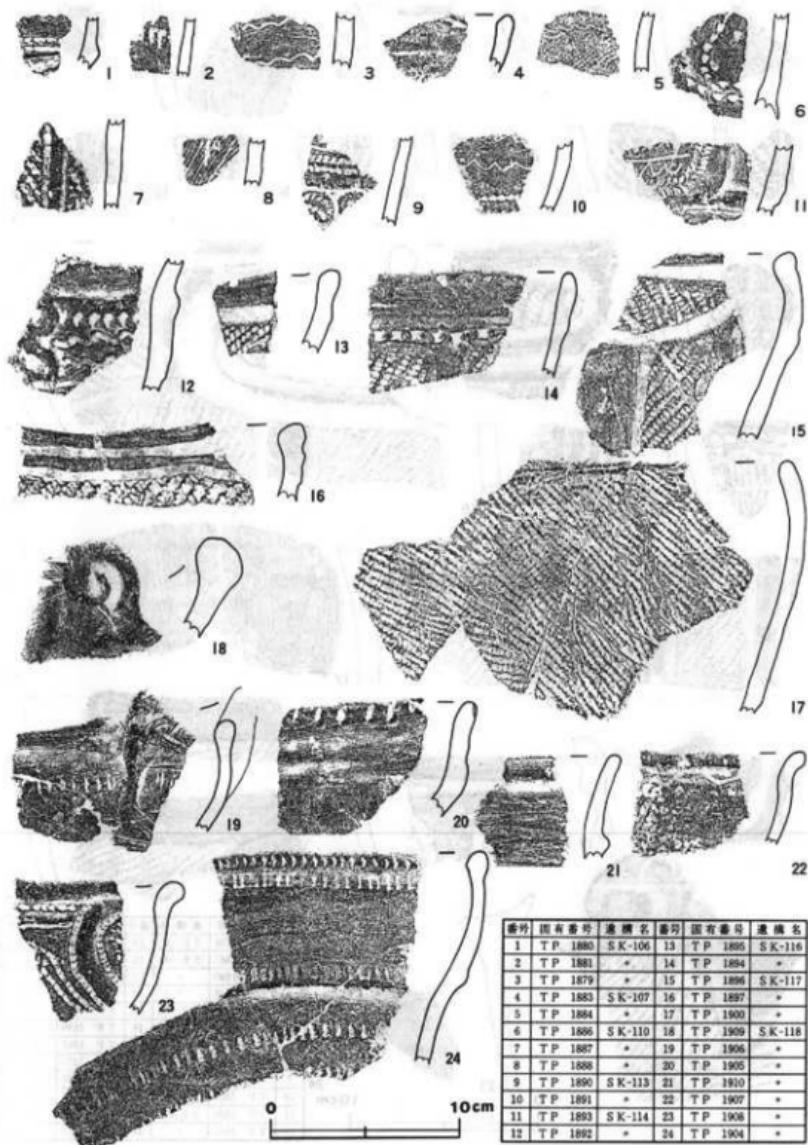
第121図 土壌出土土器拓影図（3）

（3） 四種器土由出土 圖121



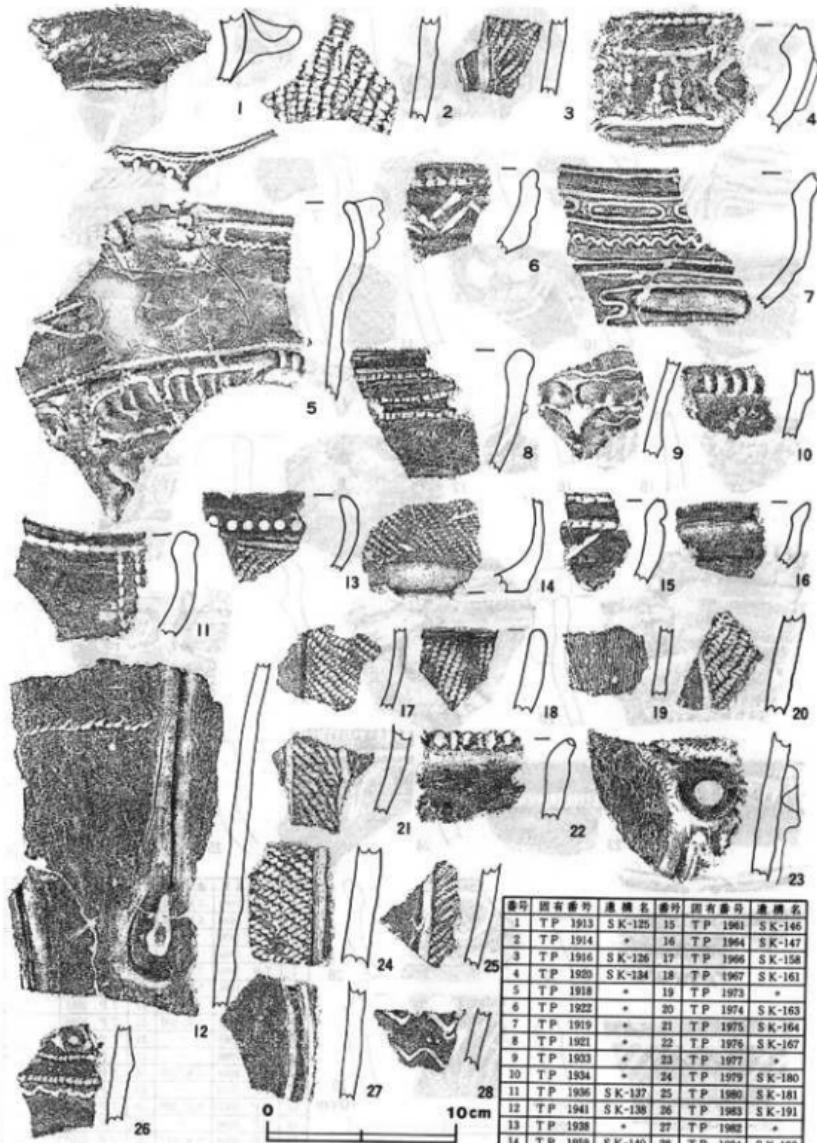
番号	西暦番号	遺構名	番号	西暦番号	遺構名
1	TP 1839	SK-83	13	TP 1863	SK-104
2	TP 1841	SK-84	14	TP 1862	*
3	TP 1840	*	15	TP 1864	*
4	TP 1842	*	16	TP 1860	*
5	TP 1844	SK-85	17	TP 1858	*
6	TP 1846	SK-88	18	TP 1859	*
7	TP 1849	SK-90	19	TP 1867	SK-105
8	TP 1850	*	20	TP 1870	*
9	TP 1852	SK-91	21	TP 1869	*
10	TP 1853	SK-93	22	TP 1868	*
11	TP 1856	SK-102	23	TP 1866	*
12	TP 1857	*	24	TP 1872	*

第122図 土壤出土土器拓影図(4)



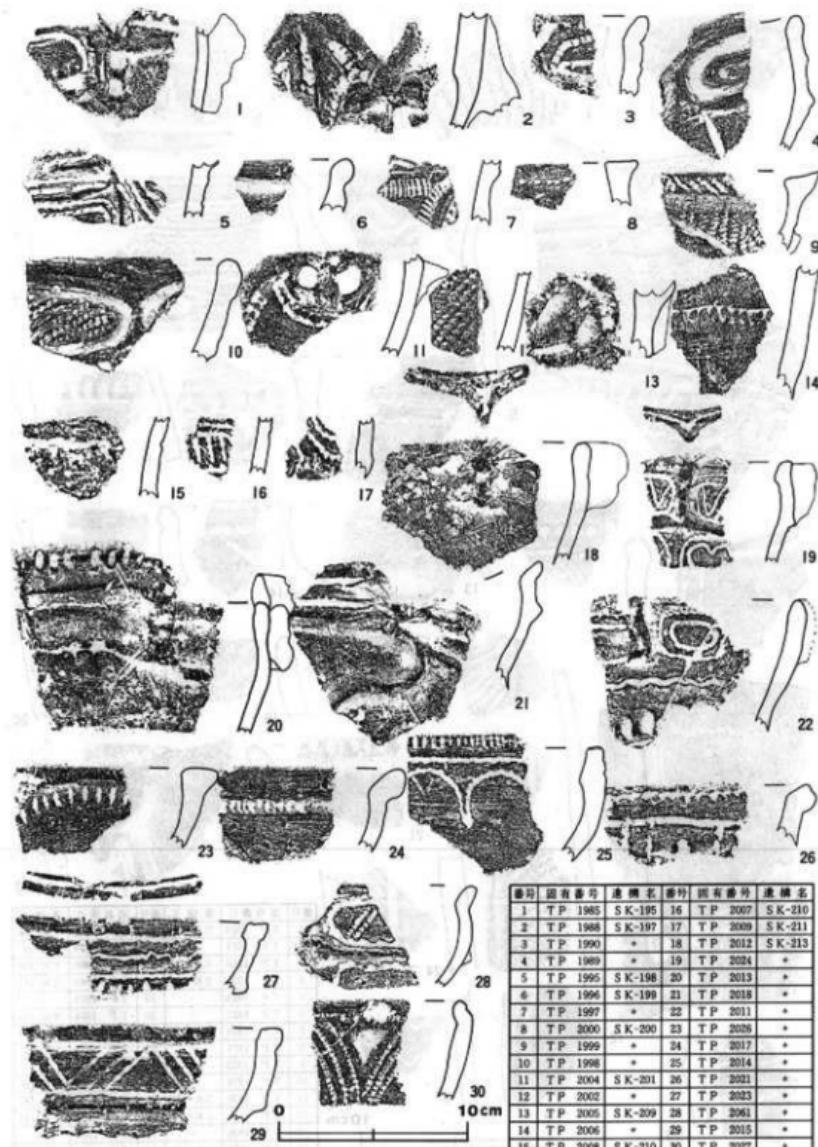
第123図 土壤出土土器拓影図 (5)

番号	固有番号	通称名	番号	固有番号	通称名
1	TP 1880	SK-106	13	TP 1895	SK-116
2	TP 1881	*	14	TP 1894	*
3	TP 1879	*	15	TP 1896	SK-117
4	TP 1883	SK-107	16	TP 1897	*
5	TP 1884	*	17	TP 1900	*
6	TP 1886	SK-110	18	TP 1909	SK-118
7	TP 1887	*	19	TP 1906	*
8	TP 1888	*	20	TP 1905	*
9	TP 1890	SK-113	21	TP 1910	*
10	TP 1891	*	22	TP 1907	*
11	TP 1893	SK-114	23	TP 1908	*
12	TP 1892	*	24	TP 1904	*



番号	固有番号	遺構名	番号	固有番号	遺構名
1	TP 1913	S K-125	15	TP 1961	S K-146
2	TP 1914	*	16	TP 1964	S K-147
3	TP 1916	S K-126	17	TP 1966	S K-158
4	TP 1920	S K-134	18	TP 1967	S K-161
5	TP 1918	*	19	TP 1973	*
6	TP 1922	*	20	TP 1974	S K-163
7	TP 1919	*	21	TP 1975	S K-164
8	TP 1921	*	22	TP 1976	S K-167
9	TP 1933	*	23	TP 1977	*
10	TP 1934	*	24	TP 1979	S K-180
11	TP 1936	S K-137	25	TP 1980	S K-181
12	TP 1941	S K-138	26	TP 1983	S K-191
13	TP 1938	*	27	TP 1982	*
14	TP 1959	S K-140	28	TP 1984	S K-193

第124図 土壤出土土器拓影図（6）



第125図 土壤出土土器拓影図 (7)

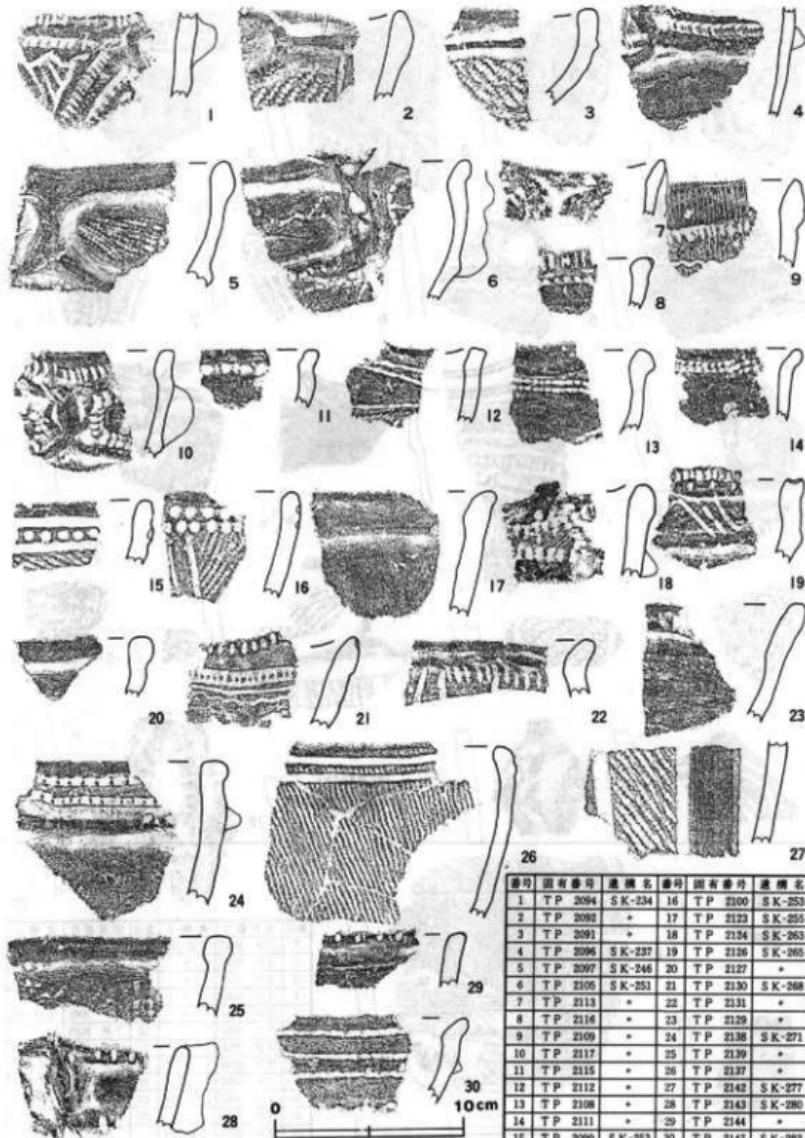
(8) 開墾段落出土土器 回有ST層



番号	固有番号	遺構名	番号	固有番号	遺構名
1	TP 2045	S K-213	13	TP 2069	S K-224
2	TP 2048	*	14	TP 2071	S K-225
3	TP 2047	*	15	TP 2075	S K-226
4	TP 2043	*	16	TP 2076	*
5	TP 2044	*	17	TP 2081	S K-228
6	TP 2051	*	18	TP 2079	*
7	TP 2055	*	19	TP 2082	S K-229
8	TP 2039	*	20	TP 2088	S K-232
9	TP 2062	*	21	TP 2089	*
10	TP 2063	S K-217	22	TP 2090	*
11	TP 2065	*	23	TP 2086	*
12	TP 2070	S K-224			

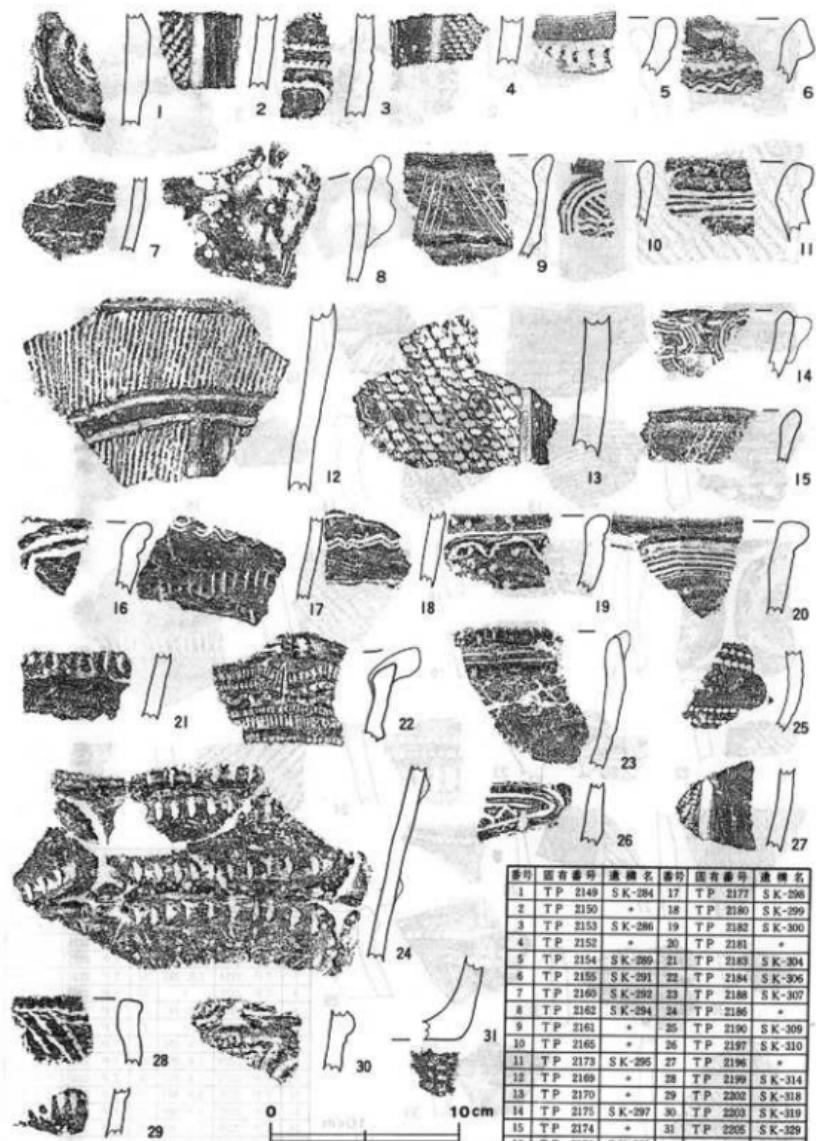
第126図 土壤出土土器拓影図 (8)

(8) 開墾段落出土土器拓影図 (8)



第127図 土壤出土土器拓影図 (9)

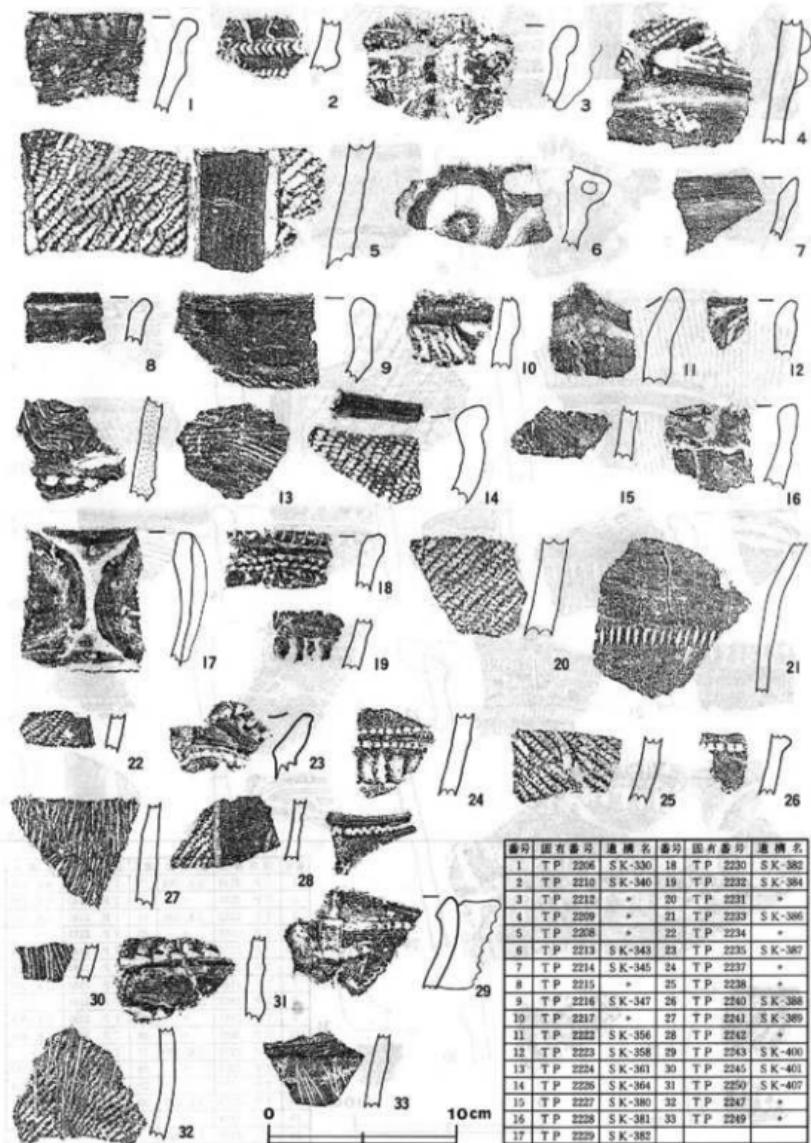
(8) 開墾多源出土土器 (9) 127



番号	固有番号	遺構名	番号	固有番号	遺構名
1	TP-2149	S K-284	17	TP-2177	S K-296
2	TP-2150	*	18	TP-2180	S K-299
3	TP-2153	S K-286	19	TP-2182	S K-300
4	TP-2152	*	20	TP-2181	*
5	TP-2154	S K-289	21	TP-2183	S K-304
6	TP-2155	S K-291	22	TP-2184	S K-306
7	TP-2160	S K-292	23	TP-2188	S K-307
8	TP-2162	S K-294	24	TP-2186	*
9	TP-2161	*	25	TP-2190	S K-309
10	TP-2165	*	26	TP-2197	S K-310
11	TP-2173	S K-295	27	TP-2196	*
12	TP-2169	*	28	TP-2199	S K-314
13	TP-2170	*	29	TP-2202	S K-318
14	TP-2175	S K-297	30	TP-2203	S K-319
15	TP-2174	*	31	TP-2205	S K-329
16	TP-2176	S K-298			

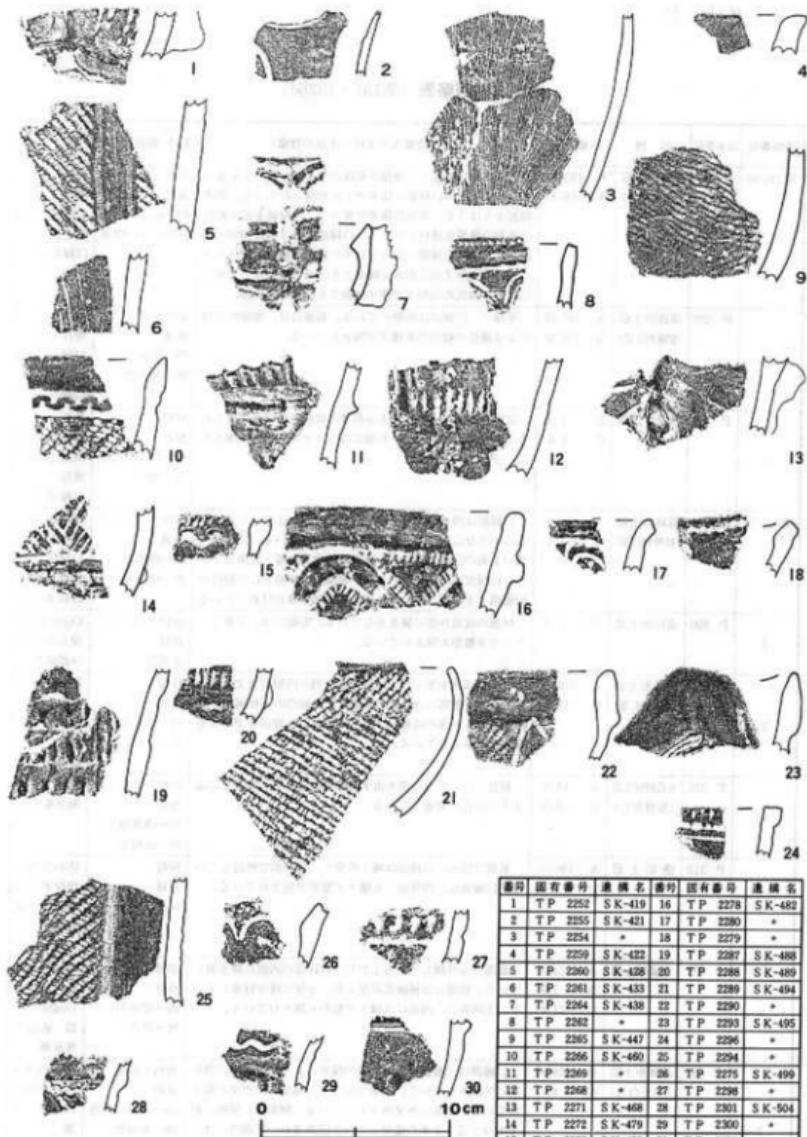
第128図 土壤出土土器拓影図 (10)

図128 土器拓影図 (10) (10枚)



第129図 土壤出土土器拓影図 (11)

番号	固有番号	遺構名	番号	固有番号	遺構名
1	TP-2206	S.K.-330	18	TP-2238	S.K.-382
2	TP-2210	S.K.-340	19	TP-2239	S.K.-384
3	TP-2212	*	20	TP-2231	*
4	TP-2209	*	21	TP-2233	S.K.-386
5	TP-2208	*	22	TP-2234	*
6	TP-2213	S.K.-343	23	TP-2235	S.K.-387
7	TP-2214	S.K.-345	24	TP-2237	*
8	TP-2215	*	25	TP-2238	*
9	TP-2216	S.K.-347	26	TP-2240	S.K.-388
10	TP-2217	*	27	TP-2241	S.K.-389
11	TP-2222	S.K.-356	28	TP-2242	*
12	TP-2223	S.K.-358	29	TP-2243	S.K.-400
13	TP-2224	S.K.-361	30	TP-2245	S.K.-401
14	TP-2225	S.K.-364	31	TP-2250	S.K.-407
15	TP-2227	S.K.-380	32	TP-2247	*
16	TP-2228	S.K.-381	33	TP-2249	*
17	TP-2229	S.K.-382			



番号	固有番号	通稱名	番号	固有番号	通稱名
1	TP-2252	S.K-419	16	TP-2278	S.K-482
2	TP-2255	S.K-421	17	TP-2280	*
3	TP-2254	*	18	TP-2279	*
4	TP-2259	S.K-422	19	TP-2287	S.K-488
5	TP-2260	S.K-423	20	TP-2288	S.K-489
6	TP-2261	S.K-433	21	TP-2289	S.K-494
7	TP-2264	S.K-438	22	TP-2290	*
8	TP-2262	*	23	TP-2293	S.K-495
9	TP-2265	S.K-447	24	TP-2296	*
10	TP-2266	S.K-460	25	TP-2294	*
11	TP-2269	*	26	TP-2275	S.K-499
12	TP-2268	*	27	TP-2295	*
13	TP-2271	S.K-468	28	TP-2301	S.K-504
14	TP-2272	S.K-479	29	TP-2300	*
15	TP-2277	S.K-480	30	TP-2309	*

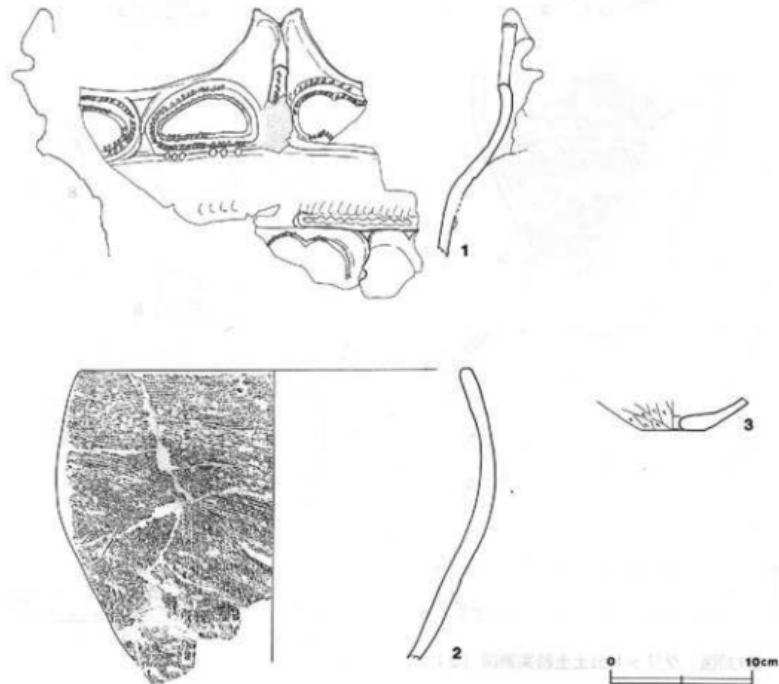
第130図 土壤出土土器拓影図 (12)

## 2 グリッド

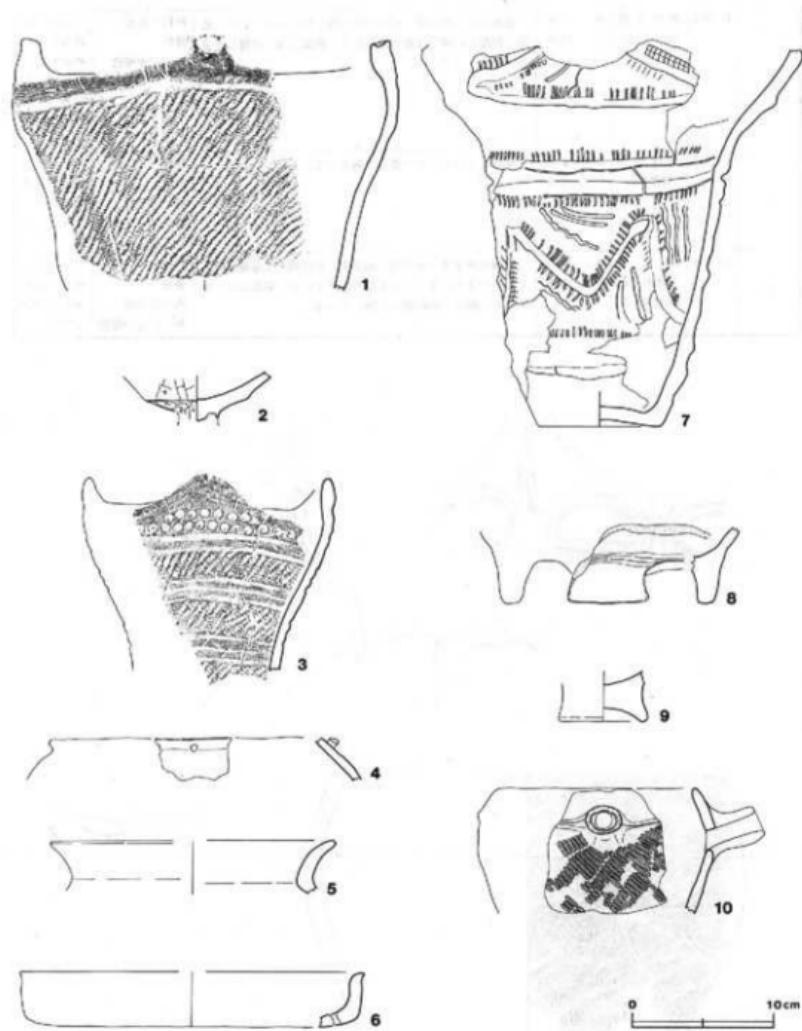
出土土器観察表 (第131・132図)

図版番号	測定番号	器種	法基(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土	焼成	色調	備考
第131図	P 199	深鉢形土器 (阿玉台Ⅱ)	A (33.6) B (16.4)	口縁は波状を呈し、頂部が双頭状となる山形把手を有している。把手の口縁部にはキザミ目が施されている。把手の頂部から「Y」字状の隆帯が平下し、口縁部を巡る画面三角形の邊縁と連絡している。胴部文様は横位に同心区画され、区画の隆帯に沿って2列の輪郭状縞文が施されている。胴部無文帯と胴部文様帯とを区画する隆帯の上部に沿って、幅広の爪形文や波状波紋文が施されている。	砂粒・粗石 良好	表焼 現存率10%	内一において褐色 外一において褐色	表焼 現存率10% 口縁部～胴部上位 口縁部15%
			A (27.6) B (20.5)	平底で、口縁部は内側に傾いている。背面には、輪郭状波紋による横帯や緩位の条縞文が施されている。	砂粒・スコリア 普通	表焼 現存率20%	内一褐色 外一赤褐色	表焼 現存率20% 口縁部～胴部中位 口縁部30%
3	P 319	深鉢形土器	B 2.0 C 4.6	底部の中央に、直径1.5cm前後の波成前の穿孔が見られる。内部にはヘラミガキ、外面にはヘラケズリ整形が施されている。	砂粒 良好	表焼 現存率5%	内一褐色 外一褐色	表焼 現存率5% 胴部下位～底部 口縁部30%
	P 318	深鉢形土器 (加賀利EⅡ)	A 26.0 B 17.6	口縁部は浅く内側で開き、口縁には、上面にくぼみをもつ小さな山形状の小把手を4単位有している。口縁部に浅い1条の沈縫を巡らし、胴部の横位文様と区画している。口縁部は研磨されており、胴部には單節RLの継位の回転縞文を全面に施している。内外面に糊が付着している。	砂粒・スコリア 普通	D6e区出土 現存率30%	内一暗赤褐色 外一暗赤褐色	口縁部80%
2	P 200	高杯形土器	B 2.9	口縁部の外部に糊が付着している。背面には、丁寧なヘラミガキ整形が施されている。	砂粒・スコリア 良好 赤褐色	C6e区出土 現存率20%		口縁部破片
	P 313	深鉢形土器 (加賀利EⅡ)	A (16.8) B (13.8)	口縁は波状を呈し、口縁部には2列の円形刻文が施されている。胴部には地文に單節RLの継位の回転縞文が施され、2～3本の沈縫によって区画された跡消音がほぼ等間隔に巡らされている。	砂粒 良好	D5d区出土 現存率10%	内一褐色 外一において褐色	口縁部～胴部中位 口縁部20%
4	P 316	有孔鉢付土器 (加賀利E)	A (18.0) B (3.0)	肩部には、下方に突き出す隆帯が巡らされ、隆帯上には、上下に小孔が貫通している。	砂粒・スコリア 魚肝 内一浅灰褐色 外一灰褐色	D6e区出土 現存率5%		
	P 312	深鉢形土器	A (20.0) B (3.4)	肩部で矧ぎ、口縁部は浅く外張し、口縁部で外反している。口縁部は、内外面とも横ナナ字形が施されている。	砂粒 良好 褐灰色	D7e区出土 現存率5%	未調 口縁部破片	口縁部10%
6	P 314	土師形土器	A 24.3 B 3.8 C 23.4	底部から外張して立ち上がり、口縁部の内面に糊を有している。底部には補修孔が見られ、全体に糊が付着している。土師質で、内面には横ナナ字形が施されている。	砂母・砂粒 良好 内一褐色 外一黑色	D7g区出土 現存率10%	口縁部～底部 底部5%未調	口縁部破片
	P 197	深鉢形土器 (阿玉台Ⅱ)	B (26.8) C (8.7)	口縁部は、断面カマボコ状の隆帯によって、横位に三角形に区画されている。隆帯に沿って、幅広の爪形文が施されている。胴部に無文帯をもつている。胴部は、輪郭と胴下部を巡る2本の沈縫によって区画され、区画内には、山形状の隆帯が連続的に巡らされている。隆帯に沿って幅広の爪形文が施され、区画内には、沈縫や波状波紋文が施されている。胴下平部は無文で、底部外周はややくぼんでいる。	長石・右糞 良好	F5e区出土 現存率50%	内一において褐色 外一赤褐色	口縁部10% 底部100%

	P 315	脚付土器 (阿玉台)	B C	5.4 12.6	底部には、裾の開く長方形状の脚が付けられており、底部と胴部との境には棱が見られる。胴部は浅く内壁して立ち上がっている。	砂粒・長石 良好 にぶい赤褐色	F7es区出土 現存率5% 胴部下位～ 底部 底部 20% SI50 のP 80に類似
8	P 311	台付土器 (加曾利E)	B C	( 2.8) 6.4	底部はくぼみ、ナガ整形が施されている。	砂粒 良好 内一灰褐色 外一にぶい赤褐色	F7fs区出土 現存率5% 台部破片 底部100% 色
9	P 198	注口付 深鉢形土器 (加曾利E N)	A B	14.0 8.8	口縁部無文帯と胴部繩文施文帯とを区画する隆線に接して、やや上方に反る注口を取り付けている。胴部には、單節LRの極位の回転繩文を施している。	砂粒・スコリア 普通 内一灰褐色 外一にぶい橙色	F7fr区出土 現存率10% SI50のP128 に類似
10							



第131図 グリッド出土土器実測図（1）



第132図 グリッド出土土器実測図（2）

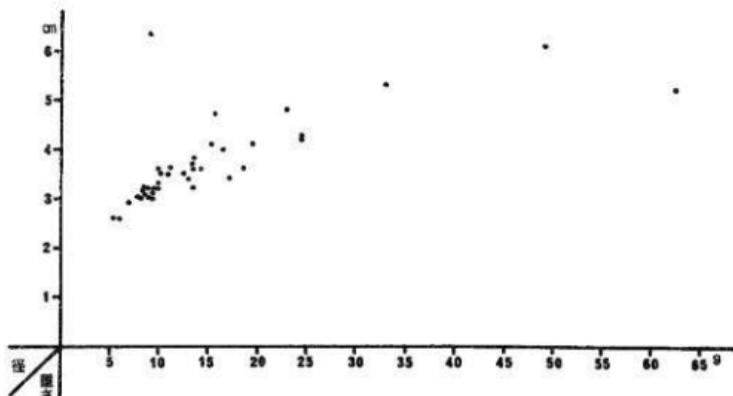
石塚古墳出土土器実測図（2）

## 第4節 その他の遺物

### 1 土製品

#### (1) 土製円板 (第136図)

土製円板は、総数40点出土している。そのほとんどが完成品で、欠損品は、わずかに3点である。平面形は、円形あるいは不整円形を呈するものが多く、2・9・11・16・27などは、その代表的なものである。他に、円形を基調とするよりも、むしろ方形に近い形のものとして、8・13・19・33・34などがある。この土製円板は、土器片を打ち欠いて整形するものであるが、当遺跡出土のものは、打ち欠いた後に研磨しているものが多い。土製円板の大きさは、直径3~4cmのものが多く、重さは、10g前後のものが多い。



第133図 土製円板の大きさと重量

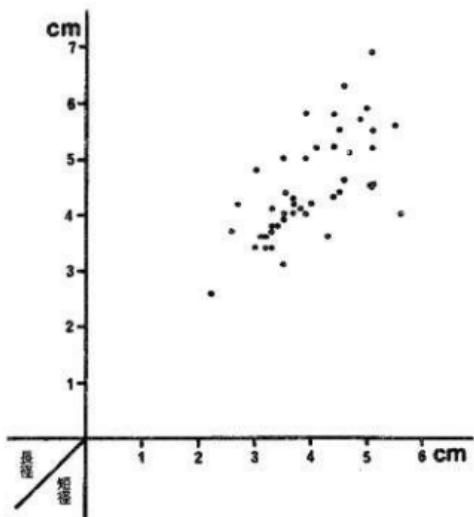
表1 土製円板一覧表

団板番号	固有番号	出土地点	大きさ			重量(g)	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
第136図-1	DP53	SI-5	4.0	4.1	1.35	19.5	縁部研磨
2	DP54	SI-11	4.0	4.1	1.0	15.4	
3	DP55	SI-13	3.7	3.4	1.0	13.4	縁部研磨

図版番号	固有番号	出土地点	大きさ			重量(g)	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
第136図-4	DP 56	SI-15	2.9	3.5	1.0	10.3	縁部研磨
5	DP 57	*	2.7	2.9	0.9	7.0	
6	DP 58	*	3.6	2.6	1.0	11.2	縁部研磨
7	DP 59	*	3.1	3.2	1.1	13.6	*
8	DP 60	*	3.2	3.0	0.9	10.0	
9	DP 61	SI-23	3.6	3.4	1.2	14.3	縁部研磨
10	DP 62	SI-34	3.8	4.2	1.4	24.4	*
11	DP 63	SI-36	3.5	3.5	0.9	12.5	
12	DP 64	*	3.2	2.9	1.1	9.0	縁部研磨
13	DP 65	SI-60	5.6	5.1	1.8	62.5	*
14	DP 66	SK-138	4.1	3.6	1.5	24.5	*
15	DP 67	C5ee	(2.2)	3.5	0.9	(7.2)	*
16	DP 68	C5e <sub>2</sub>	3.6	3.5	1.7	18.5	*
17	DP 69	*	3.0	3.2	1.0	8.5	
18	DP 70	C6e <sub>2</sub>	3.1	3.4	1.2	12.8	縁部研磨
19	DP 71	C6e <sub>2</sub>	3.2	3.1	0.9	10.0	*
20	DP 74	D5bs	3.5	3.5	0.9	11.0	
21	DP 72	D5bs	3.0	2.9	1.0	9.4	縁部研磨
22	DP 73	D5f <sub>2</sub>	4.0	3.9	1.1	16.5	
23	DP 75	D6a <sub>2</sub>	5.95	6.1	1.4	49.3	縁部研磨
24	DP 77	D6b <sub>2</sub>	2.6	2.4	1.0	6.0	
25	DP 78	D6c <sub>2</sub>	2.9	3.2	1.1	9.6	
26	DP 76	D6d <sub>2</sub>	3.0	2.9	1.0	8.2	縁部研磨
27	DP 79	D7e <sub>1</sub>	3.6	3.6	1.1	13.0	
28	DP 80	D7g <sub>1</sub>	2.8	3.0	1.2	9.2	縁部研磨
29	DP 81	D7i <sub>2</sub>	3.0	2.8	0.9	8.0	*
30	DP 83	E6f <sub>1</sub>	3.6	3.8	1.1	13.6	
31	DP 82	F6bs	4.7	4.0	1.05	15.6	
32	DP 85	F6ds	4.8	4.2	1.05	23.2	
33	DP 84	F6g <sub>4</sub>	3.4	3.2	1.3	17.2	
34	DP 86	表採	5.2	5.3	1.1	32.8	縁部研磨

図版番号	固有番号	出土地点	大きさ			重城(g)	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
図136図-35	DP 87	表 掘	3.1	2.9	1.0	8.4	
36	DP 88	*	3.6	3.3	1.0	10.0	縁部研磨
37	DP 89	*	(2.5)	2.9	0.7	(6.8)	*
38	DP 90	*	3.0	2.9	1.2	8.8	*
39	DP 91	*	2.6	2.4	1.0	5.7	
40	DP 92	Z	4.7	(2.9)	0.9	(11.6)	縁部研磨

(2) 土器片鍤 (第137図)

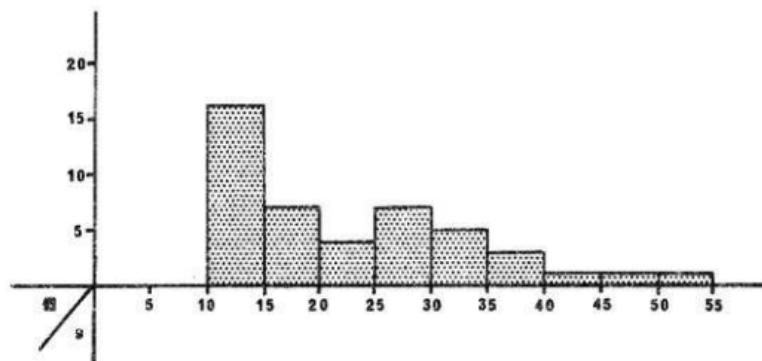


第134図 土器片鍤の大きさ

土器片鍤は、総数51点出土している。そのうち、欠損品は6点である。土製円板と区別のつきにくいものもあるが、基本的に、縁辺の一部に切り込みの認められるものを、土器片鍤として分類した。

平面形は、方形を呈しているものが多い。縁辺にみられる切り込みは、上下両端に2か所施されるものと、片側1か所だけに施されるものの、2種類がみられる。この切り込みは、意図的に施されたものだが、整形時につけた割れ目を、そのまま利用したと考えられるものもある。いず

れにしても、2か所に施されるのが一般的であったと思われる。なお、この切り込みが施される部位は、6・8・16・17・39・48のように、長軸方向の両端につけられるものが極めて多い。しかし、短軸方向に施されるものもあり、5・13・47などはこの例である。いずれの切り込みも浅く、狭いものである。大きさ・重さとも最大のものは17で、口縁部片を利用している。小形の土器片錐としては、7・8・22・26などがある。土器片錐として利用されている部位は、大部分が鶴部片であり、口縁部片を利用しているのは、前述の17の他に1があるだけである。



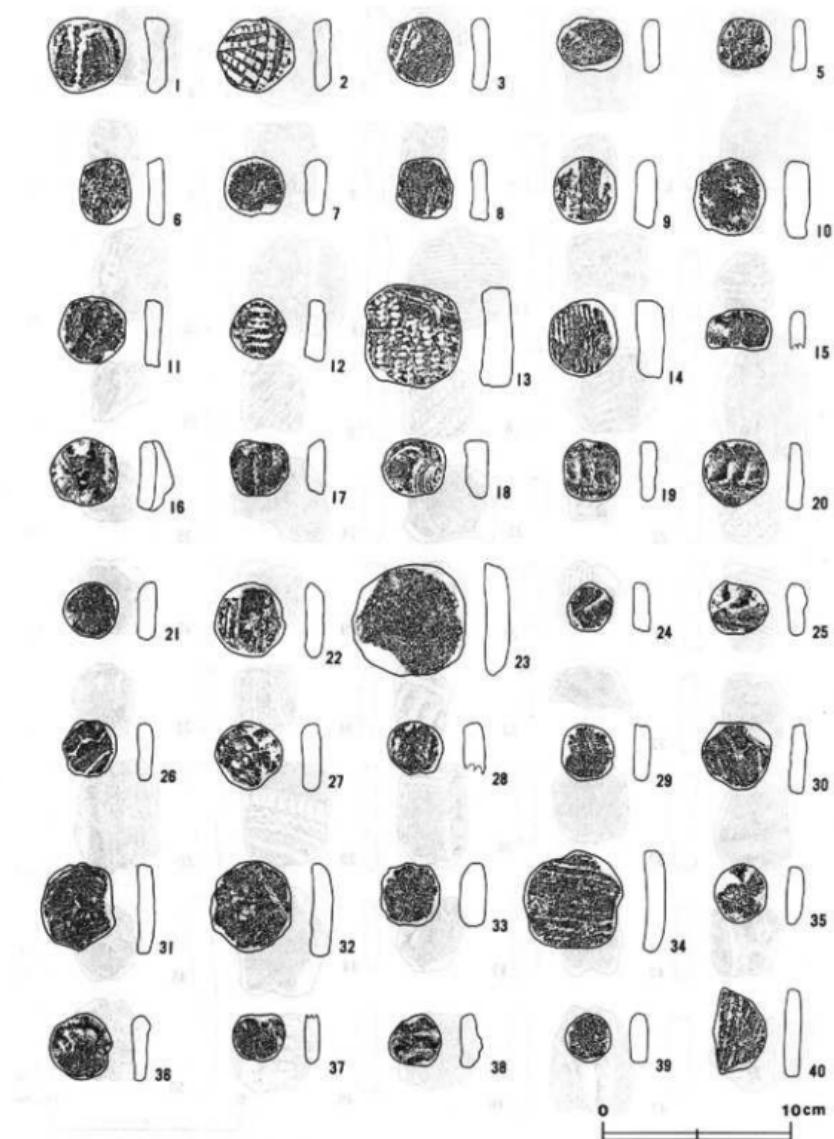
第135図 土器片錐の重量分布

表2 土器片錐一覧表

尾版番号	固有番号	出土地点	大 き さ	重 量(g)	抉 り 間 の 長 さ(cm)	形 状	備 考
長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm)							
第137回-1	DP 3	SI - 11 (3.6)	4.1 1.1 (17.0)	1.1 1.1 3.2	1.1 1.1 (正方形)	1.1 1.1 一部欠損。口縁部片	
	2	DP 4 SI - 15	5.5	4.5	1.1	25.4	5.2 長方形
	3	DP 5 *	3.4	3.3	1.0	12.5	3.0 正方形
	4	DP 6 SI - 24	5.2	5.1	1.6	34.5	4.3 台形
	5	DP 7 *	4.5	5.1	1.2	28.4	3.9 長方形
	6	DP 8 *	5.1	4.7	1.4	33.1	4.8 *
	7	DP 9 SI - 25	3.4	3.0	1.1	12.0	2.9 *
	8	DP 10 SI - 26	4.2	2.7	1.1	11.0	3.6 *
	9	DP 11 SI - 35	5.0	3.9	1.2	25.1	4.5 *

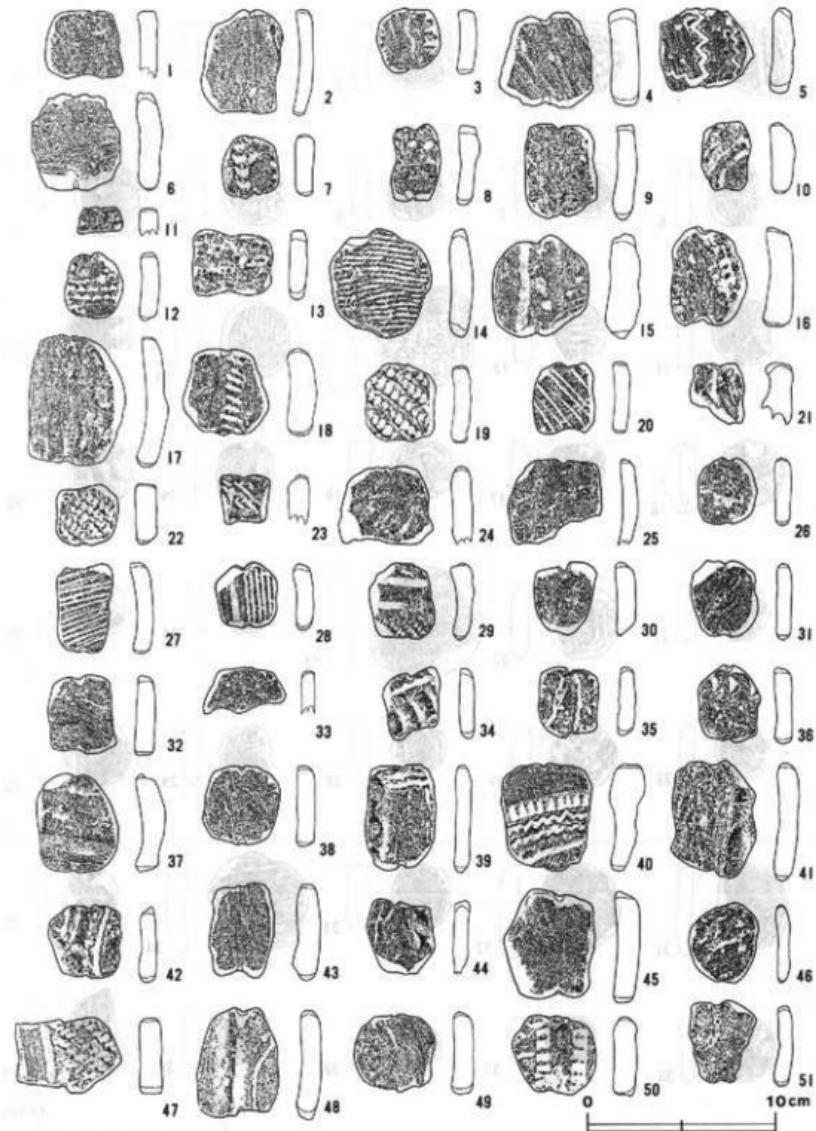
図版番号	川名番号	出土地点	大きさ			重量(g)	抉り間の長さ(cm)	形状	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
第137回-10	DP 12	SI - 36	3.7	2.6	1.4	13.4	3.4	長方形	
11	DP 13	*	(1.4)	2.5	1.0	(4.0)	1.2	不明	一部欠損
12	DP 14	SI - 39	3.6	3.1	1.1	11.5	3.1	長方形	
13	DP 15	SI - 40	3.6	4.3	1.0	16.0	2.9	*	
14	DP 16	SI - 62	(5.6)	5.5	1.5	(35.4)	5.4	円形	
15	DP 17	SI - 65	5.5	5.1	1.9	43.0	4.7	*	
16	DP 18	SI - 66	5.2	4.1	1.1	31.5	4.7	長方形	
17	DP 19	SK-120	6.9	5.1	1.8	53.1	6.5	*	上縁部欠
18	DP 20	SK-182	4.6	4.6	1.7	26.0	4.3	台形	
19	DP 21	SK-292	4.1	3.8	1.1	18.4	3.9	正方形	
20	DP 22	*	3.8	3.4	1.0	14.0	3.2	*	
21	DP 23	B7i*	(3.3)	(2.9)	1.8	(10.5)	2.7	(長方形)	一部欠損
22	DP 24	CSbs*	3.1	3.5	1.2	15.8	2.8	正方形	
23	DP 25	C5h*	2.6	(2.2)	1.2	13.6	2.2	(正方形)	一部欠損
24	DP 26	C6j*	(4.2)	5.1	1.2	(27.6)	3.9	(*)	*
25	DP 28	D5bs	(4.5)	5.1	1.1	19.6	3.3	(長方形)	*
26	DP 30	D5ce	3.6	3.2	0.9	10.6	3.2	長方形	
27	DP 29	D5dr	4.8	3.0	1.3	18.4	4.3	*	
28	DP 1	D5f*	3.4	3.2	1.0	11.3	2.9	正方形	
29	DP 27	*	4.0	3.5	1.3	14.6	3.8	長方形	
30	DP 31	D5i*	3.9	3.5	1.2	12.4	3.3	*	
31	DP 36	D6as	4.0	3.7	0.8	13.6	3.7	長方形	
32	DP 32	D6ce	4.2	3.7	1.2	20.0	3.7	*	
33	DP 33	D6dr	(2.7)	4.5	1.0	10.6		不明	一部欠損
34	DP 34	D6es	3.8	3.3	0.8	10.5	2.8	平行四辺形	
35	DP 37	D7ds*	3.7	3.3	1.1	13.4	3.1	正方形	
36	DP 39	E5f*	4.1	3.3	1.05	14.6	3.7	長方形	
37	DP 38	F6ar	5.2	4.4	1.6	29.4	4.9	*	
38	DP 40	F6hs	4.2	4.0	1.0	20.7	4.0	正方形	
39	DP 42	F7es	5.8	3.9	1.0	25.5	5.1	長方形	
40	DP 46	F7ds	5.7	4.9	1.9	48.2	5.4	*	

回収番号	固有番号	出土地点	大きさ			重窓(g)	抉り窓の 長さ(cm)	形 状	備 考
			長さ(cm)	幅 cm	厚さ(cm)				
第137図-41	DP 41	F7e <sub>3</sub>	6.25	4.6	1.2	31.4	5.6	長方形	
42	DP 43	F7i <sub>3</sub>	4.0	3.9	1.05	17.5	3.5	正方形	
43	DP 44	F7j <sub>2</sub>	5.0	3.5	1.5	25.7	4.5	長方形	
44	DP 47	F8g <sub>2</sub>	4.0	3.7	0.9	12.6	3.7	*	
45	DP 45	F9f <sub>2</sub>	5.9	5.0	1.4	37.6	5.1	*	
46	DP 2	H4i <sub>2</sub>	4.3	3.7	0.8	13.4	3.8	橢円形	
47	DP 48	表様	4.0	5.6	1.35	31.4	3.3	長方形	
48	DP 49	*	5.8	4.4	1.3	26.6	5.2	*	
49	DP 50	*	4.3	4.4	1.05	24.1	3.9	正方形	
50	DP 51	*	4.4	4.5	1.4	32.6	3.8	*	
51	DP 52	*	4.4	3.6	1.0	15.1	4.0	長方形	



第136図 土製円板実測図

高木実業社蔵土 調査ノ書

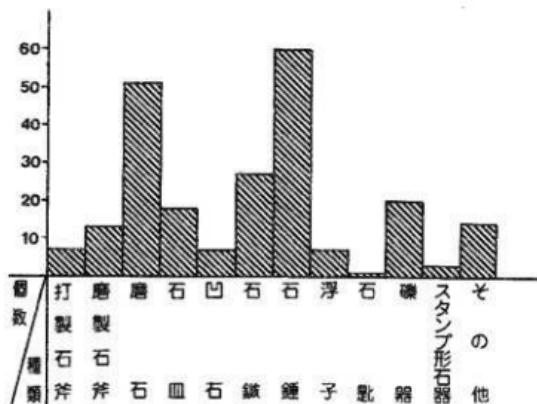


第137図 土器片錠実測図

昭和23年秋田土器研究会

## 2 石 器

当遺跡では、17種類、228点の石器が出土している。各種類毎の出土点数は、第138図に示したとおりである。最も多い石器は石錐の60点である。他に、磨石51点、石鏃26点、砾器21点、石皿19点、磨製石斧13点などがある。少數ではあるが、打製石斧、凹石、浮子、スタンプ形石器なども出土している。なお、個々の石器については、一覧表のとおりである。



第138図 石器の個数

### (1) 打製石斧 (第141図、第142図1)

本種は、7点出土している。これを、形態から分類すると、3種類に分けられる。

#### ○分銅形 (第141図1～5)

本種は、上下両端が張り出し、中央部両側面がくびれる形状の打製石斧である。いずれも、表面2面に調整痕が残されている。1や2の一部には、自然面も残されている。3は、打ち欠いて調整した後に擦った痕跡がみられる。5のくびれ部には、使用時にいたと思われる磨滅痕が認められる。1～5は、両端に小さな剝離痕があり、これは使用中にできたものと考えられる。

#### ○短冊形 (第141図6)

本種は、1点だけであり、上部の三分の一ぐらいが欠損している。調整は片面だけで、もう一方の面は、ほとんど手を加えず、自然面が大きく残されている。刃部は、小剝離痕や磨滅痕が残っており、よく利用されたことがうかがえる。

### ○乳棒状（第142図1）

本種は、乳棒状を呈する打製石斧である。片面の中央部に、自然面が大きく残り、他は側面も含めて打ち欠いて調整されている。基部に近い側面には、装着していた時にできたと思われるこすれたような磨滅痕が認められる。

### （2）局部磨製石斧・磨製石斧（第142図2～9、第143図1～5）

本種は、13点出土している。局部磨製石斧は、第142図の2の1点だけである。これらは、扁平な自然縁を利用したものと、いわゆる定角式の磨製石斧、及びミニチュア石斧に分類できる。

#### ○自然縁を利用したもの（第142図2・3・7、第143図3・4）

本種は、自然縁を利用して作られた石斧で、全面磨かれたものが多いが、第142図の2・7、第143図の4などのように、刃部とその周辺だけを磨き、他は自然面を大きく残すものも認められる。当遺跡出土の石斧では、基部と両側の縁部には、研磨痕がみられない。刃部は、第142図の7が直刃で、他はすべて円刃である。

#### ○定角式石斧（第142図4・5・6・8・9、第143図1・2）

本種は、両側縁及び基部が研磨されている石斧で、完存品は第142図の5と第143図の1の2点だけである。第142図の4は、極めてよく利用され、本来の研磨された刃部は残っておらず、大小の使用痕だけがみられる。6と8は、刃部だけが残り、他はすべて欠損している。6の刃部には剝離痕がみられるが、これは使用中に欠損したものと考えられる。9は、基部だけで、断面は隅丸方形を呈している。第143図の1は、全面がよく研磨され、刃部は、片刃の偏刃であり、剝離痕や磨滅が認められる。刃部が片刃で、しかも偏刃の形狀をもつのは、これ1点だけであり、他は、両刃で、かつ円刃である。2は、基部の約二分の一が欠損し、刃部だけが残っている。断面は、隅丸長方形で、刃部には、使用時に生じた剝離痕が認められる。

#### ○ミニチュア石斧（第143図5）

本種の出土は、1点だけである。基部の一部が少し欠けているが、ほぼ完形である。刃部及び両側の縁部は、ていねいに磨かれている。刃部には、小さな剝離痕が認められる。

### （3）磨石（第143図6～8、第144～149図、第150図1～5）

本種は、他種の石器と比べて多量に出土しており、総数51点である。もっとも、磨石としての単一機能だけが認められるものは少量で、そのほとんどは、凹石や敲石としても使用された痕跡をもつものである。最も多くみられる組合せは、磨石と凹石、磨石と敲石という組合せである。なかでも、前者の組合せは、平面形が正方形や円形の磨石に多くみられる。これらの磨石を、平面形から分類すると、次のようになる。

○円形のもの（第143図6、第144図6など）

本種は、11点認められる。この形状の磨石は、単一の機能だけに使用されることが多かったと思われる。第143図の6は、<sup>凹</sup>みや敲いた痕跡がなく、磨石としての機能だけが認められる。第148図の2、第150図の2などは、凹石としても利用されている。

○楕円形のもの（第145図5、第146図3、第147図4など）

本種は、欠損品も含んでいるが、総数24点が確認でき、これは、磨石全体の50%弱である。本種は、複数の機能をもつものが多く、磨石だけに使われているのは、第144図の5・7、第145図の1・2、第147図の2の5点である。他の磨石は、凹石の機能をもつものが多く認められる。凹みは、表裏2面の中央部にあるものが多い。凹みが側面にあるものは少なく、第145図の5だけである。これらの中には、第145図の5、第146図の3、第147図の4のように、外面が赤く焼けているものもある。第148図の5は、長軸方向の両端に敲いた跡が認められる。また、表面の中央部には、浅い凹みもあり、磨石、敲石、凹石の3種類の機能をもっていたことがわかる。

○正方形のもの（第143図8、第145図3、第148図1・8など）

本種は、8点出土している。磨石としての使用痕は、全面に残っているが、中でも、側面の使用痕は良好なものが多い。これは、表・裏面に凹みのあるものが多く、この面は凹石的な使われ方をしたとみられ、磨石としては、側面が多用された結果であろうと思われる。

○長方形のもの（第143図7、第146図6、第148図7など）

本種は、8点出土している。使用痕は、全面に残っているが、正方形のものと同様、側面がより多用されたことがうかがえる。特に、長軸に沿った面には、研磨痕が顕著に残されている。本種も、複数の機能を有しているものが多い。第148図の7は、表裏面・両側面・両端面の6か所に凹みが残されている。第149図の2は、表裏面・両側面の4か所に、凹みが残されている。このように、磨石と凹石の機能が組み合わされているものが多いが、第143図の7のように、両端に敲いた跡が認められるものもある。第143図の7、第146図の6は、磨石としての機能だけが残されている。

(4) 石皿（第150図6・7、第151～152図、第153図1～3）

本種は、18点出土しているが、すべて欠損品で、小さな破片が多い。皿部の使用痕をみると、表裏両面が使われているものと、片面だけのものがみられる。第150図の7、第151図の1は、両面が使われており、断面をみると、中央部に向けて磨滅し、薄くなっている。第151図の5・6や第152図の2は、片面だけに使用痕が残されている。石皿が破損した後に、凹石として再利用されたものが多く、14点に凹みが認められる。凹みは、2～5か所ぐらい残されるものが多い。第150図の7は、凹みが極めて多く、16か所も残されている。

#### (5) 凹石（第153図4～7、第154図1～3）

本種は、7点出土している。第154図の3を除いた6点は、自然礫を利用しておらず、表裏に凹みがつけられている。第153図の4・5は、小破片で、表面中央に1か所の凹みがみられる。7は長方形の礫を利用しておらず、二分の一強が欠損しているが、表面に2か所、裏面に1か所の凹みがみられる。第154図の1は、表・裏面のほか、側面にも凹みがつけられており、総数46か所も認められる。2は、板状の礫を利用しておらず、表面に6か所の凹みがみられる。3は、磨石にも使用された凹石で、表・裏面及び側面が磨かれており、凹みは、表・裏面の中央に、それぞれ1か所みられる。

#### (6) 石鎌（第161～164図）

本種は、26点出土している。そのうち、一部が欠けている石鎌は、11点である。形式的には、すべて無茎石鎌に属するもので、基部に抉りをもっている。第162図の1は、柳葉鎌と考えられ、基部がわずかに突起している。無茎石鎌は、形状から次のように分類できる。

○平面形が二等辺三角形をしており、基部の抉りが浅いもの

（第161図1～4・7～8、第162図2・6、第163図3、第164図1・2）

本種のうち第161図の1～4は、比較的細かい剥離が全面に加えられている。1及び2の先端部は欠損している。第162図の2は、側縁の一部に突起が残されている。第164図の1は、先端部が欠損しており、剥離痕は、比較的荒いものである。2は、先端部が細長くのびる形状の石鎌で、基部の両端は、鋭く尖っている。

○平面形が二等辺三角形をしており、基部の抉りが深いもの

（第161図5、第162図5、第163図4、第164図3～5）

本種のうち、第161図の5は、基部の片側が欠損しているが、側縁部は丁寧な剥離が加えられている。第162図の5は、当遺跡から出土した石鎌の中で最も大形のもので、長さ3.9cm、幅2.6cmあり、側縁部には浅いくぼみがみられる。また、基部の抉りも深く、鍔形鎌に似たものである。第163図の4は、側縁部にわずかな張りがみられる。基部の整形は、主に片面からの剥離によって調整されている。第164図の4・5は、全面に剥離調整痕がみられる。

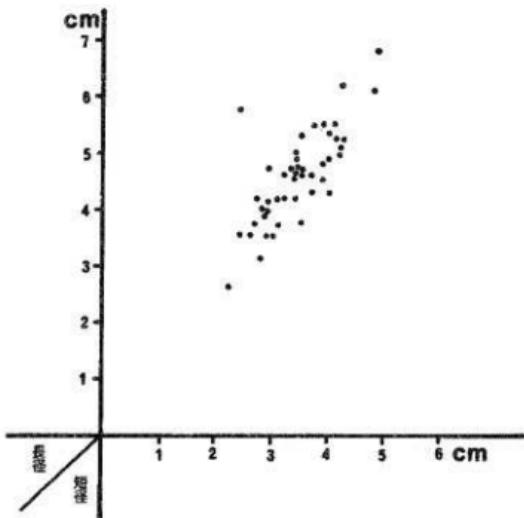
○平面形が正三角形あるいは、ハート形を呈するもの

（第161図6、第162図3・4、第163図1・2・5～7）

本種のうち、第161図の6は、基部が大きく欠損しているが、調整痕は全面にみられる。第162図の3・4は、荒い剥離痕が残され、基部の抉りは、浅いものである。第163図の1は、厚さが1.1cmあり、最も厚い石鎌である。2は、非常に小形のもので、調整痕は、基部だけにみられる。6・7は、幅広のハート形をしたもので、全面に剥離調整痕がみられる。

(7) 石錘 (第158~159図, 第160図1~7)

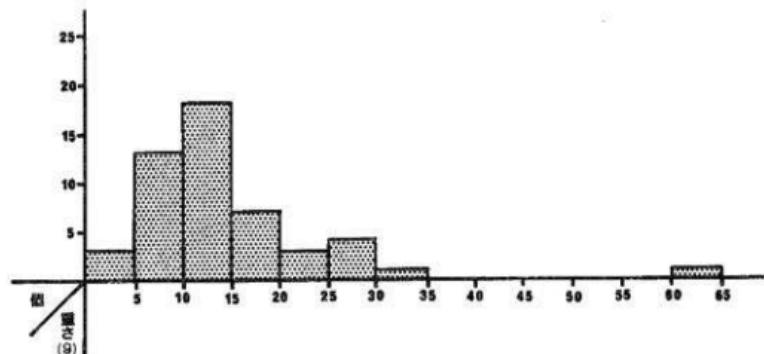
本種は、60点出土している。当遺跡の石錘は、すべて礫石錘に分類されるものである。これは、平面形が、楕円形あるいは長方形を呈する自然礫を利用し、両端に縦をかけるキザミ目が施されるもので、断面は、いずれも扁平である。キザミ目は、長軸に沿った両端に施されるものがほとんどで、「V」字状の剥離痕が認められる。第158図の15だけが、短軸に沿った両端にキザミ目が施されている。第139、140図は、石錘の大きさと重量分布を表示したグラフである。これをみると、石錘の長径は、3.5~5.5cm、短径は、2.5~4.0cmの範囲に集中している。最も大きいものは、第158図の15で、長径6.9cm、短径4.8cmである。重量分布は、5~20gの範囲に集中する傾向がみられる。なかでも、10~15gの間のものが最も多い。60~65gの石錘が1点みられるが、これは前述の第158図の15であり、大きさ、重量とも最大の石錘である。



第139図 石錘の大きさ

(8) 浮子・軽石 (第157図8~14)

本種は、7点出土している。すべて欠損品のため、詳細は不明であるが、11は端部に孔が一か所認められ、明らかに浮子と思われるものである。他の遺物は、浮子の一部と思われるものもあるが(10・13など)、欠損部が多く、形状や加工痕が明確でないため、軽石として取り扱った。



第140図 石錐の重量分布

(9) 石錐 (第165図 2 ~ 4)

本種は、3点出土している。2は、つまみ部から錐部にかけて、両側縁より剥離調整が加えられている。錐部の先端は、欠損している。3と4は、ブーメランに似た石錐で、2方向に錐部が作り出されている。錐部の調整は、側縁の両面から交互に剥離調整が加えられ、断面は、平行四辺形に仕上げられている。なお、錐部の太さは、片方が細身に作られている。

(10) 磨器 (第154図 4 ~ 7, 第155図, 第156図 2 ~ 4)

本種は、20点出土している。形状などは、いろいろであるが、整形技法から、大きく2種類に分けられる。

○楕円形や方形の自然縁の一部に剥離調整痕がみられるもの

本種は、磨器の中で最も多いものである。剥離調整痕は、縁の側縁部や端部の一部にみられるもの (第154図 4・6, 第155図 1・4・10, 第156図 1・3等) と、周縁のかなりの部分にみられるもの (第155図 3・5・6, 第156図 2・4等) がある。第154図の4は、左右の側縁部に連続的な剥離調整痕が残っており、サイド・スクレイパー的な機能を持っていたものと思われる。

○打製石斧に類似した形状のもの

本種は、比較的大形の磨器で、表裏2面に剥離調整痕が残っているものである。第154図の5及び第155図の9の2点がある。2点とも端部が欠損しているが、平面形は長楕円形を呈していたものと思われる。第155図の9は、比較的荒い調整により、刃が作り出されている。側縁部にも剥離痕が残されている。

(11) スタンプ形石器 (第156図 8 ~ 10)

8は、自然石の下半と側面の一部を打ち欠き、片手で握りやすいように加工されている。底面

の平坦部が、主な使用面であると思われる。断面は、三角形を呈している。9は、平面形及び断面形がともに三角形を呈する自然礫を利用したもので、敲いた痕跡が底面に残されている。また、側面と後線の一部には、擦痕がみられる。

(12) 砕石 (第156図7)

本種は、非常に小形の礫石で、長さ3.6cm、幅2.4cmである。使用痕は、側面に残されており、長軸方向に擦痕がみられる。

(13) 挖器 (第157図3・4)

3は、扁平な礫を素材として利用している。刃部は、片面調整が施され、磨滅している。4は、橢円形の剝片を利用したもので、刃部は片面調整が施され、裏面には、使用時に生じた剥離痕がみられる。

(14) 削器 (第157図5)

本種は、縦長剝片の側縁に、連続的な剥離調整を加え、刃部を作り出している。刃部は、弧状を呈しており、裏面には、使用痕が認められる。

(15) その他の石器 (第157図1・2・6・7、第165図1、第166図1)

1は、扁平な礫を利用したヘラ状の石器である。側縁の一部に剥離痕が残されている。2は、1と類似した形状の石器で、平坦な面に横方向の擦痕がみられる。6と7は、剝片である。6は、側縁の一部に片面調整による刃部がみられ、ナイフとしての機能が考えられる。7は、調整痕がみられない。第165図の1は、尖頭器に似た形状の石器である。先端部は、欠損しており、基部は、直線的に調整されている。第166図の1は、横形石匙である。つまみ部は、先端が尖っており、刃部は、直線的に調整され、一部に、使用時に剥離したとみられる痕跡が残っている。

表3 石器一覧表

図版番号	固有番号	器種	出土地点	大きさ			重量(g)	石質	備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
第141図-1	Q 90	打製石斧	SI - 34	11.4	5.3	2.2	163.0	片麻岩	PL39-1
2	Q 80	*	SI - 25	9.2	6.2	1.5	102.0	安山岩	PL39-2
3	Q 202	*	SI - 36	8.3	5.7	1.1	58.0	砂岩	PL39-3
4	Q 79	*	SI - 25	(10.1)	(7.7)	2.4	(162.0)	凝灰岩	PL39-4
5	Q 66	*	SI - 21	15.2	8.6	2.3	280.0	片麻岩	PL39-5
6	Q 67	*	*	(10.1)	(5.8)	2.4	(156.5)	砂岩	三分の一欠損 PL39-6

図版番号	固有番号	器種	出土地点	大きさ			重量(g)	石質	備考
				長さmm	幅mm	厚さmm			
第142図-1	Q 4	打製石斧	H1区	12.3	5.3	2.8	181.0	砂岩	PL39-7
2	Q 31	磨製石斧	SI - 15	6.0	3.4	1.4	36.0	安山岩	PL39-8
3	Q 29	磨製石斧	SI - 13	(3.2)	3.4	1.4	(17.0)	流紋岩	三分の二欠損 PL39-9
4	Q 13	*	SI - 6	(8.8)	5.3	2.5	(204.7)	練泥片岩	PL39-10
5	Q 62	*	SI - 11	(9.5)	4.9	3.5	(269.0)	*	刃部欠損 PL40-1
6	Q 72	*	SI - 24	6.5	5.8	3.7	155.0	砂岩	刃部のみ PL40-2
7	Q 69	*	*	6.5	3.0	0.8	20.0	頁岩	PL40-3
8	Q 85	*	SI - 26	(4.5)	5.3	2.0	(83.0)	砂岩	刃部のみ PL40-4
9	Q 133	*	SK - 460	(4.1)	3.8	3.1	(65.5)	*	基部のみ PL40-5
第143図-1	Q 204	*	C6f3	8.6	4.9	3.1	216.0	花崗岩	PL40-6
2	Q 144	*	D6f3	(6.3)	4.7	3.1	(125.0)	砂岩	三分の一欠損 PL40-7
3	Q 7	*	F2区	7.5	4.8	2.1	135.0	*	PL40-8
4	Q 8	*	H1区	7.9	4.4	1.9	99.0	*	三分の一欠損 PL40-9
5	Q 154	*	表抜	4.3	2.6	1.3	17.0	頁岩	ミニチュア石斧 PL40-10
6	Q 5	麻 石	SI - 1	7.7	7.1	4.3	352.0	安山岩	PL40-11
7	Q 60	*	SI - 8	9.1	5.1	3.1	217.0	*	融石併用 PL40-12
8	Q 18	*	SI - 9	(5.0)	6.0	5.4	(193.0)	*	凹石併用 三分の一欠損 PL40-13
第144図-1	Q 15	*	SI - 7	(6.5)	(5.7)	5.0	(153.0)	多孔質岩	三分の一欠損 PL40-14
2	Q 19	*	SI - 9	(5.4)	6.6	3.3	(175.0)	安山岩	三分の一欠損 PL40-15
3	Q 61	*	SI - 10	6.4	(10.5)	3.2	(345.0)	*	PL40-16
4	Q 20	*	SI - 11	(5.1)	(7.2)	5.9	(245.0)	*	PL41-1
5	Q 36	*	SI - 16	(8.0)	(5.1)	5.5	(260.0)	石英斑岩	三分の一欠損 PL41-2
6	Q 35	*	*	8.4	7.7	4.5	362.0	安山岩	PL41-3
7	Q 41	*	SI - 18	8.3	6.5	4.6	360.0	*	PL41-4
第145図-1	Q 43	*	*	9.3	6.9	4.5	372.0	石英斑岩	PL41-5
2	Q 55	*	SI - 23	11.2	8.2	4.9	715.0	安山岩	PL41-6
3	Q 68	*	SI - 21	6.9	6.6	4.5	340.3	安山岩	融石併用 PL41-7
4	Q 76	*	SI - 25	6.6	(6.0)	4.0	(148.0)	*	三分の一欠損 PL41-8
5	Q 54	*	SI - 23	10.0	7.3	4.1	440.0	アブライト	融石併用 PL41-9
6	Q 57	*	SI - 36	6.7	5.6	2.2	117.0	流紋岩	融石併用 PL41-10
第146図-1	Q 91	*	SI - 34	5.8	6.4	4.5	270.5	安山岩	融石併用 PL41-11

図版番号	民有番号	器種	出土地点	大きさ			重量(g)	石質	備考
				長さmm	幅mm	厚さmm			
第146図-2	Q 93	磨石	SI - 37	( 8.3)	( 5.3)	4.2	(234.0)	安山岩	PL42-1
3	Q 92	*	*	(11.2)	7.5	3.8	(408.0)	*	四石伊弉、焼けている PL42-2
4	Q 95	*	SI - 38	5.9	( 4.7)	3.9	(155.0)	*	四石併用 PL42-3
5	Q 99	*	SI - 50	( 5.2)	5.9	( 2.5)	( 87.0)	*	四石併用、二分の一欠損 PL42-4
6	Q 107	*	SI - 60	10.6	7.6	3.7	500.0	砂岩	PL42-5
7	Q 102	*	SI - 59	5.8	( 4.5)	3.8	(113.0)	流紋岩	二分の一欠損 PL42-6
第147図-1	Q 104	*	SI - 60	( 4.8)	8.1	4.2	(275.0)	安山岩	四石併用 PL42-7
2	Q 112	*	SI - 65	8.5	7.0	4.0	346.0	*	PL42-8
3	Q 109	*	SI - 62	10.5	5.7	3.7	377.0	流紋岩	敲石併用 PL42-9
4	Q 111	*	SI - 65	8.5	5.4	3.8	273.0	アブライト	四石併用 焼けている PL42-10
5	Q 114	*	SI - 66	9.9	8.7	5.6	600.0	流紋岩	PL42-11
6	Q 103	*	SI - 60	( 6.3)	5.5	( 4.9)	(230.0)	多孔質 安山岩	四石併用 PL42-12
第148図-1	Q 146	*	D6i4	7.1	6.3	4.1	207.0	安山岩	四石併用 PL42-13
2	Q 131	*	SK - 292	7.4	7.1	4.3	275.0	*	四石併用 PL43-1
3	Q 130	*	SK - 213	( 5.2)	6.5	3.2	(139.0)	*	PL43-2
4	Q 58	*	C5g7	6.2	6.7	4.3	288.5	*	四石併用 PL43-3
5	Q 149	*	E7i2	8.5	5.0	4.6	259.0	*	敲石併用 PL43-4
6	Q 151	*	F5b3	( 5.3)	7.1	4.5	(242.0)	多孔質 安山岩	四石併用 PL43-5
7	Q 138	*	C6j3	7.6	5.5	3.9	245.0	安山岩	四石併用 PL43-6
8	Q 150	*	E7i2	7.7	6.4	3.5	232.0	*	四石併用 PL43-7
9	Q 30	*	SI - 15	( 7.0)	( 3.7)	( 6.1)	(140.0)	*	三分の二欠損 PL43-8
第149図-1	Q 203	*	表採	9.2	8.2	3.5	445.0	*	四石併用 PL43-9
2	Q 168	*	*	7.0	4.7	4.2	204.0	多孔質 安山岩	四石併用 PL43-10
3	Q 166	*	*	( 7.5)	7.5	4.0	(338.0)	安山岩	PL43-11
4	Q 158	*	*	( 6.6)	( 5.2)	4.2	(205.0)	砂岩	四分の三欠損 PL43-12
5	Q 162	*	*	8.4	6.7	4.5	348.0	安山岩	PL44-1
6	Q 171	*	*	9.1	( 5.2)	4.1	(283.0)	*	PL44-2
7	Q 164	*	*	( 7.1)	7.3	3.5	(230.0)	*	四石併用 PL44-3
8	Q 169	*	*	5.9	( 5.7)	4.1	(200.0)	多孔質 安山岩	四石併用、二分の一欠損 PL44-4
第150図-1	Q 155	*	*	( 6.9)	6.9	4.7	(286.0)	安山岩	PL44-5
2	Q 165	*	*	5.6	5.2	3.7	168.0	*	四石併用 PL44-6

図版番号	固有番号	器種	出土地点	大きさ			重量(g)	石質	備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
第150図-3	Q 175	磨石	表抜	(5.8)	6.8	3.5	(198.0)	安山岩	PL44-7
4	Q 167	*	*	(7.5)	(6.2)	4.1	(245.0)	石英斑岩	三分の二欠損 PL44-8
5	Q 178	*	*	(6.0)	2.6	2.4	(49.0)	砂岩	敲石併用 PL44-9
6	Q 14	石皿	SI - 6	(16.4)	(8.0)	2.4	(440.5)	安山岩	PL44-10
7	Q 16	*	SI - 7	(13.2)	(12.8)	8.6	(590.5)	多孔質安山岩	くぼみ16か所 PL44-11
第151図-1	Q 34	*	SI - 16	(13.4)	(9.0)	5.9	(750.0)	安山岩	くぼみ5か所 PL45-1
2	Q 44	*	SI - 18	(12.2)	(8.6)	4.9	(540.0)	*	くぼみ4か所 PL45-2
3	Q 40	*	*	(7.1)	(5.1)	4.7	(198.3)	多孔質安山岩	くぼみ1か所 PL45-3
4	Q 52	*	SI - 19	(12.8)	(7.1)	(10.4)	(38.5)	*	くぼみ2か所 PL45-4
5	Q 71	*	SI - 24	(9.2)	(9.8)	4.8	(305.3)	*	くぼみ6か所 PL45-5
6	Q 73	*	*	(10.2)	(9.4)	3.7	(418.0)	安山岩	PL45-6
第152図-1	Q 82	*	SI - 26	(5.2)	(3.9)	2.9	(74.3)	*	PL45-7
2	Q 100	*	SI - 52	(10.3)	(9.5)	5.0	(500.0)	*	くぼみ3か所 PL45-8
3	Q 101	*	*	(6.3)	(6.2)	4.6	(194.6)	砂岩	くぼみ2か所 PL45-9
4	Q 56	*	SI - 36	(7.9)	(5.7)	5.6	(301.0)	安山岩	くぼみ1か所 PL45-10
5	Q 106	*	SI - 60	(6.0)	(8.7)	4.7	(210.3)	多孔質安山岩	くぼみ1か所 PL45-11
6	Q 113	*	SI - 65	(7.0)	(4.6)	5.6	(203.0)	安山岩	PL45-12
7	Q 115	*	SI - 66	(10.9)	(7.4)	3.5	(202.0)	多孔質安山岩	PL46-1
第153図-1	Q 128	*	SK-210	(9.9)	(10.2)	5.8	(720.0)	安山岩	くぼみ1か所 PL46-2
2	Q 129	*	*	(12.4)	(6.4)	(7.2)	(344.0)	*	くぼみ2か所 PL46-3
3	Q 147	*	E6at	(25.2)	(14.6)	6.4	3430.0	*	くぼみ3か所。焼けている PL46-4
4	Q 47	閃石	SI - 18	(4.5)	(4.6)	2.8	(74.5)	流紋岩	PL46-5
5	Q 98	*	SI - 43	(6.3)	(4.6)	5.5	(127.5)	多孔質安山岩	PL46-6
6	Q 108	*	SI - 61	(21.1)	(12.1)	3.5	(1070.0)	片麻岩	PL46-7
7	Q 89	*	SI - 34	(18.7)	(9.4)	5.5	(1050.0)	角閃片麻岩	PL47-1
第154図-1	Q 152	*	F7bs	(22.5)	(18.2)	11.5	(6900.0)	花崗岩	くぼみ46か所以上 PL47-2
2	Q 153	*	F7es	(10.5)	(9.9)	4.4	(368.5)	多孔質安山岩	PL47-3
3	Q 173	*	表抜	7.6	7.3	4.3	365.0	流紋岩	磨石併用 PL47-4
4	Q 17	礫器	SI - 9	7.3	5.8	1.4	87.5	*	PL47-5
5	Q 22	*	SI - 11	10.7	6.2	3.4	261.5	*	PL47-6
6	Q 37	*	SI - 16	5.6	4.8	0.7	23.0	*	PL47-7

図版番号	固有番号	器種	出土地点	大きさ			重量(g)	石質	備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
7	Q 45	種器	SI - 18	6.3	4.7	1.0	33.5	不明	PL47-8
第155図-1	Q 42	*	SI - 18	7.0	5.3	1.0	47.0	流紋岩	PL47-9
2	Q 50	*	SI - 19	8.2	5.0	2.1	86.0	砂岩	PL47-10
3	Q 51	*	*	8.1	5.2	1.5	87.0	*	PL48-1
4	Q 83	*	SI - 26	( 7.7 )	5.9	0.8	( 51.0 )	流紋岩	PL48-2
5	Q 97	*	SI - 43	4.6	4.1	1.2	20.0	粘板岩	PL48-3
6	Q 117	*	SK-104	5.1	4.5	0.9	21.3	流紋岩	PL48-4
7	Q 120	*	SK-134	6.5	( 3.9 )	( 1.3 )	( 37.0 )	*	PL48-5
8	Q 132	*	SK-340	4.8	( 2.5 )	( 1.0 )	( 12.0 )	*	PL48-6
9	Q 9	*	溝	8.8	9.8	3.1	370.0	頁岩	PL48-7
10	Q 134	*	SK-489	( 7.7 )	4.9	1.9	( 89.5 )	砂岩	PL48-8
11	Q 177	*	表様	( 3.5 )	5.8	1.0	( 21.0 )	流紋岩	PL48-9
第156図-1	Q 174	*	*	6.7	5.3	0.9	43.0	*	PL48-10
2	Q 160	*	*	7.2	5.8	1.1	47.0	*	PL48-11
3	Q 157	*	*	4.2	( 3.0 )	1.3	( 41.5 )	*	PL48-12
4	Q 156	*	*	6.1	5.1	1.2	45.0	*	PL48-13
5	Q 176	*	*	( 3.1 )	6.5	0.9	( 18.0 )	*	PL48-14
6	Q 163	*	*	( 4.3 )	5.9	1.2	( 41.0 )	*	PL48-15
7	Q 46	種石	SI - 18	3.6	2.4	1.4	13.0	凝灰岩	PL48-16
8	Q 124	スタンプ形石	SK-161	11.5	6.4	4.2	319.0	流紋岩	PL49-1
9	Q 105	*	SI - 60	10.5	6.4	5.3	358.0	粘板岩	PL49-2
10	Q 125	*	SK-161	( 8.0 )	( 6.9 )	5.0	( 370.0 )	流紋岩	PL49-3
第157図-1	Q 159	ヘラ状石器	表様	7.3	8.6	1.5	116.0	砂岩	PL49-4
2	Q 161	*	*	( 4.7 )	6.1	1.1	( 39.0 )	流紋岩	PL49-5
3	Q 172	種器	*	5.5	3.0	1.2	19.0	頁岩	PL49-6
4	Q 170	*	*	3.9	2.4	1.0	8.4	粘板岩	PL49-7
5	Q 118	削器	SK-104	7.5	2.9	1.4	24.0	流紋岩	PL49-8
6	Q 207	剥片	SI - 9	5.5	2.4	1.1	6.6	チャート	PL49-9
7	Q 3	*	SK-33	4.3	4.1	1.0	12.0	黑曜石	PL49-10
8	Q 25	種石	SI - 12	5.0	3.0	1.1	1.0	種石	PL49-11
9	Q 94	*	SI - 37	3.0	3.5	1.7	2.0	*	PL49-12

団版番号	埋有番号	器種	出土地点	大きさ			重さ(g)	石質	備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
第157回-10	Q 110	軽石	SI - 65	4.8	4.5	1.1	4.0	軽石	PL49-13
11	Q 64	浮子	SI - 18	7.4	5.7	1.2	4.0	+	PL49-14
12	Q 39	軽石	+	2.6	3.3	1.4	1.0	+	PL49-15
13	Q 26	+	SI - 12	3.1	4.2	1.4	2.0	+	PL49-16
14	Q 23	+	+	(3.1)	2.2	2.2	(1.5)	+	PL49-17
第161回-1	Q 221	石鏡	SI - 38	1.9	1.6	0.4	0.6	チャート	先端部欠損 PL50-1
2	Q 222	+	SI - 50	3.0	2.0	0.5	2.5	+	PL50-2
3	Q 223	+	SI - 52	(2.1)	1.8	0.7	(1.7)	黒曜石	PL50-3
4	Q 224	+	SI - 60	1.9	1.6	0.7	2.0	石英	PL50-4
5	Q 225	+	SI - 65	3.3	1.6	0.7	2.5	チャート	基部欠損 PL50-5
6	Q 226	+	SK-135	(2.1)	1.9	0.7	(1.5)	黒曜石	基部欠損 PL50-6
7	Q 227	+	SK-251	(2.0)	1.9	0.8	(2.4)	+	先端部欠損 PL50-7
8	Q 229	+	SK-289	2.5	1.6	0.5	1.0	チャート	PL50-8
第162回-1	Q 205	+	SI - 5	(3.8)	1.4	(0.6)	(2.6)	黒曜石	PL50-9
2	Q 206	+	SI - 8	2.7	2.1	0.8	3.3	+	PL50-10
3	Q 208	+	SI - 9	(2.0)	(1.9)	0.6	(1.2)	+	PL50-11
4	Q 209	+	SI - 10	(1.3)	1.4	0.4	(0.3)	+	PL50-12
5	Q 210	+	SI - 11	(3.9)	2.6	0.7	(4.4)	+	PL50-13
6	Q 211	+	+	(2.1)	1.5	0.5	(0.6)	+	基部欠損 PL50-14
第163回-1	Q 212	+	SI - 16	(2.8)	2.4	1.1	(3.8)	チャート	PL50-15
2	Q 214	+	SI - 17	(1.5)	(1.3)	0.3	(0.3)	黒曜石	PL50-16
3	Q 216	+	SI - 24	(2.9)	1.4	0.5	(1.6)	チャート	基部欠損 PL50-17
4	Q 218	+	SI - 26	(3.5)	1.7	0.5	(1.7)	+	PL50-18
5	Q 217	+	SI - 26	(1.8)	1.8	0.5	(1.0)	黒曜石	PL50-19
6	Q 219	+	SI - 36	(1.8)	1.9	0.5	(0.8)	チャート	PL50-20
7	Q 220	+	+	1.4	1.8	0.5	0.6	+	PL50-20
第164回-1	Q 230	+	C7iz	(2.2)	1.7	0.6	(2.4)	黒曜石	先端部欠損 PL50-21
2	Q 232	+	D6f*	3.4	2.1	0.8	3.5	+	PL50-22
3	Q 1	+	E4ha	2.5	1.4	0.5	1.0	+	PL50-23
4	Q 233	+	表抜	(2.1)	1.9	0.5	(1.6)	+	先端部欠損 PL50-24
5	Q 234	+	+	2.6	1.9	0.4	1.4	+	PL50-25

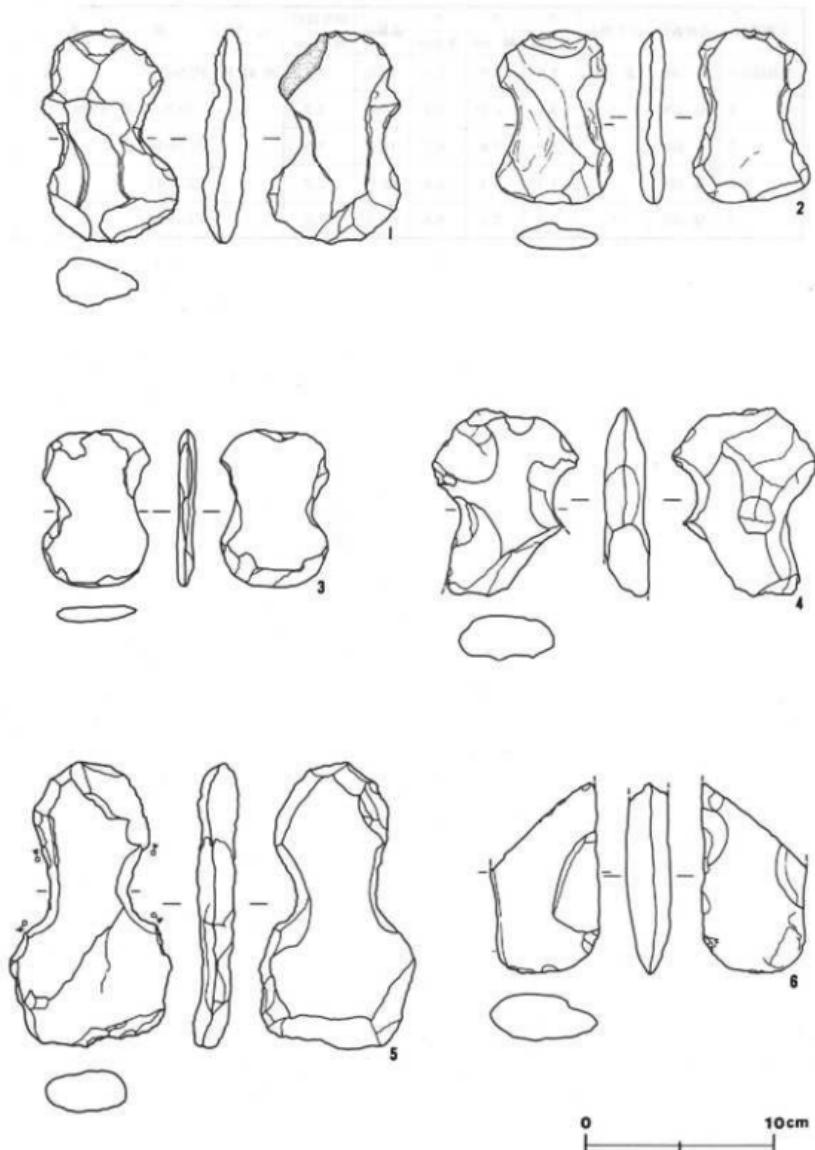
図版番号	固有番号	器種	出土地点	大きさ			重量(g)	石質	備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
第165図-1	Q 215	尖頭状石器	SI-21	(3.5)	2.4	0.7	(0.8)	黒耀石	PL51-1
2	Q 213	石錐	SI-16	(3.2)	1.3	0.3	(1.7)	チャート	PL51-2
3	Q 228	*	SK-267	(2.9)	(3.4)	0.5	(4.5)	黒耀石	先端部欠損 PL51-3
4	Q 231	*	D64	4.0	3.0	0.6	5.5	*	PL51-4
5	Q 2	石匙	H3区	4.0	5.7	1.2	13.3	砂岩	PL51-5

表4 石錐一覧表

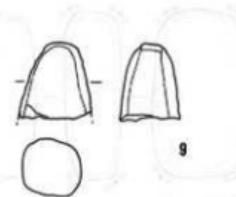
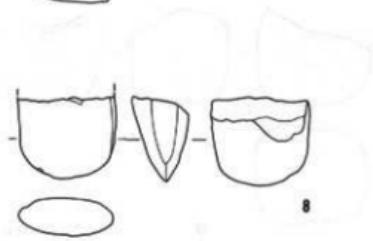
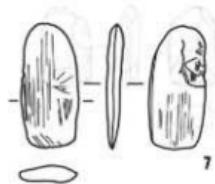
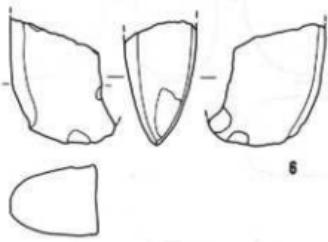
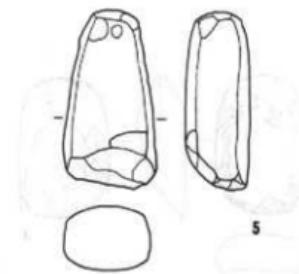
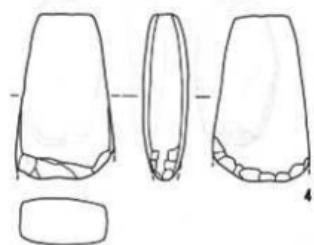
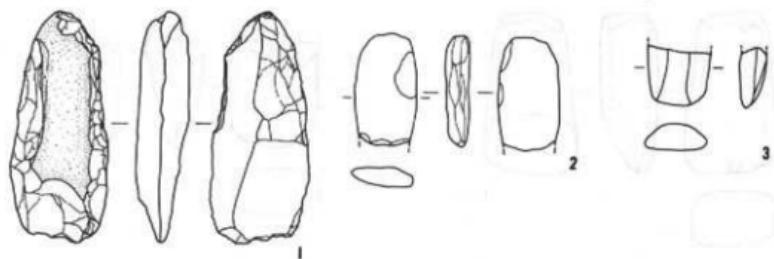
図版番号	固有番号	出土地点	大きさ			重量(g)	挟り間の長さ(cm)	石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
第158図-1	Q 12	SI-5	(5.4)	(6.5)	1.1	(40.0)	/	流紋岩	三分の一欠損 PL52-1
2	Q 24	SI-12	3.7	3.1	1.1	12.5	2.9	*	PL52-2
3	Q 32	SI-15	4.9	2.7	0.8	10.0	2.3	*	PL52-3
4	Q 63	*	3.7	3.5	0.8	10.0	2.9	*	PL52-4
5	Q 33	*	3.5	2.6	0.8	5.0	2.2	*	PL52-5
6	Q 38	SI-16	4.2	3.4	0.7	15.0	3.1	*	PL52-6
7	Q 48	SI-18	2.6	2.2	0.6	5.0	2.1	*	PL52-7
8	Q 49	*	4.1	2.7	1.2	19.0	2.3	*	PL52-8
9	Q 70	SI-24	4.2	3.2	1.0	19.0	2.9	*	PL52-9
10	Q 77	SI-25	4.5	3.4	1.0	13.0	3.1	*	PL52-10
11	Q 74	*	4.6	3.5	1.0	15.0	3.4	*	PL52-11
12	Q 75	*	4.7	3.5	0.7	15.0	3.0	粘板岩	PL52-12
13	Q 78	*	4.6	3.4	0.5	8.0	3.0	流紋岩	PL52-13
14	Q 81	SI-26	4.8	3.4	1.0	16.0	3.2	*	PL52-14
15	Q 84	*	6.9	4.8	1.3	65.0	6.8	安山岩	PL52-15
16	Q 86	*	3.5	2.9	0.6	8.0	2.5	流紋岩	PL52-16
17	Q 88	SI-28	4.0	2.8	1.0	15.0	2.5	*	PL52-17
18	Q 87	*	4.6	3.7	0.8	14.0	3.1	*	PL53-1
19	Q 96	SI-40	4.6	3.2	0.7	13.0	2.9	*	PL53-2
20	Q 116	SK-104	4.3	4.0	0.8	15.0	3.1	碧玉岩	PL53-3
21	Q 119	SK-118	4.1	2.9	0.8	10.0	2.7	流紋岩	PL53-4

図版番号	固有番号	出土地点	大きさ			重量(g)	抉り間の長さ(cm)	石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
第158図-22	Q 122	SK-147	5.0	4.3	1.1	26.0	3.7	流紋岩	PL53-5
23	Q 123	SK-161	(4.2)	(2.4)	(1.4)	(15.0)	/	*	三分の二欠損 PL53-6
24	Q 121	SK-138	5.3	4.1	1.1	25.0	3.0	砂岩	PL53- 7
25	Q 126	SK-165	5.5	4.1	1.0	29.0	3.9	流紋岩	PL53- 8
26	Q 127	SK-209	3.5	2.4	0.9	9.0	2.2	砂岩	PL53- 9
第159図-1	Q 136	B6ts	4.0	2.9	1.1	13.0	2.5	*	PL53-10
2	Q 137	C5ts	3.7	2.7	0.7	5.0	2.4	流紋岩	PL53-11
3	Q 139	C6js	5.3	3.5	1.2	18.0	2.7	*	PL53-12
4	Q 140	*	5.4	4.0	0.8	17.5	3.5	*	PL53-13
5	Q 141	D5hs	5.5	3.9	1.0	24.0	3.2	*	PL53-14
6	Q 143	D6es	6.1	4.8	1.1	30.0	4.1	*	PL53-15
7	Q 145	D6fs	5.5	3.7	0.9	15.0	3.2	*	PL53-16
8	Q 148	D7bs	4.7	3.3	0.9	13.0	3.7	*	PL53-17
9	Q 11	E7as	5.2	4.3	1.3	30.0	3.5	*	PL53-18
10	Q 200	表採	5.1	4.2	1.4	30.0	3.6	*	PL53-19
11	Q 197	*	4.9	4.0	1.1	25.0	3.3	凝灰岩	PL53-20
12	Q 198	*	5.8	3.4	0.5	15.0	3.0	流紋岩	PL53-21
13	Q 189	*	6.2	4.2	1.2	31.0	3.6	*	PL53-22
14	Q 192	*	5.0	3.4	0.8	16.0	3.0	*	PL54- 1
15	Q 142	D7bs	4.7	3.3	0.9	13.0	2.7	*	PL54- 2
16	Q 199	表採	(4.6)	3.4	0.5	(11.0)	3.0	*	PL54- 3
17	Q 194	*	4.5	3.9	0.5	10.0	3.3	*	PL54- 4
18	Q 187	*	3.5	2.9	0.9	13.0	2.5	砂岩	PL54- 5
19	Q 183	*	4.3	3.7	0.7	10.0	3.2	流紋岩	PL54- 6
20	Q 185	*	4.2	3.1	0.7	11.0	2.6	*	PL54- 7
21	Q 195	*	3.1	2.8	0.5	6.0	2.6	*	PL54- 8
22	Q 191	*	4.9	3.4	0.9	(12.0)	2.7	砂岩	PL54- 9
23	Q 193	*	4.8	(3.9)	0.7	(12.0)	/	流紋岩	三分の一欠損 PL54-10
24	Q 196	*	3.5	3.0	0.8	9.5	2.7	*	PL54-11
第160図-1	Q 182	*	4.2	2.7	1.0	10.0	2.4	*	PL54-12
2	Q 181	*	3.9	2.8	0.7	6.0	2.6	*	PL54-13

図版番号	固有番号	出土地点	大きさ			重量(g)	抉り面の長さ(cm)	石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
第160回-3	Q 188	表 探	3.5	2.9	1.0	11.0	2.5	流紋岩	PL54-14
4	Q 179	*	(3.0)	(4.1)	0.8	(10.0)	3.7	*	二分の一欠損 PL54-15
5	Q 180	*	3.9	2.8	0.7	10.0	2.5	*	PL54-16
6	Q 186	*	(4.1)	3.4	0.8	(11.0)	2.2	*	PL54-17
7	Q 201	*	3.9	2.6	0.8	9.0	2.6	*	PL54-18



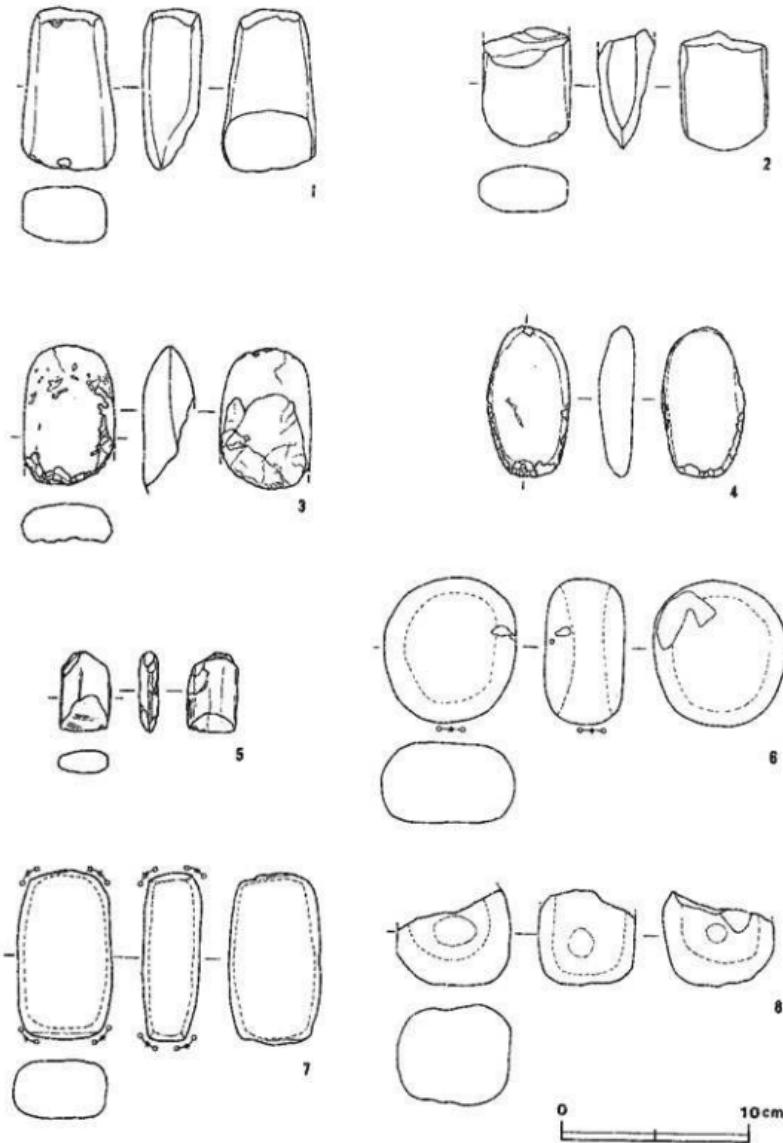
第141図 石器実測図(1)



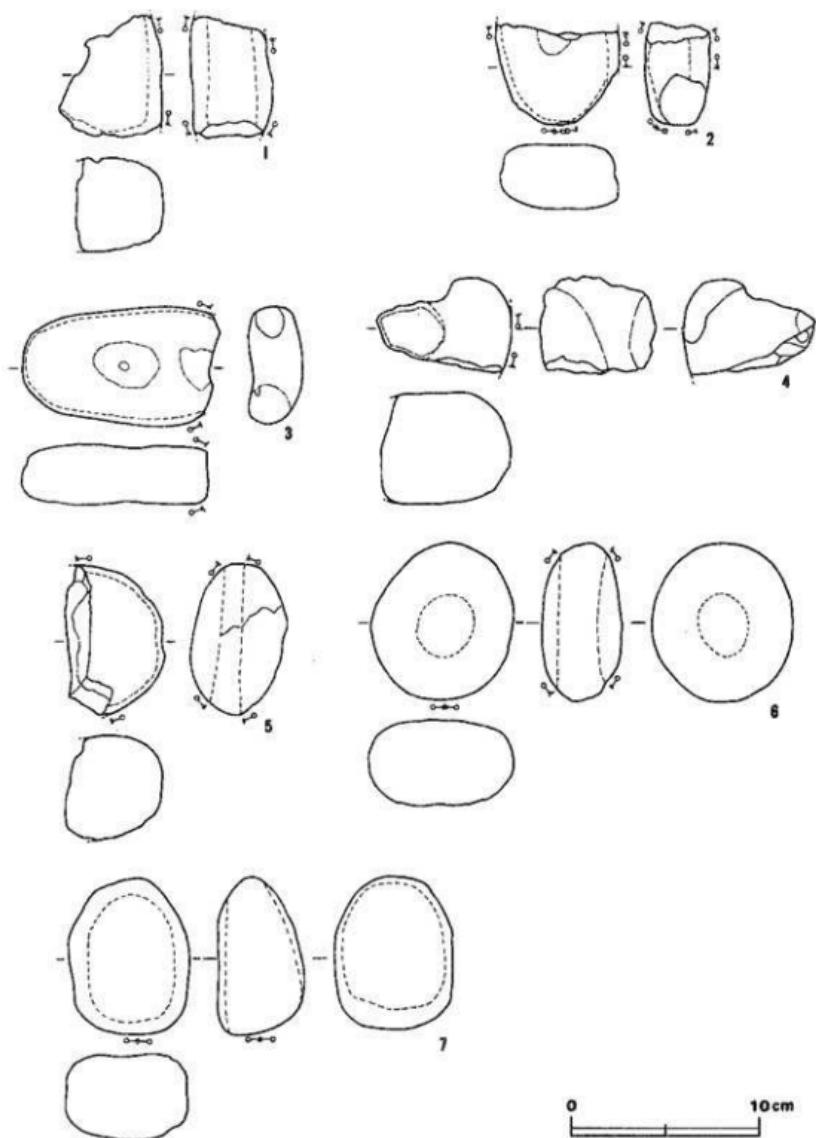
0 10cm 3.50

第142図 石器実測図(2)

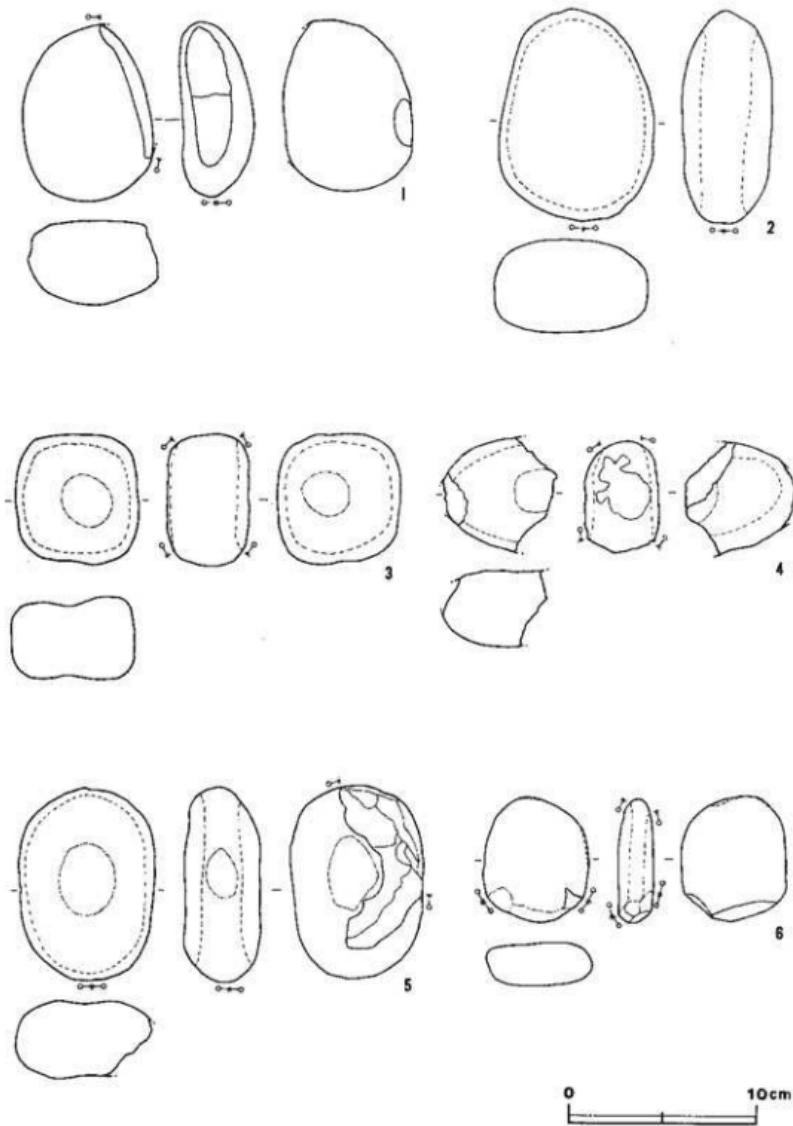
(1)・(2)・(3)・(4)・(5)・(6)・(7)・(8)・(9)



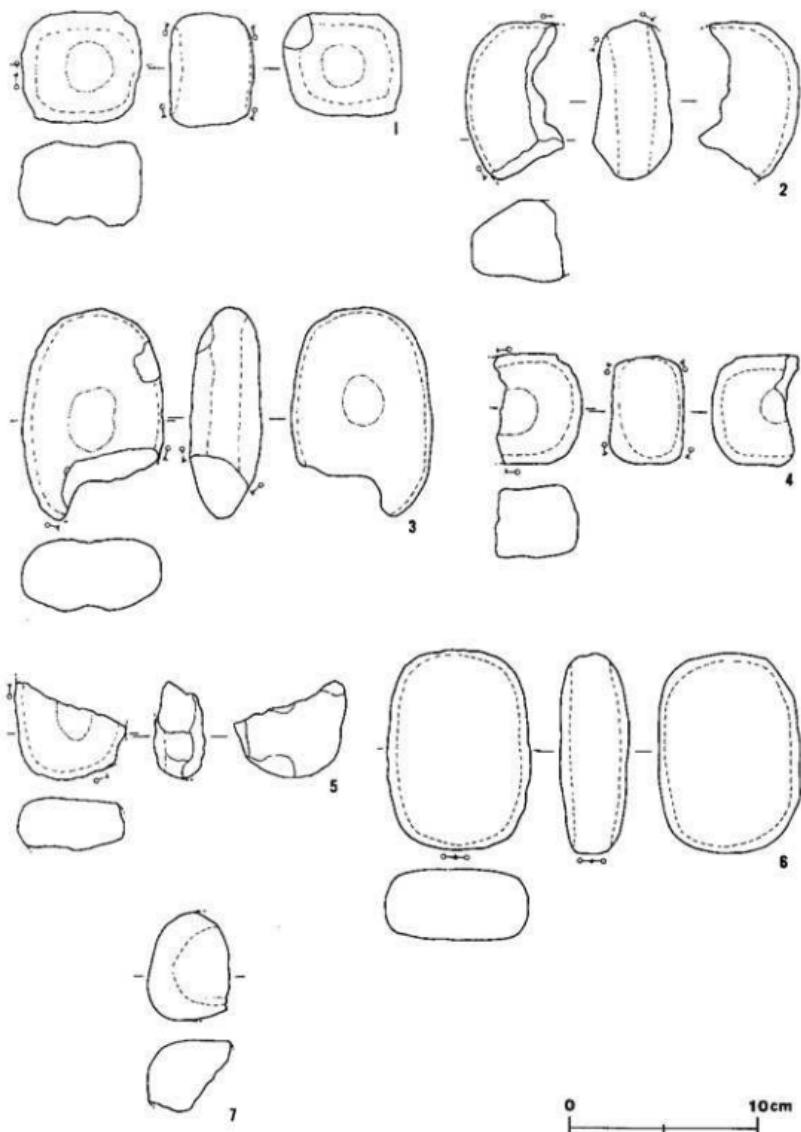
第143図 石器実測図(3)



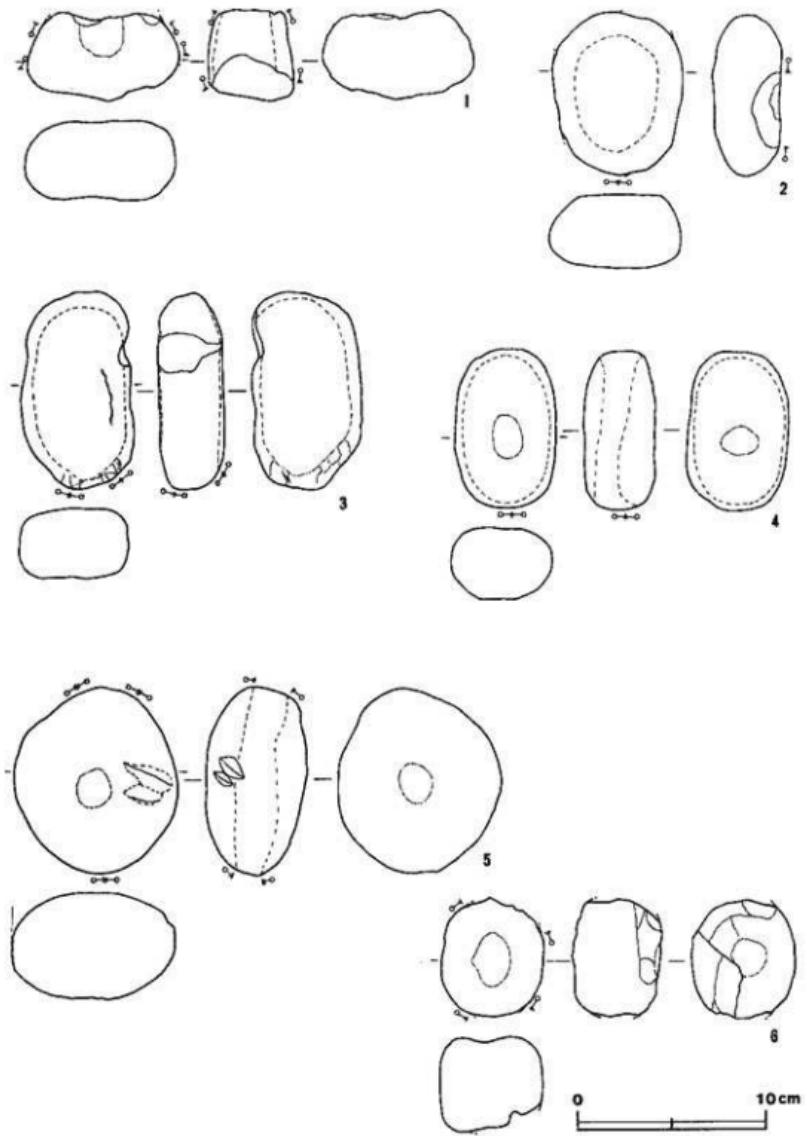
第144図 石器実測図 (4)



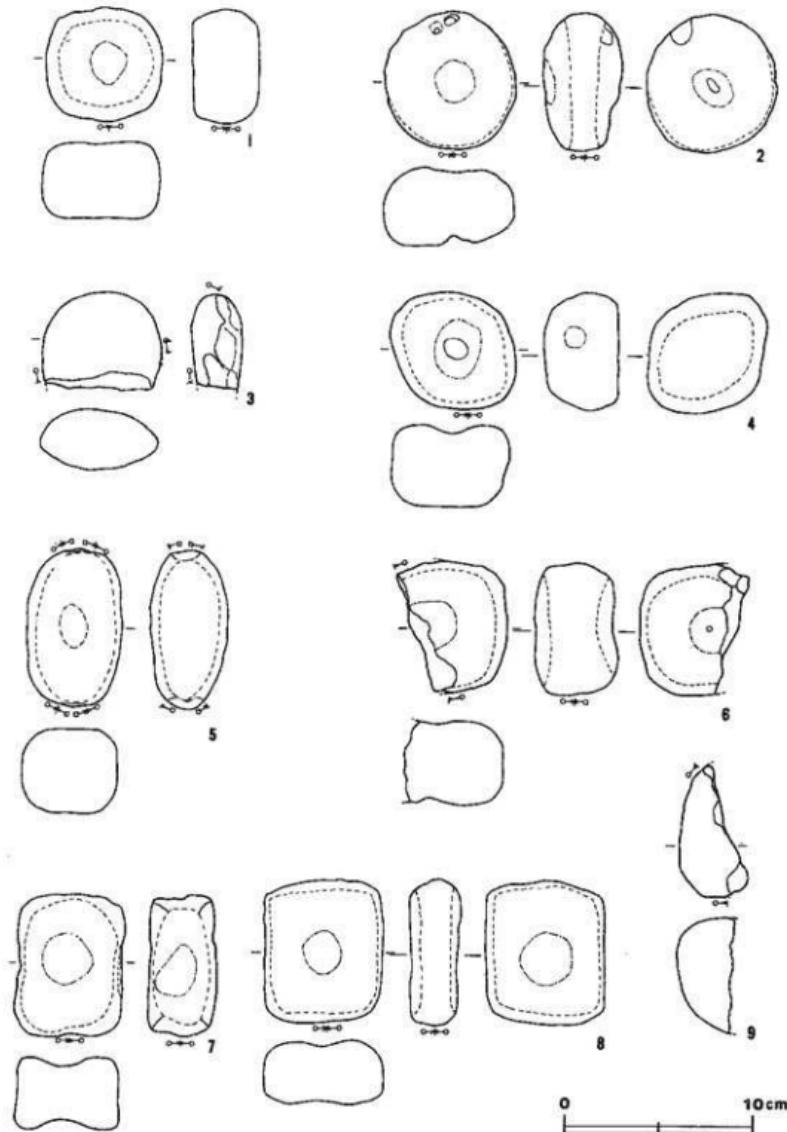
第145図 石器実測図(5)



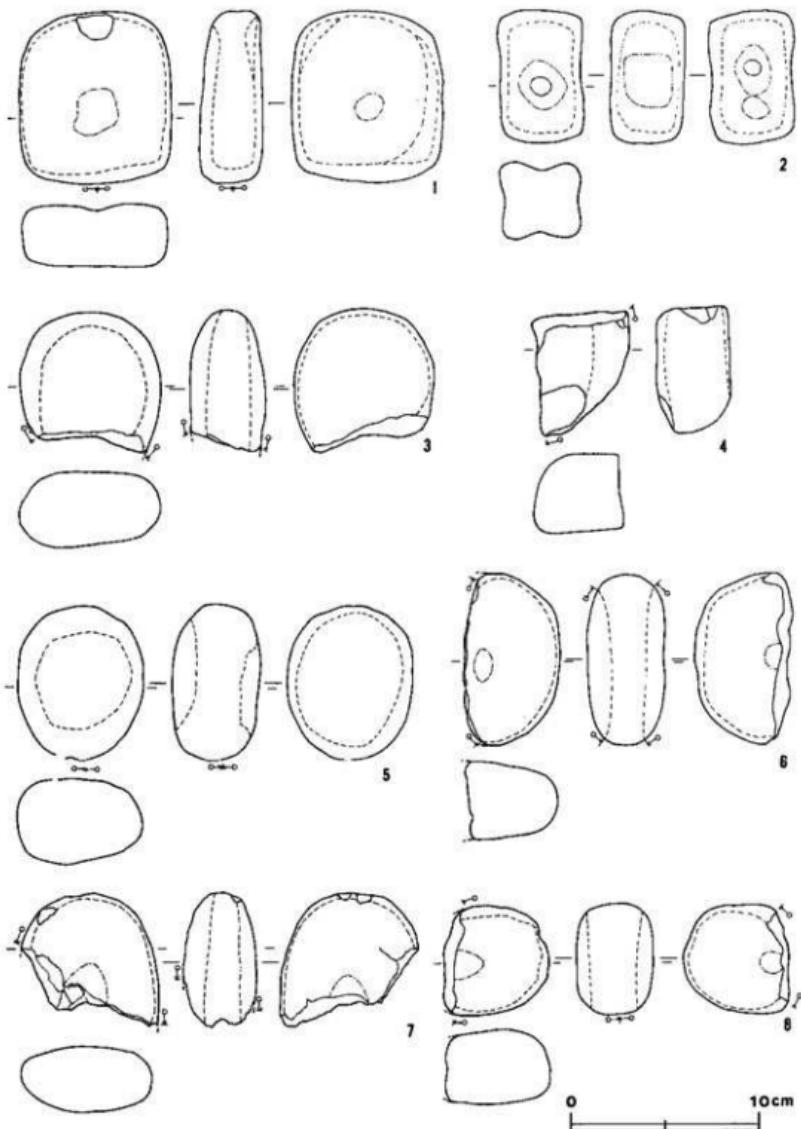
第146図 石器実測図(6)



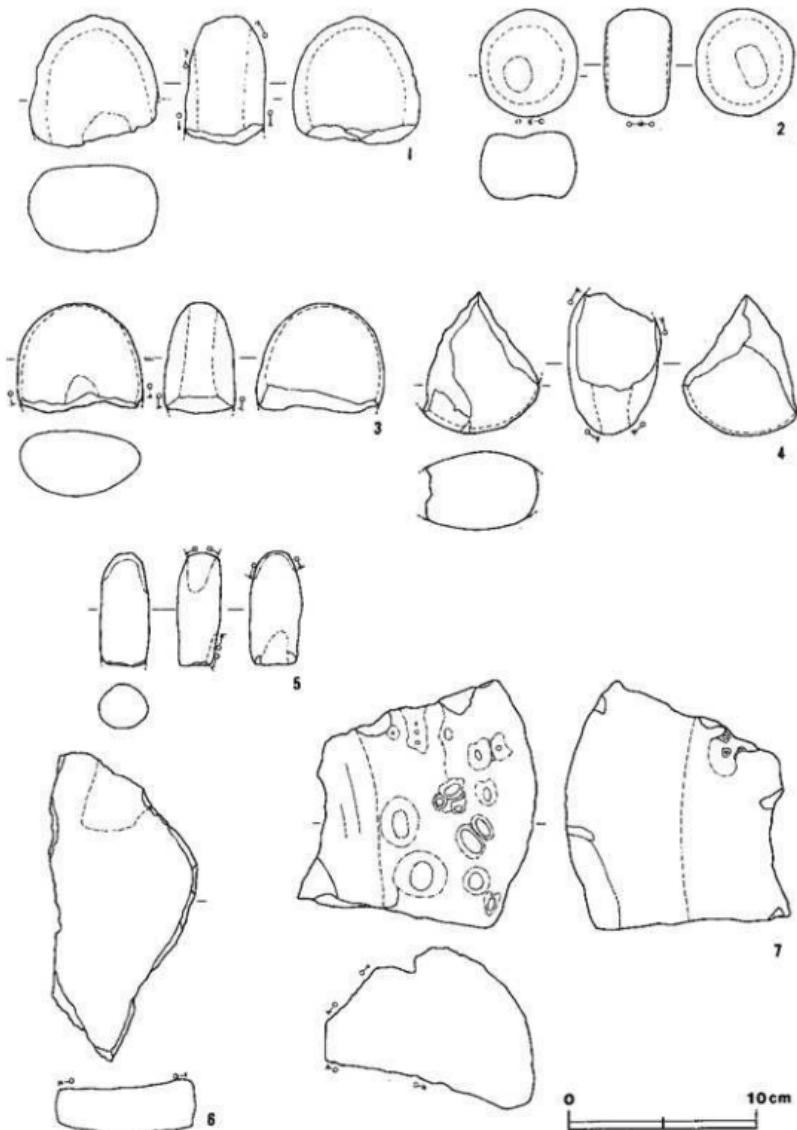
第147図 石器実測図(7)



第148図 石器実測図(8)



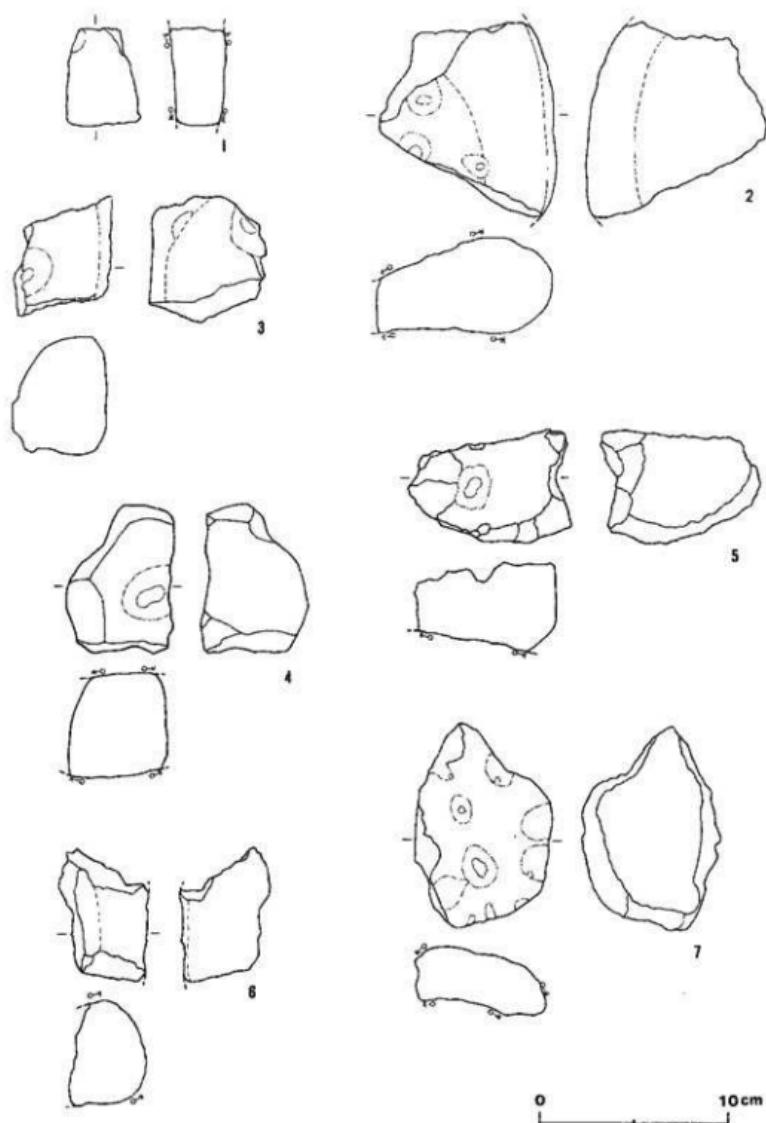
第149図 石器実測図(9)



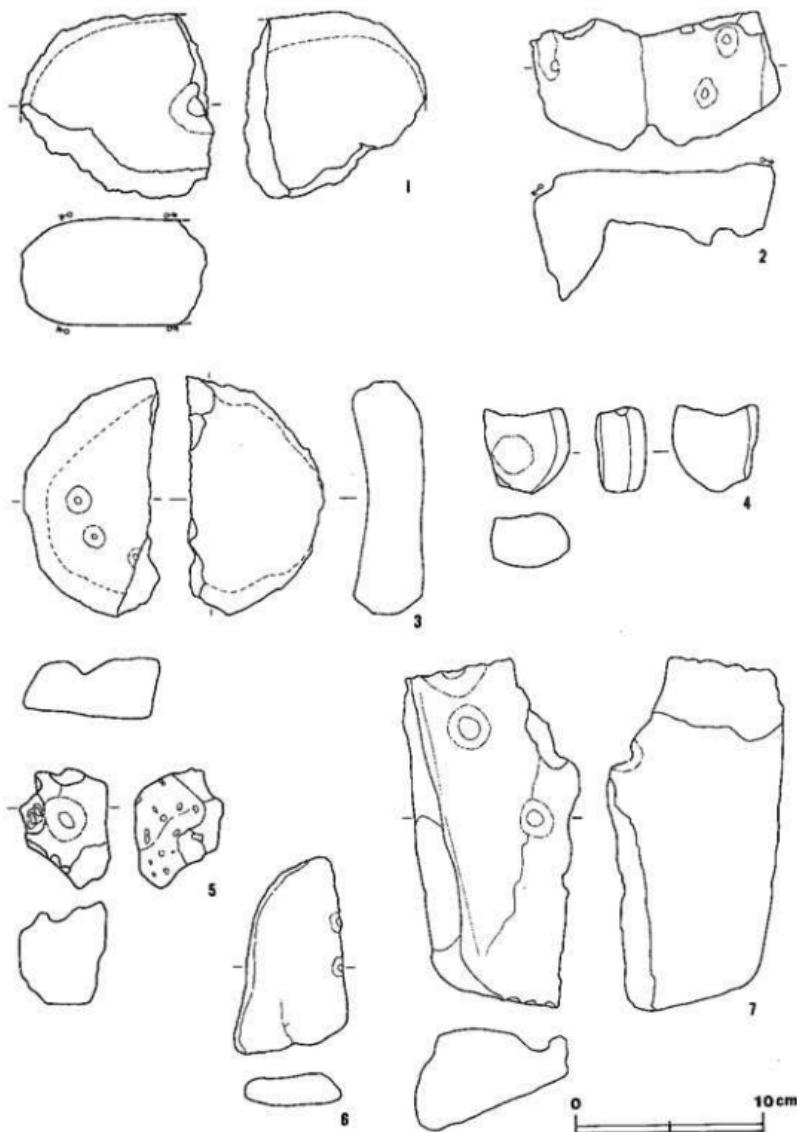
第150図 石器実測図(10)



第151図 石器実測図(11)



第152図 石器実測図(12)

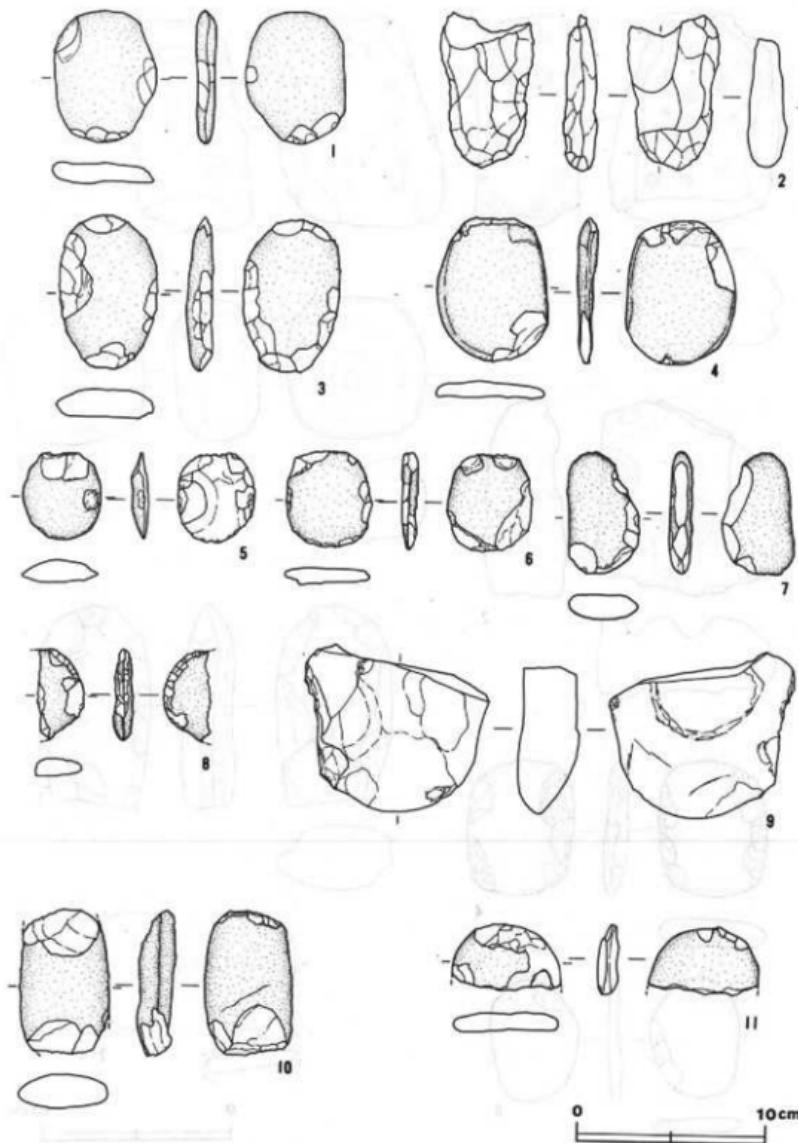


第153図 石器実測図(13)



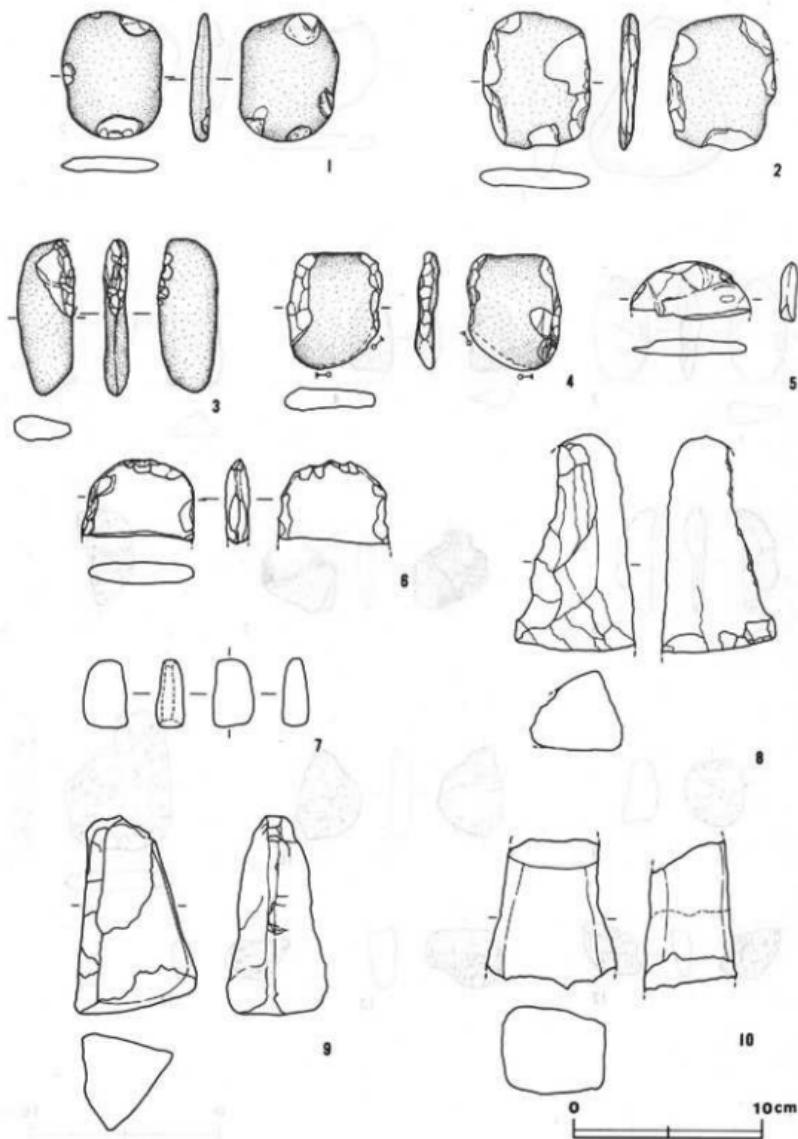
第154図 石器実測図(14)

複合石刀実測図 (14) (14)



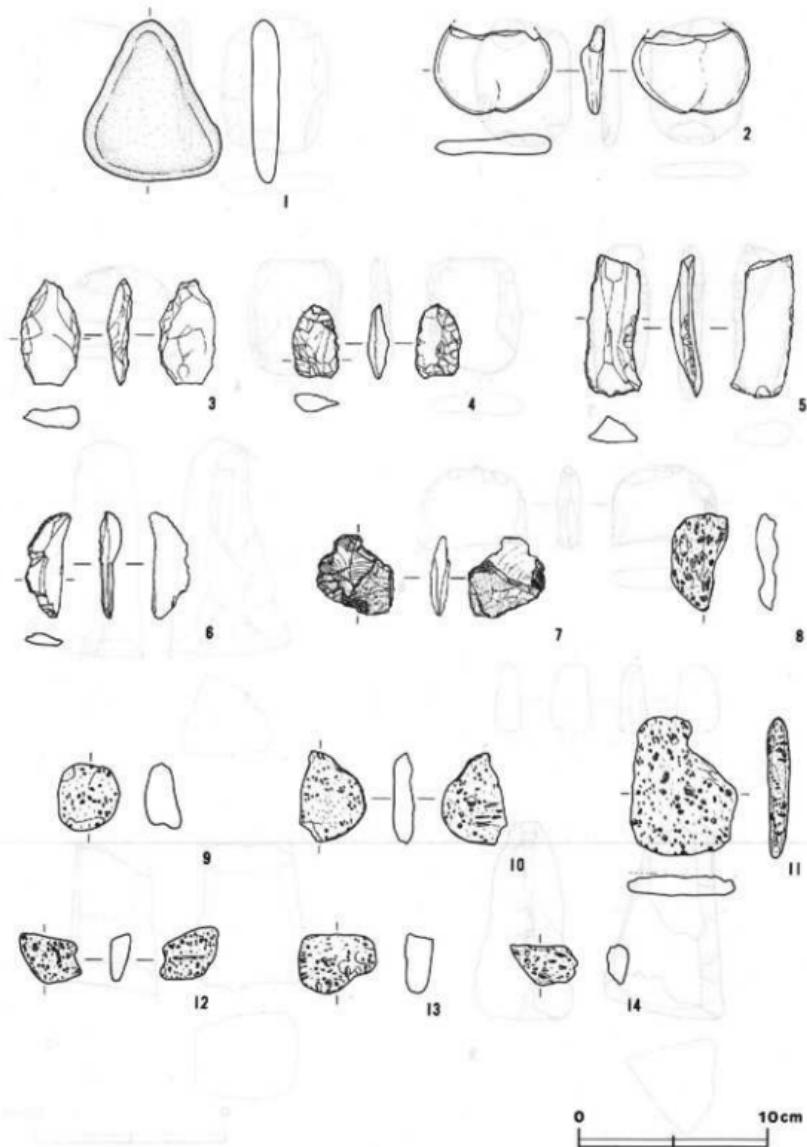
第155図 石器実測図(15)

[15] 実測実測図(15)



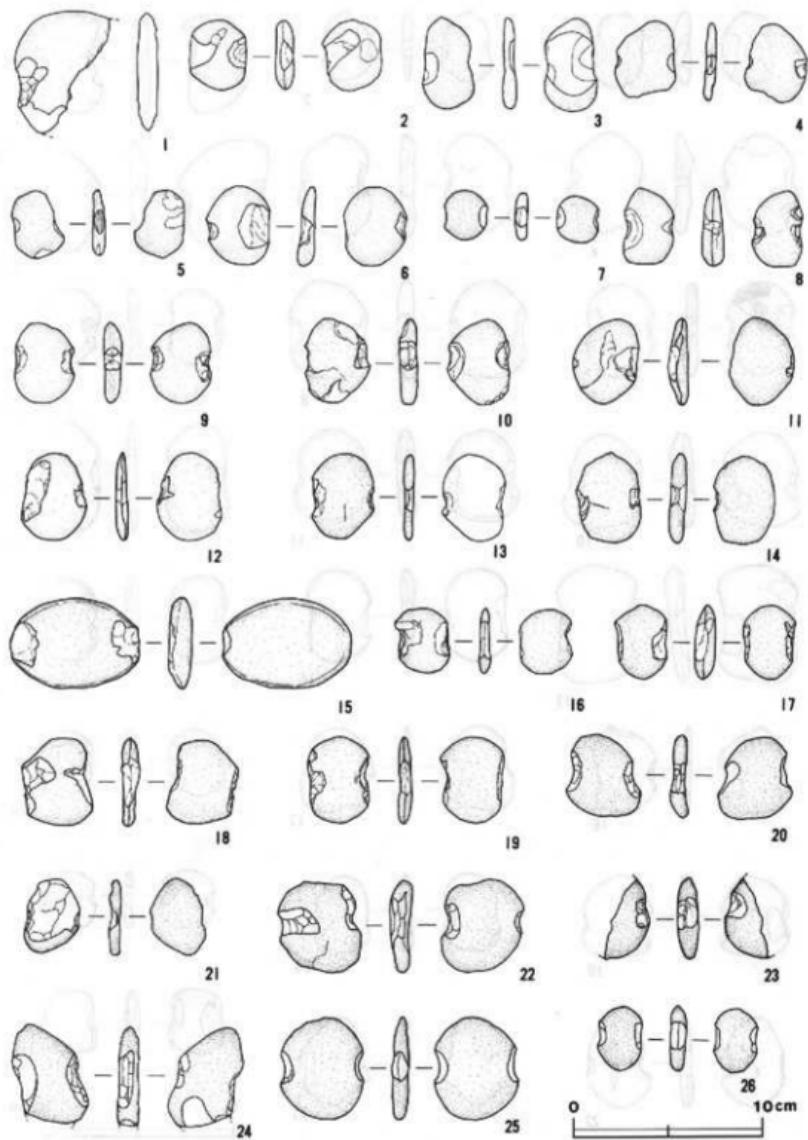
第156図 石器実測図(16)

新石器時代後期のもの



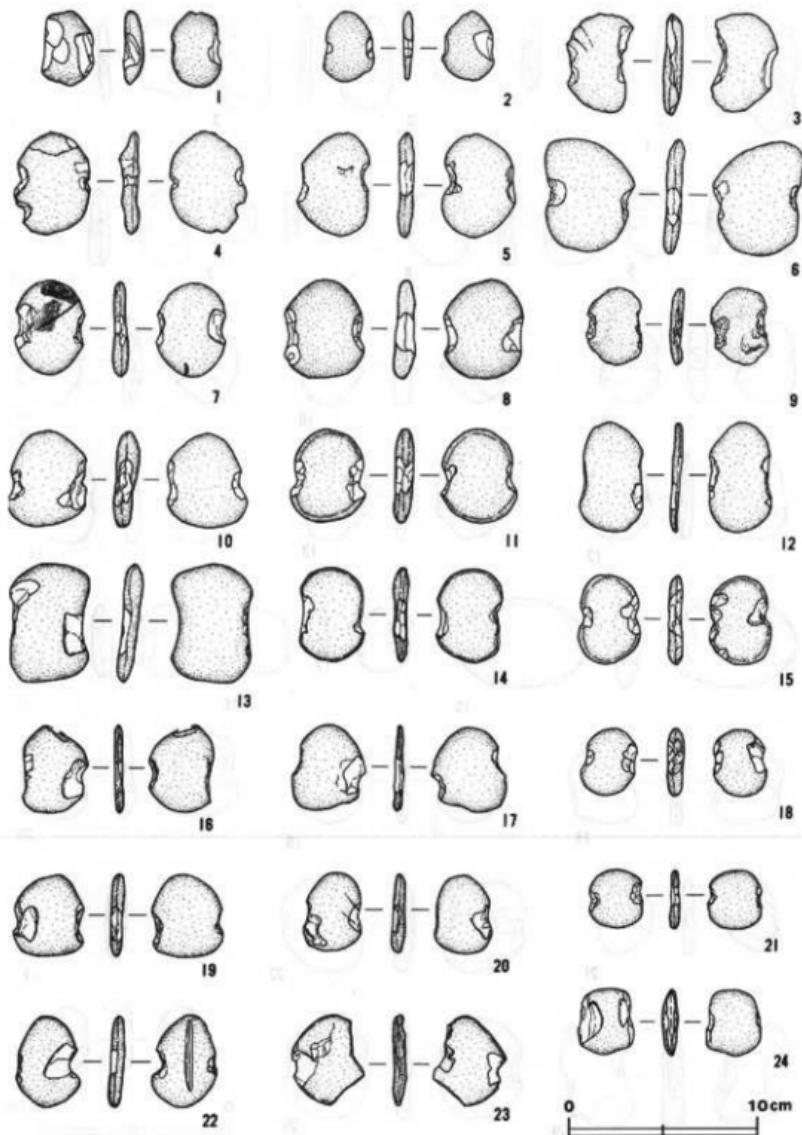
第157図 石器実測図(17)

(1) 四輪車頭石 (2) 骨刀



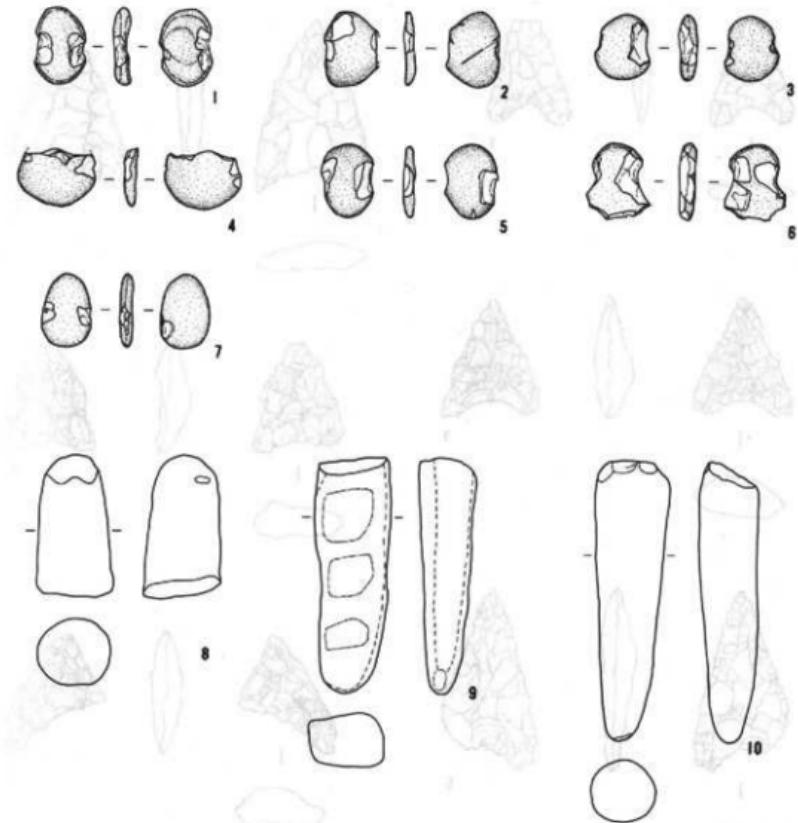
第158図 石器実測図(18)

（出所）前川義典著「縄文文化」



第159図 石器実測図(19)

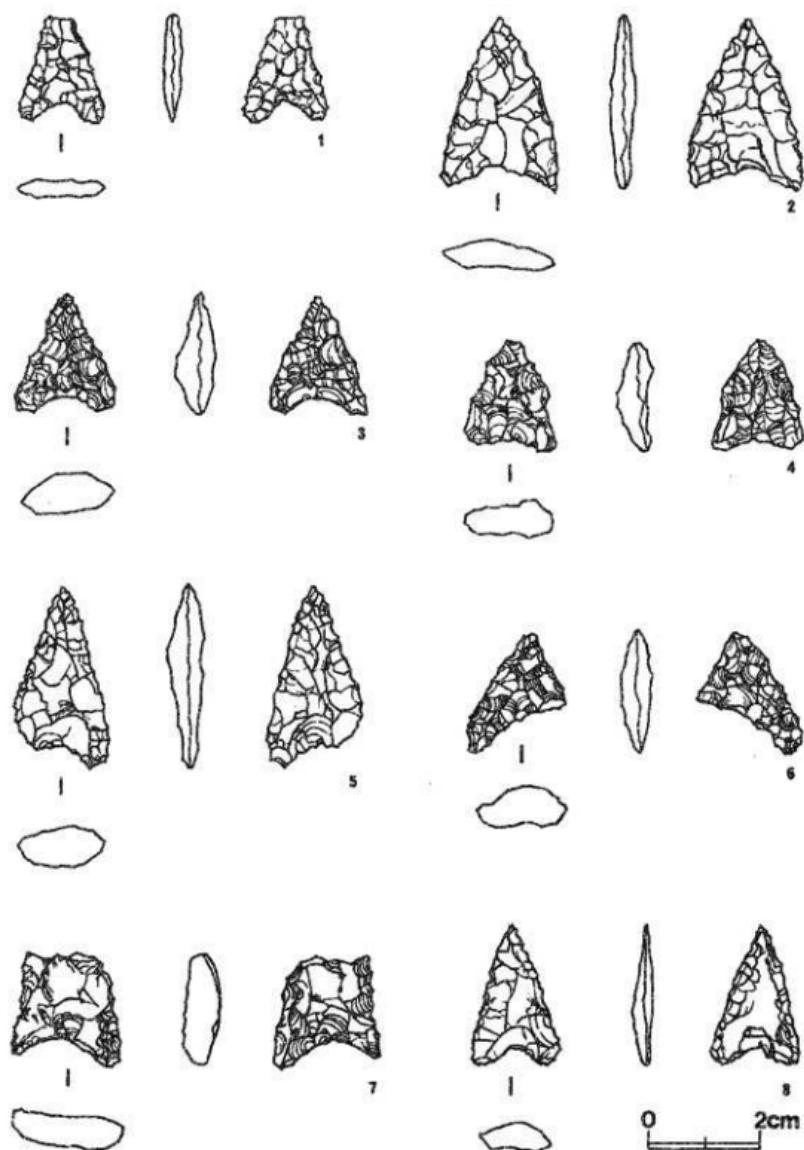
出典: 国立民族学博物館



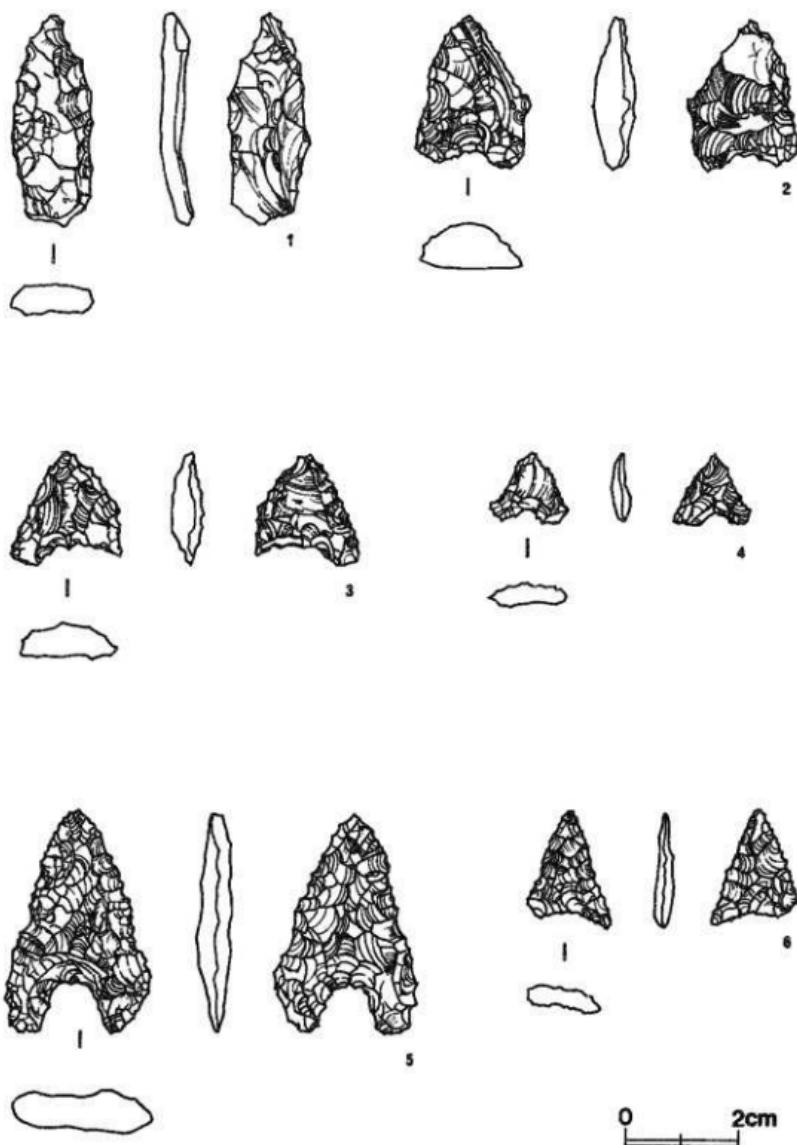
第160図 石器実測図(20)

0 10 cm

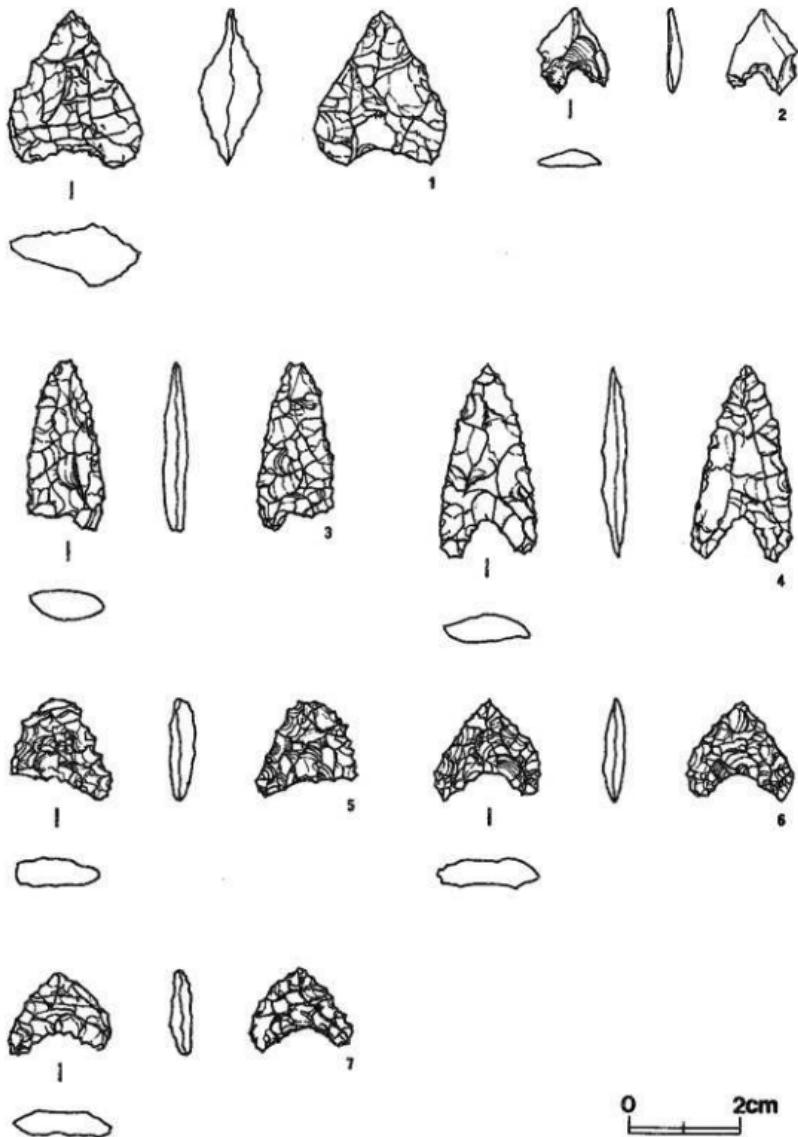
151 152 153 154 155



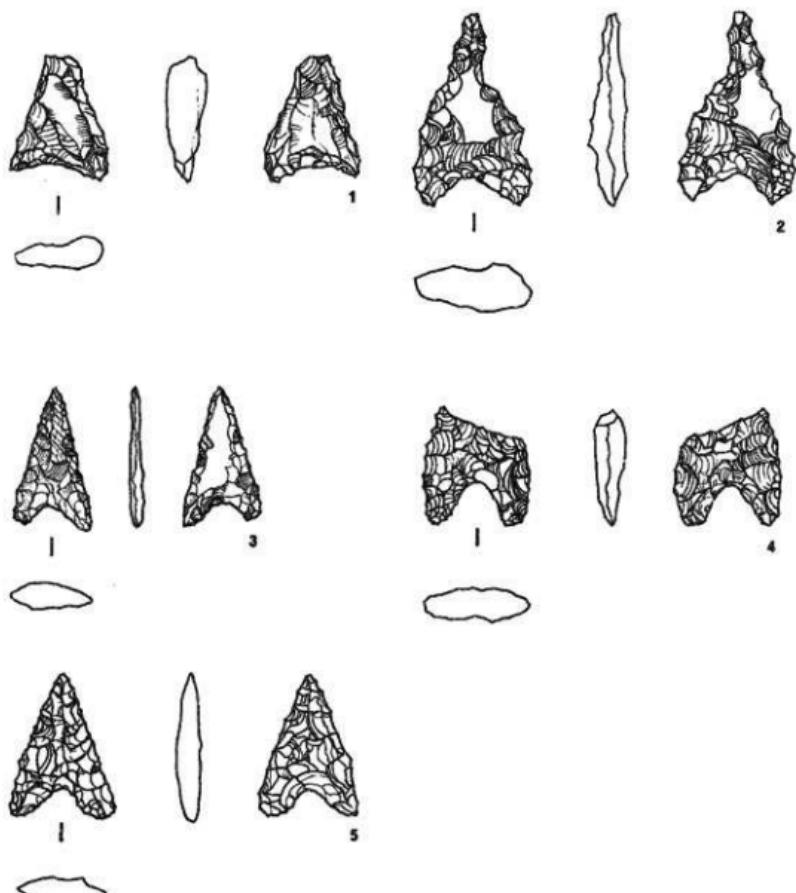
第161図 石器実測図(21)



第162図 石器実測図(22)

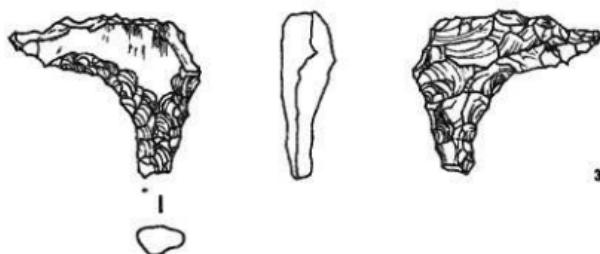
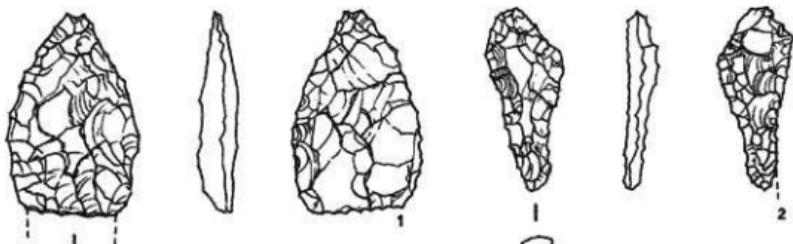


第163図 石器実測図(23)

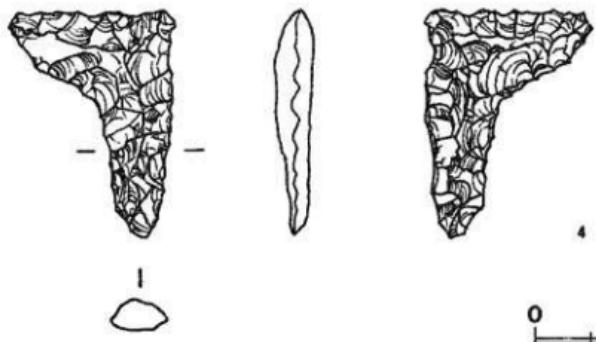


0 2cm

第164図 石器実測図(24)



3



4

0 2cm

第165図 石器実測図(25)

### 3 石製品

#### (1) 石棒 (第160図 8 ~10)

本種は、3点とも欠損しているため、全体の形状は不明であるが、無頭石棒の一部であると思われる。8は、両端が欠損しており、断面形は、楕円形である。表面は、ざらざらした状態である。9は、一端を欠いており、断面形は平行四辺形である。先端部には、擦った痕跡がみられる。10は、先端が尖っている石棒で、断面形は、楕円形である。なお、先端部から5cmぐらいの範囲で表面が赤く変色しており、熱を受けたものと思われる。

#### (2) 勾玉 (第166図 2)

本種は、極めて小形の勾玉で、全長1.5cmである。頭部に直径2mmの孔が、両方向からあけられている。表面の仕上げは荒く、擦った痕跡が残されている。

#### (3) 積状耳飾り (第166図 3)

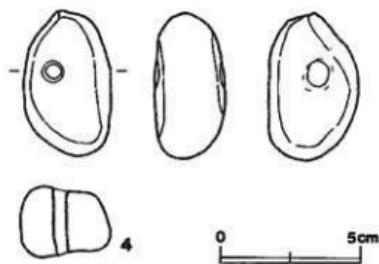
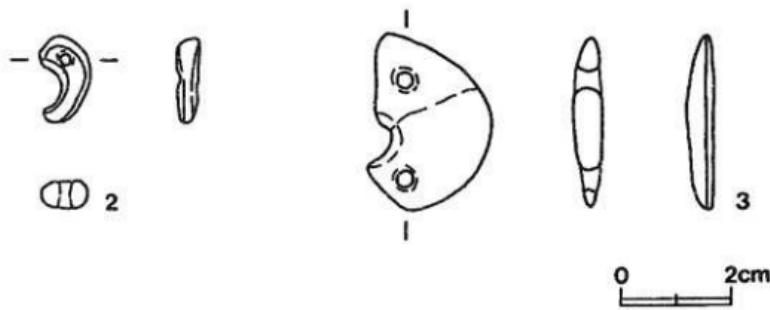
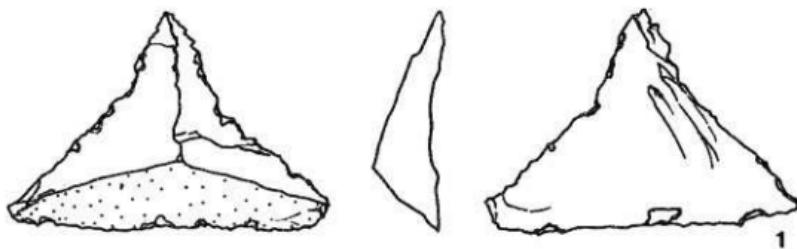
本種は、本来円環状を呈していたものが、中央部から割れ、再利用したものと思われる。割れた面を、ていねいに磨き、両端に小孔があけられている。これらの孔は、両側からあけられている。

#### (4) 大珠 (第166図 4)

本種は、長さ5.2cmの硬玉製の大珠である。調整は、表・裏面及び側面を磨いて作られているが、側面は、よりていねいに磨かれている。中央やや上部の孔は、内部に残る段差の跡から、貫通寸前まで一方からあけられ、最後の段階で、反対側からもあけられたことがわかる。硬玉の石質は、それほど良好なものではない。

表5 石製品一覧表

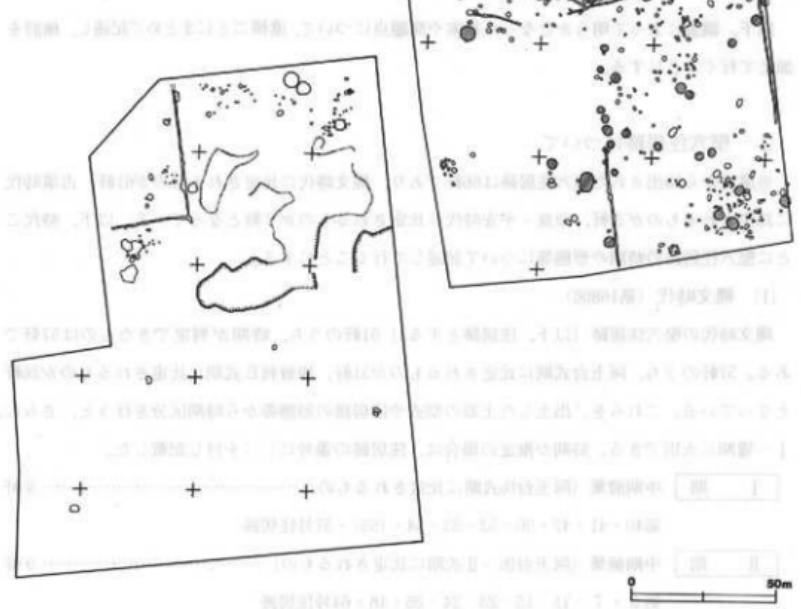
図版番号	固有番号	器種	出土地点	大きさ			重量(g)	石質	備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
第160図-8	Q 21	石棒	SI-11	(7.5)	4.0	3.5	(143.0)	砂岩	PL51-6
9	Q 28	*	SI-12	(14.8)	3.9	3.2	(260.0)	*	PL51-7
10	Q 27	*	*	(12.5)	3.5	2.9	(208.0)	*	PL51-8
第166図-2	Q 59	勾玉	SI-8	1.5	0.9	0.5	0.6	硬玉	PL51-9
3	Q 65	積状耳飾り	SI-21	3.1	2.3	0.9	3.6	*	PL51-10
4	Q 135	大珠	B64	5.2	3.2	2.6	76.0	*	PL51-11



第166図 石製品実測図

## 第5章まとめ

アラビア樹齢図の作成は、アラビア樹齢図の構成要素とアラビア樹齢図の作成手順を理解するための基礎知識である。アラビア樹齢図は、アラビア樹齢図の構成要素とアラビア樹齢図の作成手順を理解するための基礎知識である。アラビア樹齢図は、アラビア樹齢図の構成要素とアラビア樹齢図の作成手順を理解するための基礎知識である。アラビア樹齢図は、アラビア樹齢図の構成要素とアラビア樹齢図の作成手順を理解するための基礎知識である。アラビア樹齢図は、アラビア樹齢図の構成要素とアラビア樹齢図の作成手順を理解するための基礎知識である。



第167図 大谷津A遺跡遺構配置図

鳥取県立歴史博物館

## 第1節 遺構について

大谷津A遺跡において検出された遺構は、第3章第1節の1で述べた通り、堅穴住居跡66軒、土壙489基、溝6条である。遺構や遺物を検討した結果、当遺跡は、縄文時代中期前葉から中葉の阿玉台Ib～IV式期、後葉の加曾利EⅢ～IV式期を中心として営まれた集落跡であることが判明した。また、時を隔てた古墳時代や奈良・平安時代の住居跡も検出されているところから、この時期にも同一台地上に集落が営まれていたことが確認された。遺構は、当遺跡の北から東に入り込む支谷に向かい合うように、調査区の北側や東側に密集して検出されており、住居跡の分布状況やその帰属する時期等から、後述するように幾つかの大きなグループに分けることが出来る。このことは、往時の集落の様相や変遷を考察する上で、同一台地上に隣接して所在し、当遺跡とほぼ同時期に営まれた集落跡である大谷津B遺跡や筒戸A・B遺跡とともに、貴重な資料を提供している。

以下、調査によって明らかとなった事実や問題点について、遺構ごとにまとめて記述し、検討を加えて行くこととする。

### 1 堅穴住居跡について

当遺跡から検出された堅穴住居跡は66軒であり、縄文時代に比定されるものが61軒、古墳時代に比定されるものが3軒、奈良・平安時代に比定されるものが2軒となっている。以下、時代ごとに堅穴住居跡の時期や形態等について記述していくことにする。

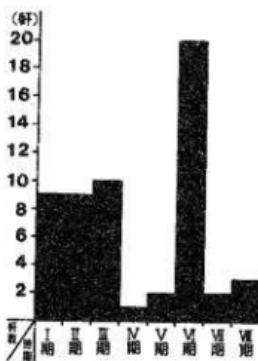
#### (1) 縄文時代（第168回）

縄文時代の堅穴住居跡（以下、住居跡とする。）61軒のうち、時期が判定できたものは57軒である。57軒のうち、阿玉台式期に比定されるものが31軒、加曾利E式期に比定されるものが26軒となっている。これらを、出土した土器の型式や住居跡の形態等から時期区分を行うと、さらに、I～IV期に大別できる。時期が推定の場合は、住居跡の番号に( )を付し記載した。

I 期	中期前葉（阿玉台Ib式期に比定されるもの）	9軒
	第40・41・47・50・52・53・54・(55)・57号住居跡	
II 期	中期前葉（阿玉台Ib～Ⅱ式期に比定されるもの）	9軒
	第5・7・11・15・23・24・26・46・64号住居跡	
III 期	中期前葉（阿玉台Ⅱ式期に比定されるもの）	10軒
	第(30)・32・35・39・44・48・(49)・51・56・(58)	
IV 期	中期前葉～中葉（阿玉台Ⅱ～Ⅳ式期に比定されるもの）	1軒
	第42号住居跡	

V 期	中期中葉（阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期に比定されるもの）	2軒
	第65・66号住居跡	
VI 期	中期後葉（加曾利EⅢ式期に比定される住居跡）	21軒
	第4・6・9・10・12・13・14・16・17・18・19・20・21・22・25・28・33	
	34・36・37・38号住居跡	
VII 期	中期後葉（加曾利EⅢ～Ⅳ式期に比定される住居跡）	2軒
	第45・61号住居跡	
VIII 期	中期後葉（加曾利EⅣ式期に比定される住居跡）	3軒
	第59・60・62号住居跡	

なお、時期については8期に分けたが、近接するものが多く多少前後することも考えられる。第1・2・3・31号住居跡の4軒については、遺構に伴なう出土遺物が少ないので時期を特定することができなかった。しかし、当遺跡において検出された遺構や遺物は、古墳時代や奈良・平安時代の住居跡を除くと、その大半は縄文時代中期前葉または後葉に比定される。時期不明の4軒の住居跡の覆土中やその周辺からは、縄文時代中期以外の遺構や遺物は検出されていないため、これらの住居跡は、いずれも縄文時代中期に包括できるものと思われる。



### ① 住居跡の類型化

第168図 時期別住居跡軒数

当遺跡から検出された縄文時代の住居跡について、第

3章第1節2の(6)で述べた遺構の分類基準に基づいて類型化と形態分類を進めた。まず、住居跡の平面形・柱穴の配列・炉の形態について述べ、次にこれらを組み合わせ、記号を用いて（例えばA-1-aのように）分類を行い、それぞれの形態ごとにその特徴や問題点について述べて行くこととする。

#### ア 平面形（第169図）

##### A 型 円を基調とする一群（円形・梢円形を含む）

第1・2・3・4・5・(6)・7・10・11・12・(13)・14・15・16・(17)・(18)・19  
 20・(21)・22・(23)・24・25・28・(30)・(31)・33・34・35・36・37・38・39・40・  
 41・44・45・46・47・48・49・50・51・52・53・54・55・56・57・58・59・60・61・  
 62・64・66号住居跡

A型を呈する住居跡は、上記の56軒であり、これらをさらに詳しく分類すると円形(A1)を呈するものが11軒、円形状(A2)を呈するものが16軒、不整円形(A3)を呈するものが3軒、楕円形(A4)を呈するものが18軒、楕円形状(A5)を呈するものが8軒となっている。なお、上記の住居番号に( )を付したものは、推定を表わしたものである(以下同じ)。

**B型** 方を基調とする一群(方形・隅丸方形・長方形・隅丸長方形を含む)

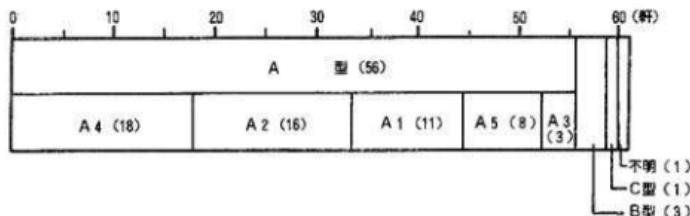
第9・26・42号住居跡

B型を呈する住居跡は、上記の3軒であり、いずれも隅丸方形を呈している。

**C型** いわゆる、「二段掘り込み」の形態を有する一群

第65号住居跡

C型を呈する住居跡は上記の1軒だけであり、第65号住居跡は、上段の掘り込みが隅丸長方形下段の掘り込みが長方形を呈している。



第169図 平面形による分類

大谷津A遺跡から検出された縄文時代の住居跡61軒のうち、平面形が不明な第32号住居跡を除く60軒(推定平面形を含む)をA・B・Cの3型に大別すると、実にその93%がA型に分類される。B型は5%, C型は2%にすぎず、当遺跡から検出された縄文時代中期の住居跡の平面形は、円形や楕円形を呈するいわゆる、「円を基調とする一群」がその主流を占めていたことがわかる。堅穴住居跡の平面形については、後藤守一博士が全国の住居跡の発見例を集大成し、堅穴住居跡をはじめ各種住居跡の分析と考察を試み、堅穴住居跡の平面形を総括され、縄文時代前期一長方形、中期一円形・楕円形、弥生時代に再び方形にもどることを指摘しており(後藤1940)，中期の住居跡の平面形については、当遺跡の分析結果と一致している。

#### 4 柱穴の配列（第170図）

##### 1 類 住居跡のほぼ中央部に、1か所の主柱穴を持つ一群

第7・11・15・24・26・35・39・40・41・44・46・47・48・49・50・51・52・53・55  
・56・58号住居跡

1類の柱穴配列を有する住居跡としては、上記の21軒が上げられる。住居跡のほぼ中央部に検出される柱穴は、比較的掘り込みの浅いものも数例認められるが、その大部分は、住居跡内から検出された他の柱穴に比べて掘り込みが深く、しっかりしていることが特徴と言える。特に、第11・35・39・40号住居跡から検出された柱穴は、92～128cmの深さを有している。また、1類の住居跡は、中央部の深い柱穴の他に、その周囲や壁際に数か所、浅い柱穴を伴なっていることが多い。

##### 2 類 住居跡の長軸線上に、柱穴が配列される一群

第5・14・64号住居跡

2類の柱穴配列を有する住居跡としては、上記の3軒が上げられる。検出例が少なく、特異な柱穴の配列と言える。しかし、同様の柱穴配列を有する住居跡は、近年、千葉県の高根木戸<sup>(2)</sup>・飯山満東<sup>(3)</sup>・東平賀<sup>(4)</sup>・向台<sup>(5)</sup>・子和清水貝塚<sup>(6)(7)</sup>・麻立<sup>(8)</sup>の各遺跡や、埼玉県の池田遺跡<sup>(9)</sup>などからも検出されており、阿玉台式期に確実に存在していたものと思われる。

##### 3 類 柱穴が、規則的に配列される一群

第2・3・4・6・9・10・12・13・16・17・18・19・20・21・22・23・25・28・30  
・31・32・33・34・36・37・38・42・45・59・60・61・62・65・66号住居跡

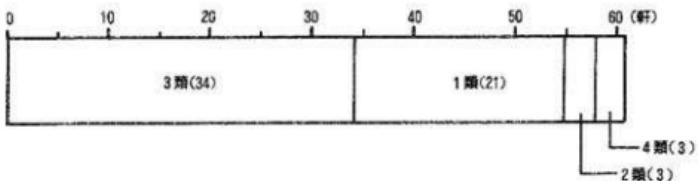
3類の柱穴配列を有する住居跡としては、上記の34軒が上げられる。これらを、主柱穴の数によってさらに細分してみると、4か所に主柱穴を有する住居跡が第4・6・9・10・16・22・23・28・34・38・42・45・59・61・66号住居跡の15軒と最も多く、3類の中で44%を占めている。次いで、5か所に主柱穴を有する住居跡が第2・13・18・19・21・23・32・60・62号住居跡の9軒で27%，6か所に主柱穴を有する住居跡が第3・12・36・65号住居跡の4軒で13%，5～6本の主柱穴を有する住居跡が第30・31号住居跡の2軒で6%，3か所に主柱穴を有する住居跡としては第17号住居跡、4～6か所に主柱穴を有する住居跡としては第37号住居跡、6～8か所に主柱穴を有する住居跡としては第20号住居跡、8か所に主柱穴を有する住居跡としては第25号住居跡が各々1軒（2%）ずつ検出されている。当遺跡から検出された住居跡の中で、規則的な柱穴の配列を有する住居跡は、4か所に主柱穴をもつものが最も多い。

##### 4 類 柱穴の配列に、規則性が見られない一群

第1・54・57号住居跡

4類の柱穴配列を有する住居跡としては、上記の3軒が上げられる。第1号住居跡は時期不明であるが、第54・57号住居跡はいずれも阿玉台式期に比定される。該期の住居跡の中で、同様の柱穴配列を有する住居跡の類例としては、千葉県の子和清水貝塚、麻立遺跡などがある。

大谷津A遺跡の住居跡を柱穴の配列によって分類すると3類が56%、1類が34%、2・4類が各々5%となっている。



第170図 柱穴の配列による分類

ウ 灼の形態 (第171図)

a 類 住居跡内に灼をもたない一群

第2・3・5・7・11・15・24・26・30・32・35・39・40・41・44・46・47・48・49  
・50・51・52・53・55・56・57・58・64・65号住居跡

b<sub>1</sub> 類 住居跡内に地床がを有する一群

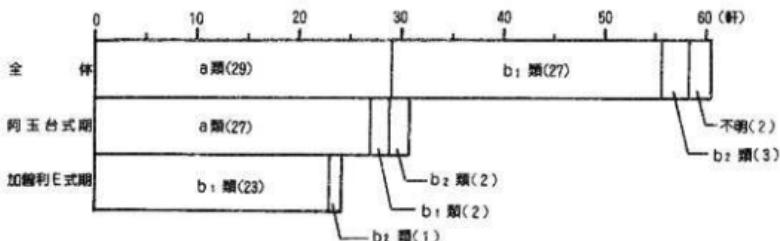
第1・4・6・10・12・13・14・16・17・19・20・22・23・25・28・31・33・34・36  
・37・38・45・54・59・60・61・62号住居跡

b<sub>2</sub> 類 住居跡内に土器埋設灼を有する一群

第18・42・66号住居跡

縄文時代の住居跡61軒のうち、擾乱や重複のため灼の有無が不明な第9・21号住居跡と、時期が不明な第1・2・3・31号住居跡の計6軒を除いた55軒について、住居跡の時期と灼の有無について検討を加えて行くこととする。

55軒の住居跡のうち、屋内に灼を有する住居跡は28軒であり、全体の51%であった。これを中期前葉の阿玉台式期と中期後葉の加曾利E式期に分けて分析してみると、中期前葉の阿玉台式期では、31軒の住居跡のうち灼を有しているものは4軒で、全体の約13%にすぎない。しかし、これに対して、加曾利E式期の住居跡は24軒全てが灼を有している。



第171図 炉の形態による分類

住居の炉は、すでに縄文時代草創期に僅少ではあるが発見例がある。しかし、早期前葉の住居跡内からは炉はほとんど発見されず、関東地方周辺では、早期の撫糸文土器の時期に台地の縁辺部などに炉穴が集中してつくられ、特に、これらは野島から茅山期に多いとされている。前期になると、中部地方から関東地方にかけては、地床炉を主体として土器埋設炉などが屋内炉として高率で普及している。当遺跡が営まれた縄文時代中期は、集落規模の大形化と共に、遺跡数の増加が顕著となり、文化的にも大きく飛躍した時期である。屋内炉も地域的な特色や差があるとは言え、その形態も、地床炉や土器埋設炉、石組炉、石組複式炉など複雑な様相を示しながら発達し、炉は中期の住居跡に普遍的なものとして定着する。このような状況の中で、中期前葉に位置する阿玉台式期の住居跡は、特異な形態を示し、屋内に炉をもたない例の多いことが指摘されている。近年、宮本長二郎氏は「関東地方の縄文時代の堅穴住居跡の変遷」という論文の中で、阿玉台式期の住居跡についても分析され、「阿玉台期の16遺跡・67軒について平均面積を求めるとき、13.3m<sup>2</sup>で、前期～中期を通じて最小であり、……（中略）……この時期で最も特異な傾向として、炉を住居内に設けないものが実に73%に達することである。」（宮本1983）と述べている。当遺跡における阿玉台式期の住居跡についても例外に漏れず、その87%は炉をもたないという分析結果が出ている。炉の有無の割合については時間差があると考えられ、それについては後述することにする。

## ② 住居跡の形態分類（第173・174・175図）

①で類型化を進めてきたが、これらを組み合わせ住居跡の形態分類を行った。形態分類は、当遺跡から検出された縄文時代の住居跡61軒のうち、重複のため炉の有無の不明な第9・21号住居跡、壁が検出されず平面形が不明な第6・30・31・32号住居跡、時期が不明な第1・2・3号住居跡の計9軒を除いた52軒について行い、検討を加えた。

### A-1-a型の住居跡（第178図）

円形または楕円形を基調とし、床面のほぼ中央部に（深い）柱穴をもつ、炉のない住居跡である。中央部の柱穴以外に、壁際に数か所、支柱穴と思われるピットの検出される例が多い。

A-1-a型の形態を有する住居跡は、当遺跡から20軒検出されており、このうち阿玉台Ib式期に比定されるものが第40・41・47・50・52・53・55号住居跡の7軒であり、阿玉台Ib～II式期に比定されるものが第7・11・15・24・46・58号住居跡の6軒、阿玉台II式期に比定されるものが第35・39・44・48・49・51・56号住居跡の7軒である。本形態を有する住居跡は、いずれも阿玉台Ib～II式期に属し、加曾利E式期の住居跡は含まれていない。第11・15・35号の3軒の住居跡は他の本形態を有する住居跡と若干異なり、住居跡の中央部に検出された柱穴の他に、周囲に4～5本の柱穴がほぼ規則的な配列を示している。しかし、平面形が円を基調とすることや住居跡の中央部に深い柱穴を有すること、炉をもたないことなど多くの共通点が見られることから、本形態に分類した。阿玉台式期の住居跡の中で、A-1-a型の形態を有する住居跡は、近年における発掘件数の増加とともに検出例が増しており、類例としては、千葉県松戸市子和清水貝塚252号住居跡、同千葉市蘇立遺跡第14・18号住居跡、同柏市水砂遺跡<sup>12</sup>027・028・029号住居跡、同柏市中山新田II遺跡<sup>13</sup>002・043号住居跡、東京都文京区動坂遺跡<sup>14</sup>3・6号住居跡などがあり、いずれも阿玉台Ib～II式期に比定される。

### B-1-a型の住居跡（第179図）

方形・隅丸方形・長方形・隅丸長方形を基調とし、床面のほぼ中央部に（深い）柱穴をもつ、炉のない住居跡である。A-1-a型の住居跡同様、壁際に数か所、支柱穴と思われるピットが検出される例が多い。

B-1-a型の形態を有する住居跡は、当遺跡からは第26号住居跡が1軒だけ検出されている。第26号住居跡は、阿玉台Ib～II式期に比定される。本形態を有する住居跡の類例としては、千葉県鎌ヶ谷市西山遺跡第2号住居跡、同松戸市子和清水貝塚33・111・117号住居跡、同鎌ヶ谷市大堀込遺跡J-1・J-2・J-3号住居跡、同柏市中山新田II遺跡029号住居跡、茨城県新治郡下広岡遺跡第28号住居跡などがあり、いずれも阿玉台Ib～II式期に比定される。本形態の住居跡は平面形は異なるが、基本的にはA-1-a型の住居跡と同じ要素をもっている。

### A-2-a型の住居跡（第179図）

円形または楕円形を基調とし、住居跡の長軸線上に2か所の柱穴をもつもの、または、柱穴が長軸線上にほぼ1列に配列される形態を有する炉のない住居跡である。

A-2-a型の形態を有する住居跡は、当遺跡からは第5・64号住居跡の2軒が検出されており、いずれも阿玉台Ib～II式期に比定される。本形態を有する住居跡の類例としては、千葉県市川市向台遺跡第2号住居跡、同船橋市飯山満東第31号住居跡、同松戸市子和清水貝塚1・90・

92・160号住居跡、同千葉市蘇立遺跡第2・9・15・26・34・47号住居跡、茨城県新治郡下広岡遺跡第37号住居跡などがあり、これらはいずれも阿玉台Ib～Ⅲ式期に比定される。

#### A-4-a型の住居跡（第179図）

円形または楕円形を基調とし、柱穴が不規則に配列されている炉をもつ住居跡である。

A-4-a型の形態を有する住居跡としては、当遺跡からは第57号住居跡が1軒だけ検出されている。第57号住居跡は、阿玉台Ib式期に比定される。本形態を有する住居跡の類例としては、千葉県松戸市子和清水貝塚91号住居跡、同柏市中山新田Ⅱ遺跡039・055・056号住居跡などがあり、これらは阿玉台Ⅱ～Ⅲ式期に比定される。

#### A-2-b<sub>1</sub>型の住居跡（第180図）

円形または楕円形を基調とし、住居跡の長軸線上に2か所の柱穴をもつもの、または、柱穴が長軸線上に1列に配列する形態を有する住居跡で、炉をもつもの。

A-2-b<sub>1</sub>型の形態を有する住居跡としては、当遺跡からは第14号住居跡が1軒だけ検出されている。第14号住居跡は、加曾利EⅢ式期に比定される。

#### A-3-b<sub>1</sub>型の住居跡（第180図）

円形または楕円形を基調とし、柱穴が規則的に配列されている地床炉をもつ住居跡である。

A-3-b<sub>1</sub>型の形態を有する住居跡は、当遺跡から22軒検出されており、阿玉台式期のものが1軒、加曾利E式期のものが21軒となっている。阿玉台Ib式期に比定されるものは第23号住居跡の1軒であり、加曾利EⅢ式期に比定されるものが第4・10・12・13・16・17・19・20・22・25・28・33・34・36・37・38号住居跡の16軒、加曾利EⅢ～Ⅳ式期に比定されるものが第45・61号住居跡の2軒、加曾利EⅣ式期に比定されるものが第59・60・62号住居跡の3軒となっている。同形態を有する阿玉台式期の住居跡としては、阿玉台Ib～Ⅱ式期に比定される東京都文京区動坂遺跡第11号住居跡があげられるが、類例は少ない。A-3-b<sub>1</sub>型の住居跡は、加曾利E式期に中心をもつものと思われる。

#### A-4-b<sub>1</sub>型の住居跡（第179図）

柱穴の配列が不規則である他は、平面形状・炉の形態ともA-3-b<sub>1</sub>型の住居跡と共通の要素をもっている。

A-4-b<sub>1</sub>型の形態を有する住居跡は、当遺跡からは阿玉台Ib式期に比定される第54号住居跡が1軒検出されているにすぎず、特異な例と言える。今後の類例の増加をまち検討する必要がある。炉の形態は異なるが、A-4-b<sub>2</sub>型の住居跡としては、千葉県千葉市蘇立遺跡第44号住居跡がある。

#### A-3-b<sub>2</sub>型の住居跡（第179・181図）

円形または楕円形を基調とし、柱穴が規則的に配列されている土器埋設炉をもつ住居跡である。

A-3-b<sub>2</sub>型の形態を有する住居跡は、当遺跡から2軒検出されており、第66号住居跡は阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期に、第18号住居跡は加曾利EⅢ式期に比定される。同形態を有する阿玉台式期の住居跡としては、近年、阿玉台Ⅲ式期に比定される千葉県千葉市蘇立遺跡第49号住居跡や、阿玉台Ⅰb式期に比定される東京都町田市木曾中学校遺跡JT3号住居跡などがある。

#### B-3-b<sub>2</sub>型の住居跡（第179図）

方形・隅丸方形・長方形・隅丸長方形を基調とし、柱穴が規則的に配列されている土器埋設炉をもつ住居跡である。

B-3-b<sub>2</sub>型の形態を有する住居跡は、当遺跡からは阿玉台Ⅱ～Ⅲ式期に比定される第42号住居跡が1軒検出されているにすぎない。平面形は異なるが、基本的にはA-3-b<sub>2</sub>型の住居跡と共通の要素をもっている。

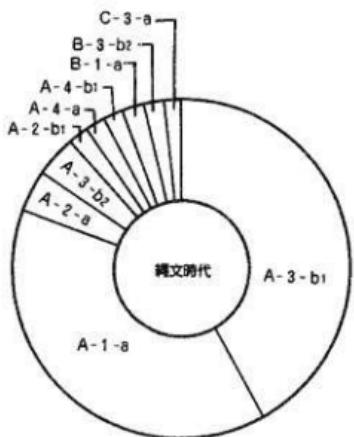
#### C-3-a型の住居跡（第179図）

いわゆる、「二段掘り込み」の形状を呈し、柱穴が規則的に配列される住居跡で炉をもたないもの。その平面形状が特異なことから、「ペット状遺構」（岡崎他1982）、「有段式堅穴遺構」（川崎他1983）等とも称されている。

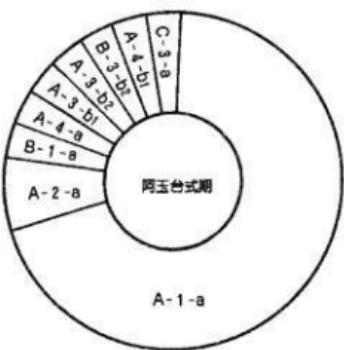
C-3-a型の形態を有する住居跡としては、阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期に比定される第65号住居跡が1軒検出されているだけである。同形態を有する阿玉台式期の住居跡としては、茨城県石岡市大作台遺跡2号住居跡、同新治郡下広岡遺跡第4・39号住居跡、同稲敷郡赤塚遺跡第15号住居跡、千葉県千葉市蘇立遺跡第1・12号住居跡、栃木県塙谷郡上の原遺跡JT-2A号住居跡等がある。また、柱穴の配列が不規則ではあるが二段掘り込みの形状を呈するC-4-a型の住居跡としては、茨城県石岡市東大橋原遺跡D-J1号住居跡、同石岡市大作台1号住居跡があげられる。二段掘り込みの住居跡は、屋内炉をもたないことが一般的であり、その機能としては「選果場などの住居以外の機能をもった施設…」（鈴木1980）との指摘もあるが、いまだ不明な点が多く、今後の類例の増加をまち、検討する必要がある。本報告では住居跡として取り扱った。

以上、当遺跡から検出された绳文時代の住居跡について類型化と形態分類を進めてきたが、ここでは、それらの結果をふまえながら明らかになった事実について検討を加えて行くことにする。  
○阿玉台式期の住居跡について（第173・178・179図）

当遺跡から検出された阿玉台式期の住居跡31軒のうち、時期や形態が明確な（一部推定も含む。）29軒についてその形態を分類してみると、実にその約70%に当たる20軒が「A-1-a」型に分類され、次いで「A-2-a」型の住居跡が約7%の2軒、「B-1-a」・「A-4-a」・「A-3-b<sub>1</sub>」・「A-3-b<sub>2</sub>」・「B-3-b<sub>2</sub>」・「A-4-b<sub>1</sub>」・「C-3-a」型の住居跡は各々約3%の1軒づつとなっている。



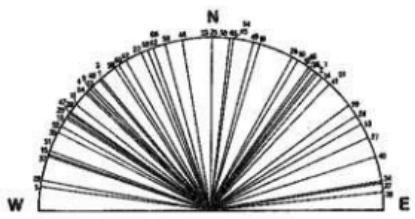
第172図 住居跡の形態（1）



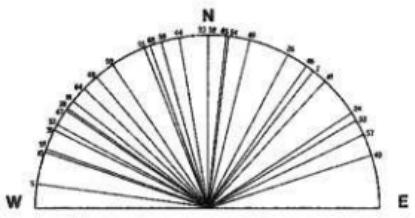
第173図 住居跡の形態（2）



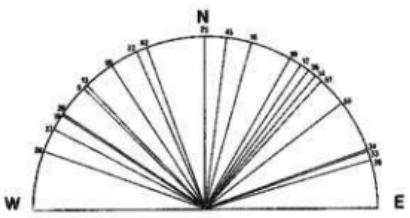
第174図 住居跡の形態（3）



第175図 繩文時代の住居跡の主軸方向



第176図 阿玉台式期の住居跡の主軸方向



第177図 加曾利E式期の住居跡の主軸方向

が円や楕円形などの円を基調とするものが優位を保っていたものと思われる。「A-2-a」型の住居跡は2軒検出されており、いずれも阿玉台Ib～II式期に比定される。前述した千葉県の飯山満東遺跡や埼玉県の池田遺跡からは、阿玉台II～III式期に比定される同形態を有する住居跡が検出されており、類例が少ないため詳細は不明であるが、阿玉台Ib～III式期の比較的長期間に亘って営まれた住居跡の形態と思われる。「A-4-a」型の住居跡はわずかに1軒検出されているにすぎず、類例が少ないとから詳細は不明である。屋内に炉をもつ住居跡は4軒検出されており、そのうち地床炉を有するものが2軒、土器埋設炉を有するものが2軒となっている。阿玉

「A-1-a」型の住居跡は、その内訳を見ると、阿玉台Ib式期に比定されるものが7軒、阿玉台Ib～II式期に比定されるものが6軒、阿玉台II式期に比定されるものが7軒となっており、いずれも阿玉台Ib～II式期に包含される。前述した他の県の例からも、同形態を有する住居跡は阿玉台Ib～II式期を中心として営まれた住居跡の形態であることが窺われる。平面形が円を基調とし、住居跡の中央部に1か所の（深い）主柱穴を有し、屋内炉をもたないという特異な形態から、住居跡の中央部に立てられた主柱穴に対して周囲から垂木を集中させ、垂木間に横木を架け渡して屋根を葺いた、円錐形の上屋構造を持つ住居跡と推測される。この形態の住居跡は、一般に床面積が狭く、最大のものが $18.7\text{m}^2$ 、最小のものが $4.23\text{m}^2$ で、平均床面積は $9.7\text{m}^2$ となっている。

「B-1-a」型の住居跡は、わずかに1軒検出されているにすぎず、平面形を除けば基本的には「A-1-a」型と類似しており、時期も阿玉台Ib～II式期に比定されることから、住居跡の中央部に主柱穴をもつがのない住居跡は、平面形

台Ib式に比定される「A-4-b<sub>1</sub>」型の住居跡は、屋内に地床炉を有するが、柱穴の配列が不規則となっており、阿玉台Ib～II式期に比定される「A-3-b<sub>1</sub>」型の住居跡は、地床炉を有し柱穴が規則的に配列している。阿玉台II～III式期に比定される「B-3-b<sub>2</sub>」型の住居跡や、阿玉台III～IV式期に比定される「A-3-b<sub>2</sub>」型の住居跡になると、平面形も整い、柱穴の配列も規則的となり、炉の形態も土器埋設炉へと発展してくる。前述した近県の例などからも、阿玉台式期の住居跡は、古い時期のものは平面形があまり整わず小規模で、柱穴の配列に特異性が見られ、その大半は屋内に炉をもたない傾向が窺われる。新しい時期になると平面形が整い、柱穴の配列に規則性が見られるようになり、屋内に炉の検出される例が多くなる。当遺跡から検出された阿玉台式期の住居跡の中で最大のものは、「二段掘り込み」を呈する第65号住居跡で、床面積29.1m<sup>2</sup>を有している。これを除けば、最大のものが18.7m<sup>2</sup>、最小のものが4.23m<sup>2</sup>で、平均床面積は10.6m<sup>2</sup>となっている。炉の形成時期や形態については、地域差が認められるため、資料の増加をまち今後さらに検討する必要がある。「C-3-a」型のいわゆる、「二段掘り込み」の形態を有する住居跡は、炉をもたない例が多く、阿玉台III～IV式期にその発生を見、加曾利E式期に続くものと思われる。

#### ○加曾利E式期の住居跡について（第174・180・181図）

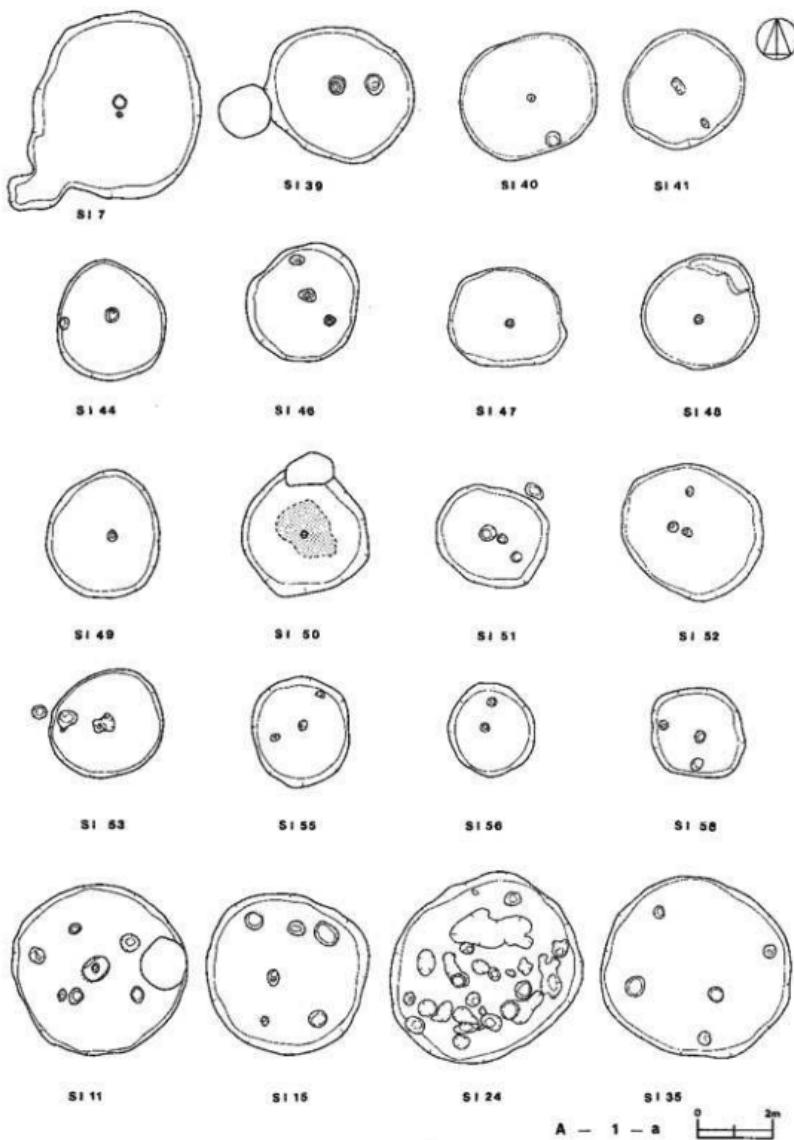
加曾利E式期の住居跡としては、「A-2-b<sub>1</sub>」型の住居跡が1軒、「A-3-b<sub>1</sub>」型の住居跡が21軒、「A-3-b<sub>2</sub>」型の住居跡が1軒検出されている。「A-2-b<sub>1</sub>」型の住居跡は、加曾利E III式期に比定され、主柱穴は2本で、その中間に地床炉が検出されており、特異な形態を有しているが、その他の22軒の住居跡は、いずれも平面形が円形や橢円形の整った形状を呈し、柱穴も規則的に配列され、炉を有している。最大のものが45.2m<sup>2</sup>、最小のものが8.7m<sup>2</sup>で、平均面積は18.5m<sup>2</sup>となっており、阿玉台式期の住居跡に比べて規模が大きく安定した傾向が窺われる。

表6 住居跡一覧表（掲文時代）

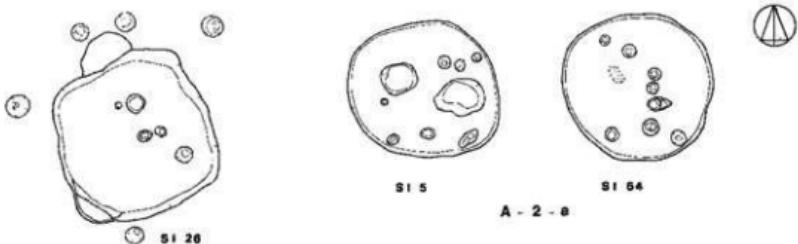
住居跡番号	位置	方 向	平面形	爐 横		ピット数 長径×短径(m) 壁厚(m)	柱穴数 主柱	炉 壁上	出土遺物	時 期	形 态	備 考
				長径	短径							
SI 1	E4a	N-40°W	円形状	4.16×4.10	5	9	不明	地床炉	N	绳文土器片27点 石1点	(A-4-b <sub>1</sub> )	
SI 2	E3f	N-38°E	円 形	4.86×4.80	2-6	9	5		N	绳文土器片19点 石3点	A-3-a	
SI 3	E3e	N-40°W	円 形	5.60×5.50	6-9	11	6		N	绳文土器片7点 石1点	(A-3-a)	
SI 4	C4f	N-46°W	円形状	4.82×4.68	24-28	11	4	地床炉	N	绳文土器片447点 石49点	加 E III	A-3-b <sub>1</sub>
SI 5	C5f	N-82°W	椭円形	4.21×3.70	10-15	9	5(2)		(K)	绳文土器片100点 石器2点・石13点	加 II	A-2-a
SI 6	C5e		(円形)	(5.00×5.00)		6	4	地床炉	K	绳文土器片106点 石器2点・石54点	加 E III	(A-3-b <sub>1</sub> ) SK94・SI7を掘り込んでいる。

住居跡番号	位置	方向	平面形	規格		ピット数	炉	覆土	出土遺物	時期	形態	備考	
				長径×短径(cm)	壁高(cm)								
SI 7	C5e+	N-38°-E	楕円形	4.82×4.09	50~60	2	2(1)		N (N)	楢文土器片230点・石器2点・石30点	阿II~II	A-1-a	SI36に振り込まれている。A-3-aとも考えられる。
SI 9	C5e+	N-45°-W	楕丸形	4.18×4.00	5~16	4	4	不明	N (N)	楢文土器片92点・石器5点・石19点	加EIII	(B-3-a)	中央部がSK84に振り込まれている。
SI 10	C6d+	N-30°-E	円形	3.92×3.82	12~30	8	4	地床炉	N (N)	楢文土器片68点・石器2点・石32点	加EIII	A-3-b	SK74・SK86によって振り込まれている。
SI 11	C5e+	N-52°-W	円形	4.43×4.40	12~20	7	5(1)		N (N)	楢文土器片284点・石器7点・石85点・上部品2点	阿II~II	A-1-a	SK85に振り込まれている。中央部のピット。(注)。
SI 12	C5e+	N-34°-E	椭円形	4.70×4.08	3~20	9	6	地床炉	N (N)	楢文土器片405点・石器3点・石29点	加EIII	A-3-b	SK66を振り込んでいる。
SI 13	C6e+	N-44°-W	圓形狀	(6.24×5.32)	7~13	8	5	地床炉	K (N)	楢文土器片300点・石器1点・石44点・土器品1点	加EIII	(A-3-b)	SI17に振り込まれている。
SI 14	C6d+	N-40°-E	椭円形	3.49×3.14	21~25	2	2	地床炉	N (N)	楢文土器片153点・石13点	加EIII	A-2-b	
SI 15	C6d+	N-71°-W	不整円形	4.44×4.28	15~32	6	2(1)		N (N)	楢文土器片395点・石器5点・石62点・土器品1点	阿II~II	A-1-a	SI25に振り込まれている。
SI 16	C5j+	N-16°-E	不整円形	3.60×3.58	10~17	7	4	地床炉	N (N)	楢文土器片64点・石器7点・石57点	加EIII	(A-3-b)	SI17を振り込んでいる。
SI 17	C6e+		圓形狀	(4.94×4.23)	4~6	4(3)	4	地床炉	N (N)	楢文土器片49点・石器1点・石7点	加EIII	(A-3-b)	SI16-SK77に振り込まれている。
SI 18	B6j+		(円形狀)	(4.21×4.11)	10~12	7	5	土器 地床炉	N (N)	楢文土器片401点・石器11点・石9点	加EIII	(A-3-b)	SK159-161-266に振り込まれている。
SI 19	C6e+	N-57.5°W	円形	4.86×4.78	7~11	9	5	地床炉	N (N)	SI25参照	加EIII	(A-3-b)	SI25の上に振り込まれるSK126上2上に振り込まれている。
SI 20	C6e+	N-57°-W	椭円形	5.27×4.66		9	6~8	地床炉	N (N)	楢文土器片11点・石12点	加EIII	-	SI25を振り込んでいる。
SI 21	C6e+		(円形狀)	(5.00×5.00)	8~14	7	5	不明	N (N)	楢文土器片19点・石器1点・石1点	加EIII	-	SI28によって振り込まれている。
SI 22	B6j+	N-24°-W	椭円形	4.20×3.80	14~16	4	4	地床炉	N (N)	楢文土器片33点・石32点	加EIII	A-3-b	
SI 23	B7j+	N	(円形狀)	(4.00×3.80)	4~8	6	4	地床炉	N (N)	楢文土器片132点・石器2点・石17点・土器品2点	阿II~II	(A-3-b)	SI120-SK121に振り込まれている。
SI 24	B7i+	N-57°-E	椭円形狀	5.14×4.46	24~25	13	3(1)		N (N)	楢文土器片1277点・石器6点・石90点・土器品1点	阿II~II	A-1-a	
SI 25	C6e+	N	円形	7.40×7.30	5~15	14	8	地床炉	N (N)	楢文土器片1824点・石器13点・石30点・土器品2点	加EIII	A-3-b	SI15を振り込み、SI18,20に振り込まれている。
SI 26	C6e+	N-28°-E	楕丸形	4.10×4.01	37~48	5	3(1)		N (N)	楢文土器片214点・石器2点・石28点・土器品1点	阿II~II	B-1-a	SK18に振り込まれている。
SI 28	C6e+	N-80°-W	円形	6.40×5.69	6~26	6	4	地床炉	N (N)	楢文土器片352点・石器6点・石32点	加EIII	A-3-b	SI23を振り込んでいる。
SI 30	D6b+		(円形狀)	(6.00×6.00)		8	5~6		N (N)	楢文土器片23点	(阿 II)		SK213・SK287と重複
SI 31	C6e+		(円形狀)	(6.00×6.00)		13	5~6	地床炉	N (N)	楢文土器片2点			
SI 32	D6e+					7	5		N (N)	楢文土器片13点・石2点	阿 II		便盆により、半倒壊、倒壊とも不分明。
SI 33	D6e+	N-81°-E	椭円形	5.89×4.89	5~10	7	5	地床炉	N (N)	楢文土器片39点・石6点	加EIII	A-3-b	SK187・188に振り込まれている。
SI 34	D5d+	N-80.5°-E	円形	4.11×3.90	8~11	4	4	地床炉	N (N)	楢文土器片219点・石器3点・石8点・土器品1点	加EIII	A-3-b	
SI 35	D5b+	N-63°-W	椭円形	5.20×4.56	15~25	5	5(1)		N (N)	楢文土器片153点・土器品1点・石33点	阿 II	A-1-a	A-3-aとも考えられる。
SI 36	D5e+	N-37°-E	円形	6.64×6.10	6~15	8	6	地床炉	N (N)	楢文土器片437点・石器7点・石61点	加EIII	A-3-b	SK288に振り込まれている。
SI 37	D5j+	N-72°-W	椭円形	5.62×4.96	7~12	11	4~6	地床炉	N (N)	楢文土器片150点・石器3点・石13点	加EIII	A-3-b	
SI 38	D6d+	N-84°-E	椭円形	5.22×4.50	9~20	6	4	地床炉	N (N)	楢文土器片812点・石器3点・石24点	加EIII	A-3-b	
SI 39	D6e+	N-55°-W	椭円形	3.90×3.41	18~29	2	2(1)		N (N)	楢文土器片287点・石器1点・石44点・土器品1点	阿 II	A-1-a	SK310に振り込まれている。
SI 40	D6f+	N-72°-E	椭円形	3.62×3.05	18~25	2	2(1)		A (N)	楢文土器片287点・石器1点・石44点・土器品1点	阿 lb	A-1-a	多量の便器が投棄されている。

柱号 番号	位 置	方 向	平面形 長径×短径(m)	規 模 壁高(m)	ビット数	炉	覆土	出 土 產 物	時 期	形態	備 考	
S141	D7ja	N-43°-E	円 形	3.18×2.90	15~26	2	2(1)	(N) 鐘文土器片少量	阿 Ib	A-1-a		
S142	D7hb	N-30°-W	偏A方形	3.84×3.32	11~23	7	4	土 器 埋設炉	N 鐘文土器片35点・埴 輪上白1点・石1点	阿Ⅱ~Ⅲ B-3-b		
S144	D7gc	N-10°-W	橢円形	3.18×2.29	12~16	2	2(1)	N 鐘文土器片20点	阿 II	A-1-a		
S145	E7ds	N-7°-E	橢円形	3.80×3.39	15~23	7	4	地床炉	N 鐘文土器片14点・石 器1点・石7点	加E Ⅲ ~ IV	A-3-b	
S146	E7ea	N-35°-E	橢円形	3.15×2.77	14~25	3	2(1)	N 鐘文土器片5点・石 1点	加E~Ⅲ	A-1-a		
S147	E6fs	N-55.5°W	橢円形	2.90×2.68	15~22	1	1	N 鐘文土器片15点	阿 Ib	A-1-a		
S148	E7js	N-41°-W	円 形	3.15×2.98	25~34	1	1	N 鐘文土器片195点・土 製品1点・石8点	阿 II	A-1-a		
S149	E7js	N-14°-E	橢円形	3.35×2.95	21~30	1	1	N 鐘文土器片28点 石3点	(阿 II)	A-1-a		
S150	E6ia	N-34°-W	円形狀	3.28×3.17	17~35	1	1	A 鐘文土器片509点・石 器3点・石21点	加E Ib	A-1-a	本段落は二重壁の内 側壁で、外側壁が残存 している。	
S151	E6it	N-70°-W	橢円形	2.87×2.56	24~30	3	3(1)	N 鐘文土器片20点・石 器2点	阿 II	A-1-a		
S152	E6hs	N-61°-W	橢円形	3.86×3.32	18~25	3	3(1)	N 鐘文土器片189点・G 器3点・石8点	阿 Ib	A-1-a		
S153	E6gs	N-60°-E	橢円形	3.03×2.70	7~23	2	1	N 鐘文土器片10点 石3点	阿 Ib	A-1-a		
S154	E6cr	N-7°-E	円 形	3.64×3.43	8~13	3	3	地床炉	N 鐘文土器片76点 石3点	阿 Ib	A-4-b	
S155	E7ti	N-22°-W	円形狀	2.80×2.55	12~28	3	3(1)	N 鐘文土器片6点	(阿 Ib)	A-1-a		
S156	E6cs	N-16°-W	円 形	2.45×2.25	10~15	2	2(1)	N 鐘文土器片18点	阿 II	A-1-a		
S157	E6as	N-65°-E	橢円形	2.96×2.60	9~14	2	1	N 鐘文土器片12点 石2点	阿 Ib	A-4-a		
S158	E6hr	N	不整圓形	2.96×2.60	24~28	3	3(1)	N 鐘文土器片14点	阿Ⅱ~Ⅲ	A-1-a		
S159	F7er	N-52.5°E	円 形	3.89×3.80	14~21	4	4	地床炉	N 鐘文土器片11点・石 器3点・石6点	加E IV	A-3-b	
S160	F7fs	N-33°-W	橢円形	4.70×4.08	14~24	5	5	地床炉	N 鐘文土器片15点・石 器3点・石5点・土 製品1点	加E IV	A-3-b	
S161	E7cs	N-43°-E	橢円形	3.66×3.08	8~15	5	5(4)	地床炉	N 鐘文土器片128点・石 器1点・石1点	加E Ⅲ ~ IV	A-3-b	
S162	F8ds	N-20°-W	円 形	4.13×3.76	6~15	5	5	地床炉	N 鐘文土器片31点・石 器6点・石5点・土 製品1点	加E IV	A-3-b	
S164	F6hr	N-46.5°W	円形狀	4.08×3.84	10~15	8	4	N 鐘文土器片14点	阿Ⅱ~Ⅲ	A-2-a	燒土が混入する	
S165	F6cs	N-6°-E	偏 A 偏方形	6.96×4.75	21~24	6	6	N 鐘文土器片1134点 石4点・石35点	阿Ⅲ~Ⅳ	C-3-a	二重壁に込み	
S166	F6ia	N-20°-W	円形狀	3.58×3.47	6~21	5	4	土 器 埋設炉	N 鐘文土器片207点・石 器4点・石8点・土 製品1点	阿Ⅲ~Ⅳ	A-3-b	野廬穴を有している。 火災に遭っている。



第178図 阿五台式期の住居跡集成図（1）

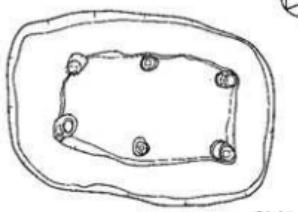
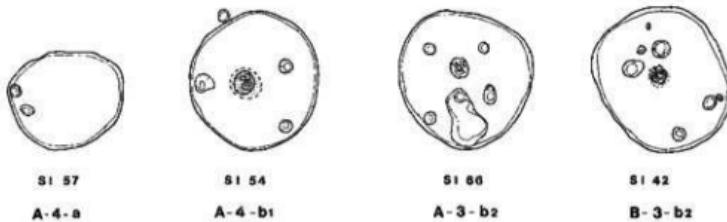


B-1-a

SI-5

SI-54

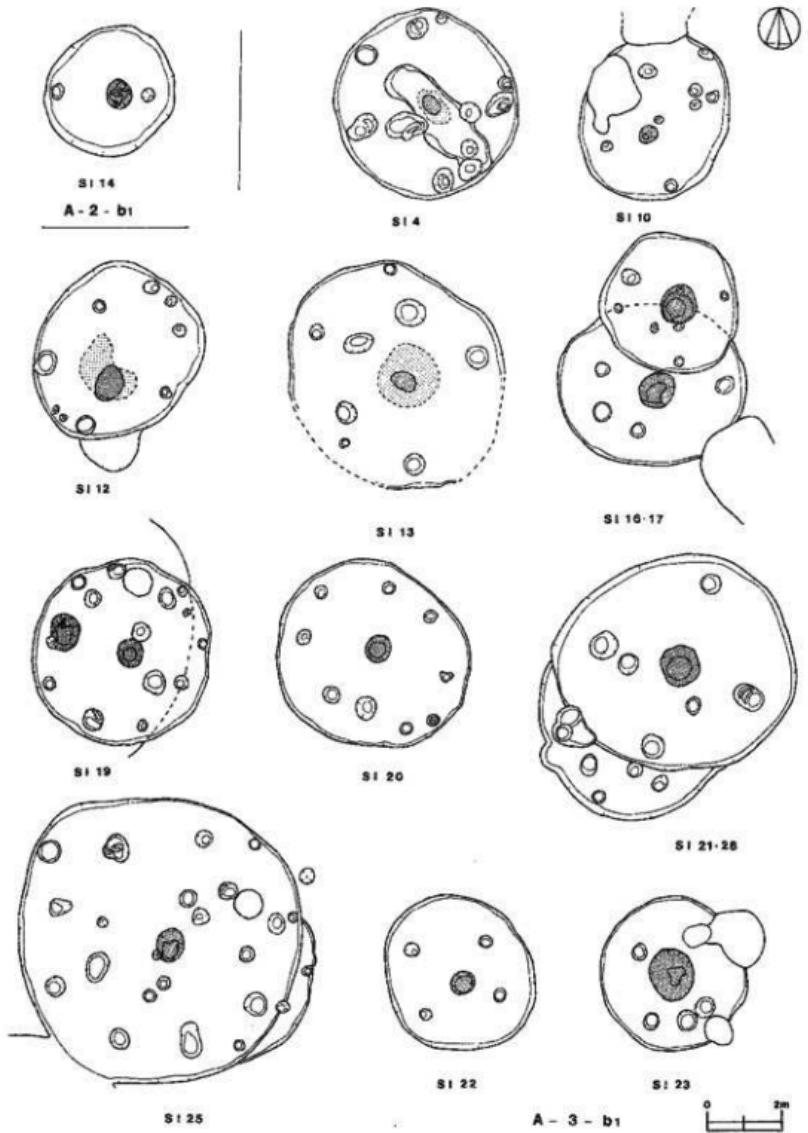
A-2-b



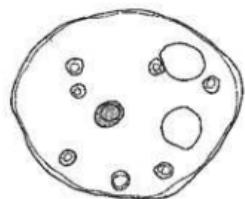
C-3-a



第179図 阿玉台式期の住居跡集成図（2）



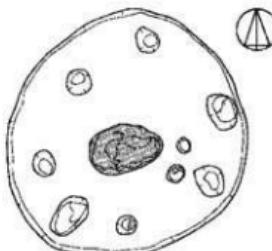
第180図 加曾利E式期の住居跡集成図（1）



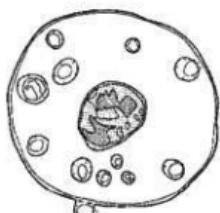
SI 33



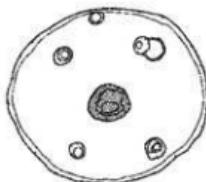
SI 34



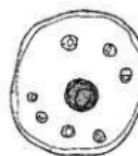
SI 35



SI 37



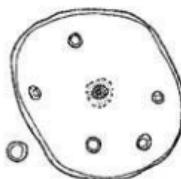
SI 38



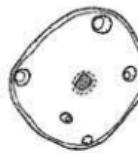
SI 45



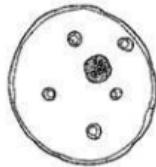
SI 59



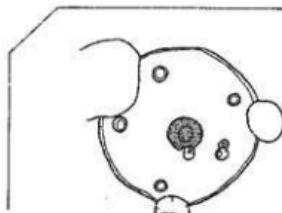
SI 60



SI 61



SI 62



SI 63

A - 3 - b1

A - 3 - b2



第181図 加曾利E式期の住居跡集成図（2）

## (2) 古墳時代

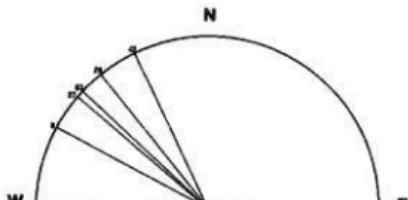
古墳時代の住居跡は、当遺跡から第8・27・43号住居跡の3軒が検出されており、これらは、いずれも古墳時代中期の和泉期に比定される。平面形は、第8・27号住居跡が方形、第43号住居跡が方形状を呈しており、主柱穴は4か所に検出され規則的に配列する。屋内には地床炉を有し、炉と反対側のコーナー部に貯蔵穴が設けられている。(1)で行った縄文時代の住居跡の形態分類をあてはめるならB-3-b<sub>1</sub>型に分類できる。第27・43号住居跡の2軒は壁溝を有し、第27号住居跡には間仕切りの痕跡が認められる。また、第8号住居跡の屋内からは多量の焼土と炭火物が検出されており、火災に遭遇したことが窺われる。3軒の住居跡の中で最大規模を有するものは第43号住居跡であり、床面積は41.9m<sup>2</sup>となっている。第8号住居跡は36.4m<sup>2</sup>、第27号住居跡は26.6m<sup>2</sup>である。当遺跡から検出された古墳時代の住居跡は以上の3軒にすぎず、多くを述べることは出来ない。

表7 住居跡一覧表

住居跡 番号	位 漢	方 向	平面形	規 模		ビット数	炉	覆土	出 土 遺 物	時 期	形 态	考 察	
				長径×短径(m)	高さ(m)								
S1 8	D6fa	N-62°W	方 形	6.04×6.02	15~17	7	4	地床炉	N	土師器片少量・石製品1点・縄文中期の土器片	和 泉	B-3-b <sub>1</sub>	貯蔵穴を有している。火災に遭っている。
SI 27	C5f <sub>a</sub>	N-50°W	方 形	5.16×5.16	2~3	6	4	地床炉	N	土師器片24点・石16点・縄文上期の土器片	和 泉	B-3-b <sub>1</sub>	貯蔵穴・壁溝を有している。
SI 43	D7b <sub>a</sub>	N-26°W	方形狀	6.52×6.43	23~41	5	4	地床炉	N	土師器片・縄文中期の土器片34点・石器2点・土製品1点・石器	和 泉	B-3-b <sub>1</sub>	SK337-468・505と直接・燃焼・貯蔵穴を有している。

## (3) 奈良・平安時代

奈良・平安時代の住居跡は、当遺跡から第29・63号住居跡の2軒が検出されているにすぎない。第29号住居跡は、耕作による攪乱を受け、壁及び床の大部分はすでに破壊されており、柱穴とカマドの一部が検出されただけである。第63号住居跡は、カマドと柱穴が比較的良好な状態で検出されているが、その三分の一



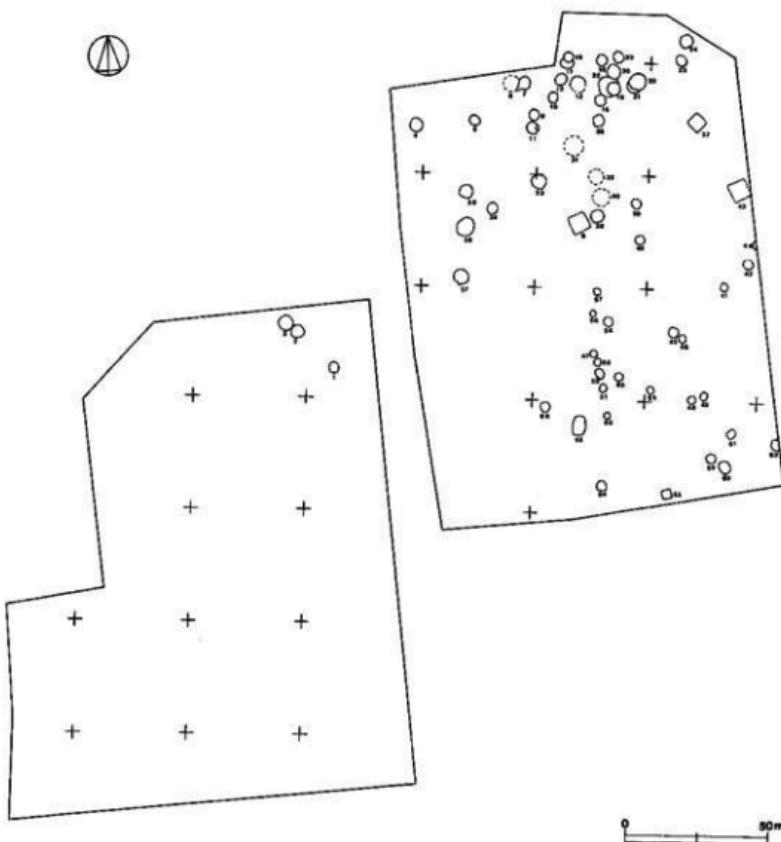
第182図 古墳時代、奈良・平安時代の住居跡の主軸方向

が農道の下に広がっており、後世の人为的な攪乱と木根による攪乱を受け、不明な点が多い。これらの2軒の住居跡は、平面形や規模については推定の域を出ず、時期についても出土遺物が極めて少ないため明確にすることはできないが、いずれも住居跡にカマドを付設することや、同一台地上に隣接して所在する箇所B遺跡から平安時代の住居跡が2軒検出されていることから、奈良・平安時代の住居跡として取り扱ったものである。

表8 住居跡一覧表

住居跡番号	位置	方向	平面形	規模		ピット数	が	覆土	出土遺物	時期	形態	備考
				長軸×短軸(m)	壁高(m)							
SI 29	C7m	(N-39°W)	長方形	(5.00×4.00)	0	5	4	カマド	磨光小片	奈良 平安	柱	大部分が擾乱を受けている。
SI 63	E7m	N-47°W	(南北 方向)	(3.50×3.10)	8~24	5	4	カマド	N 土師器片8点、 石1点	奈良 平安	柱	一部擾乱を受けている。大火に遭っている。

## (4) 集落の変遷



第183図 大谷津A遺跡住居跡配置図 (1)

大谷津A遺跡の立地する同一台地上には、当教育財団が昭和55年度から56年度にかけて調査を実施した大谷津B遺跡や、昭和56年度から57年度にかけて調査を実施した筒戸A・B遺跡が隣接して所在する。大谷津B遺跡、筒戸A・B遺跡は、いずれも縄文時代中期を中心とする集落跡であり、報告書によれば、大谷津B遺跡は加曾利EⅢ～Ⅳ式期を中心とした集落跡であり、住居跡55軒、住居跡状遺構12基、土塙854基、溝1条が検出され、筒戸A・B遺跡は加曾利EⅡ～Ⅳ式期を中心とした集落跡であり、住居跡87軒（内2軒は平安時代の住居跡）、土塙415基、埋甕7基、その他の遺構が3基検出されたことが報告されている。遺構の時期や分布状況等から大谷津B遺跡の北西側から検出された遺構の一群は、当遺跡の南西側から検出された遺構の一群と密接な関連をもち、また大谷津B遺跡の南側から検出された遺構の一群は、筒戸A・B遺跡の北側から検出された遺構の一群と密接な関連をもっている。加曾利E式土器の型式区分については、報告者によって若干の差異が認められるものの、大谷津A遺跡を含め、これらの遺跡の立地する台地上には、縄文時代中期を中心として比較的長い期間にわたって集落の営まれていたことが窺われる。ここでは、これらの事実を踏まえながら、大谷津A遺跡を中心とした集落の変遷について若干の考察を加えてみたい。

#### 大谷津I期（中期前葉の阿玉台Ib式期）（第184図）

大谷津I期に属する住居跡群は9軒検出されており、隣接する大谷津B遺跡や筒戸A・B遺跡を含めた3遺跡の中で最も古い時期に位置づけられる。これらは、当遺跡の立地する台地の東側に「U」字状に入り込む小支谷に対して弧を描くように配置している。9軒の住居跡は、分布状況等からさらに幾つかの小グループに分かれるものと思われるが、出土遺物から住居跡の時期を細分することは困難であり、集落の構成単位については明確でない。しかし、9軒の住居跡の中で、第50・52・53号の3軒の住居跡はそれぞれ4～6mの間隔で隣接しており、また、前述のように出土した土器片が互いに接合関係にあることから、同時期に集落を構成した一群と考えられる。I期の住居跡の中で第40・41・47・50・52・53・55号住居跡の7軒はA—1—a型を呈し、第54号住居跡はA—4—b1型、第57号住居跡はA—4—a型を呈している。住居跡の長径方向や住居跡の形態、分布状況等から考えると、第47・50・52・53号住居跡の4軒は互いに隣接し、東側の小支谷に対して弧を描くように配置し、住居跡の形態もA—1—a型を呈しており、多くの共通要素を持つことから、同時期に集落を構成していたことも考えられる。この4軒の住居跡を集落の構成単位と考えると、集落は東側の小支谷に対して開口しており、広場は4軒の住居跡の東側に存在していたものと思われる。広場に当たる空間部には、平面形が長楕円形を呈し、底面がレンガ状に赤く焼けた屋外炉と思われる土塙が3基（SK392・393・395）まとめて検出されている。出土遺物が皆無のため明確でないが、これらの住居跡との関連も考えられる。第465

号土壙は、第50号住居跡の北壁や床面を掘り込んでおり、前述した3基の土壙と同様の形態を示している。また、第40・50号住居跡内には、多量の焼土が投棄されていた。

#### 大谷津Ⅱ期（中期前葉の阿玉台Ib～Ⅱ式期）（第184図）

大谷津Ⅱ期に属する住居跡群は9軒検出されており、台地の北側に入り込む支谷に対して弧を描くように集落を構成する一群と、台地の東側に点在する一群とに分けられる。台地の北側から検出された住居跡は7軒（SI 5・7・11・15・22・24・26）であり、2～3軒がさらに小グループを構成している。第22・24号住居跡は2mの間隔で隣接しており、第22号住居跡はA-3-b<sub>1</sub>型、第24号住居跡はA-1-a型を呈し、2軒が異なる住居跡形態を示している。第15・26号住居跡は3mの間隔で隣接しており、第15号住居跡はA-1-a型、第26号住居跡はB-1-a型を呈している。第5・7・11号住居跡は3軒で1単位を構成していたものと思われ、それぞれ12～17mの間隔で隣接しており、三角形状に配置している。第5分住居跡はA-2-a型、第7-11号住居跡はA-1-a型を呈している。これら7軒の住居跡は弧状に配置され、集落が北側の支谷に向かって開口していることから、北側に広場を有していたものと思われる。第46・64号住居跡は点在しており、第46号住居跡はA-1-a型、第64号住居跡はA-2-a型を呈している。第46号住居跡は、位置や形態等から大谷津Ⅰ期に属することも考えられる。また、第64号住居跡の南側は調査区外となっており不明であるが、集落の一部が調査区外に延びていることも考えられる。

#### 大谷津Ⅲ期（中期前葉の阿玉台Ⅱ式期）（第184図）

大谷津Ⅲ期に属する住居跡群は10軒検出されており、その配置状況から2～3軒で1単位を構成するグループと、点在するグループとに分けられる。第30・32・39号住居跡は、3軒で1単位を構成するものと思われ、大谷津Ⅱ期の集落（SI 26）の15mほど南側に位置し、台地の北東側に向かって開口する弧状に配置している。第30・32号住居跡は形態が不明であるが、第39号住居跡はA-1-a型を呈している。第51・58号住居跡と第48・49号住居跡はそれぞれ2軒で1単位を構成するものと思われ、台地の東側に位置する大谷津Ⅰ期の集落の外側に位置している。第51・58号住居跡は7.4mの間隔で隣接し、第48・49号住居跡は1.8mの間隔で隣接している。いずれもA-1-a型を呈している。第35・44・56号住居跡はそれぞれ点在して検出されており、いずれもA-1-a型を呈している。第44号住居跡の東側は調査区外となっており不明であるが、第44号住居跡が検出された位置等から、集落の一部がさらに東側に延びていることも考えられる。

#### 大谷津Ⅳ期（中期前葉～中葉の阿玉台Ⅱ～Ⅲ式期）（第184図）

大谷津Ⅳ期になると住居跡の数が激減し、台地の東側（Ⅱ次調査区の東端）から第42号住居跡

が1軒検出されているにすぎない。第42号住居跡はB-3-b<sub>2</sub>型を呈している。第42号住居跡の東側は調査区外となっているため不明であるが、第42号住居跡の検出された位置から考えると、東側に「U」字状に入り込む小支谷に対して弧を描くように大谷津Ⅳ期の集落が営まれていた可能性も考えられる。

#### 大谷津Ⅴ期（中期中葉の阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期）（第184図）

大谷津Ⅴ期は阿玉台の終末期（Ⅲ～Ⅳ式期）に属する一群で、第65・66号住居跡の2軒が検出されている。第65・66号住居跡の2軒は10mの間隔で隣接しており、その周囲からは大谷津Ⅴ期に属する住居跡が検出されていないことから、2軒で1単位を構成していたものと考えられる。しかし、30mほど南側が調査区外となっているため、大谷津Ⅴ期の住居跡がこの調査区外に存在している可能性も考えられる。第65号住居跡はいわゆる「二段掘り込み」を呈する住居跡でC-3-a型を呈し、第66号住居跡はA-3-b<sub>2</sub>型を呈している。Ⅳ期・Ⅴ期の集落については、集落の一部が調査区外に存在する可能性もあり明確でないが、Ⅰ期～Ⅲ期の住居跡に比べその数が減少しており、他地域への集落の移動も考えられる。

#### 大谷津Ⅵ期（中期後葉の加曾利EⅢ式期）（第185図）

大谷津Ⅵ期に属する住居跡は21軒検出されており、住居跡の数が激増し、集落が最も隆盛した時期である。Ⅵ期の集落は大きく2つのグループに分かれ。1つは台地の北側に入り込む支谷に対して弧を描くように配置するグループで、15軒の住居跡（SI 6・9・10・12・13・14・16・17・18・19・20・21・22・25・28）が検出されている。しかし、15軒の住居跡の中には重複関係も認められ、全てが同時期に存在していたものではない。これらの住居跡群の北側は調査区外となつておらず、集落の全貌は明らかではないが、広場は集落が北側の支谷に対して弧状に開口していることから、北側の調査区外にものびていたものと思われる。これらの住居跡の中には、形態が不明なものや推定のものも含まれるが、その大部分はA-3-b<sub>1</sub>型を呈している。もう1つのグループは、Ⅱ次調査区の中央部付近に位置し、5軒の住居跡（SI 33・34・36・38）が半月形状に配置されている。集落は南東側に開口しており、この空間部に広場を有していたものと思われる。5軒の住居跡は、いずれもA-3-b<sub>1</sub>型を呈している。第4号住居跡は1軒だけ点在して検出されている。その北側10m及び西側4.3mは調査区外となつておらず、不明であるが、この調査区外に集落の一部が存在する可能性も考えられる。第4号住居跡は、他のⅥ期の大部分の住居跡と同様にA-3-b<sub>1</sub>型を呈している。

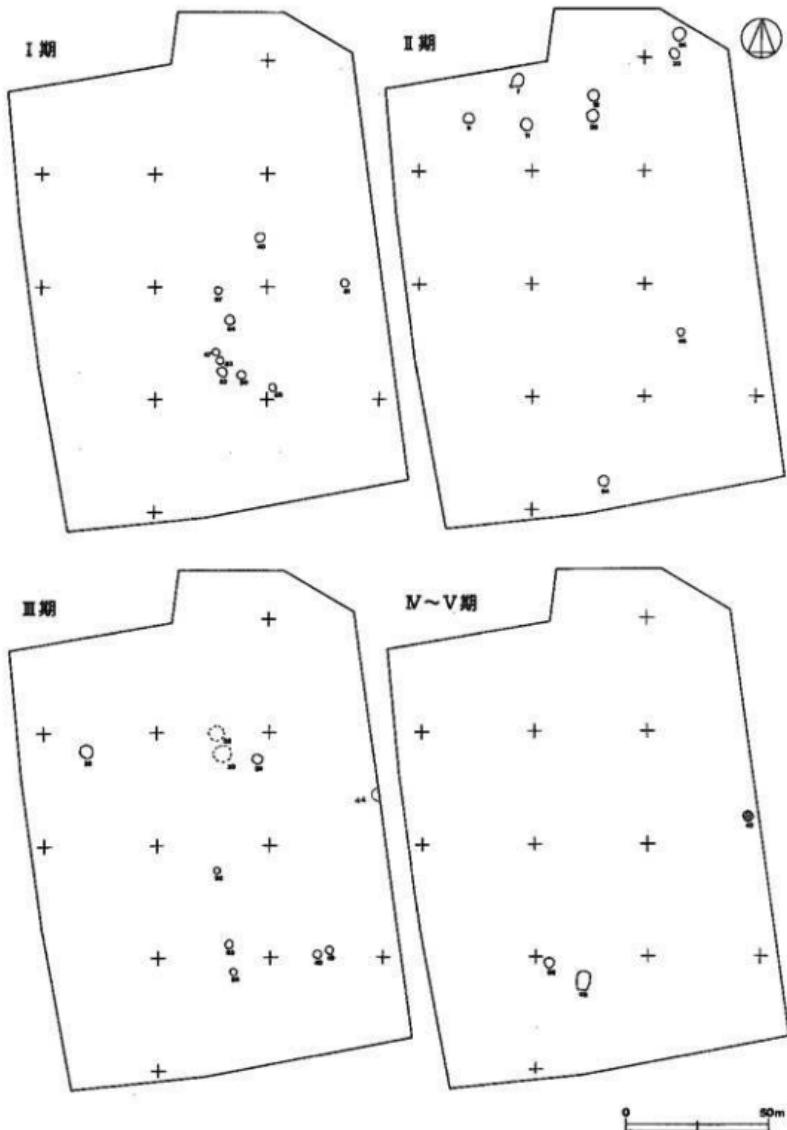
### 大谷津Ⅶ期（中期後葉の加曾利E Ⅲ～Ⅳ式期）（第185図）

大谷津Ⅶ期になると、Ⅷ期に比べ住居跡の数が激減し、台地の東側に第45・61号住居跡の2軒が点在して検出されているにすぎない。第45・61号住居跡は、いずれもA-3-b1型を呈している。第61号住居跡は、次のⅨ期に属する第59・60・62号住居跡と隣接して位置しており、時期的にも近接していることから、Ⅸ期に属することも考えられる。

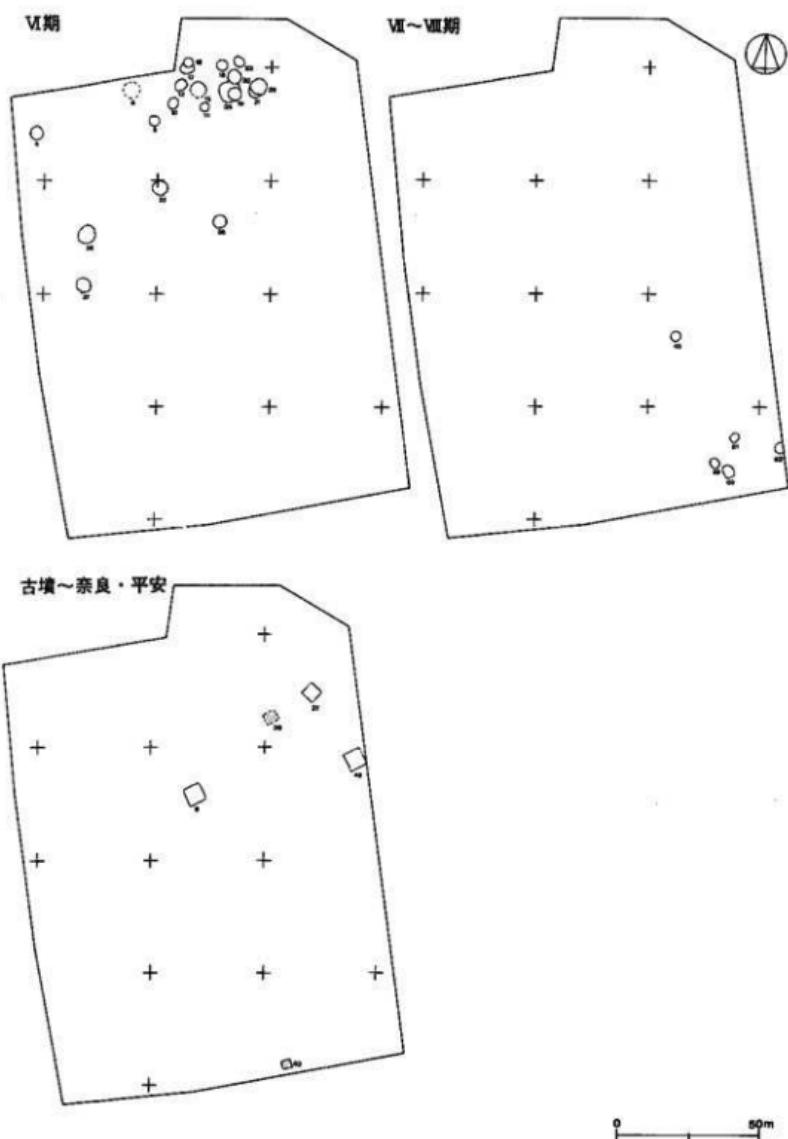
### 大谷津Ⅸ期（中期後葉の加曾利E Ⅳ式期）（第185図）

大谷津Ⅸ期の住居跡は、Ⅱ次調査区の南東端、大谷津B遺跡と隣接する台地の東側に3軒検出されており、第59・60号住居跡の2軒は1mの間隔で隣接している。隣接する大谷津B遺跡の北西端からは、報告書によれば、加曾利E Ⅳ式期に比定される第16・17・18・20・21号の5軒の住居跡が検出されている。そこで、大谷津Ⅸ期の住居跡との関連から再度検討を加えた結果、加曾利E Ⅳ式期に比定される住居跡は第18号住居跡の1軒と思われ、大谷津B遺跡の第18号住居跡は、当遺跡から検出されたⅨ期の住居跡群とは離れており、別のグループを構成する住居跡と思われる。大谷津Ⅸ期の住居跡の一群は、東側及び南側の調査区外にその一部が存在する可能性が考えられる。

以上述べて来たように、大谷津A遺跡から検出された縄文時代中期の集落は、Ⅰ期からⅨ期に区分され、Ⅰ～Ⅲ期（阿玉台Ib～Ⅱ式期）にわたって安定的に営まれていた集落が、Ⅳ～Ⅷ期（阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期）にかけて激減し、Ⅸ期（加曾利E Ⅲ式期）になって隆盛期を迎え、Ⅹ～Ⅺ期（加曾利E Ⅲ末～Ⅳ式期）に再び減少する傾向が見られる。また当遺跡と隣接する大谷津B遺跡や簡戸A・B遺跡から検出された遺構は、再度検討を加えた結果、加曾利E Ⅱ・E Ⅳ式期に比定される住居跡はほとんど見られず、その大部分は加曾利E Ⅲ式期に比定されることから、当遺跡の立地する台地上には、縄文時代中期後葉の加曾利E Ⅲ式期に大集落が営まれていたものと思われる。ここで注目されることは、阿玉台の終末期（Ⅲ～Ⅳ式期）に住居跡の数が激減し、加曾利E Ⅰ式期の住居跡が前述した3遺跡の中から全く検出されていないことである。この時期の集落は、何らかの理由で同一台地上の調査区外の場所か、あるいは別の場所に集落を移動したものと考えられる。古墳時代になると再び同一台地上に集落が営まれ、当遺跡からは、古墳時代中期の和泉期に比定される住居跡が3軒（SI 8・27・43）検出されている。第27・43号住居跡が検出された位置から見ると、さらに東側の調査区外にも同期の住居跡が存在していたことも考えられる。奈良・平安時代の住居跡は2軒検出されており、Ⅱ次調査区の北側と南側に1軒ずつ点在して検出されている（185図）。また、隣接する簡戸A・B遺跡からは、平安時代の住居跡が2軒検出されている。いずれにしても、古墳時代～奈良・平安時代の住居跡については検出例が少ないため、集落としては不明な点が多い。



第184図 大谷津A遺跡住居跡配置図（2）



第185図 大谷津A遺跡住居跡配置図（3）

## 2 土壙について

当遺跡から検出された最終的な土壙の数は、498基である。これらの土壙の多くは、調査区の北側や東側から密集して検出されており、調査区の中央部からはほとんど検出されていない。土壙の多くは単独で検出されたものが多く、重複関係はあまり見られない。また、覆土中から遺物が出土した土壙は全体の39%にすぎず、時期が明確にできたものは少ない。しかし、出土した遺物の大半は縄文土器片であり、縄文時代中期の阿玉台～加曾利E式期に比定されるものが大半であることから、時期不明の土壙も、その大半が縄文時代中期に包括できるものと思われる。

これらの土壙は、様々な形態をもって存在し、これらを逐一詳細に検討することは困難であるため、特徴的な土壙を除いては、第3章第1節2の(6)で述べた土壙の分類基準にしたがって分類し、おもに形態上の特徴について述べて行くことにする。

### (1) 屋外がについて

土壙の底面から焼土が検出された第392・393・395・465号の4基の土壙について、検討を加えて行くことにする。4基の土壙はⅡ次調査区の南側、大谷津Ⅰ期の集落の東側に位置し、第392号土壙を中心として半径8.6mの円内に互いに隣接して位置している。この部分は大谷津Ⅰ期（阿玉台Ib式期）の集落の広場に当たる。第392号土壙は長径1.58m、短径0.8mの楕円形を呈し、0.36mの深さに掘り込まれており、土壙の北側底面がレンガ状に焼けている。長径方向はN-13°-Wを指している。第393号土壙は第392号土壙の南5.5mに位置し、長径1.58m、短径0.8mの楕円形を呈し、0.36mの深さに掘り込まれており、第392号と全く同様の規模を有している。第393号土壙は南側の底面がレンガ状に焼けており、長径方向はN-23°-Wを指している。第395号土壙は第392号土壙の南東8.6mに位置し、長径1.24m、短径0.77mの楕円形を呈し、0.23mの深さに掘り込まれており、南西側の底面がレンガ状に焼けている。主軸方向はN-55°-Eを指している。第465号土壙は第392号土壙の南西7.4mに位置し、長径1.28m、短径0.81mの楕円形を呈しており、阿玉台Ib式期に比定される第50号住居跡の北側の壁及び床面の一部を掘り込んでいる。土壙の北東側の底面がレンガ状に焼けている。長径方向はN-86°-Eを指している。

4基の土壙の規模や形状は、前述のとおりである。形状については、早期に多く検出される炉穴と類似しているが、これと区別する意味で屋外がとして扱った。当遺跡においても早期の夏島・稻荷台式期に比定される燃系文系の土器片が検出されているが、これらは、遺跡の北側から少量検出されているにすぎず、前述した4基の土壙が検出された地区やその周辺からは検出されていない。4基の土壙からは遺物が全く出土していないため、時期を明確にすることはできないが、第465号土壙が阿玉台Ib式期に比定される第50号住居跡を掘り込んでおり、その他の3基の土壙も互いに隣接して検出され、同様の形態、規模を呈していること等から、いずれも縄文時代中期の阿玉台Ib式期もしくはそれ以後のものと考えられる。また、これらが大谷津Ⅰ期の集落の広場に当

たる地区から検出されていることから、この集落の共同の屋外炉の役割りを果していたことも考えられるが、決定的資料に欠ける。

### (2) 「Tピット状遺構」について

ここで「Tピット状遺構」として扱う土壙は、平面形が長径1.40～2.78m、短径0.54～1.74mの楕円形を呈し、深さが0.41～2mを有するもので、開口部では比較的幅があるが、下へ行くほど狭くなり、断面形状が「T」字状や「V」字状をなすものである。「Tピット」は、1967年に北海道函館空港第1地点の調査の際にその形状等から動物を落とし込んで捕えるための可能性があるとして「トラップーピット」、略して「Tピット」と呼ばれたもので、「棒状遺構」「溝状遺構」「V字形土壙」等とも呼ばれている。

当遺跡からは、形状からいわゆる「Tピット」と思われる土壙が7基（第11・84・128・132・141・263・293号土壙）検出されている。これらは前述したように、長径1.40～2.78m、短径0.54～1.74m、深さ0.41～2mの規模を有し、横断面は「T」字状や「V」字状を呈し、縦断面は下部で若干オーバーハングするものや「L」字状を呈するものが多い。底面の幅は、4～30cmと非常に狭くなっている。覆土は自然堆積で、覆土中に焼土粒子や炭化粒子・炭化物を極少量含むものもある。これらの土壙は、遺構の密集する調査区の北側から検出されており、その分布状況から、台地の北側を固むように東西35mにわたり、9～28mの間隔で弧状に配置する一群（第9・128・132号土壙）と、東西165mにわたり48～65mの間隔でほぼ直線的に配置する一群（第11・263・293・141号土壙）とに分けることができる。しかし、覆土中から遺物が出土している土壙は第11・84号土壙の2基にすぎず、時期を特定することは困難であり、相互の関連や新旧は不明である。形状から本稿では「Tピット状遺構」として扱ったが、決定的資料に欠け、その性格や集落との直接的な関係を明らかにすることはできなかった。

同形態を有する土壙は、県内では日立市大沼遺跡、千代田村志筑遺跡、竜ヶ崎市松葉遺跡、同赤松遺跡、同尾坪台遺跡等からも検出されている。また類似形態のものは北海道から関東にかけて多数検出されており、その性格については「落し穴」という説もあるがまだ決定資料に乏しく、当遺跡においてもその手掛りは無い。

### (3) 土壙の形態分類

当遺跡から検出された498基の土壙の内で、重複等により形状や規模の不明な17基を除く481基について、第3章第1節2の(6)で述べた分類基準に基づいて形態分類を行った。その結果は表-9の通りである。

地盤・底面		1a	1b	1c	2a	2b	2c	3a	3b	3c	計
I A		22	2	2	17	8		3	1		55
A'		6	3		6		1		1	1	18
B		21			32			2			55
B'		4			11			7			23
C		6	1		1						8
C'		3	1		2						6
D'					1						1
E								1			1
小計		62	7	2	69	10	1	13	2	1	167
II A		8		2	34	7		9	4		64
A'		1			7	4		1			13
B		7			77	2		30	3		119
B'		2	1		19	2		14	2		40
C		3			3	2			2		10
C'		3			1						4
E						1	1	1	2	2	7
小計		24	1	2	141	18	1	55	13	2	257
III A					2						2
B		1			2			1			4
小計		1			4			1			6
IV B					1			2			3
B'							1				1
C								1			1
小計					1			3	1		5
V A		1		2	1		3				7
A'				2				2			4
B		2			8			4	3		17
B'					7			2	1	1	11
C		1		2	1						4
D									3		3
小計		3	1		21	2		9	9	1	46
合計		90	9	4	236	30	2	81	25	4	481

表9 土壌形態分類一覧表

#### ○規模

第186図に示したように、土壌の長径や長軸の長さを見てみると、2類（1m以上2m未満）に属するものが56%で全体の過半数を占め、3類（2m以上）に属するものが23%，1類（1m未満）に属するものが21%となっている。また、深さについて見てみると、a類（50cm未満）に

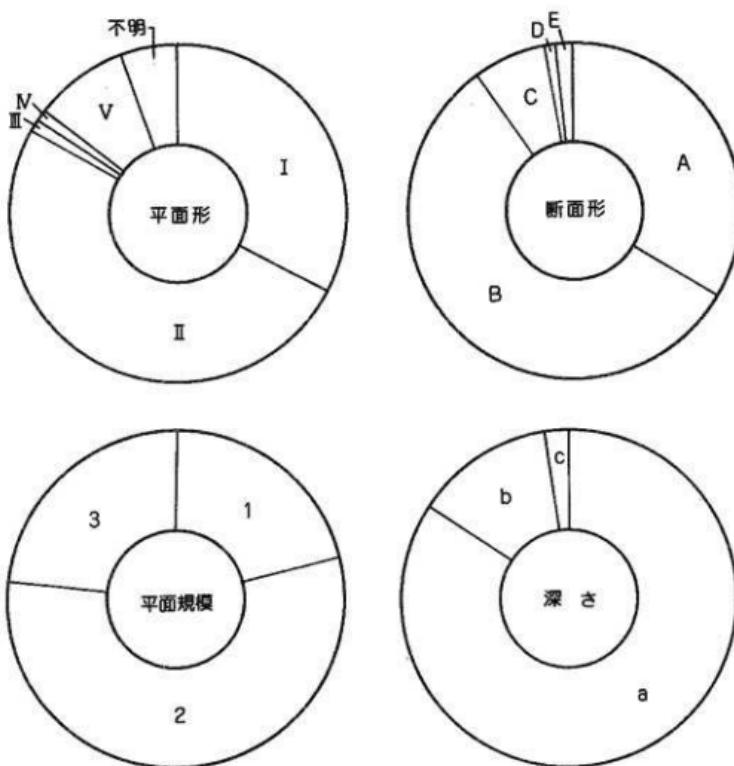
#### ○平面形

第189図に示したように、土壌の平面形状はⅡ類（楕円形）に属するものが53%と全体の過半数を占め、次いでⅠ類（円形）に属するものが35%，Ⅴ類（不定形）に属するものが10%，Ⅲ類（隅丸長方形・長方形）・Ⅳ類（隅丸方形・方形）に属するものが各々1%となっている。当遺跡から検出された土壌の大半はⅠ・Ⅱ類に属している。

#### ○断面形

第186図に示したように、土壌の断面形状を見てみると、B類（皿状）に属するものが56%で全体の過半数を占め、次いでA類（円筒状）に属するものが34%，C類（V字状）に属するものが7%，E類（T字状）に属するものが2%，D類（袋状）に属するものが1%となっている。また、A～E類の中で、土壌の底面に何らかのピットを有するものは全体の25%を占めている。当遺跡から検出された土壌の大半は、断面形状がB類・A類に属している。

属するものが85%と大半を占め、b類(50cm以上100cm未満)に属するものが13%，c類(100cm以上)に属するものが2%となっている。長径・長軸は最小のものが0.24m，最大のものが6.75m，短径・短軸は最小のものが0.1m，最大のものが4.52mとなっている。深さは最も浅いものが8cm，最も深いものが200cmとなっている。第187・188図に示したように、当遺跡から検出された土壙は、長径・短径が50～150cm，深さが30～45cmのものが中心であると言える。



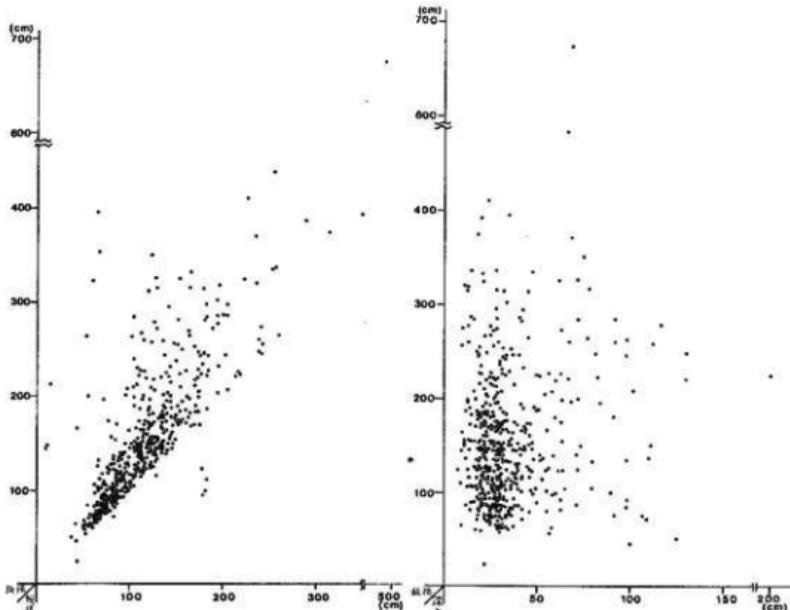
第186図 土壙の形態規模分類

○形態 (第189図)

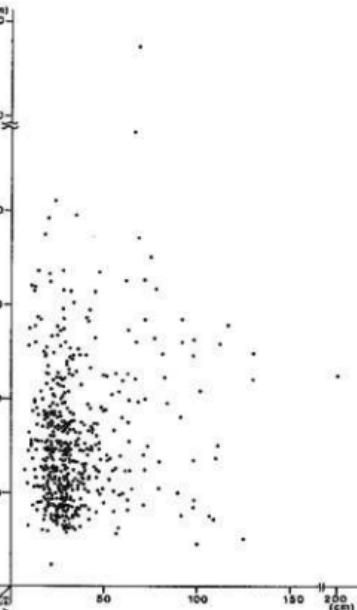
前述した平面形、断面形、規模、深さの4要素を組み合わせ、形態分類を行った。その結果、形態分類が可能な481基の土壙は98形態に分類でき、変化に富んでおり、あまり特徴的な傾向は

見られなかった。しかし、その中で比較的多く見られる形態を示すと次のようになる。第186図に示したように、98形態の中で最も多く見られるものはⅡB2aに分類された土壤で全体の16%を占めている。次いでⅡA2a・IB2aが各々7%, IB3aが6%, IA1aが5%, IB1a・ⅡB'2a・IA2aが各々4%, ⅡB'3aが3%, IB'2a・ⅡA3a・IA2b・ⅡA1a・VB2aが各々2%となっている。それ以外の形態を呈する土壤は、全体に占める割合が1%、もしくは、それ以下となっている。最も多く見られたⅡB2aの土壤は、平面形が梢円形、断面形状が皿状を呈し、長径・長軸の長さが1m以上2m未満のもので、深さは50cm未満となっている。

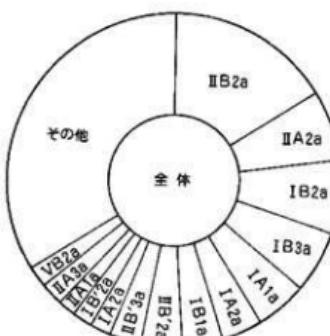
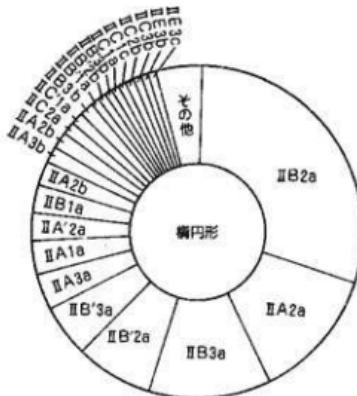
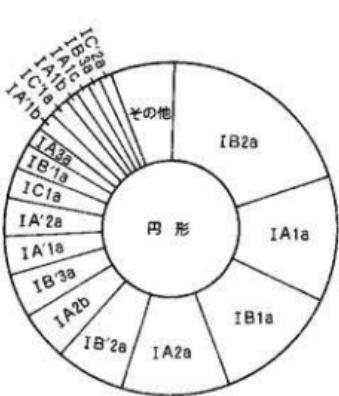
当遺跡から検出された土壤を、数量的な分析結果から見て行くと、次のようなになる。前述したように、平面形は梢円形や円形を呈するものが最も多く、全体の88%を占める。断面形状は皿状や円筒状を呈するものが全体の90%を占め、壁面は65°~80°の傾きで外傾するものが66%, 65°以内の傾きで緩斜するものが22%となっている。また、土壤の底面は皿状を呈するものが最も多く44%を占め、次いで平坦なものが32%となっている。また、土壤の底面にピットを有するものは25%となっている。次に規模についてみると、長径・長軸の長さは1m以上2m未満のものが最も多く56%を占め、深さは50cm未満と浅く掘り込まれた土壤が85%を占めている。



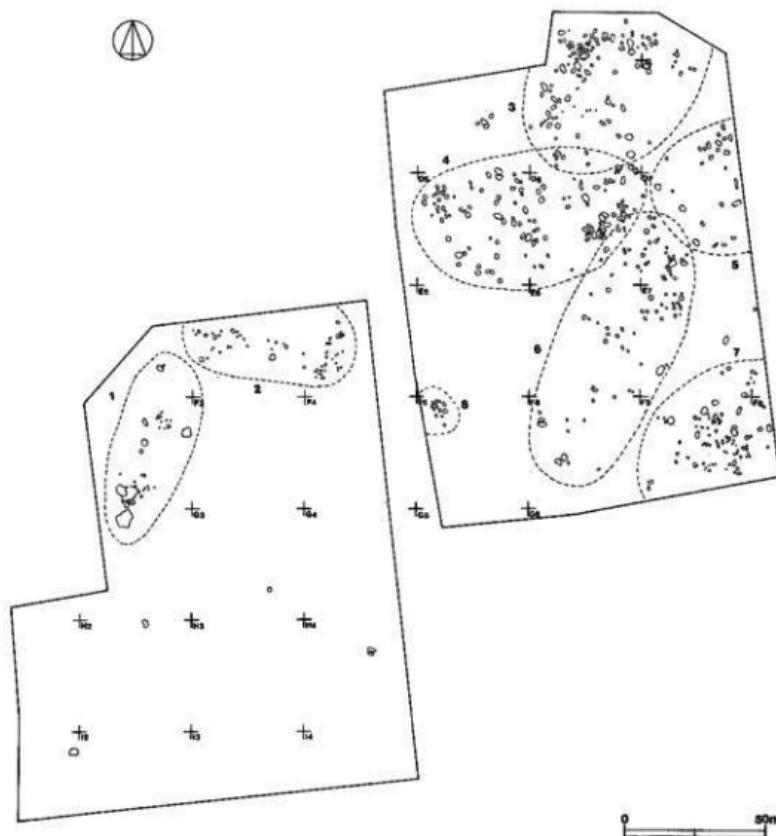
第187図 土壤の長径と短径の関係



第188図 土壤の長径と深さの関係



第189図 土壌の平面形からみた分類



第190図 大谷津A遺跡土壙配置図

#### (4) 土壙の分布状況（第190図）

当遺跡から検出された土壙は、第190図に見られるように、その分布状況から8つのグループに大別することができる。

第1のグループは、大谷津A遺跡の西端F2区を中心に検出された土壙群である。30基ほどが検出されており、重複関係も見られる。平面形は不定形を呈し、比較的規模が大きく円筒状に深く掘り込まれているものや、皿状に浅く掘り込まれているものが多い。規模の大きな土壙は袋状を呈している。しかし、遺物が出土している土壙は3基にすぎず、時期や性格については明らかで

ない。この地区からは住居跡は検出されていない。

第2のグループは当遺跡の北西端E 3～4区を中心に検出された土壙群である。20基ほどが検出されている。遺構の分布状況から、さらに北側の調査区外にその一部が存在する可能性も考えられる。平面形は楕円形を呈し、規模は比較的大きなものから小さなものまで様々であるが、皿状に浅く掘り込まれているものが多い。遺物を出土する土壙はそのうちの約半数で、縄文時代中期の土器片が主である。第11号土壙は「Tピット状遺構」である。この地区からは縄文時代の中期内に比定される3軒の住居跡が検出されており、土壙との関連も考えられるが明らかでない。

第3のグループは、住居跡が密集して検出された遺跡の北側B6・C6区を中心に検出された土壙群である。120基ほどが検出されており、重複関係の見られるものが多い。平面形は楕円形を呈し、中規模のものや比較的規模の大きなものが多く、皿状に浅く掘り込まれているものが多い。覆土中の出土遺物や住居跡との重複関係等から、縄文時代早期に比定される土壙や中期以降に比定される土壙の存在も考えられるが、個々の土壙の時期については明らかでない。しかし、この地区から検出された住居跡や出土した遺物は、その大部分が縄文時代中期の阿玉台・加曾利E式期のいずれかに属することから、新旧はあるにしても、土壙の多くはこれらの住居跡に伴なうことと考えられる。性格については明らかでない。

第4のグループは、遺跡の中央部よりもやや北側のD5～6区を中心に検出された土壙群である。130基ほどが検出されており、その大部分は単独で位置している。平面形は楕円形を呈し、中規模で、浅く皿状に掘り込まれているものが多い。遺物が出土している土壙は約半数であり、その大半は縄文時代中期の土器片である。この地区からは住居跡が10軒ほど検出されており、古墳時代の住居跡1軒を除けば全て縄文時代中期の阿玉台・加曾利E式期に比定される。以上の事から、土壙の多くは縄文時代中期に属すると思われ、これらの住居跡との関連も考えられるが、性格については明らかでない。

第5のグループは、遺跡の北東端C7・D7区から検出された土壙群である。20基ほどが検出されており、その分布状況から、さらに小グループに分かれることや、土壙群の一部がさらに東側の調査区外に存在することも考えられる。平面形は楕円形を呈し、中規模で浅く皿状に掘り込まれているものが多い。この地区からは、古墳時代の住居跡や縄文時代の住居跡も検出されているが、遺物が出土している土壙は少なく、住居跡との関係やその性格については不明である。

第6のグループは、遺跡の中央部よりもやや東側に片寄ったD 6～7区、E 6区、F 6区を中心検出された土壙群である。90基ほどが検出されており、重複関係はあまり見られない。平面形は円形や楕円形を呈し、中規模で、浅く皿状に掘り込まれているものが多い。この地区からは阿玉台式期の住居跡が多数検出されており、出土遺物も縄文時代中期の阿玉台・加曾利E式期のものが大半を占めることから、これらの土壙の大半は縄文時代中期に属するものと思われる。性格

については不明なものが多い。

第7のグループは、遺跡の南東端F7区から検出された土壙群である。60基ほどが検出されており、その分布状況から、隣接する大谷津B遺跡の北西端から検出された土壙群と何らかの関連をもつものと考えられる。平面形は円形や楕円形を呈し、小規模または中規模で、浅く円筒状や皿状に掘り込まれているものが多い。この地区からは加曾利EⅣ式期の住居跡が4軒検出されており、土壙は住居跡を取り巻く様に密集している。遺物の出土している土壙は少なく、住居跡との関連やその性格については明らかではないが、覆土中の遺物等から、当遺跡の中では比較的新しい時期の土壙群と考えられる。

第8のグループは、遺跡の中央部付近のF5区に検出された土壙群である。12基検出されている。平面形は円形や楕円形を呈し、中規模で、皿状に浅く掘り込まれているものが多い。これらの土壙の位置する遺跡の中央部は、他の地区に比べて遺構の数が極端に少なく、大きな空間部となっており、集落の墓域的な性格をもつとも考えられる。しかし、土壙内からは、それを裏付ける資料は検出されておらず、推測の域を出ない。第8のグループをなす12基の土壙の約半数から縄文中期の土器が出土していることから、これらの土壙群はいずれも縄文時代中期に属するものと思われる。

以上、481基の土壙をその分布状況から大略的に8つのグループに分けて検討を加えてきた。しかし、これらの土壙は、遺物が検出されていないものが大部分を占めるため、時期不明のものが多く、土壙群の領域については確たる根拠はない。また、土壙の性格や住居跡との関連を明確にすることはできなかった。

## 第2節 遺物について

### 1 土器

大谷津A遺跡から出土した土器の大半は縄文式土器であり、その他、少量ではあるが土師器が出土している。縄文式土器としては、早期前葉の夏島式や稻荷台式に比定される燃系文系の土器や、中期前葉の五領ヶ台式、前葉から中葉にかけての阿玉台Ib～IV式、勝坂式、後葉の加曾利EIII～IV式に比定される土器が出土している。出土した縄文式土器の大半は、中期の阿玉台式や加曾利E式に比定され、中でも阿玉台Ib～III式、加曾利EIII式に比定される土器の出土量が多い。器種としては、深鉢形上器の出土量が最も多く、その他には鉢形土器、浅鉢形土器、注口付土器、有孔鉢付土器、脚付土器、台付土器、手捏土器等が見られる。土師器の出土量は少量であるが、その大半は古墳時代中期の和泉式に比定されるものである。また、破片が少量出土しているだけで明確ではないが、奈良～平安時代の真間式や国分式に比定されるものと思われる土師器も出土している。器種としては、斐形土器、壺形土器、塊形土器、高环形土器等が見られる。

これらの土器は、遺跡の北から東に入り込む支谷に向い合うように、調査区の北側及び東側に密集して検出された住居跡や土壤等の遺構の覆土中からその大半が出土しており、一般的な集落に見られる土器捨て場の様相を呈している。ここでは、当遺跡から出土した縄文式土器を、説明の便宜上、時期や型式から大きく3群に分け概略を述べることにする。第1群土器については第191図に拓影図を掲載したが、第2群・第3群土器については、各遺構ごとに掲載した実測土器及び出土土器観察表を参照されたい。

#### 第1群土器

第1群土器は、早期前葉の夏島式・稻荷台式に比定される土器群であり、II次調査区の北側から少量出土しているにすぎない。第191図は、井草式に後続し、夏島式に比定される尖底深鉢形土器の口縁部破片である。井草式に比べ、口縁部の外反や口唇部の肥厚は少なくなり、器面には、口縁直下から縱方向の縄文が密に施されているものが多い。口唇部に丸味を持ち、まばらな間隔の粗い縄文が施された、稻荷台式と思われる土器片もわずかに見られる。

#### 第2群土器（I～V期）

第2群土器は、中期前葉から中葉にかけての阿玉台式に比定される土器群である。当遺跡から出土した阿玉台式土器については、西村正衛氏が現在提唱されている、Ia・Ib・II・III・IV式の5細分（西村 1972）を基本とし、第2群土器をさらに4類に分けて概略を述べることにする。

##### 第1類 隆帯に沿って、または、単独で1列の結節沈線文が施される土器群

阿玉台Ⅰb式に比定される土器群であり、第11号住居跡（P14）、第50号住居跡（P79・91）、第52号住居跡（P52）等に好資料が見られる。Ia式の土器に比べて口縁部の彎曲の度合が増し、口縁部の内面に棱が見られる。口縁部は棒状文が定形化し、口縁には扁状や板状の把手を有するものが多い。胴部には、粗く整形された器面にヒダ状の指圧痕が見られ、また、波状沈線やキザミ目文、竹管文、爪形文等の多彩な文様構成が見られる。底部外面には、網代痕の見られるものが多い。

#### 第2類 隆帯に沿って、2列の結節沈線文が施される土器群

阿玉台Ⅱ式に比定される土器群で、口縁部の彎曲の度合が一段と増し、口縁部内面の稜は明瞭となっている。第23号住居跡（P32）や第24号住居跡（P40・43）等に好資料が見られる。口縁には、発達した山形状や扁状の把手を有するものが多い。器面は比較的良く整形されており、隆帯による区画状文が口縁部をはじめ胴部にも及び、平行波状沈線文やキザミ目文、爪形文等が施されている。細い条の繩文が施されたものも若干見られる。

#### 第3類 隆帯に沿って、幅の広い結節沈線文や爪形文が施される土器群

阿玉台Ⅲ式に比定される土器群で、口縁部は彎曲の度合を増し、波状口縁は大きく山形状に突出し、頭部の勝った不安定な大形の器形を呈するものが多く見られる。区画の隆帯は、全体的に太くなり、口縁に幅の広い隆帯が巡らされたものもある。隆帯に沿って爪形文が施され、隆帯と爪形文との複合による文様構成は、勝坂式と類似している、第42号住居跡（P127）、第65号住居跡（P114）等に例が見られる。爪形文は、半截竹管の外側を押しあてたものや内側を曳きすりながら押しあてたもの（押し引き）、幅が広く平坦な、あるいは先端が剣先状に尖ったヘラ状の工具で施したもの等様々である。胴部も隆帯によって複雑に区画され、区画の接点に凹い孔のあけられたものも見られる。

#### 第4類 隆帯に沿って、沈線文を付随させた土器群

阿玉台Ⅳ式に比定される土器群で、器形は阿玉台Ⅲ式とほぼ同様である。山形把手を持つ不安定な器形が目立ち、器面に繩文や条線文が施されているものが多い。口縁部には、隆帯による幅の狭い区画帯が構成されている。第3・4類の好資料としては、第65・66号住居跡から出土した土器群があげられる。

### 第3群土器（VI～Ⅶ期）

第3群土器は、中期後葉の加曾利EⅢ・EⅣ式に比定される土器群である。加曾利EⅢ式とEⅣ式とを、さらに1類と2類に分けて概略を述べることにする。

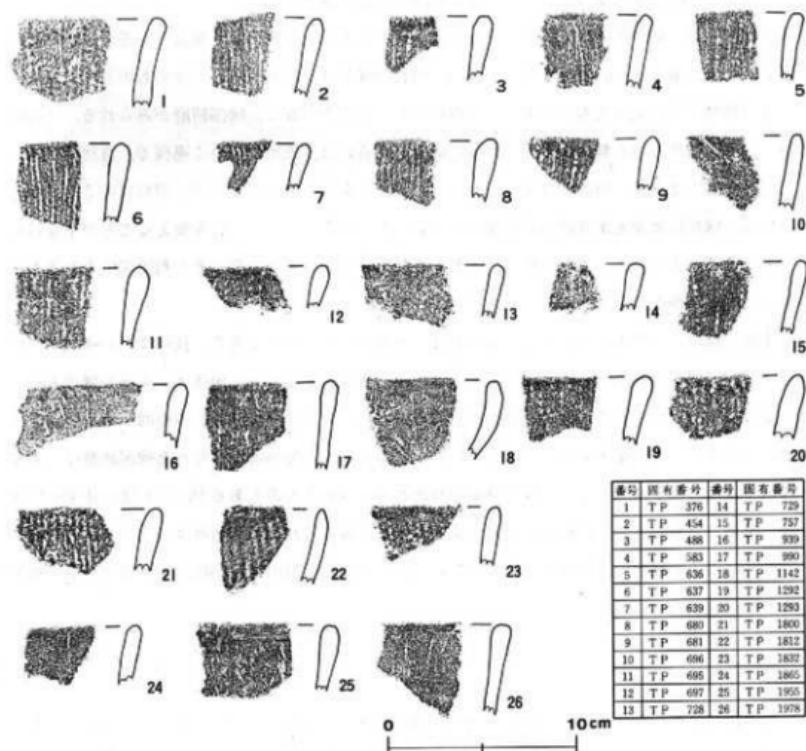
#### 第1類 加曾利EⅢ式に比定される土器群

加曾利EⅡ式に現われはじめた磨消手法が盛行し、第18号住居跡のP67に見られるように、

胴部の磨消繩文帯の幅が広くなってくる。口縁部文様帶は、隆線・沈線による渦巻文や楕円形、長方形の区画文で構成されるものと、沈線で構成されるものとが見られる。渦巻文は退化し、更に新しくなると、口縁部文様帶は列点文や沈線文だけで構成されるようになる。胴部には、隆線による大きな渦巻文を施す土器や、曲線的な磨消手法、U字文、W字文、H字文などを施す土器が見られる。繩文だけが施される粗製土器は、口縁部と胴部の施文方向が異なる。器形としては、口縁部が内側し、口縁部文様帶を隆線や沈線によって区画し、胴部に幅の広い磨消帯を持つものが中心である。第1類土器は、当遺跡の中でも出土量の多い土器である。

## 第2類 加曾利E IV式に比定される土器群

加曾利E III式から発達したもので、微隆起線文が多用される土器である。細い沈線区画に



第191図 第1群土器拓影図

より曲線的な磨消帶を持つものも見られる。橋状把手の発達も特徴的であり、器形としては、括れの著しい深鉢形土器が中心であり、注口付土器や有孔鈎付土器も見られる。第2群土器としては、第59号住居跡（P128）、第60号住居跡（P93・P95）、第62号住居跡（P105）等にその例を見ることが出来るが、全体的に出土量は少なく、調査区の南東側に当たる大谷津B遺跡と隣接する地区からその大半は出土している。

以上、説明の便宜上、3群に分けて出土した土器の概略について述べてきた。加曾利E式土器の編年については、未だ確立しておらず、報告者によって若干の相違も認められるため、今後さらに検討を加えていかなければならない。

## 2 土製品

当遺跡で出土した土製品としては、土製円板と土器片鍤がある。

土製円板は、40点出土している。平面形は、円形、あるいは橢円形を基調とするもので、直径は3~4cm、重量は10g前後のものが多い。円板の縁部は、打ち欠いただけのものと、打ち欠いた後に研磨して仕上げたものがある。40点のうち、25点の円板に、縁部研磨がみられる。この研磨が、土製円板の形を整えるために行ったのか、あるいは、使用していく過程で、自然に磨滅していったものなのか、明確ではない。しかし、土器片を打ち欠いただけで、円形に近くなつたものには、縁部研磨があまり認められない点から、どちらかというと、形を整えることが主な目的であったと考えられる。土製円板は、土器片を利用して作られており、その利用部位をみると、ほとんどが胴部片である。

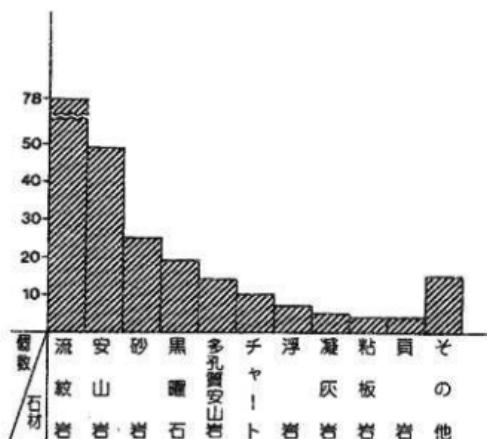
土器片鍤は、51点出土している。平面形は、方形を呈するものが多く、長径は2.6~6.9cm、短径は2.2~5.6cmの範囲にある。最も集中するのは、長径3.5~4.5cm・短径3~4cmの間である。重量は、最も軽いもので10.6g、最も重いもので53.1gであり、10~40gの範囲にあるものがほとんどである。最も集中するのは、10~15gの間である。土製円板でみられた縁部研磨は、土器片鍤ではほとんどみられない。縁部研磨されたように見えるものもあるが、これは、使用中に次第に磨滅したものと考えられる。なお、縁をかけたと考えられる切り込みは、上下2か所につけられている。本種も、土器片を利用して作られたもので、土製円板と同様に、胴部片が多く利用されている。

## 3 石器

当遺跡で出土した石器は、17種類で、総数228点である。最も多く出土したものは石鍤で、60点出土している。他には、磨石51点、石鏃26点、礫器21点などが主なものである。石匙や砥石などは、各1点だけの出土である。第192図は、器種別出土点数の割合を表示したグラフである。

石斧	26.2	磨石	24.0	石錐	11.3	礫器	9.19	石皿	8.3	磨製 石斧	5.6	浮子3.0	
												打製石斧3.0	
												凹凸3.0	
												その他	

第192図 石器の類別割合



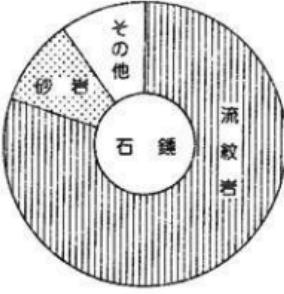
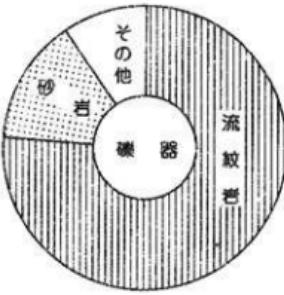
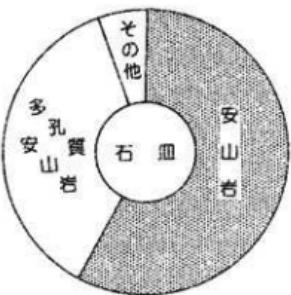
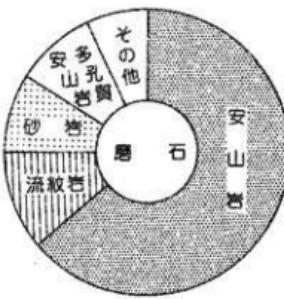
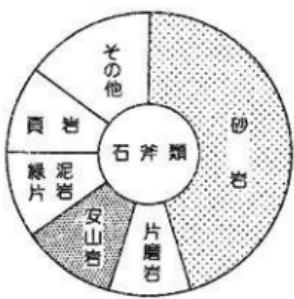
第193図 石質による分類

に利用されている多孔質安山岩は、その表面に小さな孔が無数にあり、ざらざらしている岩石である。黒曜石やチャートも比較的多く用いられている。次に、石器の種類ごとの石質をみると、第194図のとおりで、石器の用途に応じて適切なものが選択されていたことがうかがえる。磨石や石皿などは、やや目的の荒い安山岩が多く利用され、石錐は、硬く緻密な黒曜石やチャートが利用されている。礫器や石斧は流紋岩が極めて多く、石斧類は砂岩がやや多いが、比較的多様な石質の岩石が利用されている。

当遺跡に隣接する大谷津B遺跡や筒戸A・B遺跡は、調査結果がすでに報告されており、それを見ると、安山岩が最も多く利用され、他にチャート、砂岩、流紋岩などが使われている。当遺跡とは、やや時期が異なるが、利用されている石質は、ほぼ同様であると考えられる。

これをみると、石錐、石斧、磨石、礫器の4種類だけで全体の7割以上を占めていることがわかる。これは、当遺跡の生活様式を反映していると考えられ、狩猟や採集生活が主に営まれていたことが推定できる。特に、漁網鍼と考えられている石錐が、60点も出土した例は県内でも珍らしく、当遺跡の周辺で盛んに漁撈が行われていたと思われる。

石器として利用されている石質をみると（第193図）、流紋岩が極めて多く、78点の石器に利用されている。次いで、安山岩48点、砂岩25点と続いている。なお、石皿など



第194図 石器類の石質分類

## 参考文献

- (1) 後藤守一 「上古代の住居(上)」 『人類学・先史学講座15』 1940
- (2) 八幡一郎ほか 「高根木戸 - 繩文時代中期集落址調査報告書 -」 船橋市教育委員会 1971
- (3) 清藤一順 「飯山満東遺跡」 房総考古資料刊行会 1975
- (4) 古里節夫ほか 「坂之台遺跡・東平賀遺跡 第3次調査」 松戸市教育委員会 1983
- (5) 戸沢光則ほか 「向台遺跡」 『市川市史 第1巻 原始・古代』 1971
- (6) 関根孝夫ほか 「子和清水貝塚 遺物編」 松戸市教育委員会 1976
- (7) 関根孝夫ほか 「子和清水貝塚 遺構図版編」 松戸市教育委員会 1978
- (8) 岡崎文喜ほか 「遺跡研究論集Ⅱ - 嵩立遺跡を中心とした繩文時代中期初頭集落址の研究 -」 1982
- (9) 佐々木保俊ほか 「池田遺跡発掘調査報告」 新座市埋蔵文化財報告第Ⅱ集 新座市教育委員会 1976
- (10) 目黒吉明 「住居のが」 『縄文文化の研究』 8 社会・文化 雄山閣 1982
- (11) 宮本義二郎 「関東地方の縄文時代堅穴住居跡の変遷」 『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 同朋社 1983
- (12) 清藤一順ほか 「常磐自動車道埋蔵文化財報告書Ⅰ - 館林、水砂、花前Ⅰ - 1 -」 千葉県文化財センター 1982
- (13) 清藤一順ほか 「常磐自動車道埋蔵文化財報告書Ⅱ - 花前Ⅰ・中山新田Ⅰ・中山新田Ⅱ -」 千葉県文化財センター 1984
- (14) 安孫子昭二 「動坂遺跡」 動坂貝塚調査会 東京都文京区 1978
- (15) 「西山遺跡」「大堀込遺跡」 『鎌ヶ谷市史』 上巻 1982
- (16) 「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」 下広岡遺跡 茨城県教育財團 1981
- (17) 渡辺忠胤ほか 「町田市木曾中学校遺跡」 木曾中学校用地内遺跡調査会 町田市教育委員会 1983
- (18) 川崎純徳ほか 「茨城県石岡市大作台遺跡発掘調査報告」 石岡市教育委員会 1981
- (19) 河野辰男ほか 「赤塚遺跡発掘調査報告書」 牛久町赤塚遺跡調査会 1984
- (20) 北原寅徳ほか 「上の原遺跡」 日本窯業史研究所 1981
- (21) 鈴木裕芳ほか 「源訪遺跡発掘調査報告書」 日立市教育委員会 1980
- (22) 西村正衛 「阿玉台式土器縄年の研究の概要 - 利根川下流域を中心として -」 『早稲田大学文学部研究科紀要』 第18輯 1972

## 終 章 む す び

「常総ニュータウン」建設計画の一環として打ち出された、谷和原村小網を中心とする大規模開発計画「水海道都市計画事業・小網土地区画整理事業」に伴う、開発地域内（小網地区内）に確認された5遺跡（大谷津A遺跡・大谷津B遺跡・筒戸A遺跡・筒戸B遺跡）の調査は、昭和55年度から当教育財団によって実施され、昭和59年度の大谷津A遺跡の整理業務をもって、全て終了の運びとなった。

大谷津A遺跡は、先に述べたように、昭和56年2月16日から昭和59年3月31日までの約2年1か月にわたって発掘調査が実施され、遺跡の立地する台地の北から東に入り込む支谷に向かい合うように、縄文時代、古墳時代、奈良～平安時代にかけての数多くの貴重な遺構や遺物が検出された。当遺跡から検出された遺構や遺物の大半は、縄文時代中期の阿玉台式期や加曾利E式期に比定され、集落は、Ⅰ～Ⅲ期（阿玉台Ib～Ⅱ式期）にわたって安定的に営まれ、Ⅳ～V期（阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期）に激減し、VI期（加曾利EⅢ式期）に隣盛し、VII～VIII期（加曾利EⅢ末～EⅣ式期）に再び減少するという変遷過程を辿ることが明らかとなった。また、特筆すべきこととして、県内ではあまり検出例のない阿玉台式期の住居跡が多数（31軒）検出されたことがあげられよう。検出された阿玉台式期の住居跡は、平面形が円形や橢円形を呈し、平均床面積が10.6m<sup>2</sup>と小規模で、屋内に炉をもたない例が多く、柱穴の配列に特異性が見られる等、これまでの縄文時代中期の住居跡の概念とは異なる傾向を示している。近年、阿玉台式期の住居跡の検出例は次第に増加の傾向にあるとはいえ、その実態については未だ不明な点が多い。当遺跡から検出された阿玉台式期の遺構や遺物は、該期の住居跡の形態や集落の構造を明らかにする上で、千葉県の藤立遺跡等とともに、今後、貴重な資料になるものと思われる。また、当遺跡から検出された加曾利E式期の遺構や遺物は、同一台地上に隣接して所在し、ほぼ同時期に比定される大谷津B遺跡や筒戸A遺跡、筒戸B遺跡との関連から、この地域における縄文時代中期中葉から後葉にかけての文化的様相を明らかにする上で、貴重なものである。3遺跡の関連については、若干触れるにとどめたが、今後、現在混乱の状況下にある加曾利E式土器の編年をもふまえ、十分に時間をかけて検討して行く必要があろう。

なお、この報告書をまとめるにあたっては、調査担当者はもちろん、関係各位の御協力と御指導をいただいた。文末を借りて、心から感謝の意を表したい。